

公益財団法人鹿児島県文化振興財団  
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(28)

東九州自動車道建設(志布志IC～鹿屋串良JCT間)に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

みや わき い せき  
**宮 脇 遺 跡**

(曾於郡大崎町)

(公財)埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書(28)

宮脇遺跡

二〇二〇年二月

鹿児島県教育委員会  
公益財団法人鹿児島県文化振興財団  
埋蔵文化財調査センター



2020年2月

鹿児島県教育委員会  
公益財団法人鹿児島県文化振興財団  
埋蔵文化財調査センター



遺跡遠景（志布志方面を望む）





縄文早期の遺物



# 序 文

この報告書は、東九州自動車道（志布志 I C～鹿屋串良 J C T 間）の建設に伴って、平成 26 年度から平成 28 年度にかけて実施した、大崎町に所在する宮脇遺跡の発掘調査の記録です。

本遺跡は、志布志湾に注ぐ田原川の右岸に形成されたシラス台地上に位置し、発掘調査では旧石器時代から近世に至る遺構・遺物が発見されました。

中でも、縄文早期の調査では、集石 44 基や土坑 22 基を検出したのはじめ、南九州でよく見られる貝殻文を中心に、押型文・縄文・撚糸文など、多種にわたる土器が多く出土し、地域の歴史を語る貴重な資料・情報を得ることができました。

本報告書が県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたり御協力いただいた国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、大崎町教育委員会、各関係機関及び発掘調査に従事された地域の方々に厚く御礼を申し上げます。

令和 2 年 2 月

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団  
埋蔵文化財調査センター  
センター長 中原 一成

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	みやわきいせき							
書名	宮脇遺跡							
副書名	東九州自動車建設（志布志IC～鹿屋申良JCT間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第28号							
編著者名	抜水茂樹 上床真							
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576							
発行年月	2020年2月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	発掘起因
		市町村	遺跡番号					
みやわきいせき 宮脇遺跡	かごしまけん 鹿児島県 そおぐん 曾於郡 おおさきちやう 大崎町 いまた 井俣 あざみやわき 宇宮脇	468 (25)	88	31° 27' 0"	131° 0' 12"	試掘調査 2014. 1. 30 本調査 2015. 8. 3～ 2016. 2. 25 2016. 11. 7～ 2017. 1. 27	9,000 m <sup>2</sup>	東九州自動車道 建設（志布志IC～鹿屋申良JCT間）に伴う 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主要な遺構		主要な遺物		特記事項	
宮脇遺跡	散布地	旧石器時代	礫群2基		細石器（細石刃核・細石刃）、ナイフ形石器、三稜尖頭器、台形石器、スクレイパー、搔器、使用痕剝片、チップ、磨石、叩石			
		縄文時代早期	集石44基、土坑22基		志風頭式土器、加栗山式土器、札ノ元遺跡Ⅶ類土器、小牧3Aタイプ、倉園B式土器、下剥峯式土器、桑ノ丸式土器、押型文土器、手向山式土器、平椀式土器、塞ノ神式土器、打製石鏃、石匙、磨製石斧、石錐、石皿、磨石、叩石、チップ、軽石製品			
		中世～近世	井戸状遺構		青磁、薩摩焼、寛永通宝			
遺跡の概要	<p>宮脇遺跡は、田原川の右岸に形成された標高約43mのシラス台地縁辺部に位置する、旧石器時代～近世の複合遺跡である。</p> <p>本遺跡の主となる時代は、旧石器時代と縄文時代早期である。旧石器時代では、礫群2基を検出し、遺物はナイフ形石器・細石器等が出土している。縄文時代早期では、集石45基・土坑21基を検出し、遺物は加栗山式土器をはじめとする貝殻文円筒形土器や、押型文土器などが出土している。これらは、本地域における当時の人々の生活の在り方、様相等を考えると、重要な資料である。</p> <p>また鬼界カルデラの噴火に伴う幸屋降下軽石層をはさんだ上下層にみられる砂質層は、7,300年前の鬼界カルデラの噴火時に2度の大地震により発生した液状化現象を示す噴砂によると考えられるものであり、これは南九州の縄文時代早期の文化・自然に与えた影響を考察し、今後の地震に対する防災・減災を検討する重要な基礎資料となるものである。</p>							



宮脇遺跡位置図 (1 : 25,000)

## 例 言

- 1 本編は、東九州自動車道建設（志布志IC～鹿屋串良JCT間）に伴う宮脇遺跡調査報告書である。
- 2 本遺跡は鹿児島県曾於郡大崎町井俣に所在する。
- 3 発掘調査事業は平成27年度から平成28年度まで国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）が受託し、県教委の監理のもと、公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）が実施し、全ての本調査を終了した。  
なお、平成28年度の発掘調査は、埋文調査センターの発掘調査担当者の管理・監督のもと大福コンサルタント株式会社へ支援業務委託を行った。
- 4 確認調査は、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「県埋文センター」という）が文化庁の国庫補助事業を受けて、県内遺跡事前調査事業として平成24年度に実施した。
- 5 整理・報告書作成作業は、平成30年度から平成31年度まで埋文調査センターが実施した。平成30年度には、埋文調査センターの整理作業担当者の管理・監督のもと株式会社島田組とパリオサーヴェイ株式会社に整理作業の一部の業務を委託した。
- 6 掲載遺構及び遺物番号は各時代ごとの通し番号であり、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 7 遺物注記等で用いた遺跡記号は、「Mワキ」である。
- 8 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 9 本編で用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 10 本編で使用した方位は、すべて磁北である。
- 11 平成27年度の本調査における実測図作成及び写真撮影は主として、調査担当者が行った。平成28年度の本

- 調査における写真撮影は調査担当者が、実測図作成及び空中写真の撮影は発掘調査の支援業務委託を行った大福コンサルタント株式会社が実施した。
- 12 本編に係る掲載遺構図の作成及びレイアウトは、抜水茂樹が整理事業員の支援を得て行った。
  - 13 本編に係る出土遺物の実測及びトレース・レイアウトは、抜水茂樹が整理事業員の支援を得て行った。
  - 14 出土遺物の写真撮影は、県埋文センター写場にて、埋文調査センターの吉岡康弘・福永修一が行った。
  - 15 本編の執筆等は次のように分担し、編集は平成30年度の担当者で行った。
- |                |                      |
|----------------|----------------------|
| 第I章 発掘調査の経過    | 抜水, 上床               |
| 第II章 遺跡の位置と環境  | 抜水, 上床               |
| 第III章 調査の方法と層序 | 抜水                   |
| 第IV章 発掘調査の成果   |                      |
| 第1節 旧石器時代の概要   | 抜水                   |
| 1 遺構           | 抜水                   |
| 2 遺物           | 抜水                   |
| 第2節 縄文時代の概要    | 抜水                   |
| 1 遺構           | 抜水                   |
| 2 遺物           | 抜水                   |
| 第3節 中世・近世の概要   | 抜水                   |
| 1 遺物           | 抜水                   |
| 第V章 自然科学分析     | パリオサーヴェイ株式会社<br>成尾秀仁 |
| 第VI章 総括        | 抜水                   |
- 16 本編に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は県埋文センターで保管し、展示・活用を図ることにしている。

## 凡 例

- 1 本報告書掲載の遺構位置図・遺物出土状況図は、1グリッド（1マス）が10m四方であり、各図に縮尺を提示してある。
- 2 本報告書掲載の遺構・遺物の縮尺は基本的には以下のとおりである。ただし、大型の石器についてはレイアウト用紙に合わせて縮尺が異なる場合もあるので、各図に提示してある縮尺を参照されたい。  
遺構：礫群, 集石：1/20 集石以外：1/50  
土器・礫石器：1/3  
剥片石器：原寸, 1/2
- 3 土器や土層の色調は、日本標準土色帖に基づく。
- 4 遺構の実測図で用いた線種の表現は下記の通りである。  
観察できる線 \_\_\_\_\_  
推定線, 直上からの観察では隠れる線 - - - - -

- 5 接合した礫や土器の線種の表現は以下の通りである。  
礫の接合線 \_\_\_\_\_  
土器の接合線 \_\_\_\_\_
- 6 石器石材のうち黒曜石については外観的特徴とルーペ観察等により、以下のように分類した。推定原産地やその他の特徴は本文中に記載した。  
黒曜石1類：黒色で黄茶褐色を帯び不純物を含む  
黒曜石2類：黒色ガラス質で不純物を含まない  
黒曜石3類：黒色～飴色で不純物が少ない  
黒曜石4類：青みがかった灰色から茶褐色で透明感強い  
黒曜石5類：漆黒色で透明感がなく不純物を含む  
黒曜石6類：青みがかった灰色で不純物を含む  
黒曜石7類：黒色～濁灰黒色で白色の不純物を含む  
黒曜石8類：灰白色で光沢感が少なく不純物含まない  
黒曜石9類：上記以外と小片で不明なもの

# 目次

巻頭図版  
序 文  
報告書抄録  
宮脇遺跡位置図  
例言・凡例

第I章 発掘調査の経過	1
第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 事前調査	1
第3節 本調査	2
第4節 整理・報告書作成	4
第II章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3節 志布志 I C～鹿屋申良 J C T間の遺跡	6

第III章 調査の方法と層序	14
第1節 調査の方法	14
第2節 層序	15
第IV章 調査の成果	20
第1節 旧石器時代の調査	20
第2節 縄文時代早期の調査	32
第3節 中世・近世の調査	108
第V章 自然科学分析等の報告	110
第VI章 総括	118
第1節 概要	118
第2節 旧石器時代の調査	118
第3節 縄文時代早期の調査	119
第4節 中世・近世の調査	121
写真図版	123

# 挿図目次

第1図 東九州自動車道関連遺跡位置図	7	第34図 30号集石, 出土遺物	54
第2図 周辺遺跡位置図	12	第35図 31・32号集石, 出土遺物	55
第3図 グリッド配置と土層断面位置図	16	第36図 33・34・35号集石	56
第4図 土層断面図①G-6~12	17	第37図 36・37・38号集石	57
第5図 土層断面図②C~G-3~6	18	第38図 39号集石, 出土遺物	58
第6図 土層断面図③A-5~11	19	第39図 40号集石	59
第7図 1・2号礫群位置図	20	第40図 41号集石, 出土遺物	60
第8図 1・2号礫群, 出土遺物	21	第41図 42号集石	61
第9図 旧石器時代石器1	24	第42図 43号集石	62
第10図 旧石器時代石器2	25	第43図 43・44号出土遺物, 44号集石	63
第11図 旧石器時代石器3	27	第44図 1号土坑	64
第12図 旧石器時代石器4	28	第45図 1号土坑出土遺物	65
第13図 旧石器時代石器5	29	第46図 2・3・4・5号土坑	66
第14図 旧石器時代遺物分布図	30	第47図 6号土坑, 出土遺物	67
第15図 全遺構位置及び土器分布図	33~35	第48図 7・8号土坑	68
第16図 1・2・3号集石	36	第49図 9・10・11・12・13号土坑	69
第17図 4・5号集石	37	第50図 14・15・16号土坑	70
第18図 6・7号集石	38	第51図 17・18号土坑, 出土遺物	71
第19図 8号集石	39	第52図 19・20号土坑	72
第20図 9・10号集石	40	第53図 21・22号土坑	73
第21図 11・12・13号集石	41	第54図 遺構・包含層の礫接合	75
第22図 14号集石	42	第55図 遺構間の礫接合1	76
第23図 15号集石	43	第56図 遺構間の礫接合2	77
第24図 16・17号集石, 出土遺物	44	第57図 I・II類土器出土分布	81
第25図 18・19号集石	45	第58図 I・II・III類土器	82
第26図 20号集石	46	第59図 IV・V類土器	83
第27図 21号集石, 出土遺物	47	第60図 III・IV類土器出土分布	84
第28図 22・23号集石	48	第61図 V類土器出土分布	85
第29図 24号集石, 出土遺物	49	第62図 VI類土器	86
第30図 25号集石	50	第63図 VII類土器	87
第31図 26・27号集石, 出土遺物	51	第64図 VI類土器出土分布	88
第32図 28号集石	52	第65図 VII類土器出土分布, VII類土器	89
第33図 29号集石	53	第66図 VIII・IX類土器出土分布	90

第67図	VIII類土器	91	第75図	早期石器4	100
第68図	X・XI類土器出土分布	92	第76図	早期石器出土分布図1	101
第69図	VIII・IX類土器	93	第77図	早期石器出土分布図2	102
第70図	X類土器	94	第78図	早期石器出土分布図3	103
第71図	XI類土器・小片土器出土分布	95	第79図	早期石器出土分布図4	104
第72図	早期石器1	97	第80図	近世遺構, 中近世遺物1	108
第73図	早期石器2	98	第81図	中近世遺物2	109
第74図	早期石器3	99			

## 表 目 次

第1表	志布志IC~鹿屋串良JTC間の遺跡	8~10	第8・9表	遺構内遺物観察表	79
第2表	周辺遺跡一覧表	13	第10表	早期土器観察表1	105
第3表	礫群一覧表	21	第11表	早期土器観察表2	106
第4表	遺構内石器観察表	21	第12表	早期石器観察表	107
第5表	旧石器時代遺物観察表	31	第13表	中世・近世遺物観察表	109
第6表	集石一覧表	78	第14表	集石 石材別重量	122
第7表	土坑一覧表	79			

## 図版目次

巻頭図版1	遺跡遠景 (志布志方面を望む)		図版13	旧石器時代遺物2	135
巻頭図版2	縄文早期の遺物		図版14	縄文早期土器1	136
図版1	遺跡近景, 集石検出状況	123	図版15	縄文早期土器2	137
図版2	土層断面	124	図版16	縄文早期土器3	138
図版3	旧石器遺構, 遺物	125	図版17	縄文早期土器4	139
図版4	旧石器遺物, 縄文早期遺構1	126	図版18	縄文早期土器5	140
図版5	縄文早期遺構2	127	図版19	縄文早期土器6	141
図版6	縄文早期遺構3	128	図版20	縄文早期土器7	142
図版7	縄文早期遺構4	129	図版21	縄文早期土器8	143
図版8	縄文早期遺構5	130	図版22	縄文早期土器9	144
図版9	縄文早期遺構6	131	図版23	縄文早期土器10	145
図版10	縄文早期遺構7	132	図版24	縄文早期石器1	146
図版11	縄文早期遺構8, 近世遺構	133	図版25	縄文早期石器2	147
図版12	旧石器時代遺物1	134	図版26	中世・近世陶磁器	148

# 第 I 章 発掘調査の経過

## 第 1 節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という）は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道の建設を計画し、志布志 I C～末吉財部 I C 区間の事業に先立って、事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、「文化財課」）に照会した。

これを受けて、文化財課は平成11年1月に鹿屋申良 J C T～末吉財部 I C 間を、平成12年2月には志布志 I C～鹿屋申良 J C T 間の埋蔵文化財の分布調査を実施し、50か所の遺跡が存在することが明らかとなった。

この結果をもとに、事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室、文化財課、県立埋蔵文化財センター（以下、「埋文センター」）の4者で協議を重ね対応を検討している最中に日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。

このような社会情勢の変化に伴い、遺跡の緻密な把握が要求されることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査や試掘調査、確認調査が実施されることとなった。

そこで、県教委はまず、平成13年1月29日～2月6日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡、加治木堀遺跡、石縊遺跡、十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに、平成13年7月10日～7月26日に鹿屋申良 J C T～末吉財部 I C 間の工事計画図をもとに33の遺跡について詳細分布調査と、平成13年12月3日～12月25日の2日間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて、既に合意されていた本線工事用道路及び側道部分の確認調査も実施することになり、関山西遺跡、関山遺跡、狩俣遺跡の3遺跡を対象に平成13年10月1日～平成14年3月22日にかけて確認調査を実施した。

平成14年4月には、志布志 I C～鹿屋申良 J C T 間の遺跡について再度分布調査を実施した結果、遺跡の調査対象面積が678,700㎡となった。

その後、日本道路公団民営化（現在の西日本高速道路株式会社）の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定、平成15年11月に暫定2車線施行に伴う議事確認書締結、同年12月に大隅 I C（平成21年4月28日に「曾於弥五郎 I C」へ名称変更）～末吉財部 I C 間の発掘調査

協定書締結が、平成16年3月に国土交通省九州地方整備局長、日本道路公団九州支社長、鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書が締結が行われ、工事は日本道路公団が国土交通省から受託し、発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に委託することとなり、これまでの確認書、協定書はそのまま生きるということになった。ただし、日本道路公団からの委託は曾於弥五郎 I C までで終了し、曾於弥五郎 I C からの先線部は国土交通省（九州地方整備局）からの受託事業となった。

平成24年度、国土交通省は、平成25年度から東九州自動車道（志布志 I C～鹿屋申良 J C T 間）の建設工事促進を図るため、発掘調査期間の短縮を要請してきた。

このような状況に対応するため、県は関係機関で協議を重ね、職員確保や予算確保が柔軟にでき、発掘調査を効率かつ効果的に実施できる財団の設置を決定し、平成25年4月に公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下、「埋文調査センター」）が設置された。これを受けて文化財課は、国事業に関する業務を埋文調査センターへ委託し、埋文調査センターが埋文センターから業務を引き継いで実施することとなった。

宮脇遺跡の調査経過は、以下のとおりである。

### 発掘調査

- 1 分布調査：平成14年4月
- 2 確認調査：平成24年11月
- 3 試掘調査：平成26年1月
- 4 本調査：平成27年8月～平成29年1月

### 整理・報告書作成作業

整理・報告書作成作業は、平成30年度から実施した。なお、各調査の調査期間、調査体制等詳細については次節以降で報告することとする。

## 第 2 節 事前調査

### 1 分布調査

宮脇遺跡に関する分布調査は、日本道路公団（現在の西日本高速道路株式会社）から東九州自動車道の志布志 I C～鹿屋申良 J C T 間の分布調査依頼を受け、平成14年4月に実施した。調査体制は次のとおりである。

### 調査体制（平成14年度）

事業主体 日本道路公団九州支社鹿児島事務所  
調査主体 鹿児島県教育委員会

## 2 確認調査

詳細分布調査は、埋文センターにより県内遺跡事前調査事業として平成24年8月20日～12月14日に町田堀遺跡・牧山遺跡・細山田段遺跡とともに行われた。

調査方法は、用地買収の終了した調査対象地の西側に15か所のトレンチを設定し、重機を使用して、地層、遺構、遺物の有無の確認を行いながら、約1～5mほどの深さまで掘り下げた。調査の結果、調査対象地内では遺構・遺物は確認されなかった。

調査体制は次のとおりである。

### 調査体制（平成24年度）

事業主体	鹿兒島県教育委員会
調査主体	鹿兒島県教育委員会
調査統括	鹿兒島県立埋蔵文化財センター
	所 長 寺田 仁志
調査企画	鹿兒島県立埋蔵文化財センター
	〃 次長兼総務課長 新小田 謙
	〃 次長兼南の縄文調査室長 井ノ上秀文
	〃 調査第一課長 堂込 秀人
	〃 調査第一課第二調査係長 大久保浩二
調査担当	〃 文化財主事 吉岡 康弘
	〃 文化財研究員 今村 結記

### 調査の詳細（調査日誌より）

調査の詳細を調査日誌より月単位で記す。本調査の詳細も同様に月単位で記すこととする。なお、数字の後の「T」はトレンチのことである。

#### 【11月】

調査開始（15日）。

1～15T掘り下げ。写真撮影。土層断面図等の実測図・配置図作成。

調査終了（遺構・遺物は発見されず）。埋め戻し（22日）。

## 3 試掘調査

前回の確認調査後に、用地買収の終了した調査対象地の東側を平成26年1月30日に試掘調査を行った。

調査方法は、遺跡内の3か所にトレンチを設定し、重機を使用して、地層、遺構、遺物の有無の確認を行いながら、約1～5mほどの深さまで掘り下げた。調査の結果、縄文時代早期の土器、集石の構成礫とみられる礫が確認された。

調査体制は次のとおりである。

### 調査体制（平成25年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体	鹿兒島県教育委員会

調査担当	鹿兒島県教育庁文化財課
	文化財主事 中村 和美
	鹿兒島県立埋蔵文化財センター
	文化財主事 吉岡 康弘
立会者	国土交通省九州地方整備局
	大隅河川国道事務所調査第三課 弓削 琢郎
調査協力者	大崎町教育委員会社会教育課 内村 憲和

## 第3節 本調査

詳細分布調査の結果を踏まえ、本調査を平成27年・28年の2か年にわたり実施した。平成28年度については発掘調査の実施にあたり、埋文調査センターは「埋蔵文化財調査センター埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき、大福コンサルタント株式会社へ発掘調査の支援業務委託を行った。なお、埋文調査センター職員1名が常駐し、調査方法及び業務内容に係る指導、助言及び調査現場の監理を行った。

各年度の調査期間は以下のとおりである。

平成27年度：平成27年8月3日～平成28年2月25日

平成28年度：平成28年11月7日～平成29年1月27日

また、各年度の調査体制及び調査の詳細（日誌抄より）については次のとおりである。

### 調査体制（平成27年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所
調査主体	鹿兒島県教育委員会
調査統括	公益財団法人 鹿兒島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター
	センター長 堂込 秀人
調査企画	〃 総務課長兼総務係長 有村 貢
	〃 調査課長 八木澤一郎
	〃 調査第一係長 中村 和美
調査担当	〃 文化財専門員 三垣 恵一
	〃 文化財専門員 立神 倫史
	〃 文化財調査員 下田代清海
	〃 文化財調査員 稲垣 友裕
	〃 文化財調査員 宮田 大之
事務担当	〃 主 査 荒瀬 勝巳
現地指導	武岡台高校 教 諭 成尾 英仁

### 調査の詳細（調査日誌より）

#### 【7月】

作業準備。営繕用地及び調査範囲の抜根作業開始（10日）。表土剥ぎ（重機使用）。

#### 【8月】

発掘作業開始。環境整備（3日）。グリッド杭打設。

B～D-6～11区：V・VI層（縄文早期）掘り下げ。

B区先行確認トレンチ調査：Ⅵ・Ⅶ層（縄文早期）掘り下げ。

台風接近のため耐風養生（24日）

八木澤課長現地指導（4日・19日）。中村係長現地調査（3日・24日）。

#### 【9月】

B・C-6～12区：Ⅵ・Ⅶ層（縄文早期）掘り下げ。

1～9号集石検出・調査。

所内安全パトロール（中村〈耕〉文化財専門員・徳永〈智〉文化財専門員）（17日）。

堂込センター長現地視察（9日）。中村係長現地調査（2日・9日）。黒川文化財主事（文化財課）監理業務（9日）。

#### 【10月】

A～C-5～13区：Ⅴ～Ⅸ層（縄文早期）掘り下げ。

B～F-7～13区：Ⅶ・Ⅷ層（縄文早期）掘り下げ。

B・C-7・8区：下層確認トレンチ調査

B・C-8区にて旧石器下層確認トレンチから旧石器時代遺物確認。トレンチ拡張（21日）。

7～15号集石検出・調査。

空中写真撮影（受託者：スカイ・サーベイ）（20日）。

委託業務（受託者：スカイ・サーベイ）による遺構（集石）実測開始（26日）。

堂込センター長現地視察（7日）。八木澤課長現地指導（9日）。中村係長現地調査（22日）。

#### 【11月】

B～E-9～13区：Ⅶ～Ⅸ層（縄文早期）掘り下げ。

A・B-10～12区：Ⅷ・Ⅸ層（縄文早期）掘り下げ。

B～F-4～6区：Ⅶ～Ⅸ層（縄文早期）掘り下げ。

B・C-6・7・11・12区：下層確認トレンチ調査（Ⅷ・Ⅸ層）。

A～G-4～13区：土層断面実測図作成。

B～G-6～13区：Ⅷ層上面地形測量。

八木澤課長現地指導（9日）。中村係長現地調査（12日）。

武岡台高校教諭成尾英仁氏現地指導（25日）。

#### 【12月】

B～F-3～7区：Ⅶ・Ⅷ層（縄文早期）掘り下げ。

D～G-8～10区：Ⅶ・Ⅷ層（縄文早期）掘り下げ。

C・D-3～5区：Ⅹ・Ⅺ層（旧石器時代）掘り下げ。

※ナイフ形石器の出土を確認。

堂込センター長現地視察（11日）。中村係長現地調査（7日・16日・21日）。

成尾英仁氏（武岡台高校教諭），下司氏・星住氏（産総研），安池氏（原子力規制委員会），柴畑光博氏（都城市教委）来跡（11日）。

#### 【1月】

B～D-11・12区：Ⅶ・Ⅷ層（縄文早期）掘り下げ。

D～G-5～11区：Ⅶ・Ⅷ層（縄文早期）掘り下げ。

B～F-5～7区：Ⅹ・Ⅺ層（旧石器時代）掘り下げ。土器集中検出（E-10区）。

集石検出・調査。

周辺住民への対応。

堂込センター長現地視察（13日）。中村係長現地調査（14日）。長野眞一文化財専門員来跡（15日）。

#### 【2月】

D～G-6・7区：Ⅶ層（縄文早期）掘り下げ。

※押型文土器出土

B～G-6・7区：Ⅹ・Ⅺ層（旧石器時代）掘り下げ。

A～G-6・7・10～12区：下層確認トレンチ（Ⅹ・Ⅺ層）調査。

C～G-4・5区：土層断面実測図作成。

A～G-8～12区：Ⅸ層上面地形測量。

A-7区：Ⅳ～Ⅹ層断面剥ぎ取り作業（16日）。

堂込センター長現地視察（16日）。八木澤課長現地指導（22日）。中村係長現地調査（2日）。大久保係長（県立埋文センター），平文化財専門員，内村氏・大野氏（大崎町教委）来跡。

プレハブ撤収。調査区内安全対策。排土処理（重機使用）。当該年度の作業終了（26日）。

#### 調査体制（平成28年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

調査統括 公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター

〃 センター長 堂込 秀人

調査企画 〃 総務課長兼総務係長 有村 貢

〃 調査課長 八木澤一郎

〃 調査第一係長 中村 和美

調査担当 〃 文化財専門員 上床 真

〃 文化財専門員 倉元 良文

事務担当 〃 主 査 荒瀬 勝巳

#### 発掘調査の民間委託（平成28年度）

発掘調査の実施にあたり、埋文調査センターは「公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター 埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託実施要項」に基づき、大福コンサルタント株式会社へ埋蔵文化財発掘調査支援業務の委託を行った。委託内容は以下のとおりである。

委託先 大福コンサルタント株式会社

調査体制 〃 主任技術者 黒木 淳雄

〃 主任調査支援員 後藤喜八郎

〃 調査支援員 岩下 直樹

〃 調査支援員 長濱 武史

〃 調査支援員 木場 浅葱

〃 調査支援員 百瀬 正恒

(11月14日から)

主任測量技師 大野 哲平  
測量技師 瀬戸山 学  
現地指導 甲南高校 教諭 成尾 英仁

検査 中間検査 平成28年11月10日  
完成検査 平成29年2月22日(実地検査)  
平成29年2月24日(成果物の検査)

### 調査の詳細(調査日誌より)

#### 【10月】

作業準備。基準点測量及び着工前測量。環境整備。営繕用地及び調査範囲における準備作業開始。グリッド杭打設(3日～14日)。

表土剥ぎ及び無遺物層(IX層：薩摩火山灰層)掘削(重機使用)(17日から)。

黒川文化財主事(文化財課)監理業務(14日)。

#### 【11月】

発掘作業開始(7日)。

B・C-2～6区：X・XI層(旧石器時代)掘り下げ。

A区先行確認トレンチ調査：X・XI層(旧石器時代)掘り下げ。

集石(縄文時代草創期：X層)，礫群(旧石器時代：XII層上面)検出・調査。

三稜尖頭器・細石器の出土を確認(24日)。

遺物取り上げ(No.20001～20063)。

基礎整理作業。遺物水洗・注記。

#### 【12月】

D～G-4～9区，E・F-11・12区：掘り下げ(X・XI層)。先行トレンチ調査。

SL(連穴土坑)1検出・調査・実測(X層上面で検出：縄文時代早期該当)

石器製作跡ブロック検出・調査(X・XI層)。

集石・礫群実測。

Xb層上面及びXII層上面地形測量。

西側・北側壁面土層断面実測。

遺物取り上げ(No.20064～20451)。

空中写真撮影(受託者：株式会社ふじた)(19日)。

基礎整理作業。遺物水洗・注記。

安全大会(12日)。

堂込センター長視察(6日)。中村係長現地調査(2日・15日)。

小野昭氏(第四紀学会会長)ほか6名見学(19日)。

#### 【1月】

A～F-7～11区：(X・XI層)。

遺物取り上げ(No.20452～20597)。

基礎整理作業。遺物水洗・注記。

国交省との引渡協議(27日)。

堂込センター長現地視察(17日)。八木澤課長現地指

導(24日)。中村係長現地調査(16日・27日)。

内村氏・大野氏(大崎町教委)来訪(6日)。

横手氏(肝付町教委)来訪(10日)。

井村隆介氏(鹿大理学部准教授)ほか22名(教員1名・学生21名)見学(25日午後)。

発掘作業完了。プレハブ撤収。調査区内安全対策。排土処理(重機使用)。当該年度の作業終了(27日)。

### 第4節 整理・報告書作成

#### 整理・報告書作成作業の組織(平成30年度)

本報告書に伴う整理・報告書作成作業は、平成30・31年度に実施した。埋文調査センターの第一整理作業所を中心に行った。なお、平成28年度は、発掘調査と併行して基礎的整理作業(水洗い・注記)を行った。

整理・報告書作成作業に係る組織は以下のとおりである。

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所  
作成主体 鹿児島県教育委員会  
作成統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター

センター長 前迫 亮一  
作成企画 // 総務課長兼総務係長 中村伸一郎  
// 調査課長 中原 一成  
// 調査第一係長 今村 敏照  
作成担当 // 文化財専門員 抜水 茂樹  
事務担当 // 主 査 小牧 智子  
報告書作成指導委員会

平成30年5月31日 センター長ほか 5名  
平成30年8月6日 センター長ほか 5名  
平成30年10月2日 センター長ほか 5名  
平成30年11月1日 センター長ほか 5名  
平成31年2月5日 センター長ほか 5名

#### 整理・報告書作成作業の組織(平成31年度)

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所  
作成主体 鹿児島県教育委員会  
作成統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター

センター長 中原 一成  
作成企画 // 総務課長兼総務係長 中島 治  
// 調査課長 寺原 徹  
// 調査第一係長 福永 修一  
作成担当 // 文化財専門員 抜水 茂樹  
// 文化財調査員 北園 和代  
事務担当 // 主 査 有川 剛弘  
// 事業推進員 川崎 麻衣

報告書作成検討委員会

令和元年6月17日 センター長ほか 5名  
令和元年7月25日 センター長ほか 5名

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

宮脇遺跡は曾於郡大崎町井俣に所在する。大崎町は鹿児島県の東部を形成する大隅半島の中央部東側に位置し、東西に約8km、南北に約18km、総面積100.82km<sup>2</sup>である。東側に志布志市、西側に鹿屋市、南側に肝属郡東串良町、北側は曾於市と接し、南部では黒潮の流れる志布志湾に面している。

大隅半島の地形は九州山地の延長をなす東西の山地と、その間の丘陵、台地及び低地などの低地帯から形成されている。東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地であり、西側の山地は、北部の霧島火山の分脈から湾奥に形成された始良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は、北部の白鹿岳・荒磯岳など500～600m級の山々と南部の大笠柄岳（1,236.8m）を主峰に横岳・御岳など1,000m級の山からなる山地で、山容は急峻で深い森林に覆われている。

地質は高隈山周辺に分布している新生代古第3紀の日南層群が大隅半島の基盤をなしており、山間地を埋めるような形で、洪積世の火山活動による火砕流が堆積し、丘陵や台地が広く分布した典型的シラス地形となっている。一方低地は、高隈山地や鰐塚山地などに水源をもつ大小の河川が走り志布志湾や鹿児島湾に注いでいる。これらの河川は、上・中流域で狭い谷底平野を形成し、何段かの河岸段丘も認められる。

大崎町は志布志湾に面した大崎地区と内陸部に位置する野方地区が、南北に連結する瓢箪状を呈する。南部は海岸線に向かい緩やかな傾斜をなす起伏の少ない平坦な地形であり、北部は標高150mから200mの丘陵地帯で、北端部では谷間の多い起伏の激しい地形である。高隈山系などに端を発する菱田川、田原川、持留川が南流して志布志湾に注ぎ、南部はこれら3河川によってシラス台地を開析された水田地帯が開けている。北部は台地上に畑地が形成されている。地質はシラス台地上に形成された黒色火山灰土壌が多く、低地部に位置する水田の一部では泥炭層をなしている。

宮脇遺跡は南部に広がる平坦なシラス台地を南北に開析する田原川左岸の台地東端に位置し、標高は約40mを測る。田原川と菱田川の間は「菱田原」と称され、標高は約40mである。遺跡の西側は緩やかに上る平坦面、東側は田原川周辺の低地へ向かって急激に下る谷地形を呈している。

田原川右岸の台地上には、坂上遺跡・柿木遺跡・宮脇遺跡と同じ東九州自動車道建設に伴う発掘調査を実施した荒園遺跡などの遺跡が点在する。

### 第2節 歴史的環境

宮脇遺跡の所在する大崎町では、主に田原川、持留川、菱田川、大鳥川を臨む台地の縁辺部にそって遺跡の分布がみられる。本遺跡の周辺は、東九州自動車道建設に伴い発掘調査が行なわれた遺跡などから、様相が明らかになりつつある。以下では、宮脇遺跡の所在する大崎町内の各時代の遺跡を概説する。なお、東九州自動車道建設に伴う発掘調査を実施した遺跡については、第3節で述べる。

#### 旧石器時代

大崎町において確認されている旧石器時代の遺跡は少ないが、野方地区にある二子塚A遺跡において薩摩火山灰の下層から黒曜石等のフレークが確認されている。本遺跡ではナイフ形石器文化期と細石刃文化期の石器製作跡が検出され、これに伴う石器類が出土している。

#### 縄文時代

本編では縄文時代早期の遺構・遺物を報告することから、縄文時代早期の遺跡を中心に記載する。

大崎地区では、井俣の金丸城跡で石坂式・石鏃・凹石が出土し、岡別府の下堀遺跡では13基の集石、土坑と前平式・石坂式・下剥峯式・桑ノ丸式・撚糸文・山形押型文・平椀式・塞ノ神式土器、石錐等の遺物が出土している。

野方地区の立山B遺跡は、早期・前期・中期・晩期の遺物が確認され、早期の前平式土器が出土している。大崎地区との境に位置する二子塚A遺跡では、早期の集石と晩期の土坑を検出している。早期の遺物としては、吉田式・石坂式・桑ノ丸式・塞ノ神式等の土器が出土している。

#### 弥生時代

白砂青松で著名な「くにの松原」の砂丘後背地に立地する沢目遺跡は、砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺跡であり、堅穴住居跡・土坑・柱穴が発見され、入来Ⅰ・Ⅱ式、山ノ口Ⅰ・Ⅱ式、須玖式・鉄製品・軽石加工品が出土している。下堀遺跡では、山ノ口式の他、須玖式を伴う直径8mの円形大型住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。桜迫遺跡では、山ノ口式が出土している。田原川・持留川沿いには弥生土器片の散布地としての遺跡が多く点在し、特に河口付近にあたる横瀬地域では甕棺破片が採集されている。

#### 古墳時代

大崎町とその周辺の志布志湾沿いは、高塚古墳の南限域にあたり、南九州では数少ない前方後円墳をはじめとする古墳群が所在し、畿内との関連を窺わせる。町内の古墳はそのほとんどが大崎地区に集中し、野方地区には

数基しか存在しない。

大崎地区の横瀬古墳は古墳時代中期（5世紀後半頃）の大型前方後円墳で、隣接する東串良町唐仁大塚古墳に次いで県内第2の規模を誇り、墳丘からは円筒埴輪片・形象埴輪片が出土している。範囲確認調査で発見された周濠跡からは伽耶系陶質土器及び大阪府陶邑産の須恵器も出土している。神領古墳群は、前方後円墳4基・円墳9基で構成され、加えて地下式横穴墓7基の存在が知られている。6号墳（天子ヶ丘古墳）では日光鏡・変形獣帯鏡各1面が採集され、石室は花崗岩質粘板岩6枚を使用した組合式石棺が埋設されている。地下式横穴墓（竜相地下式横穴墓）では、鉄剣・鉄刀・イモガイ製貝剣・内向花文鏡などの副葬品が確認された。

町内では、他に飯隈遺跡群・田中古墳群・後迫古墳群等が知られ、地下式横穴墓としては飯隈地下式横穴墓群・鷲塚地下式横穴墓群が知られている。

その他、二子塚A遺跡で住居跡・土師器・成川式、沢目遺跡では古墳時代初頭の住居跡や布留式をまねて作られた土師器が、下堀遺跡で住居跡・溝状遺構・地下式横穴墓・鉄剣・鉄鏃が確認されている。

#### 古代、中世

古代の遺跡としては、下堀遺跡で土師器と土坑が確認されている。柿木段遺跡では、焼土跡・溝状遺構・古道跡が検出され、土師器や須恵器が出土している。

中世の遺跡は、ほとんどが山城であり、大崎城跡・胡摩ヶ崎城跡・野卸城跡・竜相城跡・金丸城跡・柗谷城・遠見ヶ丘があげられる。金丸城跡では溝状遺構・土坑・龍泉窯系の青磁・東播系須恵器・白磁・青花・瓦質土器・備前系播鉢・天目碗などが確認されている。

また、近年の発掘調査では、下堀遺跡で溝状遺構・畝跡とともに、青磁・青花・中国陶器などが確認されている。天神段遺跡では掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑墓・土坑などに伴う土器・輸入陶磁器（青磁・白磁・天目碗など）・鉄製品・青銅製品・滑石製石鍋片などが確認されており、中でも土坑墓1号からは、青磁碗（同安窯系）・青白磁・和鏡・滑石製石鍋・鉄製品（紡錘車・和鋏など）・木製品・土師器（鍋）・銭貨（開元通宝）などの副葬品・供献品が確認されている。

#### 近世

大崎地区の金丸城跡では、掘立柱建物跡・焼土を伴う土坑・軽石集積が検出され、肥前系染付・龍門司窯および苗代川窯産の薩摩焼・鉄製品・鉄滓などが出土している。

宮脇遺跡の周辺に目を向けると、遺跡に隣接して井俣神社も存在するが、これは宇宮脇の由来となっている。

この井俣神社は、元禄7(1694)年に創建されたとの記録が残っており、本遺跡を含む一帯が近世の開拓集落であったことを想起させるものとなっている。本遺跡内で確認された近世井戸跡や陶磁器類などもこれを補強する資料である。

### 第3節 志布志IC～鹿屋串良JCT間の遺跡

東九州自動車道（志布志IC～鹿屋串良JCT間）建設に伴う発掘調査等を実施した遺跡は第2表に示すとおりである。ここでは、各遺跡の概要だけを記載する。詳細については各報告書を参照していただきたい。

なお、平成29年度以降の発掘調査及び報告書刊行計画については、平成30年10月時点の予定である。

#### （参考・引用文献）

- 救仁郷断二 1951 『大崎町史』
- 大崎町 1975 『大崎町史（明治百年）』
- 大崎町教育委員会 2001 『立山B遺跡』 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
- 大崎町教育委員会 2005 『金丸城跡』 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
- 大崎町教育委員会 2005 『下堀遺跡・大崎細山田段遺跡』 大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010 『加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡・椿山遺跡・柿木段遺跡・野方前段遺跡A地点』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（154）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012 『宮ヶ原遺跡、野方前段遺跡B地点・柿木段遺跡2』 鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（173）
- 鹿児島県教育委員会、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2015 『天神段遺跡1』 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（3）
- 鹿児島県教育委員会、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2016 『天神段遺跡2』 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（6）
- 鹿児島県教育委員会、公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2016 『永吉天神段遺跡第1地点』 公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（8）



第 1 図 東九州自動車道関連遺跡位置図 (1 : 80,000)

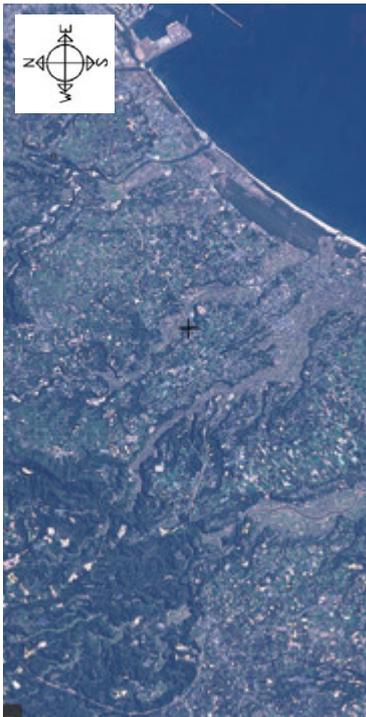
※ 本発掘調査を実施した遺跡のみ記載。地図中の番号は表 1 の番号と一致する。

第1表 志布志IC～鹿屋申良JCT間の遺跡

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
1	見婦	志布志市志布志町志布志台地上 標高約70m	H28年度 終了  H25・30年度 に県埋文センター調査(隣接地)	H30年度 刊行 令和元年度 隣接地刊行予定	旧石器	—	ナイフ形石器、細石刃、使用痕剥片、磨石、叩石、ハンマーストーン
					縄文早期	土坑 (H25年度県埋文センター調査のみ)	石坂式、押型文、下剥峯式、石鏃、磨石、石皿
					縄文前・中期	落とし穴、土坑	—
					縄文後・晩期	—	磨消縄文、丸尾式、西平式、中岳Ⅱ式、磨石、敲石
縄文時代を中心とした遺跡である。旧石器時代はナイフ形石器文化期及び細石刃文化期に比定される。縄文時代早期は、土器に比して石器の出土が極めて少ない。前～中期の落とし穴が2基検出されている。溝状遺構1号は時期不詳であるが縄文時代後期の可能性がある。							
2	宮ノ上	志布志市志布志町安楽台地上 標高約45m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
3	安良	志布志市志布志町安楽台地上 標高約30m	H28年度 H29年度 終了	H30年度 令和元年度 作業中	縄文早・後期	—	小牧3A、納骨式、西平式
					弥生中期	—	山ノロ式、須玖式
					古墳時代	溝状遺構	成川式土器、須恵器
					古代	—	土師器、須恵器
中世	掘立柱建物跡、土坑、ピット他	青白磁、滑石製石鍋、土師器、炭化米塊					
古墳時代後半期と中世を中心とした遺跡である。調査区内における両時期の集落構造把握等に向け整理作業を進めている。							
4	安楽小牧B	志布志市志布志町安楽台地上 標高約50m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 令和元年度 作業中	旧石器	—	ナイフ形石器、細石刃核、細石刃
					縄文草創期	集石	土器片、黒曜石剥片、磨石、敲石、石皿
					縄文早期	集石	吉田式、妙見・天道ヶ尾式、塞ノ神A式、塞ノ神B式、苫浜式、耳栓、石鏃、磨石、異形石器
					弥生	—	弥生土器、石包丁
起伏のある地形に立地し、縄文時代早期を中心に旧石器時代、縄文時代草創期も出土した複合遺跡である。縄文時代早期の集石は検出層によって構成礫の大きさに差が認められる。また、塞ノ神式土器の壺形土器や、耳栓、異形石器、円盤状石器等が出土している。							
5	次五	志布志市有明町野井倉台地縁辺部 標高約50m	H26年度 H27年度 終了	H29年度 刊行 ※志布志市教育委員会刊行	旧石器	—	畦原型細石刃核、細石刃、剥片
					縄文早期	落とし穴、連穴土坑、土坑、集石、磨石集積	前平式、加栗山式、吉田式、札ノ元Ⅶ類、石坂式、中原V式、下剥峯式、桑ノ丸式、押型文、手向山式、塞ノ神B式、打製・磨製石鏃、石鏑、局部磨製石斧
旧石器時代から縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代は、細石刃文化期の遺物が出土している。縄文時代早期前葉に該当する遺構や遺物が多く確認された。特に注目されるのは被熱破砕礫が多量に出土した点である。							
6	大代	志布志市有明町野井倉台地縁辺部 標高約40m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
7	木森	志布志市有明町野井倉河岸段丘 標高約30m	H26年度 H30年度 終了	令和2年度以降	縄文早期	集石	前平式、加栗山式、吉田式、下剥峯式、押型文、石鏃、石匙、磨石、敲石
					中世	掘立柱建物跡	須恵器、土師器、青磁、白磁、滑石製石鍋片、鉄製品、鉄滓
縄文時代早期と中世を中心とする遺跡である。遺構では縄文時代早期の集石、中世の掘立柱建物跡等が発見され、遺物では縄文時代早期の土器、石器、石匙、磨石・敲石の他、須恵器、土師器、青磁、白磁、滑石製石鍋片、鉄製品等が出土している。鬼界カルデラ噴火による液状化現象(噴砂跡)が確認されている。							
8	春日堀	志布志市有明町蓬原河岸段丘 標高約30m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 終了	H30年度 令和元年度 作業中	縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、集石、土坑、土器集中、炭化物集中、落とし穴	前平式、加栗山式、石坂式、下剥峯式、桑ノ丸式、押型文、手向山式、塞ノ神式、打製石鏃、打製・環状石斧、トロトロ石器、磨石、台石、石皿、砥石、穿孔円礫
					弥生	竪穴住居跡	山ノロ式
					古墳	竪穴住居跡、溝状遺構、土坑、棒状礫集積遺構	甕(東原式、笹貫式)、壺、埴、高坏、須恵器高坏、棒状礫、磨製石鏃片
					古代～中世	竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑墓、杭列跡、焼土跡	土師器
					近世	土坑、溝状遺構、古道、遺物集中	陶器、磁器
縄文早期から中世を中心とする遺跡である。遺構は縄文時代早期の竪穴住居跡、連穴土坑、集石、落とし穴、弥生時代の竪穴住居跡、古代～中世の掘立柱建物跡が検出され、遺物は縄文時代早期の土器、打製石斧、環状石斧、トロトロ石器等をはじめ、弥生時代から中近世の遺物が出土している。また鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象(噴砂跡)の痕跡も確認されている。							
9	稲荷堀	曾於郡大崎町菱田台地上 標高約50m	文化財課の試掘調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				
10	平良上C	曾於郡大崎町井俣台地上 標高約40m	H26年度 H27年度 終了	H28年度 刊行	縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、集石、埋設土器、チップ集中	吉田式、石坂式、下剥峯式、押型文、平椀式、石鏃、石匙、打製・磨製石斧、扁平打製石斧、磨石、石皿、礫石器、石核、フレーク、チップ
					縄文時代早期を中心とする遺跡である。遺構は竪穴住居跡、連穴土坑、集石、土坑が検出されている。遺物は、縄文時代早期の土器、石鏃、石匙、打製石斧、磨製石斧等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象(噴砂跡)も確認されている。		
11	宮脇	曾於郡大崎町井俣台地上 標高約40m	H27年度 H28年度 終了	H30年度 令和元年度 刊行  本報告書	旧石器	礫群2基	ナイフ形石器、三稜尖頭器、台形石器、細石器、石核、スクレイパー、搔器、使用痕剥片、フレーク、チップ、磨石、叩石
					縄文早期	集石、土坑、土器集中	加栗山式、小牧3A、下剥峯式、桑ノ丸式、押型文、平椀式、塞ノ神式、打製石鏃、磨石、チップ
					近世	—	薩摩焼、寛永通宝
旧石器時代・縄文時代早期を中心とする遺跡である。旧石器時代では、石器製作に関連すると考えられる石核、フレーク、チップ等が出土している。縄文時代早期では、集石、土坑、土器集中、ピットと土器、石器等が出土している。鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象の痕跡も確認されている。							
12	堂園堀	曾於郡大崎町井俣台地上 標高約45m	文化財課の試掘調査及び埋文センターの確認調査により、本路線には遺構・遺物がないことが確認されたため、本調査を実施せず。				

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
13	荒園	曾於郡大崎町 仮宿 台地縁辺部 標高約50m	H24年度 H25年度 H26年度 H30年度 終了  ※H24年度は 県埋文セン ター調査	H28年度 (第1地点) 刊行  (第2地点) (第3地点) H30年度 令和元年度 作業中	旧石器	—	畦原型細石核・細石刃・水晶刮片
					縄文早期	集石、土坑、剥片・チップ集中	前平式、吉田式、加栗山式、下剥峯式、押型文、手向山式、平椀式、壺ノ神式、吉浜式、条痕文、壺形土器、石鏃、スクレイパー、石匙、耳栓、打製・磨製石斧、磨石、石皿、フレーク、チップ
					弥生中期	竪穴住居跡、土坑	吉ヶ崎式、山ノロ式、磨製石鏃未製品、砥石
					古墳	竪穴住居跡	成川式土器、須恵器、砥石
					古代以前	片葉研堀溝状遺構	—
					中世	掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構、帯状硬化面	土師器、東播系須恵器、陶器、青磁、華南三彩
					近世以降	帯状硬化面	薩摩焼
縄文時代早期から古墳時代を中心とする遺跡である。遺構は、縄文時代早期の集石、弥生時代・古墳時代の竪穴住居跡、古代以前の片葉研堀、中世の掘立柱建物跡等が検出され、遺物は縄文時代早期の土器、石器、弥生時代・古墳時代の土器、土師器、陶器、磁器等が出土している。また、鬼界カルデラ噴火に伴う液状化現象の噴砂跡も確認されている。							
14	永吉天神段	曾於郡大崎町 永吉 台地縁辺及び 河岸段丘 標高30～50m	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 終了  ※H24年度は 県埋文セン ター調査	H27年度 (第1地点) 刊行 H28年度 (第2地点1) 刊行 H29年度 (第2地点2) 刊行 H30年度 (第3地点) 刊行 令和元年度 (第2地点3) 刊行	旧石器	礫群、ブロック	尖頭器、ナイフ形石器、台形石器、剥片
					縄文早期	集石、土器埋設遺構	前平式、加栗山式、吉田式、手向山式、下剥峯式、押型文、平椀式、壺ノ神式、吉浜式、条痕文、石鏃、石匙、石斧、磨石、砥石、石皿、フレーク、チップ
					縄文前期	—	曾畑式
					縄文後期	—	岩崎上層式、北久根山式、中岳Ⅱ式
					縄文晩期	竪穴住居跡、落とし穴、土坑	入佐式、黒川式、刻目突帯文、管玉、打製石斧
					弥生	竪穴住居跡、掘立柱建物跡、円形周溝墓、土坑墓群、土坑	入来式、山ノロ式、黒髪式、鉄鏃、磨製石鏃、管玉
					古墳	竪穴住居跡、土坑	成川式、須恵器
					古代	掘立柱建物跡、土坑	須恵器、土師器
					中世	掘立柱建物跡、土坑墓、地下式坑、火葬土坑、土坑	白磁、青磁、土師器、瓦質土器、東播系須恵器、備前焼、常滑焼、湖州六花鏡、砥石、石塔、古銭
近世	近世墓	薩摩焼、染付、寛永通宝、石臼					
旧石器時代から近世までの遺跡である。弥生時代中期の円形周溝墓を頂点とする土坑墓群から、国内では最古級となる鉄鏃が出土した。中世では白磁、青磁、瓦質土器、東播系須恵器等が多量に出土した。また、地下式坑と呼ばれる中～近世の大型土坑も発見された。							
15	細山田段	曾於郡大崎町 西持留 台地上 標高約95m	H25年度 H26年度 H27年度 終了	H26年度 H28年度 H30年度 令和元年度 作業中	縄文早期	集石	石坂式、下剥峯式、中原式、押型文、壺ノ神式、打製石鏃、石核
					縄文前期～ 中期初頭	土坑、土器集中	曾畑式、深浦式、大蔵山式、鷹島式、船元式、打製石鏃、石匙、石鏃、スクレイパー、二次加工剥片、磨石、砥石、石皿、石核、フレーク
					近世以降	溝状遺構・古道	—
					縄文時代前期から中期初頭を中心に、縄文時代早期から近世までを含む遺跡である。縄文中期では170基を超える土坑が検出されたほか、在地系土器の深浦式土器、近畿地方の大蔵山式土器や鷹島式土器、瀬戸内地方の船元式土器などが出土し、当時の遠隔地交流の一端が明らかとなった。		
16	小牧	鹿屋市串良町 細山田 台地上 標高約60m	H27年度 H28年度 H29年度 終了	H30年度 令和元年度 作業中	旧石器	—	細石刃、フレーク、チップ
					縄文早期	竪穴住居跡、連穴土坑、土坑、集石	前平式、吉田式、石坂式、下剥峯式、平椀式、条痕文、石匙、磨石、石皿
					縄文前期	—	曾畑式、深浦式、磨石
					縄文後期	竪穴住居跡、石皿立石遺構、伏隼、石斧集積遺構、集石、土坑	阿高式系、岩崎上層式、指宿式、市来式、石鏃、横刃型石器、打製石斧、磨石、石皿、大珠
					縄文晩期	—	入佐式、黒川式、刻目突帯文
					弥生中期	—	入来式、山ノロ式、砥石
					古墳	竪穴住居跡、礫集積、土器溜、土坑	東原式、辻堂原式、布留系土器、須恵器、鉄鏃、鉄製品、敲石、勾玉、軽石加工品
古代	土坑	土師器、須恵器短頸壺					
中世以降	竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、溝状遺構、焼土城	土師器、白磁、青磁、石鍋、輪羽口					
旧石器時代から中世までの遺跡である。縄文時代早期前半から中葉の集落、後期の石皿遺構を伴う環状構造の集落とこれらに伴う遺物が特筆される。この他、古墳時代の花卉形住居跡を伴う集落や中世の掘立柱建物跡群も発見されている。周辺の遺跡を含めて串良川沿岸における人間活動の変遷を追うことができる遺跡である。							
17	川久保	鹿屋市串良町 細山田 河岸段丘 標高30～50m	H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 H30年度 調査中	H27年度 H29年度 H30年度 令和元年度 作業中 (C区) 令和元年度 作業中 (A, B, D区) 終了	旧石器	礫群	剥片尖頭器、ナイフ形石器、畝原型細石核
					縄文早期	竪穴住居跡、集石、土坑	前平式、加栗山式、吉田式、倉園B式、石坂式、下剥峯式、押型文、壺ノ神式土器、石鏃、打製石斧、石皿
					縄文前期	集石	轟式、曾畑式、磨製石斧
					縄文晩期	集石	黒川式、刻目突帯文
					弥生中期	竪穴建物跡	高橋式、下城式、山ノロ式
					古墳	竪穴住居跡、鍛冶関連建物跡、竪穴状遺構、溝状遺構、道跡	成川式土器、輪羽口、高坏脚轆用輪羽口、鉄鏃、鉄斧、勾玉、管玉
					古代	掘立柱建物跡	須恵器、土師器
中世	掘立柱建物跡、溝状遺構、道跡	青磁、白磁、瓦器椀					
旧石器時代から中世までの遺跡である。特に古墳時代では、集落を構成する多数の竪穴建物跡や鍛冶関連遺物を伴う遺構が発見されているほか、専用の輪の羽口も出土している。古墳時代の鉄製品の生産過程を明らかにする良好な資料である。							

番号	遺跡名	所在地・立地	発掘調査	整理・報告書 作成作業	遺跡の概要		
					時代	主な遺構	主な遺物
18	町田堀	鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約90m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 終了	H27年度 (1) 刊行 H29年度 (2) 刊行	縄文早期	集石	下剥峯式, 平椀式
					縄文後期	竪穴住居跡, 埋設土器, 落とし穴, 土坑, 石斧集積遺構	中岳Ⅱ式, 石刀, 石鏃, 打製・磨製石斧, ヒスイ製垂飾, 小玉, 勾玉, 管玉
					縄文晩期	—	黒川式土器, 刻目突帯文
					弥生中期	竪穴住居跡	入佐式, 山ノロ式土器, 土製勾玉
					古墳	竪穴建物跡, 地下式横穴墓, 円形周溝墓, 溝状遺構	成川式土器, 人骨, 鉄剣, 鉄鏃, 刀子, ヤリ鉋, 異形石器
					古代	焼土跡, 道跡	土師器, 須恵器
縄文時代早期から古代までの遺跡である。古墳時代の地下式横穴墓が92基発見され、円形周溝を伴う例も初めて確認されている。立小野堀遺跡や下堀遺跡等と類似性が想定され、高塚墳と共存する志布志湾沿岸部の地下式横穴墓との比較が可能になり、大隅半島の古墳時代像解明に必須の遺跡である。このほか、縄文時代後期の竪穴建物跡から、榎原文を施す完全な石刀が出土している。							
19	牧山	鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約110m	H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 H29年度 終了	H28年度 (A地点1) 刊行 H30年度 (B, C, D地点) (A地点2) 令和元年度 作業中	旧石器	—	剥片
					縄文早期	竪穴住居跡, 連穴土坑, 土坑, 集石構, 石器製作跡	吉田式, 石坂式, 下剥峯式, 辻タイプ, 桑ノ丸式, 押型文, 石鏃, 石匙, スクレイパー, 磨石, 剥片, チップ
					縄文前期	埋設土器(甗式)	甗式, 条痕文
					縄文後期	土坑, 落とし穴状遺構, 埋設土器, 石器集中部	市来式, 丸尾式, 西平式, 太郎迫式, 三万田式, 中岳Ⅱ式, 打製・磨製石斧, 磨石, 剥片, 石核, 台石, 石冠
					縄文晩期	土坑	入佐式, 刻目突帯文
					弥生中期	竪穴住居跡, 掘立柱建物跡, 土坑	山ノロ式, 打製・磨製石斧, 磨製・打製石鏃, 磨石, 敲石, 石皿, 青銅鑿
旧石器時代から中世にかけての遺跡である。特に、縄文時代後期の建物跡を構成していた可能性のある柱穴群が環状に発見されており注目される。また、同時期のものと考えられる複数の埋設土器と石冠が1点出土している。							
20	田原迫ノ上	鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約120m	H22年度 H23年度 H24年度 H25年度 H26年度 H28年度 H30年度 終了 ※H22～24は 県埋文セン ター調査	H26年度 (1) 刊行 H27年度 H28年度 (2) 刊行 H30年度 (3) 令和元年度 作業中 ※H23～24は県埋 文センター作業	縄文早期	竪穴住居跡, 連穴土坑, 集石, 落とし穴, 土坑, 石器製作跡	前平式, 吉田式, 倉園B式, 石坂式, 下剥峯式, 辻タイプ, 桑ノ丸式, 中原式, 押型文, 手向山式, 平椀式, 塞ノ神式, 石槍, 石鏃, 石匙, 磨石, 敲石, 石皿, 打製石斧
					縄文後期	落とし穴, 礫集積	指宿式, 市来式, 石鏃, 磨石
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	竪穴住居跡, 大型建物跡, 掘立柱建物跡, 円形・方形周溝, 土坑	山ノロ式・中溝式, 擬凹線文系壺, 土製勾玉, 鉄器, 磨製石鏃, 石匙, 砥石, 敲石, 台石
					古墳時代以降	溝状遺構, 畝状遺構	土師器椀, 薩摩焼
縄文時代早期から弥生時代中期までの遺跡である。弥生時代中期では、ベッド状遺構を伴う方形・円形の大型竪穴住居跡, 棟持柱をもつ掘立柱建物跡2棟を含む建物跡群, 柱穴列や円形・方形の周溝などが検出されており、大隅半島中央部における当該期の集落の様相を知る上で貴重な遺跡である。このほか、縄文時代早期の竪穴住居跡, 連穴土坑などの遺構が多数発見されていることも注目される。							
21	立小野堀	鹿屋市串良町 細山田 台地縁辺部 標高約125m	H22年度 H23年度 H24年度 H26年度 H27年度 H28年度 終了 ※H22～24は 県埋文セン ター調査	H24年度 H25年度 H26年度 H27年度 H28年度 (1) 刊行 H30年度 (2) 令和2年度以降 作業 ※H24は県埋文セン ター作業	縄文前・中期	—	深浦式
					縄文後期	—	指宿式, 市来式, 西平式
					弥生中期	—	山ノロ式
					古墳	地下式横穴墓, 土坑墓, 溝状遺構	成川式, 須恵器, 鉄器(刀・剣・槍・鉾・刀子・鏃等), 青銅鈴, 人骨
					時期不詳	溝状遺構	—
縄文時代前期から古墳時代までの遺跡である。特筆すべきは、古墳時代の地下式横穴墓が190基発見されたことである。玄室内には鉄鏃や鉄剣等の鉄器, 青銅製鈴等の副葬品と人骨が多数残っていたほか、墓周辺から多量の土器や須恵器が出土した。青銅製鈴をはじめ、多種多様な副葬品を伴った地下式横穴墓群の発見は、南九州の古墳時代墓制の様相全体を解明していく上で貴重な資料である。							
22	十三塚	鹿屋市串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※県埋文セン ター調査	H22年度 刊行 ※県埋文センター 作業	縄文早期	—	石坂式
					縄文後期	—	凹線文, 市来式, 三万田式
					縄文晩期	—	黒川式
					弥生中期	竪穴住居跡, 掘立柱建物跡, 土坑	山ノロ式, 土製勾玉, 打製・磨製石鏃, 棒状敲貝, 鉄鏃
					古墳時代	—	成川式
弥生時代中期を中心とする遺跡である。花弁形・方形・円形を呈する竪穴住居跡が発見された。出土遺物等から、王子遺跡や前畑遺跡等と同時期の集落跡と考えられる。また、集石が竪穴住居跡内から発見されている。7号住居跡の埋土内から、松木藪遺跡や永吉天神段遺跡から出土した鉄鏃と類似する無茎の鉄鏃が出土した。							
23	石籠	鹿屋市串良町 細山田 台地上 標高約140m	H20年度 H21年度 終了 ※県埋文セン ター調査	H22年度 刊行 ※県埋文センター 作業	縄文早期	集石, 土坑	岩本式, 前平式, 志風頭式, 石坂式, 平椀式, 貝殻条痕文, 鎌石橋式, 甗A式, 打製石鏃, 磨石, 敲石
					弥生中期	—	山ノロ式, 須玖式土器
縄文時代早期前半から早期末を中心とする遺跡である。鎌石橋式土器1個体と甗A式土器が2個体以上が同一層位から出土し、両型式が同時期に存在した可能性を示唆する遺跡である。							



宮脇遺跡空中写真（国土交通省国土画像情報より転載）



第2図 周辺遺跡位置図 (1 : 25,000)

第2表 周辺遺跡一覧表

	遺跡名	所在地	時代	地形	遺物等	備考
1	宮脇遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	古墳, 古代	台地	土器・土師器	H11農政分布, H27・28発掘調査(県)
2	坂上遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	弥生, 古墳	台地		H11農政分布
3	柿木遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	弥生, 古墳	台地	土器	H11農政分布
4	田中古墳群	鹿児島県曾於郡大崎町井俣・神領	古墳	台地		
5	堂園堀遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	弥生, 古墳	台地	土器	H11農政分布, H23確認調査(県)
6	荒園遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町仮宿	弥生, 古墳	台地	土器	H11農政分布, H24~26発掘調査(県)
7	干浅遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	弥生, 古墳	台地	土器	H11農政分布
8	金丸城跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	縄文, 古墳, 古代, 中世, 近世	台地	青磁・白磁・古伊万里・炉跡16基	H10~12発掘調査(町)
9	坂ノ上遺跡	鹿児島県志布志市有明町原田字坂ノ上・前田・西原	弥生, 古墳	台地		H11農政分布
10	清水遺跡	鹿児島県志布志市有明町原田字清水	弥生	台地	打製石斧・磨製石斧	
11	原田古墳群	鹿児島県志布志市有明町原田字大塚・竹塚	古墳	台地	円墳5基・方墳1基	
12	大塚遺跡	鹿児島県志布志市有明町原田字大塚・出口・有本・竹塚	縄文, 古墳	台地		H10農政分布
13	東中原遺跡	鹿児島県志布志市有明町原田字東中原・大塚・藤原・中須	古墳	台地		H10農政分布
14	久木野堀遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町菱田	弥生, 古墳	台地	土器	H11農政分布
15	牧ノ上B遺跡	鹿児島県志布志市有明町蓬原字牧ノ上	古墳	台地		
16	稲荷堀A遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町菱田	弥生, 古墳	台地	土器	H11農政分布
17	稲荷堀B遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町菱田	古代	台地	土師器	H11農政分布
18	中沖A遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町菱田	弥生, 古墳	台地	土器	H11農政分布
19	中沖B遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町菱田	弥生, 古墳	台地	土器	H11農政分布
20	長田遺跡	鹿児島県志布志市有明町原田字長田・牧・春日免	縄文, 弥生, 古墳, 中世	台地	山ノ口式・成川式・棟持柱建物跡・白磁碗	H10確認調査, H11本調査
21	井俣牧遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	弥生, 古墳	台地	土器片	H11農政分布
22	井俣和田遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	古墳	平地		
23	平良上A遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣平良上平田	縄文, 古墳	台地	土器片	H9農政分布
24	平良上B遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣平良上	古墳	台地	土器片	H9農政分布
25	平良上C遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣平良上	縄文, 弥生, 古墳	台地	竪穴住居跡等	H26・27 発掘調査(県)
26	平良宇都A遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	古墳	平地		
27	平良宇都B遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	弥生, 古墳	平地		
28	牛ヶ迫遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町飯隈	弥生, 古墳	台地	土器	H11農政分布
29	飯隈遺跡群	鹿児島県曾於郡大崎町飯隈	弥生, 古墳	台地		
30	別府下遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町井俣	古墳	平地		H18確認調査(町)
31	王子脇遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町益丸王子脇	古墳	台地		
32	田原B遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町益丸	古墳	海岸	須恵器片	
33	大園・浜牧・蓼池遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町益丸・神領	弥生, 古墳, 古代, 平安	台地		H8農政分布
34	沢目遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町益丸松原	縄文, 弥生, 古墳	海岸	入来式・山ノ口式・須玖式・成川式	H11発掘調査(町)
35	神領遺跡群	鹿児島県曾於郡大崎町神領	弥生, 古墳, 中世	台地	前方後円墳4基・円墳9基・地下式横穴墓8基	S43発掘調査(町)他
36	田原A遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町神領西神領	弥生	平地		
37	大崎城跡	鹿児島県曾於郡大崎町仮宿	中世, 室町	台地	掘割3ヶ所	
38	胡摩ヶ崎城	鹿児島県曾於郡大崎町仮宿	中世, 室町	台地	掘割4ヶ所	
39	美堂B遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町仮宿	古墳	台地		H7農政分布
40	美堂A遺跡	鹿児島県曾於郡大崎町仮宿	古墳, 中世, 近世	台地	成川式	H7農政分布, H14発掘調査(町)

## 第三章 調査の方法と層序

### 第1節 調査の方法

ここでは、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法等、整理・報告書作成作業の方法について簡潔に述べる。

#### 1 発掘調査の方法

宮脇遺跡の発掘調査は、平成24年度に確認調査、平成25年度に試掘調査（平成24年度未調査部分）、平成27年度と平成28年度に本調査を実施した。調査対象表面積は4,900㎡、調査対象延面積は9,000㎡であった。

調査はグリッドを設定して実施した。また、掘り下げに関しては基本的に人力で行い、無遺物層や火山灰の硬化層については、重機を併用して掘り下げた。遺構については、移植ごて等の遺構調査に適した道具を用いて慎重に調査し、実測や写真撮影等を行った。遺物については、平板実測やトータルステーションを用いて取り上げを行った。

各年度の発掘調査の方法等は、以下のとおりである。

#### 平成27年度

平成27年8月3日から平成28年2月25日までの期間に、表面積4,900㎡、延べ面積5,600㎡を対象として本調査を行った。調査区割り（グリッド）は、工事中基準杭のSTA91と東に70m移動した2点を結ぶ線を中心に、10m間隔で南側から北側に向かってABC・・・、西側から東側に向かって1・2・3・・・と設定した。

調査は無遺物層であるI～V層を重機で除去した後、VI～VIII層は人力による掘り下げ、地形測量はIX層上面で行った。その後、X層以下の遺構・遺物の有無を確認するため先行調査を行ったところ、X層で旧石器時代の遺物包含層が確認された。X層の調査はIX層を重機で除去した後、人力で掘り下げた。

出土した遺物は、トータルステーションで出土位置を記録した。まとめて出土した遺物や遺構に関わりのある遺物については、1/10の縮尺で実測した。また、遺構については、写真撮影後に1/10もしくは1/20の縮尺で実測した。A～G-2～12区は縄文時代早期の調査、B～C-6・7区、D～E-5・6区、B～G-11区、F-8～12区は旧石器時代の調査を行った。

#### 平成28年度

平成28年11月7日から平成29年1月27日の期間に表面積及び延べ面積3,400㎡を対象に本調査を実施した。調査区割りについては、前年度のものを踏襲した。まず、IX層（薩摩火山灰層）を重機で除去した後、人力による掘り下げを行った。検出した遺構は、写真撮影や1/10

の縮尺で実測を行った。出土した遺物は、トータルステーションで取り上げた。地形測量については、Xb層上面とXII層上面で実施した。

#### 2 遺構の認定と検出方法

本遺跡で検出された遺構の認定と検出方法については、以下のとおりである。

##### （1）遺構の認定・分類・時期判断

本編掲載の遺構は、検出面・埋土状況や色調・規模等を基に発掘調査担当者間で検討し、認定及び時期判断を行ったものである。主な遺構の認定及び時期判断については、以下のとおりである。

土坑については、埋土や形状、遺物の出土など総合的に検討し、分類・認定・時期判断を行った。ただし、検出面が該当時期の地層よりもかなり下位層で検出されたものもあるが、埋土の堆積状況や色調・遺構内（埋土中のものも含む）遺物等から総合的に検討し、時期判断を行った。

礫群・集石については、時期を問わず概ね5個以上の礫が集中したものを礫群・集石と認定した。時期については、検出面や集石内外の出土遺物の種類等で総合的に検討し、判断した。

##### （2）遺構の検出方法

本編掲載の遺構の検出については、各年度とも共通の調査方法として、当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが、判別のしやすい地層上面での検出が多くなったのは否めない。

また、畑地や雑木林があった箇所調査では、攪乱を受けている箇所があり、遺構の検出をはじめとする調査に支障があった。この場合、ミニトレンチの設定、攪乱部分の埋土除去等、最善の調査法を調査担当職員で検討し、遺構の推定ラインも含め残存部の記録保持に努めた。

#### 3 整理・報告書作成作業の方法

平成30年度から平成31年度まで、整理作業を実施した。発掘調査出土品の整理作業を中心に、平成31年度は前年度の整理作業の成果を引き継ぎ実施した。そのため、基本的な整理作業の方法は同じである。

#### 平成30年度

平成27～28年度までの発掘調査成果品の図面整理、水洗い、注記等を行った。遺跡名を表す記号は「Mワキ」とした。

報告書に掲載する旧石器時代、縄文時代早期の遺構・遺物の分類・数量把握を行い、挿図作成・原稿執筆を

行った。

土器の分類・接合は、遺構内遺物と包含層遺物に分けた後、胎土や文様等で分類し、さらにグリッドごとに分けて接合を行い、その後エリアを広げて接合する方法をとった。石器については、剥片石器と礫石器に分けた後、器種及び石材別に分類した。また、集石内の礫及び包含層内の礫の接合も行い、礫の使用状況の検証も試みた。

遺物出土分布図は、平板実測で取り上げた情報についてはデジタイザーを用いてデータ化し、トータルステーションで取り上げたデータと統合、図化ソフトを使用して作成した。

土層断面や遺構のトレースは、鉛筆トレースで下図を作り、点検・修正後、ペントレース及びデジタルトレースを行った。

さらに、出土遺物の包含層出土遺物の実測・拓本・トレース・写真撮影・レイアウトを行った。

## 第2節 層序

宮脇遺跡の基本層序は、次のとおりである。

I 層	表土（耕作土）	平均厚20～25cm
II a層	黒色土 7.5YR3/1	平均厚15cm
II b層	白色パミスを含む黒色土 7.5YR2/1	平均厚5～10cm
II c層	黒色土 7.5YR2/1	平均厚10～15cm
III 層	黄色パミス（池田降下軽石）を含む暗褐色土	平均厚5～15cm
IV 層	暗茶褐色土 7.5YR3/3	平均厚8cm
V a層	橙色火山灰土 アカホヤ火山灰 7.5YR6/6	平均厚30cm
V b層	灰褐色土 鬼界カルデラの火山爆発の地震に伴う噴砂 7.5YR5/2	平均厚10～30cm
V c層	橙色軽石土 幸屋降下軽石 7.5YR6/8	平均厚10cm
V d層	灰褐色土 鬼界カルデラの火山爆発以前の地震に伴う噴砂（A-5・6区付近のみ） 7.5YR5/2	平均厚5～8cm
VI 層	暗褐色土 縄文時代早期後葉の遺物包含層 7.5YR3/3	平均厚3～5cm
VII a層	黒褐色土 縄文時代早期中葉の遺物包含層 7.5YR3/2	平均厚15cm
VII b層	白色パミスを含む黒褐色土 縄文時代早期中葉の遺物包含層 7.5YR3/2	平均厚15～20cm
VIII 層	白色・橙色パミスを含む褐色土 縄文時代早期前葉の遺物包含層 7.5YR4/3	平均厚20cm
IX 層	橙色火山灰土 薩摩火山灰 7.5YR6/6	平均厚15cm

X a層：黒褐色土 黒褐色土 10YR2/3  
平均厚5～10cm

X b層：暗褐色粘質土 旧石器時代（細石器・ナイフ形石器）の遺物包含層 7.5YR3/4  
平均厚5～10cm

X a' 層：IX～XII層土の混土 極暗褐色土  
平均厚10～20cm

X b' 層：X a～XII層土の混土 暗褐色土  
旧石器時代（細石器・ナイフ形石器）の遺物包含層  
平均厚5～30cm

※X a'・X b'層はB～G-7～12区に見られる。IX層は安定して堆積していることから、縄文時代以前の自然作用（崩落・地滑り等）による攪乱層である。

X c層：極暗褐色粘質土 旧石器時代（細石器・ナイフ形石器）の遺物包含層 7.5YR2/3  
平均厚10～15cm

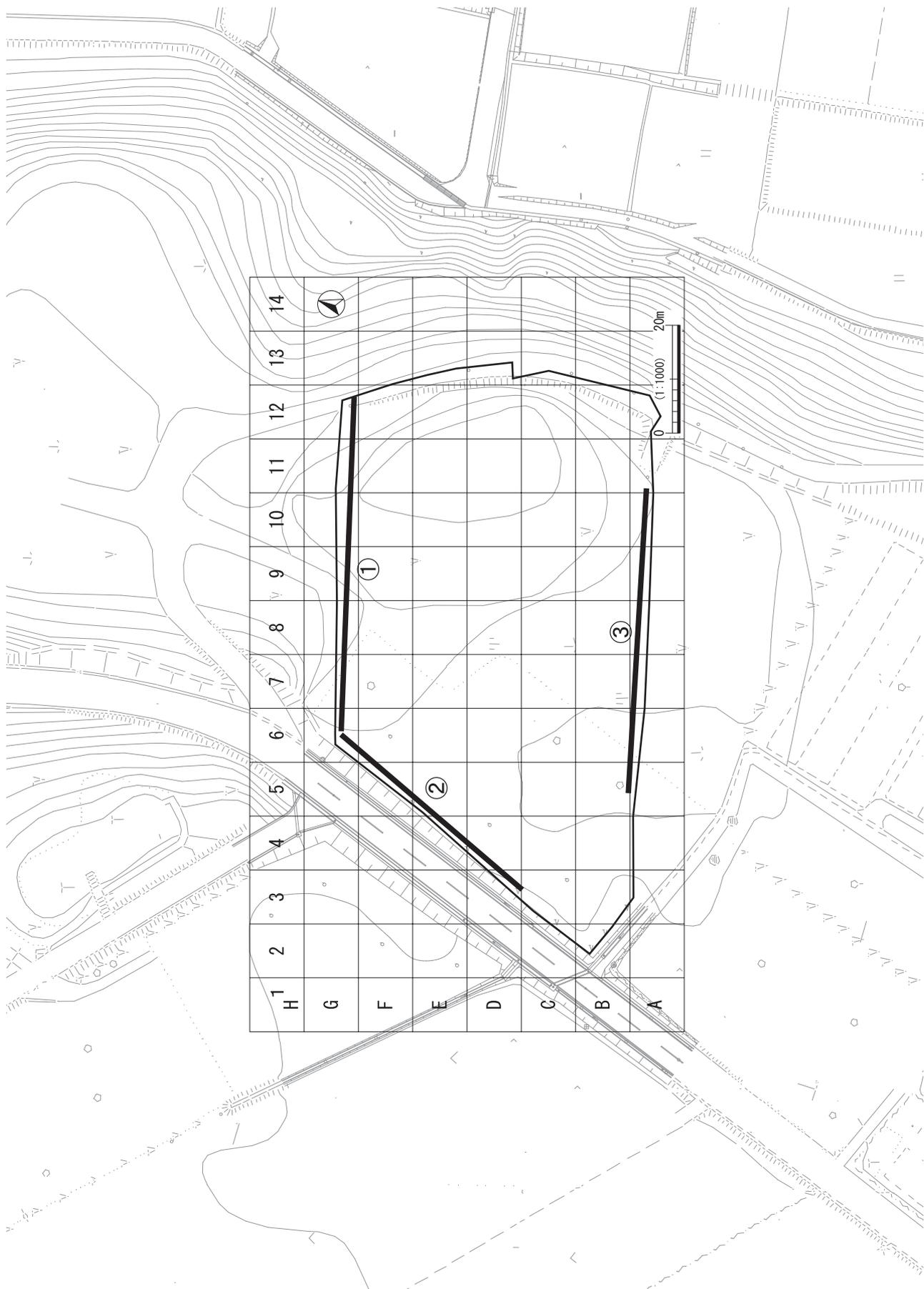
X d層：黒褐色粘質土 10YR2/3 平均厚20～25cm

XI a層：暗褐色粘質土 旧石器時代（ナイフ形石器）の遺物包含層 10YR3/4 平均厚10～15cm

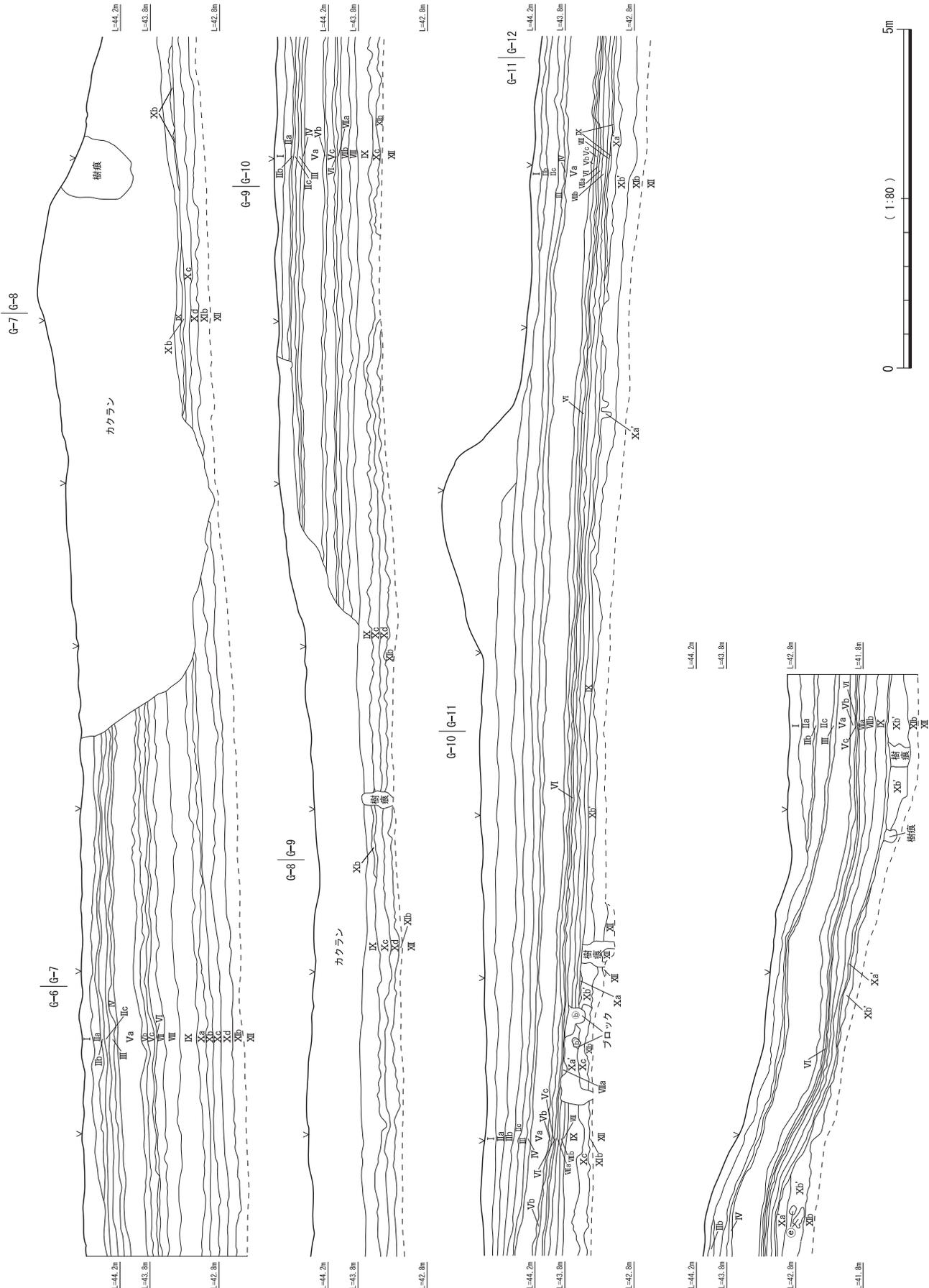
XI b層：オリーブ褐色 旧石器時代（ナイフ形石器）の遺物包含層 2.5Y4/6 平均厚15～20cm

XII 層：明黄褐色火山灰土 2次堆積シラス 10YR6/6

※火山灰の年代については、町田洋 新井房夫著 2003 『新編火山灰アトラス—日本列島とその周辺—』東京大学出版会（P108～110）から引用した。なお、年代は放射性炭素年代測定法で算出され、暦年較正した年代である。



第3図 グリッド配置と土層断面位置図



第4図 土層断面図①G-6~12

C-3 | D-3

D-4 | E-6

Geological cross-section C-3 | D-3 showing soil layers I to XII. The profile includes sub-labels IIa, IIb, III, IV, Va, VI, VII, VIII, IX, Xa, Xb, Xc, Xd, XIa, XIb, XIc, and XII. Elevation markers are shown at L=43.2m and L=42.0m.

Geological cross-section D-4 | E-6 showing soil layers I to XII. The profile includes sub-labels IIa, IIb, III, IV, Va, VI, VII, VIII, IX, Xa, Xb, Xc, Xd, XIa, XIb, XIc, and XII. Elevation markers are shown at L=43.2m and L=42.0m. A large 'カクラン' (Kakuran) area is present, and '樹根' (Tree roots) are indicated.

F-6 | G-6

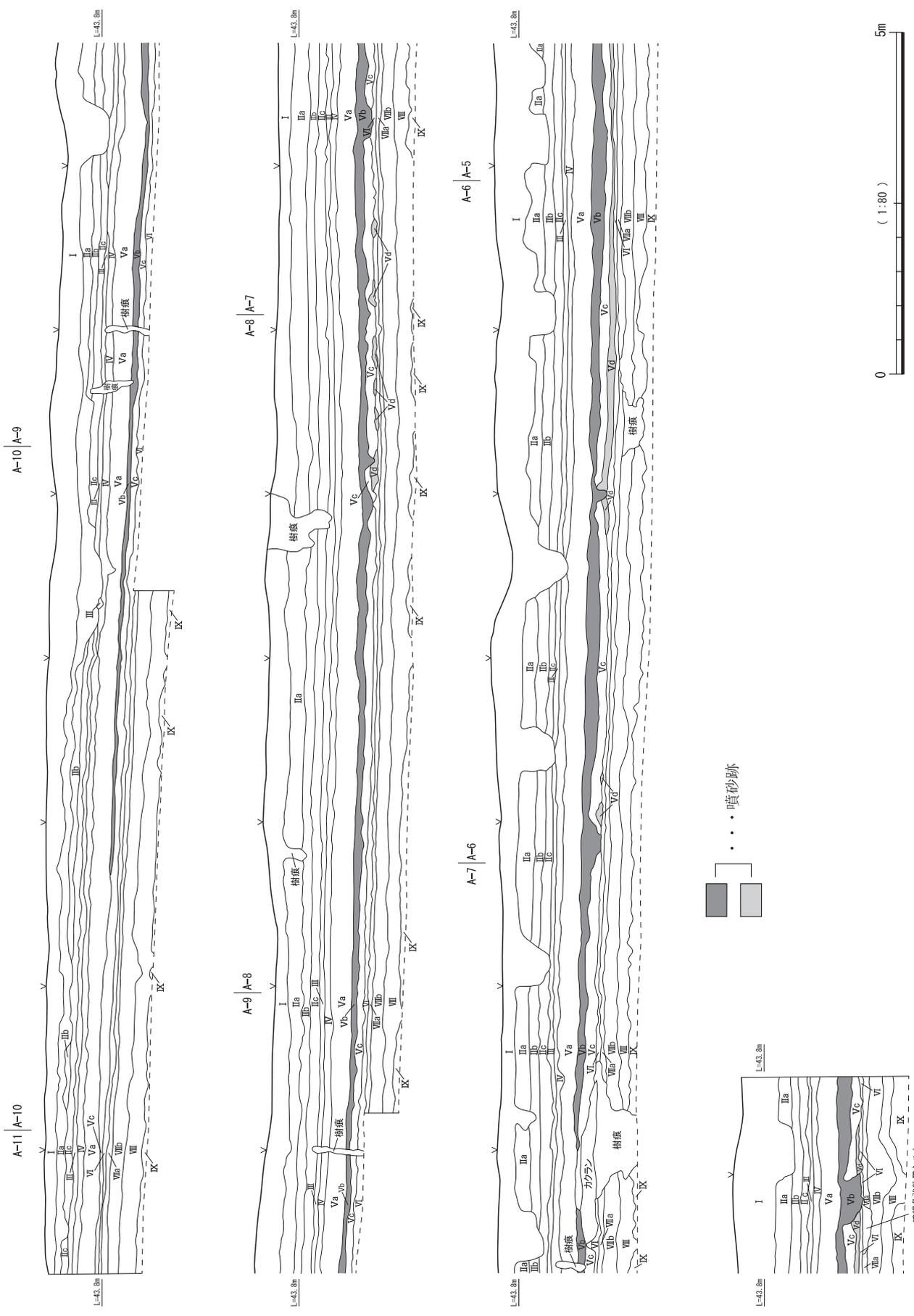
Geological cross-section F-6 | G-6 showing soil layers I to XII. The profile includes sub-labels IIa, IIb, III, IV, Va, VI, VII, VIII, IX, Xa, Xb, Xc, Xd, XIa, XIb, XIc, and XII. Elevation markers are shown at L=43.2m and L=42.0m.

■ ..... 噴砂跡

0 5m  
( 1:80 )

第5図 土層断面図②C~G-3~6

- 18 -



第6図 土層断面図③A-5~11

## 第IV章 調査の成果

### 第1節 旧石器時代の調査

#### 1 調査の概要

遺構・遺物が確認されなかったA～C-8～10区を除くエリアの調査を行った。ⅩⅦ層上面における旧石器時代の地形は、調査区の東側から西側に向かってなだらかに下る傾斜面が形成されている。西側のC・B-3・4区付近の標高は41m以下で、D・E-11・12区付近の標高は約44.3mで標高差は約4mである。また、東側端部は本遺跡東方に流れる田原川によって浸食されたシラス台地の先端部に当たるため、急傾斜で下がっている。

検出された遺構は礫群が2基である。調査区の西側と東側にそれぞれ位置する。

#### 2 礫群

旧石器時代の2基の礫群は1号をD-12区のXb層で、2号をE-6区のXd層で検出した。これらは調査区の東端と西端にそれぞれ位置し、礫数や石材等が異なる。

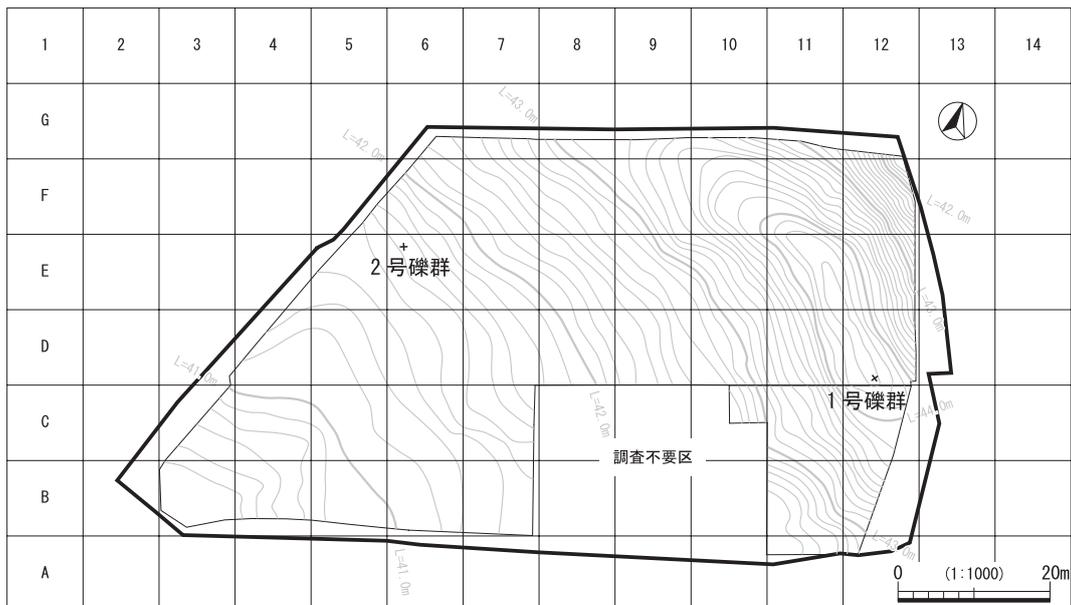
#### 1号礫群（第8図）

D-12区、Xb層で検出した。長軸80cm・短軸48cmの範囲に7点の礫がまとまる。構成礫は安山岩、砂岩、頁岩、ホルンフェルスであり、15～20cm程のやや大型で細長いものが3点ある。最大のものは長さ21cmを測る。構

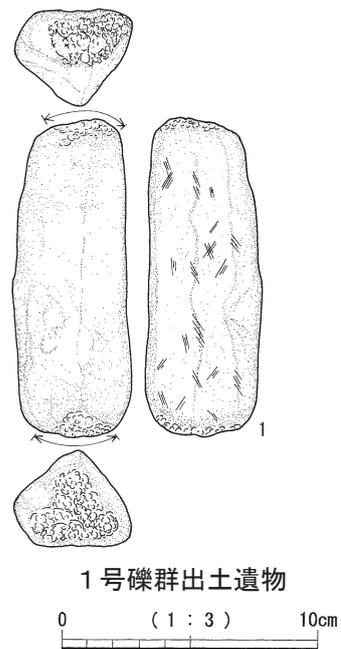
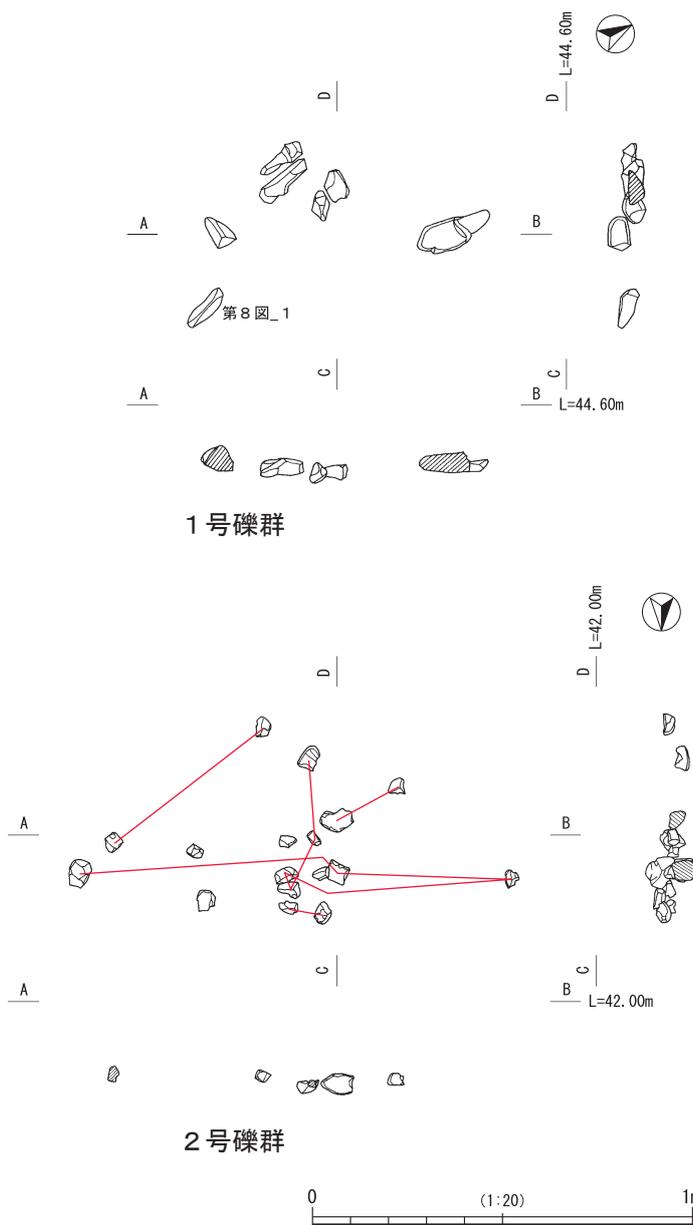
成礫の総重量は2341.5gである。類似した形状の礫で構成される点から調査当初は石材デポの可能性も想定して調査を進めた。しかし、複数の石材が混在する点や、包含層で出土した礫石器とは素材とする石材の形状が異なる点から、礫群と判断した。掘り込みや炭化物は確認されず、被熱した礫はない。また、礫群内及び周辺で出土した礫間での接合も試みたが、接合例はなかった。石器としての使用痕が認められる1点を図化した。両端部に敲打痕があり、身部に摩耗による光沢がみられる全長124mmの砂岩である。ハンマーとして使用していたと考えられる。

#### 2号礫群（第8図）

E-6区、Xd層で検出した。長軸120cm・短軸56cmの範囲に17点の礫がまとまる。構成礫は全て砂岩であり、5cm大のものが主体をなす。また、大半が被熱赤化している。構成礫の総重量は1360.8gである。遺構内の礫の接合を試みたところ、2点接合したものが3組、7点接合したものが1組の計4組13点が接合した。特に東西の両端で検出した礫は中央部分の礫5点と接合し、残長さ15cm程度の長楕円形の礫となった。掘り込みや炭化物は確認されなかった。



第7図 1・2号礫群位置図



第3表 礫群一覧表

挿図番号	番号	出土区	検出面	大きさ (cm)		掘り込み	構成礫数	出土遺物	石材別個数					備考
				長軸	短軸				安山岩	ホルンフェルス	砂岩	頁岩	その他	
8	1	D-12	Xb	80	48	無	7	棒状敲石	1	2	3	1		掘り込み, 炭化物無し
	2	E-6	Xd	120	56	無	17				17			掘り込み, 炭化物無し

第4表 遺構内石器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	出土区	器種	石材	計測値				備考
						最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	
8	1	1号礫群	D-12	棒状敲石	砂岩	125	44	46	283	裏面に擦痕

第8図 1・2号礫群, 出土遺物

### 3 遺物

基本層序では薩摩火山灰層（IX層）下位のXb層・Xc層が細石刃石器群及びナイフ形石器群の遺物包含層、XIa・XIb層がナイフ形石器群の遺物包含層とされている。しかし、遺物の主要な分布域において、Xa'層（IX～XII層の混土）・Xb'層（Xa～XII層の混土）とされる攪乱土の堆積が認められている。また、攪乱土層を除く個別の遺物の取り上げ層位についても、ナイフ形石器文化期と細石刃文化期の年代指標となる出土遺物に有意な層位的傾向は認められず、混在して出土している状況がある。遺物の平面分布からは、いくつかの遺物集中部が存在した可能性があるが、一部を除き、器種・石材や石器群のまとまりと遺物の平面分布との間に明確な対応関係を認めることはできなかった。

このため、報告は文化層及び文化層ごとの遺物集中部を単位として出土遺物を提示すべきであるが、上述の状況からこれが困難なため、Xb層～XIb層までの出土遺物を旧石器時代の出土資料として、一括して取り扱った。

#### ナイフ形石器（第9図2～12）

2～4は一側辺に調整剥離が施されるナイフ形石器である。2は灰褐色を呈する比較的緻密な頁岩を素材とするナイフ形石器である。右側辺は腹面側からの急傾斜剥離で調整され、左側辺は鋭利な剥離の縁辺が残置される。下部を欠失するが、一側辺加工のナイフ形石器の可能性はある。3は灰褐色の緻密な頁岩の横長剥片を素材とするナイフ形石器である。左側辺は鋭利な剥離縁辺で、右側辺は腹面側からの急傾斜剥離により調整され半月状を呈する。上端部を欠失するが一側辺加工のナイフ形石器とみられる。4は灰白色に灰色の縞が入る比較的緻密な砂岩製の縦長剥片である。右側辺縁は鋭利な縁辺を呈し、左側辺には腹面側から急傾斜剥離による二次加工が施されている。基部側の下半部を欠失するがやや大型のナイフ形石器とみられる。5～10は二側辺に調整剥離が施されるナイフ形石器である。5は黒曜石2類の横長剥片を素材とする小型のナイフ形石器である。左右側辺とも腹面側からの細かい調整剥離が施され、刃部となる上辺には微細な剥離が生じており、基部を欠損する。

6は暗赤褐色を呈する頁岩製の縦長剥片を素材とするナイフ形石器である。左側辺は腹面側からの荒い急傾斜剥離により調整され、右側辺下半部は平坦剥離による二次加工が施される。先端部を欠失するが、残存長5.3cmを測る。中型の二側辺加工のナイフ形石器である。

7は機能部を大きく欠失するが、黒色良質な頁岩の剥片を素材とする二側辺加工のナイフ形石器である。左側辺及び右側辺下半に腹面側からの荒い急傾斜剥離が加えられている。

8は暗赤褐色を呈する良質な頁岩製の剥片を素材とす

るナイフ形石器である。左側辺には腹面側から急傾斜剥離が施され、右側辺にも調整剥離が施され先端部が尖る形状となっている。基部側下半部を欠失するが、二側辺加工のナイフ形石器とみられる。

9は不純物を多く含むやや茶色を帯びた黒色を呈する透明感のある黒曜石4類製の不定形の横長剥片を素材とする。右側辺は背面側からの荒い急傾斜剥離で調整され、やや厚みのある左側辺は腹面側からの急傾斜剥離と背面側からの平坦剥離による二次加工が施されている。上半部の機能部を欠失するが、二側辺加工のナイフ形石器の可能性が高い。10も黒曜石4類の横長剥片を素材とする二側辺加工のナイフ形石器である。上部を欠損し機能部は残存しないが、左右側辺とも腹面側からの急傾斜剥離で調整されている。

11は黒曜石4類の厚みのある横長剥片を素材とするナイフ形石器である。基部付近中心に背面側からの平坦剥離が施され、左側辺は基部近く、右側辺はほぼ全体に腹面側からの急傾斜剥離が施される。背面稜上から左右に稜上剥離が加えられ、断面形は三稜尖頭器に近い形状であるが、上辺に鋭利な剥離の縁辺を残し先端が尖った形状とはならない。機能部とみられる上辺左上角に折れが、右下に小剥離が生じている。12は黒曜石4類の不定形剥片を素材とする平面形が菱形を呈するナイフ形石器である。左上側辺は腹面側から、左下側辺は背面側から、右下側辺は背面側から急傾斜剥離が施されている。先端部及び右上側には折れが生じ機能部が失われているがナイフ形石器とみられる。

#### 三稜尖頭器（第9図13）

13は黒曜石4類の厚みのある剥片を素材とする三稜尖頭器である。左側辺は腹面側から急傾斜剥離により調整され、右側辺下半は、背面側から腹面側に平坦剥離による調整を行った後、腹面側からの急傾斜剥離が加えられる。

#### 台形石器（第10図14）

14は黄褐色を呈する玉随製の剥片を素材とする台形石器である。左側辺は腹面側から右側辺は背面側から急傾斜剥離が加えられている。刃部には小剥離と刃こぼれが生じている。

#### 搔器・削器（第10図15～21）

15・16はいずれも黒曜石6類を素材とする搔器である。下縁稜上からの荒い剥離で刃部が作り出され、縁辺には微細な剥離と刃部の摩耗が観察される。16は石核からの転用の可能性もある。

17は赤褐色を呈する玉随製の搔器である。左右側辺とも腹面側からの急傾斜剥離で調整され、左側辺には背面

側からの平坦剥離が加えられる。荒い調整で左右側辺とも鋸歯状の刃部を作り出す。側縁の凸部及び上下縁に微細な剥離がみられる。

18は灰白色を呈する厚みのある頁岩の剥片である。下辺の複数の剥離が加えられた部分に微細な剥離が生じていることから搔器として使用された可能性がある。

19は粘板岩の横長剥片を剥片を素材とする抉入石器(ノッチドスクレイパー)である。剥片末端に腹面側から荒い剥離が加えられ、抉入部分には微細な剥離が生じている。

20・21は横歯形の削器である。20は暗緑灰色に黒色の縞の入るチャート製で、下縁及び右側辺に表裏から平坦剥離で調整を加えている。下縁刃部は鋸歯状を呈し、刃部には微細剥離と摩耗が生じている。一見、両面調整の石槍の破片にも見えるが、左側辺に打面となった自然面が残っていることから、削器とした。

21は黒色を呈する厚みのある頁岩の剥片で、下辺中央付近を中心に調整剥離が加えられている。刃部には使用の痕跡とみられる微細な剥離が生じている。

#### 彫器・石錐・楔形石器(第11図22~25)

22は灰白色を呈する頁岩の剥片を素材とする彫器である。上面・下面は折断面とみられ、右側縁上部に腹面及び背面側から急傾斜剥離による調整を加えた後、上面側から右側辺に向けて剥離を加え彫刻刀面を作り出す。上面及び主要剥離面の残存状況から、加工・使用・再調整が繰り返された資料とみられる。

23は乳白色を呈する玉随(蛋白石)の剥片で、上辺右側に背面側から、左辺上部に腹面側から剥離調整が加えられている。下端部にも細かい調整剥離と使用によるとみられる微細な剥離がみられることから石錐とした。

24は厚みのある黒色頁岩の横長剥片で、正面図左側面が主要剥離面、裏面は石核の分割面とみられる。

上半に裏面側からの荒い急傾斜剥離が加えられた後、稜上から打瘤部分を除去するように急傾斜剥離が加えられる。その後、裏面及び稜上から細かい急傾斜剥離が施され、下端部がくびれて尖る三角錐状の形状に加工されている。下端部右辺及び稜上に微細な剥離がみられることから石錐としたが、稜上に摩耗や擦痕はみられない。一側辺加工のナイフ形石器の可能性もある。

25は黒曜石4類の剥片を素材とする。主要剥離面はほぼ全体に背面右側縁から調整剥離が加えられている。上下・左右に対向する剥離があり、上・下辺には階段状の剥離とつぶれが生じていることから楔形石器とした。

#### 細石刃(第11図26~30)

細石刃は5点出土しており、使用されている石材はいずれも黒曜石3類である。26は頭部と尾部末端が折り取

られた中間部~尾部にかけての細石刃で、左側辺及び右側辺下半に微細な剥離が生じ、右側辺縁辺の表裏に刃部に対し左下がりの線状痕がまばらにみられる。27は打瘤部を含む細石刃の頭部片である。細石刃の剥出に先立ち頭部に調整が加えられている。28~30は頭部と尾部を折り取った細石刃の中間部である。28・29・30とも左側辺に微細な剥離と歯こぼれが生じており、30には右側辺縁辺の表裏に刃部に対し右下がりの線状痕がみられる。

#### 細石刃核(第11図31~34)

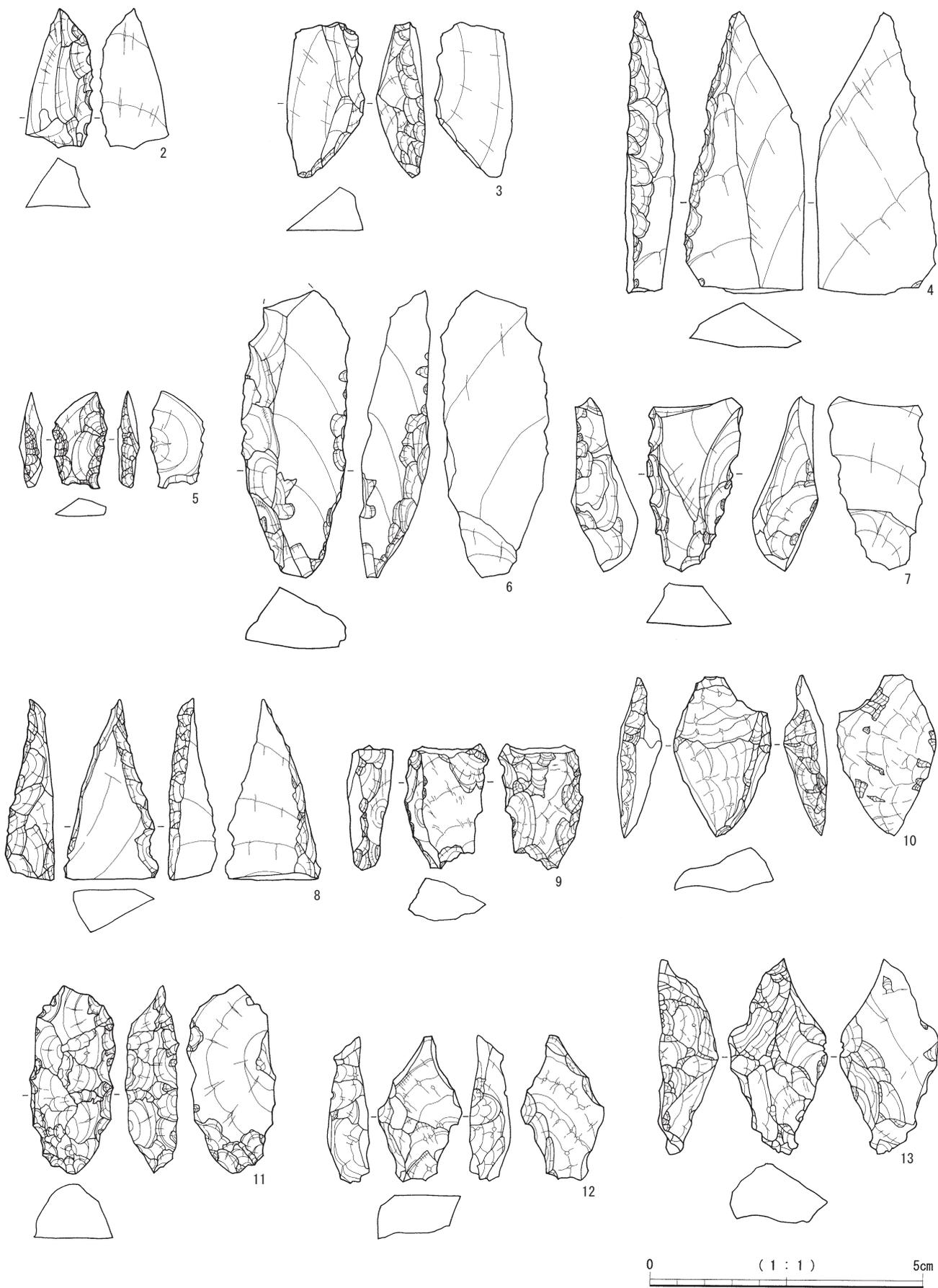
細石刃核は4点出土しており、石材はいずれも黒曜石3類である。31は打面幅(作業面幅)に対し上面観の厚みが薄い扁平形の細石刃核である。作業面側からの調整で狭小な打面が作り出される。背面は自然面で下縁への調整はみられないが、背面上に左右側辺から生じた剥離がみられる。32も幅広の正面観に対し打面・側面が薄い扁平形の細石刃核である。右側面及び背面下半は自然面であるが、左側面には背面側から剥離が加えられ、これを打面とする側方への剥離で背面が作り出される。打面は作業面側から剥離で作り出された剥離面で、細石刃の剥出に先立ち、作業面側から調整が加えられる。

33は剥片素材の細石刃核で、正面観が逆三角形を呈し、作業面と直行する短い下縁をもつ。打面は、作業面側からの剥離で作り出され、打面端部には細調整が施されている。下縁部にはつぶれと微細剥離が生じている。

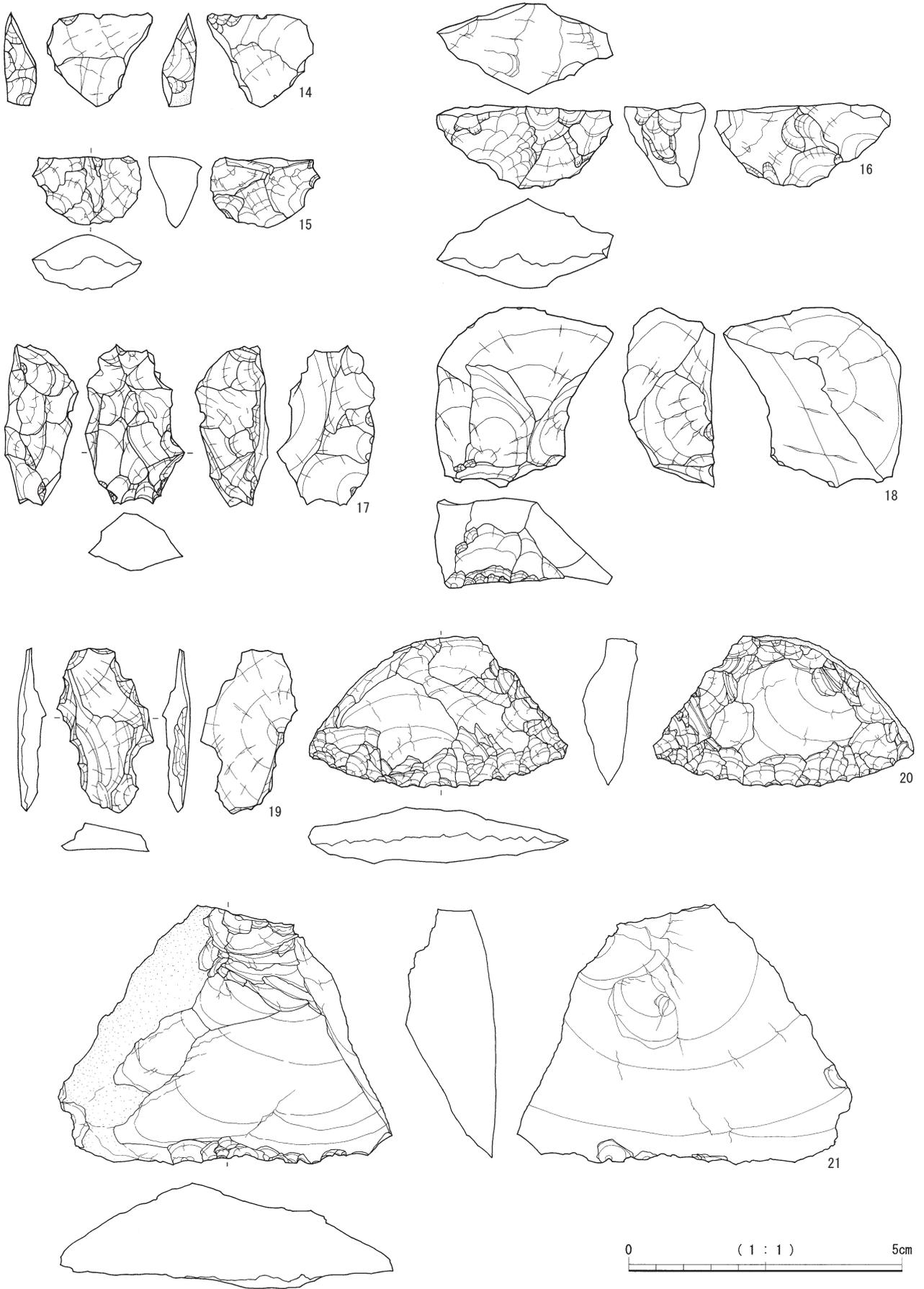
34は分割礫を素材とする小型の細石刃核で、正面観は逆三角形を呈する。下半部は分割面に背面側から調整を加え下縁とし、下縁には、つぶれと微細剥離が生じている。打面は、自然面に作業面側から剥離を加え打面とする。

#### 細石刃石器群に伴う調整剥片等(第11・12図35~45)

36~41、43~45は黒曜石3類の剥片類である。このうち、37、42、43、44はD-10区の径3m弱の範囲に細石刃核33・34、細石刃30とともに小規模な遺物集中部を形成して出土している。このほか、範囲内からは黒曜石6類製の搔器15、黒曜石3類製小剥片35が出土している。また、この集中部から2mほどの地点から細石刃核31と38・41がまとまって出土しており、別に56も集中部に近接して出土している。



第9図 旧石器時代石器 1



第 10 图 旧石器时代石器 2

本遺跡で出土している細石刃、細石刃核はいずれも黒曜石3類であり、ナイフ形石器文化期の指標となるナイフ形石器、三稜尖頭器、台形石器等には黒曜石3類は用いられていない。このことから、石材を指標として細石刃文化期の遺物を抽出できる可能性がある。以上のことから、D-10区の遺物集中部及びこれと近接して出土した黒曜石3類製の遺物は、接合関係は確認はできなかったものの、細石刃核の製作及び細石刃剥出過程での再調整等に関連した一括性のある資料とみられる。

35は黒曜石7類製の打面再生剥片である。旧打面は自然面に作業面側から剥離を加え打面としている。正面図が旧作業面とみられ、右側面背面寄りからの加撃により打面再生が図られたものとみられる。

36は打面再生剥片として図化した。背面図右半分を旧作業面とする作業面再生剥片の可能性もある。主要剥離面は末端部で湾曲し底面を取り込んだ剥離となっている。

その他黒曜石3類の剥片についてみると37・38が打面に、36・38・削片状の41が側面に、44が主要剥離面を除く全面に自然面を持ち、細石刃核31・32・34と合わせ、素材礫がすり硝子状の原礫面を有する小礫であったことが分かる。

#### その他の剥片類 (第12図46~56)

46は黒曜石5類のやや縦長の剥片で、上半部に折れが生じている。裏面側右側辺の小剥離はいずれも新しいキズである。47~51及び53・54は黒曜石4類のやや厚みのある不定形剥片もしくは切断あるいは折り取られた剥片の残片である。

48・49・51・53の縁辺部分にみられる小剥離は、いずれも他の剥離面部分と比べ風化が進んでおらず、新しいキズである可能性が高い。

54はノの字状の剥片で打面部分が剥離により除去されている。下辺部分の密集した小剥離は新しいキズであるが、末端辺にみられる、小さな折れや剥離は古いものである。腹面全体に不規則な線条痕があり、縁辺に直行する線条痕もみられることから使用された可能性もある。

52は黒曜石6類の剥片で、二次的な加工はみられない。右側縁辺に細かい剥離が生じているが、摩耗はみられず、使用の痕跡ではない可能性もある。

55は黒曜石1類の剥片で、上辺は腹面側からの荒い剥離で打瘤の一部が除かれ、下辺は2つの折れ面となっている。右側縁には折れや剥離が生じており、微細な剥離や縁辺に直行あるいは平行する不規則な線条痕がみられることから、右側縁が刃部として使用された可能性がある。

56は灰白色に青灰色の縞の入る珪岩製の厚みのある大型の剥片である。左側縁には背面側から荒い剥離が加え

られており、下方縁辺の広範囲に細かい剥離と摩耗が生じており、使用痕の可能性はある。

#### 石核 (第12図57)

57は黒曜石2類製の石核である。上面を打面として作業面側からの打面調整を繰り返しながら背面及び正面を作業面として剥片の剥出を繰り返した結果、必要な作業面長を確保できなくなった残核とみられる。その後、下辺左より及び左側縁下半に複数の剥離が加えられ、縁辺には微細剥離や刃こぼれ状の凹凸が生じており、搔器として転用された可能性がある。

#### 磨・敲石類 (第13図58~62)

58は砂岩製の一端が窄まる棒状の亜角礫で、下端部及び上端部を敲打に用いている。使用部分の敲打痕につぶれが生じ、面状に削れたような状態となっていることから、石器製作にハンマーストーンとして用いられた可能性が高い。59は砂岩製の長さ約23cm、幅7.2cmの大型の棒状亜円礫である。下端が窄まる形状で、下端部に集中した敲打痕がみられる。裏面はやや平滑で、不規則な擦痕がみられる。

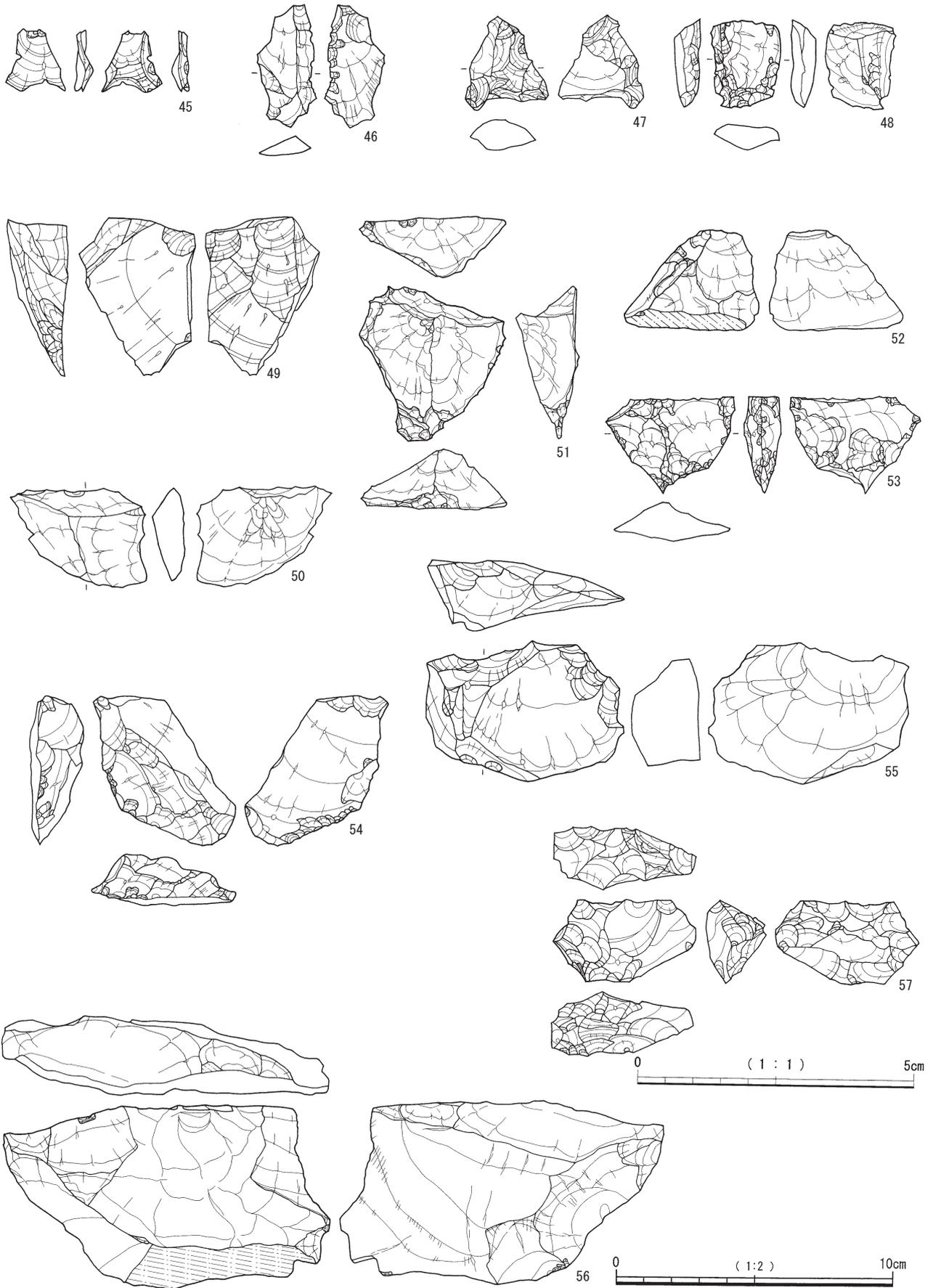
60は砂岩製の円礫である。側縁部分に部分的に敲打の痕跡がみられるが、全体が被熱により赤化し、剥落や割れが生じている。表裏面は比較的滑らかであるが、磨痕は認められない。

61はやや大きめの砂岩の扁平円礫で、右上・左下は被熱によるとみられる割れと礫面のひび割れが生じている。表面中央部分には敲打痕が集中する範囲がみられるが、凹みは生じていない。表裏面ともわずかに磨痕を認めるが、磨石のように面状の磨痕を生ずるものではない。台石のような用途も考えられる。

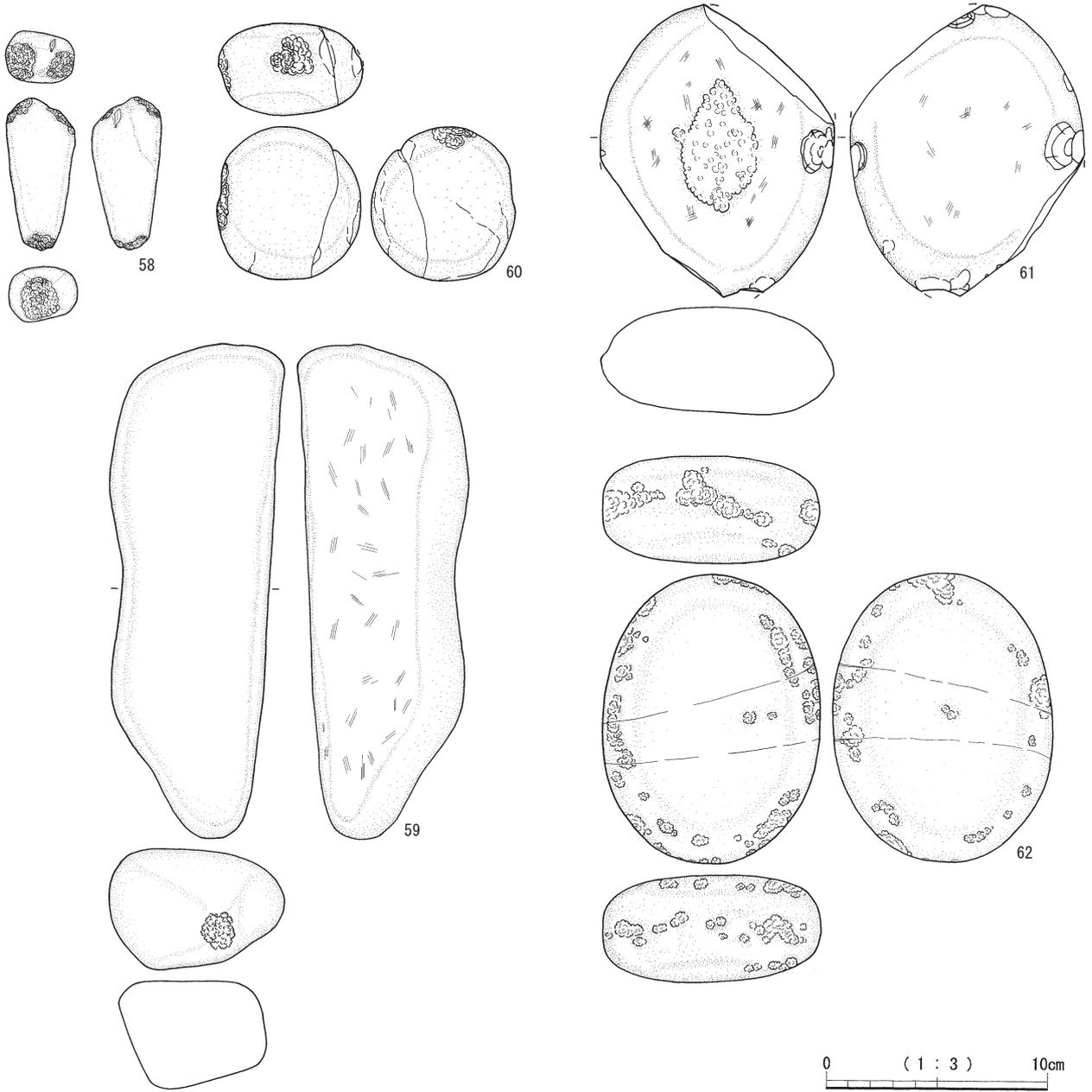
62はやや粗粒の砂岩の扁平な円礫である。左・右側縁は敲打により整形されている。上下両端には疎らに敲打の痕跡があり、表・裏周辺部にも敲打の痕跡が残る。全体に表面が風化して明瞭な擦痕等は残らないが、裏面は平滑で磨石としても用いられた可能性がある。Xc層の出土であるが、上位層からの混入の可能性もある。



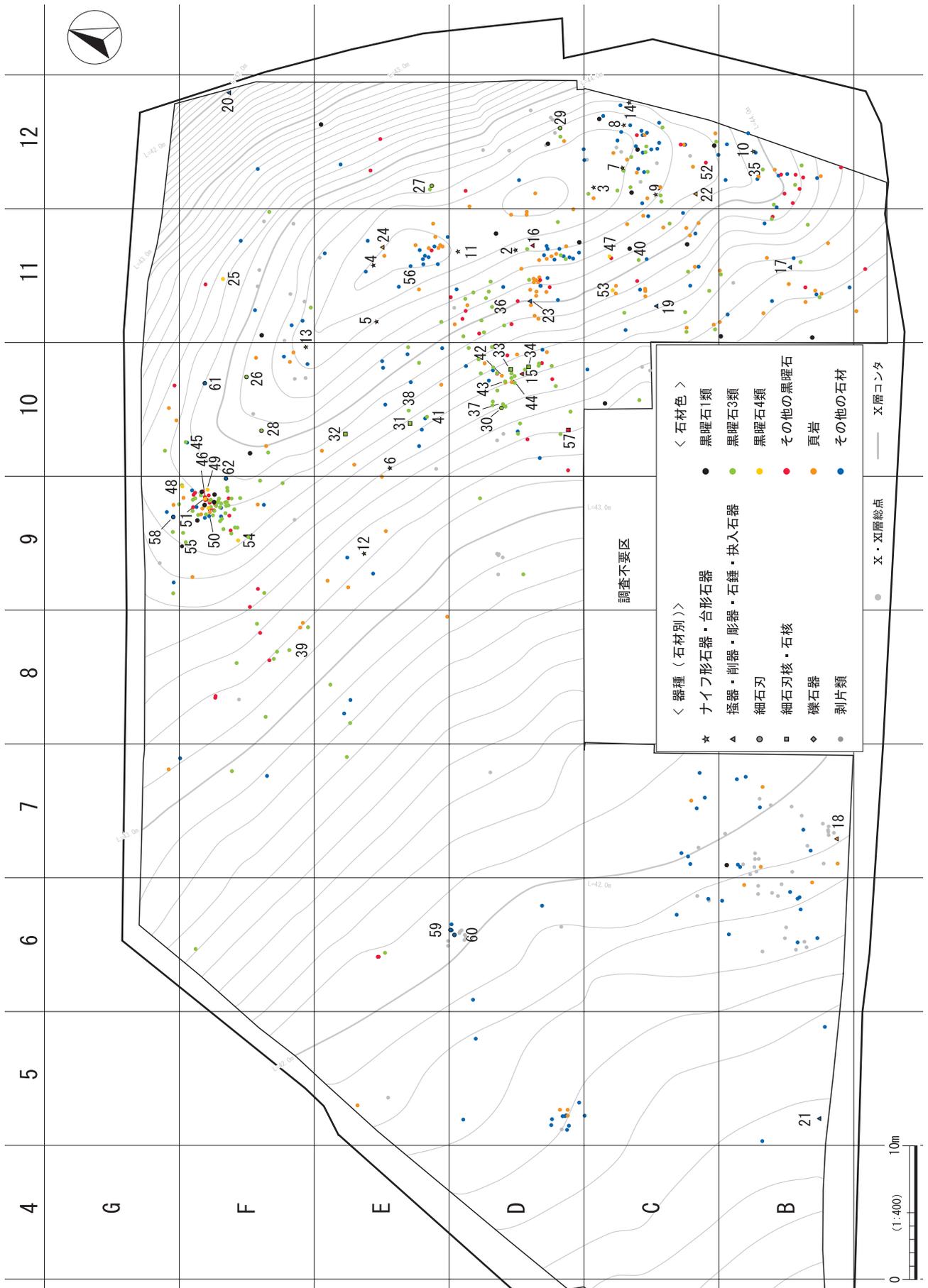
第 11 图 旧石器时代石器 3



第 12 图 旧石器时代石器 4



第 13 图 旧石器时代石器 5



第14図 旧石器時代遺物分布図

第5表 旧石器時代遺物観察表

挿図 番号	掲載 番号	出土区	層位	器種	石材	計測値				備 考
						最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	
9	2	D-11	Xc	ナイフ形石器	頁岩	25.0	11.0	8.0	2.3	
	3	C-12	Xb'	ナイフ形石器	頁岩	26.0	13.0	9.0	3.1	
	4	E-11	Xc	ナイフ形石器	砂岩	51.0	21.0	8.0	8.6	
	5	E-11	Xc	ナイフ形石器	黒曜石2類	17.0	10.0	2.0	0.6	
	6	D-9	Xb	ナイフ形石器	頁岩	53.0	28.0	10.0	10.2	
	7	C-12	Xc	ナイフ形石器	頁岩	31.0	16.0	10.0	5.2	
	8	C-12	Xb'	ナイフ形石器	頁岩	33.0	16.0	6.0	3.6	
	9	C-12	Xb'	ナイフ形石器	黒曜石4類	21.0	13.0	16.0	2.7	
	10	B-12	Xc	ナイフ形石器	黒曜石4類	29.0	17.0	6.0	2.9	
	11	D-11	Xb'	ナイフ形石器	黒曜石4類	34.0	15.0	9.0	4.8	
	12	E-9	Xc	ナイフ形石器	黒曜石4類	27.0	14.0	7.0	2.6	
	13	F-10	Xb'	三稜尖頭器	黒曜石4類	35.0	17.0	10.0	5.1	
	10	14	C-12	Xb'	台形石器	玉髄	17.0	19.0	4.0	1.7
15		D-10	Xc	搔器	黒曜石6類	12.0	20.0	9.0	2.2	
16		D-11	Xc	搔器	黒曜石6類	15.0	32.0	17.0	5.8	
17		B-11	Xc	搔器	玉髄	29.0	17.0	11.0	5.9	
18		B-7	Xb	搔器	頁岩	35.0	36.0	16.0	14.1	
19		C-11	Xa	挟入石器	粘板岩	30.0	16.0	4.0	2.1	
20		F-12	Xb'	削器	チャート	47.0	27.0	10.0	11.7	
21	B-5	Xc	削器	頁岩	55.0	61.0	15.0	43.5		
11	22	C-12	XIb	彫器	頁岩	53.0	25.0	17.0	10.1	
	23	D-11	Xc	石錐	玉髄	29.0	14.0	5.0	2.0	
	24	E-11	XIb	石錐	頁岩	48.0	14.0	11.0	7.1	
	25	F-11	Xb'	楔形石器	黒曜石4類	19.0	12.0	6.0	2.2	
	26	F-10	Xb'	細石刃	黒曜石3類	15.0	4.0	1.0	0.1	
	27	E-12	Xb'	細石刃	黒曜石3類	8.0	6.0	1.0	0.1	
	28	F-10	Xb	細石刃	黒曜石3類	9.0	5.0	1.0	0.1	
	29	D-12	Xb	細石刃	黒曜石3類	6.0	6.0	1.0	0.1	
	30	D-10	Xc	細石刃	黒曜石3類	3.0	8.0	1.0	0.1	
	31	E-10	Xc	細石刃核	黒曜石3類	15.0	11.0	16.0	1.0	
	32	E-10	Xb	細石刃核	黒曜石3類	18.0	17.0	10.0	3.8	
	33	D-10	Xb	細石刃核	黒曜石3類	16.0	9.0	10.0	1.5	
	34	D-10	Xc	細石刃核	黒曜石3類	16.0	8.0	10.0	1.2	
	35	B-12	XIb	打面再生剥片	黒曜石7類	7.0	10.0	7.0	0.5	
	36	D-11	Xc	調整剥片	黒曜石3類	18.0	22.0	4.0	1.9	
	37	D-10	Xc	調整剥片	黒曜石3類	10.0	10.0	2.0	0.3	
	38	E-10	Xc	調整剥片	黒曜石3類	15.0	14.0	4.0	1.1	
	39	F-8	Xc	調整剥片	黒曜石3類	20.0	9.0	1.0	0.4	
	40	C-11	Xc	調整剥片	黒曜石3類	17.0	15.0	2.0	0.9	
	41	E-10	Xc	調整剥片	黒曜石3類	17.0	6.0	2.0	0.3	
	42	D-10	Xc	剥片	頁岩	10.0	7.0	2.0	0.2	
43	D-10	Xc	剥片	黒曜石3類	12.0	8.0	1.0	0.2		
44	D-10	Xc	剥片	黒曜石3類	9.0	13.0	4.0	0.6		
12	45	F-10	Xb'	剥片	黒曜石3類	11.0	10.0	1.0	0.2	
	46	F-9	Xc	剥片	黒曜石5類	22.0	9.0	2.0	0.6	
	47	C-11	Xc	剥片	黒曜石4類	15.0	15.0	5.0	1.1	
	48	F-9	XIb	剥片	黒曜石4類	15.0	12.0	3.0	1.0	
	49	F-9	XIb	剥片	黒曜石4類	31.0	20.0	7.0	5.0	
	50	F-9	Xc	剥片	黒曜石4類	18.0	28.0	5.0	1.9	
	51	F-9	Xc	剥片	黒曜石4類	28.0	26.0	9.0	4.6	
	52	C-12	Xc	剥片	黒曜石6類	19.0	25.0	5.0	2.4	
	53	C-11	Xc	剥片	黒曜石4類	16.0	23.0	6.0	2.0	
	54	F-9	Xc	剥片	黒曜石4類	34.0	17.0	8.0	4.2	
	55	F-9	Xc	剥片	黒曜石1類	25.0	37.0	12.0	10.8	
	56	E-11	XIb	剥片	珪岩	66.0	120.0	24.0	200.5	
	57	D-10	Xc	石核	黒曜石2類	11.0	23.0	12.0	3.0	
13	58	G-9	Xb'	叩石	砂岩	70.0	30.0	22.0	64.5	
	59	D-6	XIa	棒状敲石	砂岩	230.0	72.0	66.0	1323.0	
	60	D-6	XIa	敲石	砂岩	71.0	63.0	41.0	238.5	
	61	F-10	Xb	磨敲石	砂岩	132.0	105.0	49.0	903.0	被熱赤化
	62	F-9	Xc	磨敲石	砂岩	132.0	109.0	58.0	905.5	

## 第2節 縄文時代早期の調査

### 1 調査の概要

IX層上面における縄文時代早期の地形は旧石器時代と同様に調査区の東側から西側に向かってなだらかに下る傾斜面が形成されている。西側C-3・4区付近の標高は約42m、東側のE・D-11区付近の標高は約45mで、標高差は約3mである。また、東側端部は本遺跡東方に流れる田原川によって浸食されたシラス台地の先端部にあたるため、急傾斜で下がっている。

これらは主に、標高43m以上の調査区中央から東側のエリアに集中する。

### 2 集石

VII層からVIII層にかけて44基を検出した。集石は礫の密度及び掘り込みの有無から、I～III類に大別した。分類基準については下記のとおりである。

I類 (1～10号) 礫が比較的集中するもの。さらに2つに細分される。

I a類 掘り込みを伴わないもの。

I b類 掘り込みを伴うもの。

II類 (11～42号) 礫が集中しないもの。さらに2つに細分される。

II a類 掘り込みを伴わないもの。

II b類 掘り込みを伴うもの。

III類 (43・44号) 礫と掘り込みの関係性が不明確なもの。

#### 【I a類】

##### 1号集石 (第16図)

A-11区で検出した。調査区の最も南東側から検出された。検出面はVIIa層であり、径100cmの範囲に構成礫が集中する。構成礫2個1組が接合した。遺物は出土していない。

##### 2号集石 (第16図)

C-11区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸105cm、短軸87cmの範囲に構成礫が集中する。構成礫2個1組が接合した。遺構内より型式不明の土器片1点が出土したが、小片のため図化に至らなかった。

##### 3号集石 (第16図)

C-9区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸219cm、短軸171cmの範囲に広がり、東側に構成礫が集中する。構成礫2個1組が接合した。遺構内より土器の小片が1点出土したが、図化に至らなかった。

##### 4号集石 (第17図)

C-12区で検出した。検出面はVIIa層であり、長軸138cm、短軸100cmの範囲に構成礫が集中する。礫4個2組

が接合した。遺構内より遺物は出土しなかった。

##### 5号集石 (第17図)

D-11区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸154cm、短軸125cmの範囲に構成礫が集中する。礫2個1組が接合した。遺構内より遺物は出土しなかった。

##### 6号集石 (第18図)

D-12区で検出した。検出面はVIIb層であり、径140cmの範囲に構成礫が集中する。遺構内より遺物は出土しなかった。

#### 【I b類】

##### 7号集石 (第18図)

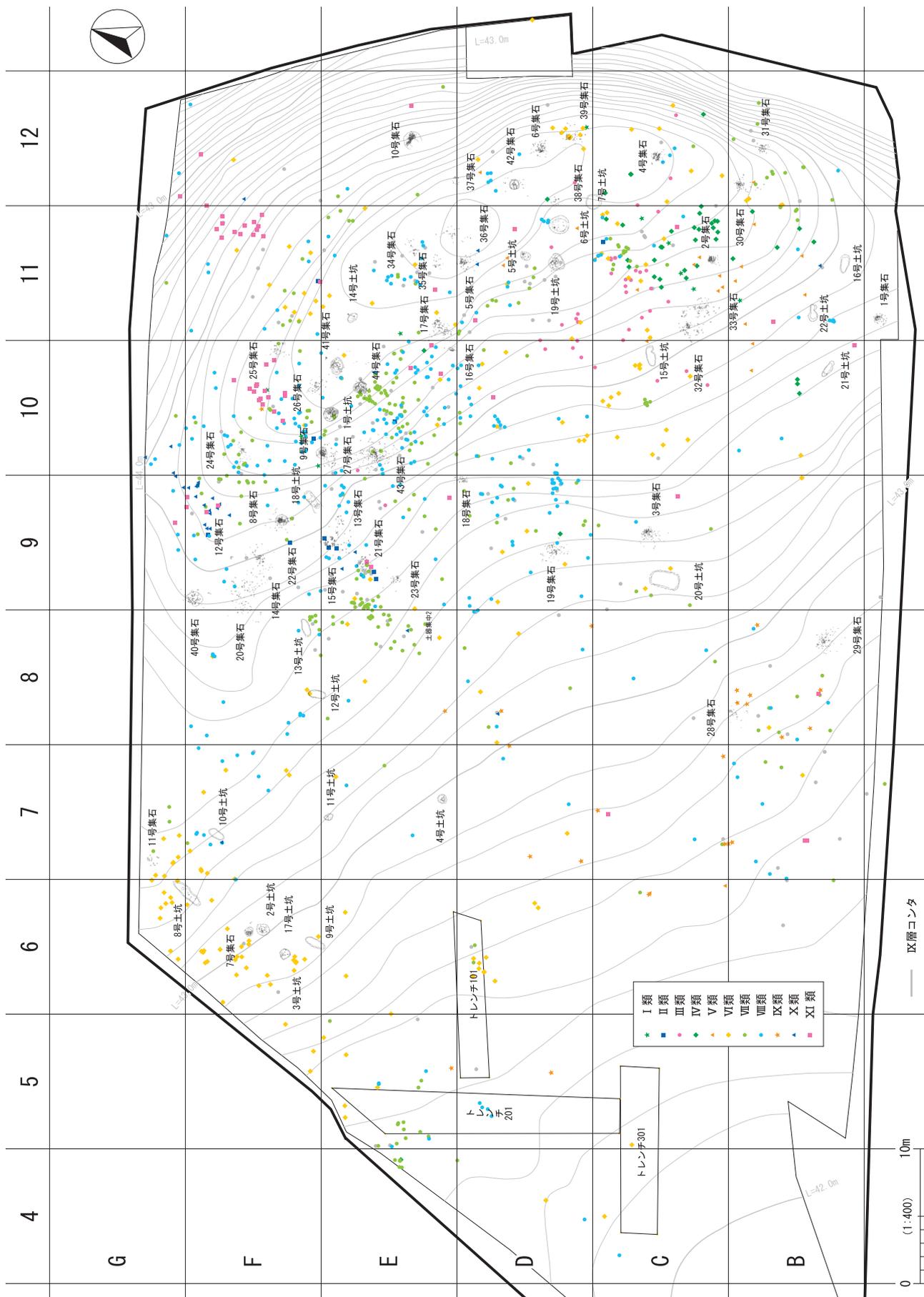
F-6区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸135cm、短軸100cmの範囲に構成礫が広がるが、構成礫の約8割が掘り込みの西側半分に充填されていた。掘り込みは長軸72cm、短軸62cm、深さ22cmであり、楕円形を呈する。埋土は単一で、2～3mm大の白色粒子を少量含み粘性としまりのある黒褐色土である。構成礫の1点が隣接する16号土坑内の礫と接合した。遺構内より遺物は出土しなかった。

##### 8号集石 (第19図)

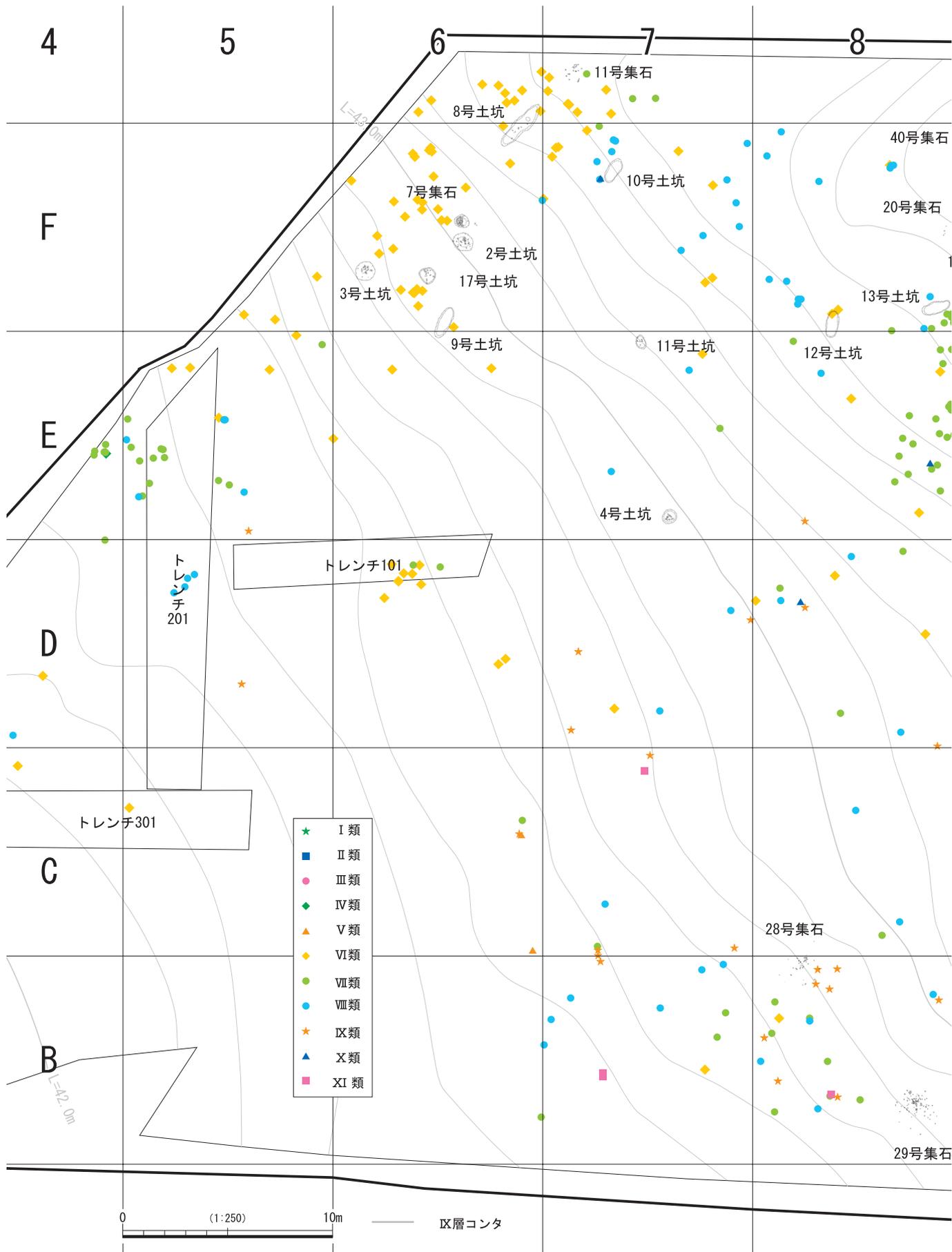
F-9区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸219cm、短軸198cmの範囲に構成礫が広がる。掘り込みは長軸85cm、短軸76cmの楕円形を呈する。掘り込みの西側は一段低くなり、深さ35cmを測る。構成礫は掘り込みのほぼ中央から重層的に検出された。構成礫12個6組が接合した。掘り込みの埋土は単一で、VIIa層に近い色調である。遺構内より楕円押型文土器が1点出土したが小片のため図化に至らなかった。

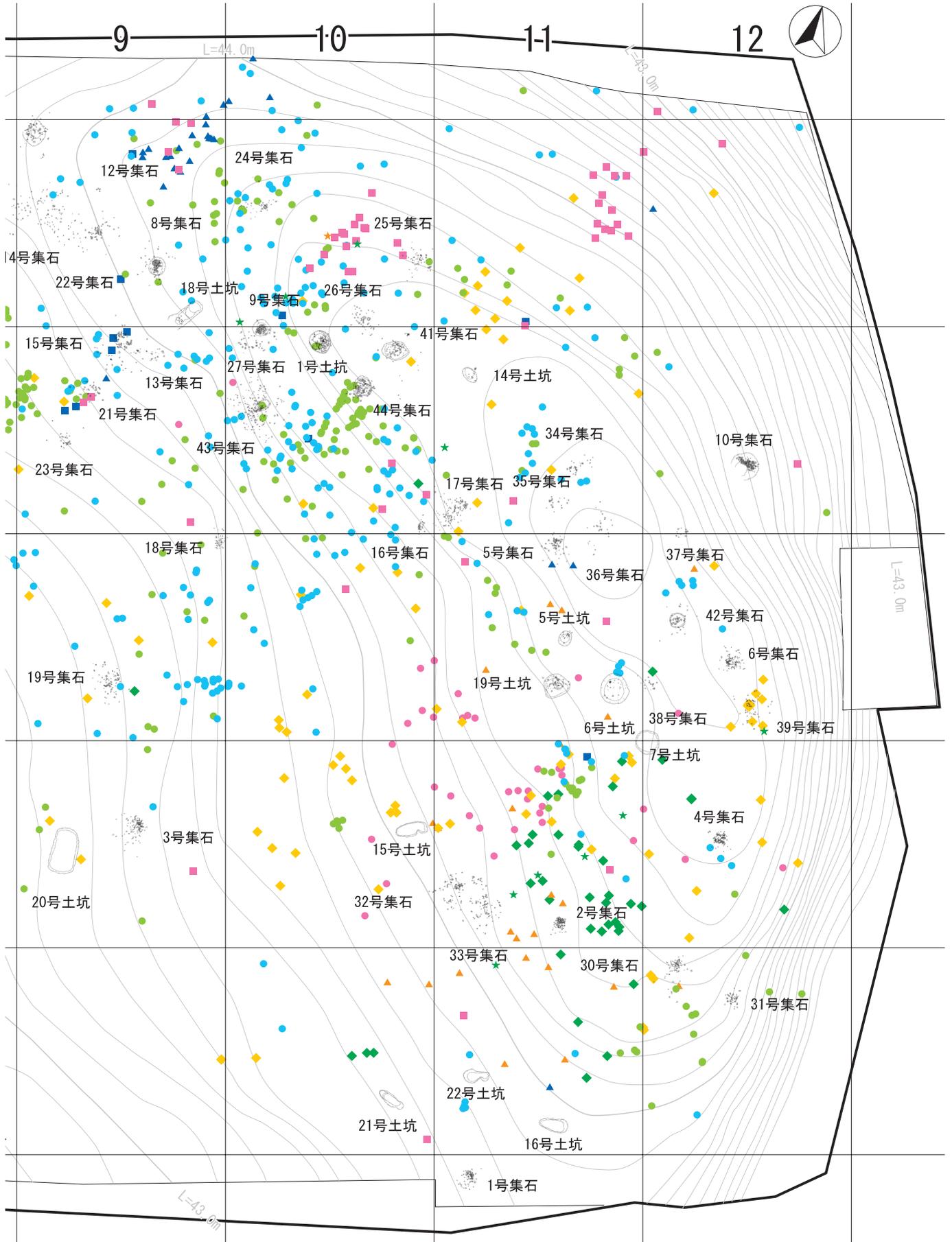
##### 9号集石 (第20図)

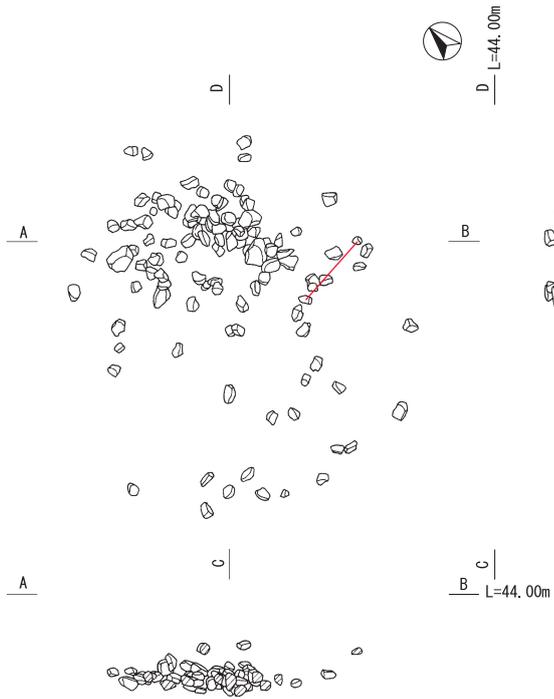
E・F-10区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸185cm、短軸126cmの範囲に構成礫が広がる。掘り込みは長軸89cm、短軸80cm、深さ22cmの楕円形を呈し、掘り込みの中央から南側にかけて、構成礫を重層的に検出した。掘り込みの埋土は単一で、VIIa層に近い色調である。構成礫4個2組が接合した。また構成礫の1点が南西方向に隣接する13号集石遺構の構成礫と接合した。遺構内より山形押型文土器と型式不明の土器が出土したが小片のため図化に至らなかった。



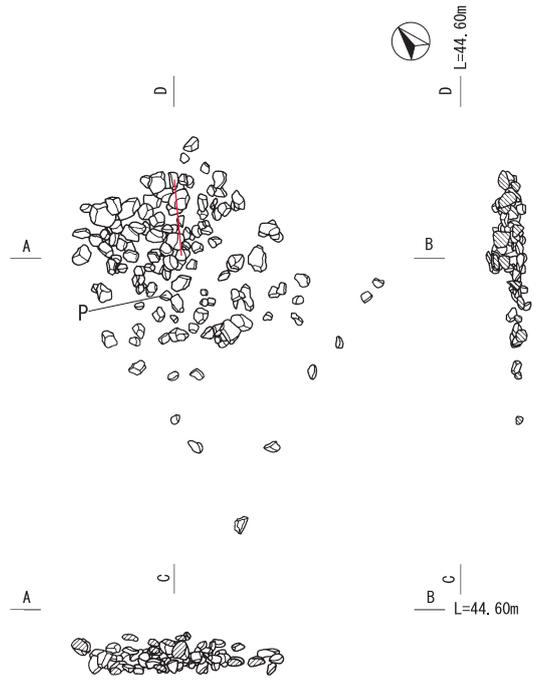
第15図 全遺構位置及び土器分布図







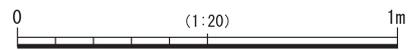
1号集石



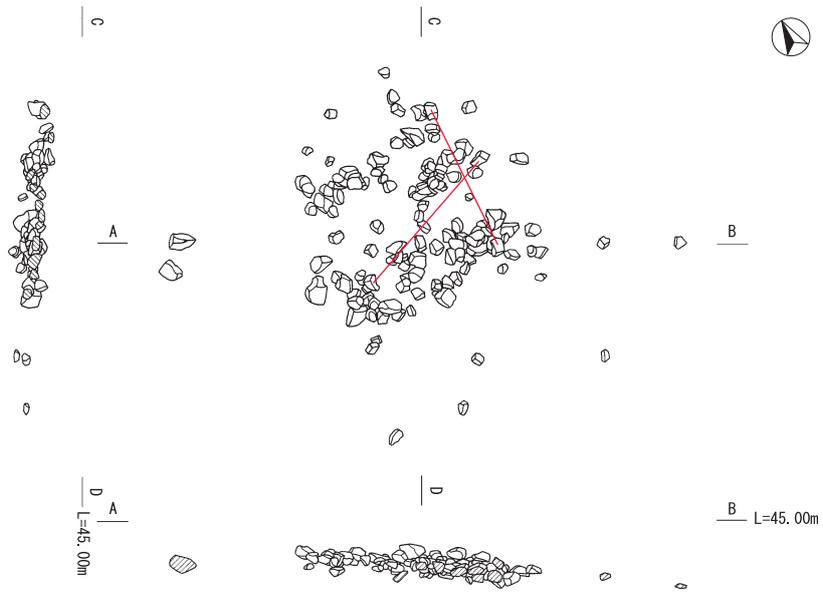
2号集石



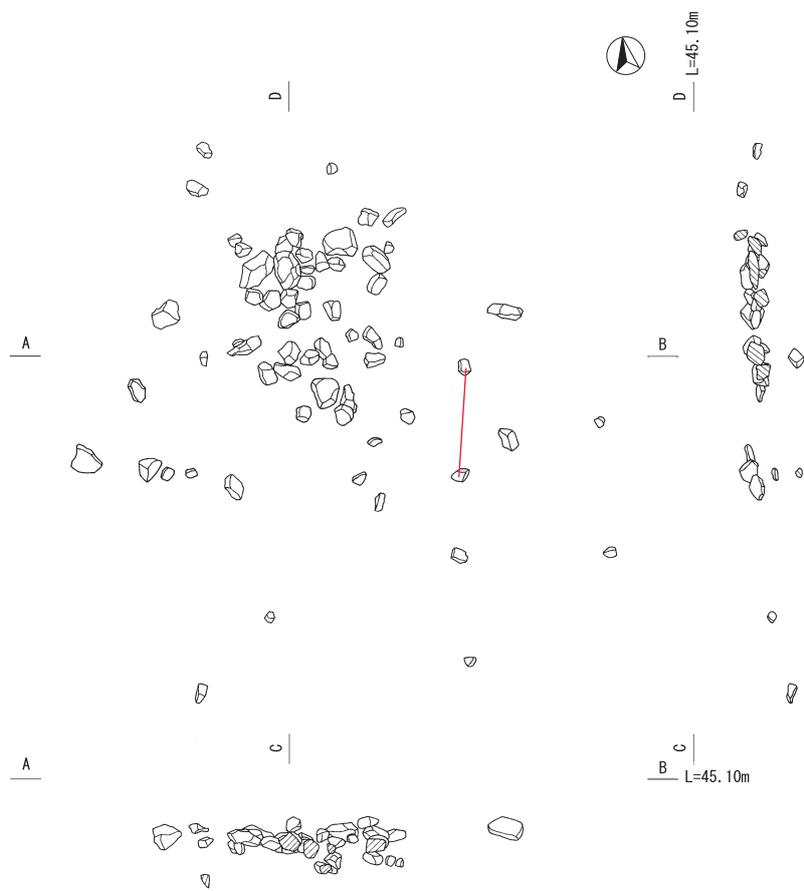
3号集石



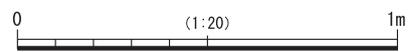
第16图 1·2·3号集石



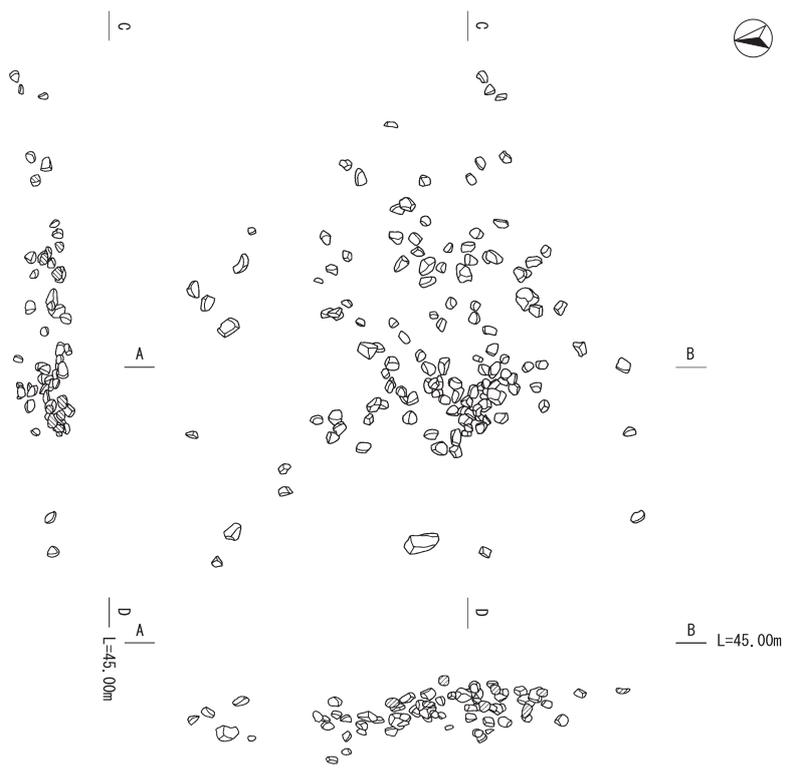
4号集石



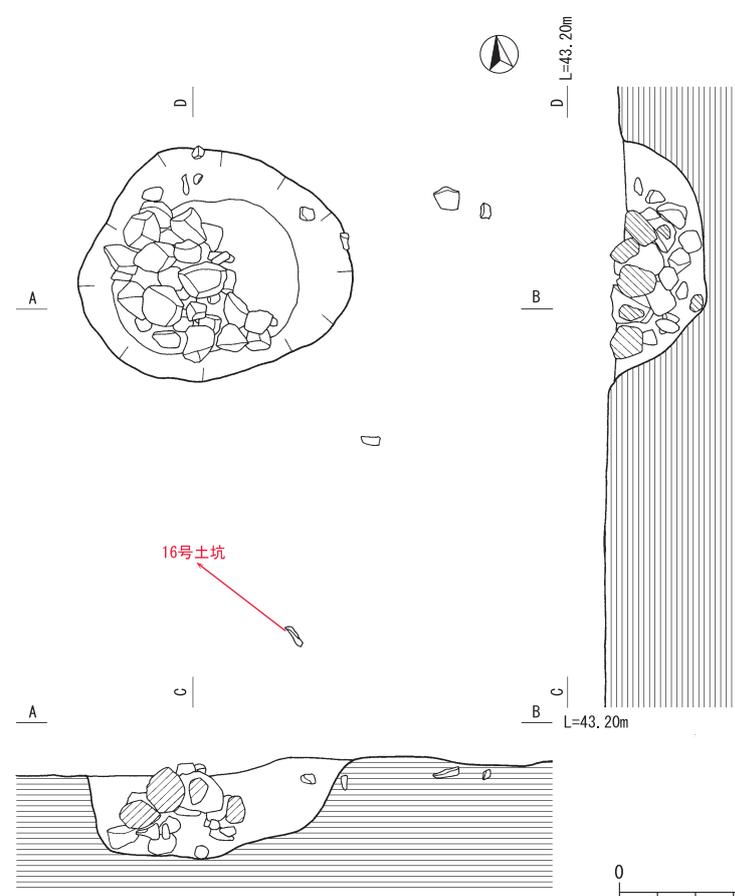
5号集石



第17图 4・5号集石

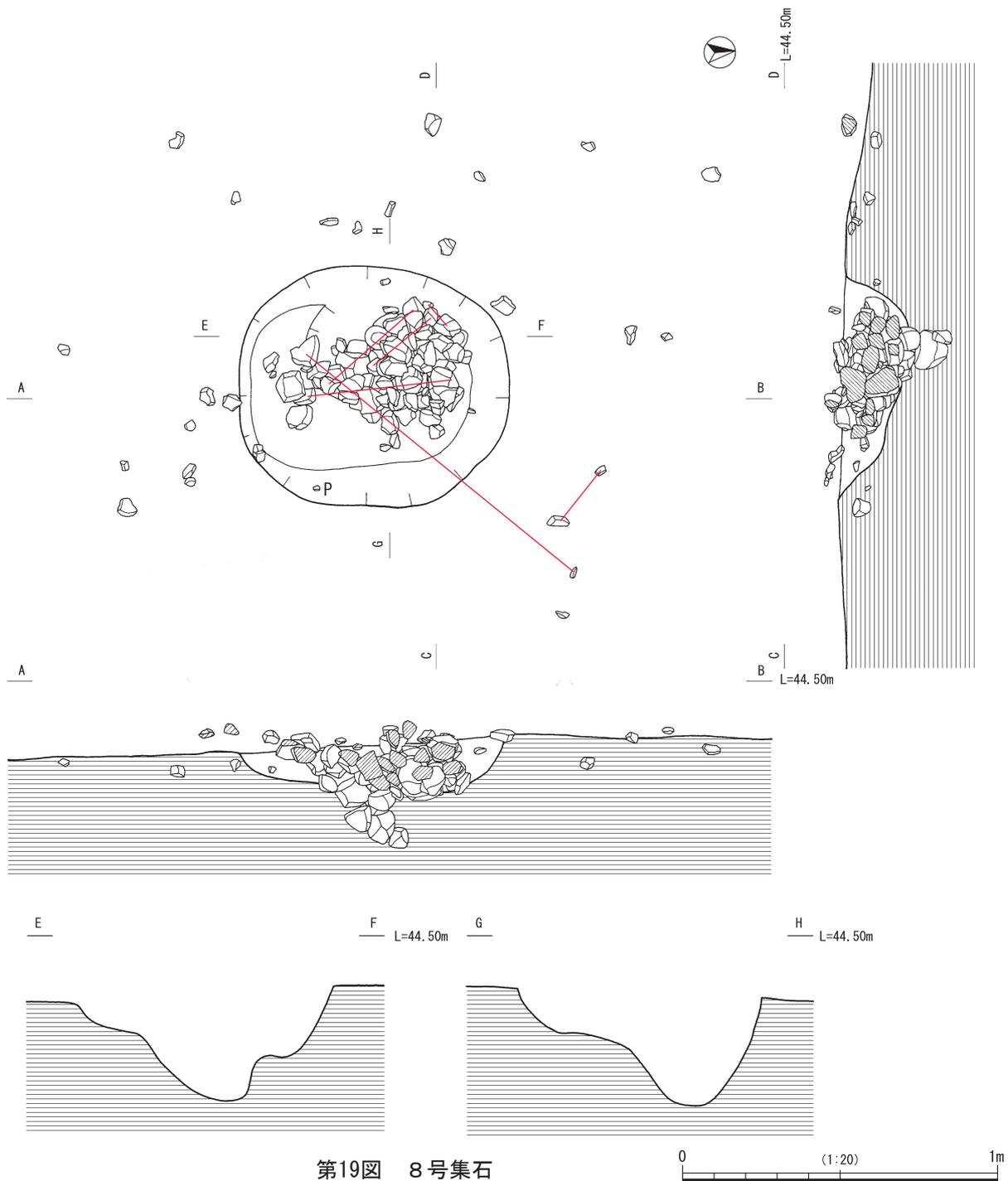


6号集石



7号集石

第18图 6·7号集石



第19図 8号集石

10号集石 (第20図)

E-12区で検出した。検出面はⅧ層であり、掘り込みは南西側が攪乱を受けており、プランを確認することができなかったが、径約260cm、深さ18cmの円形を呈すると思われる。構成礫4個2組が接合した。掘り込みの埋土は単一で、1mm大の白色粒子を少量、2~3mm大の明褐色パミスを多く含み、粘性としまりがある黒色土であった。また、埋土中から多くの炭化物が検出された。採取した炭化物の分析を行った結果、樹種は広葉樹のコナラ属アカガシ亜属で、放射性炭素年代は暦年較正で9521-9435cal B P (確率95.4%) という結果がでている。

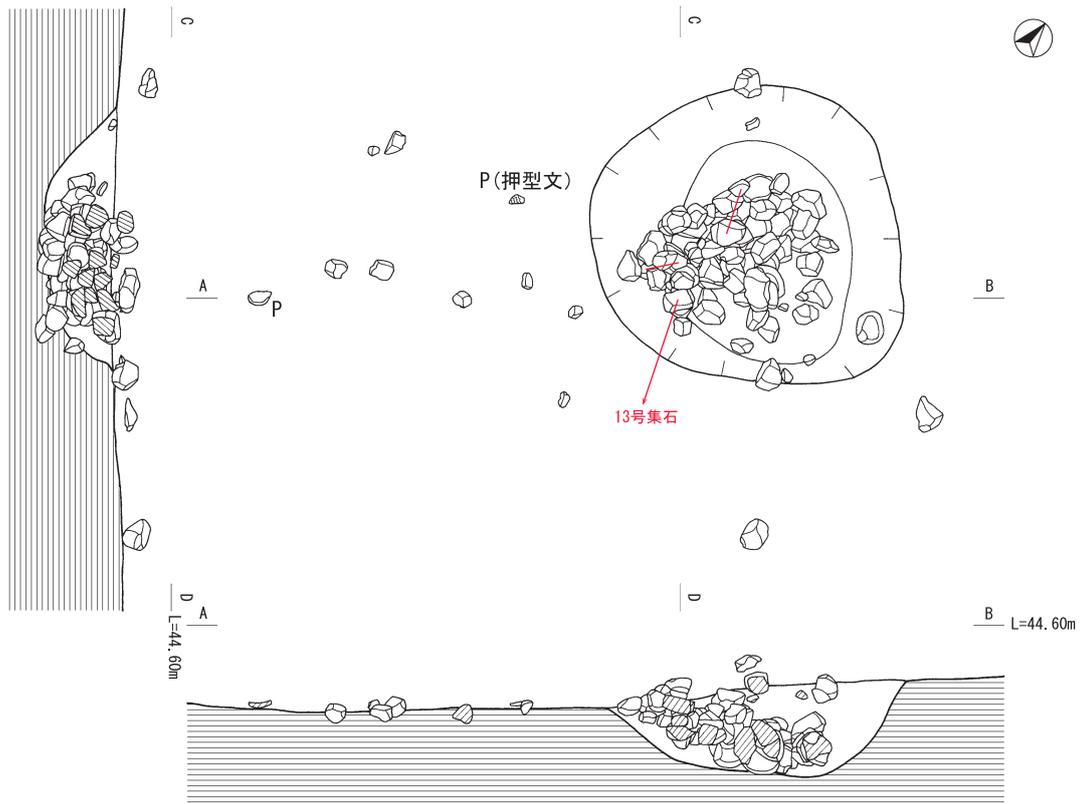
【Ⅱ a類】

11号集石 (第21図)

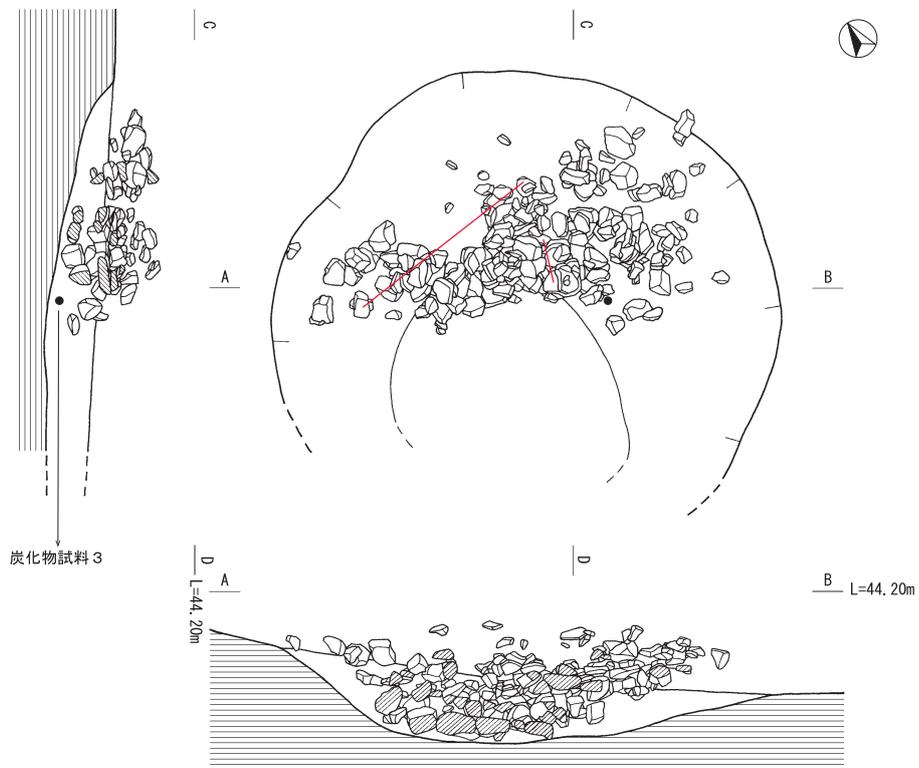
G-7区で検出した。検出面はⅦb層であり、径85cmの範囲に構成礫が広がる。遺構内より遺物は出土しなかった。

12号集石 (第22図)

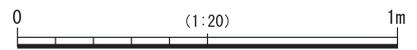
F-9区で検出した。検出面はⅦb層であり、径22cmの範囲に5個の構成礫が広がる。本遺跡で検出された集石の中で、規模及び構成礫数が最小である。掘り込みや



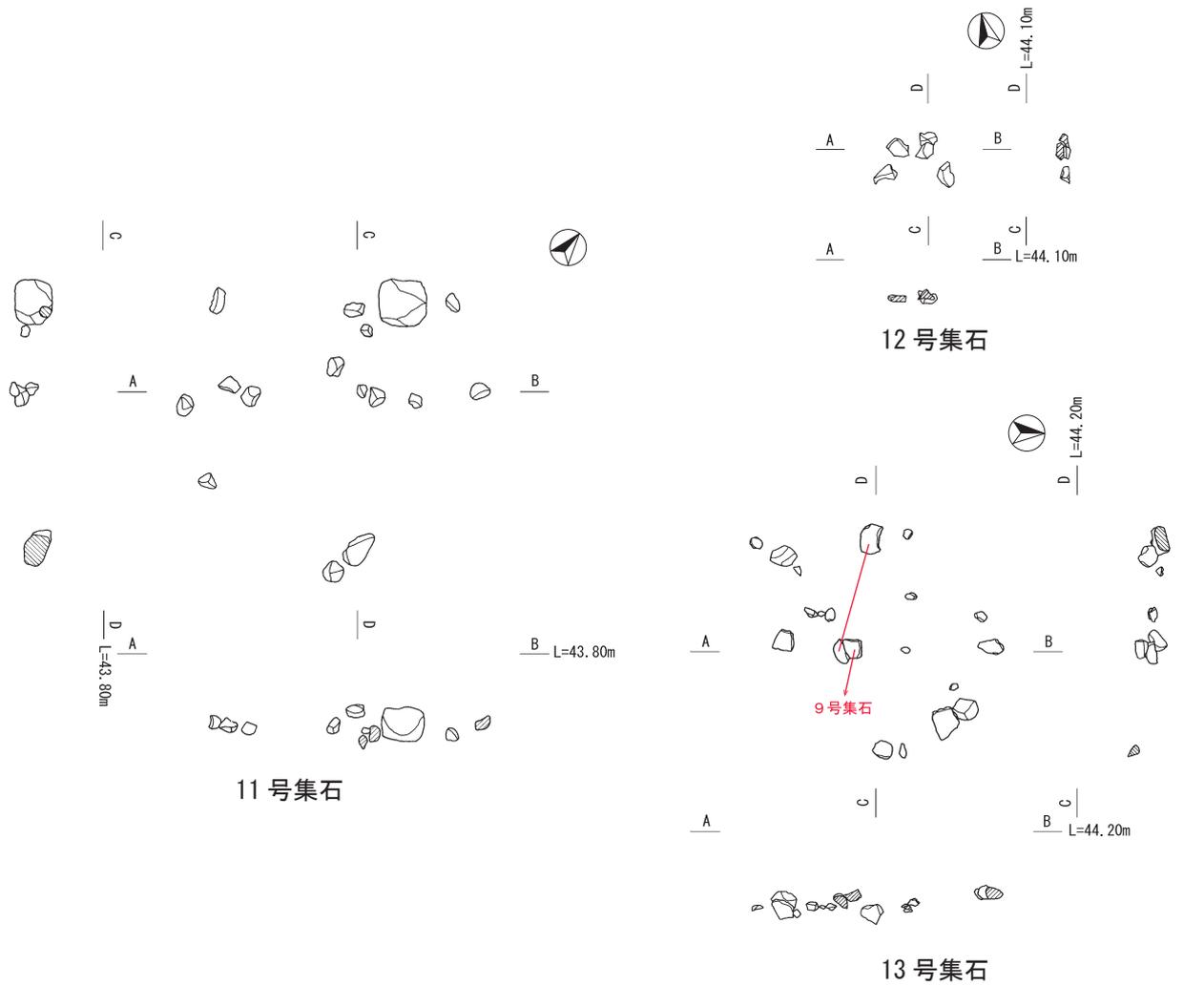
9号集石



10号集石



第20図 9・10号集石



第21図 11・12・13号集石

炭化物等は検出されなかったが、構成礫の堆積状況から集石として取り扱った。遺構内より遺物は出土しなかった。

**13号集石 (第21図)**

E-9区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸78cm、短軸50cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫2個1組が接合した。また構成礫の1個が北東へ約5m離れた9号集石の構成礫と接合した。

**14号集石 (第22図)**

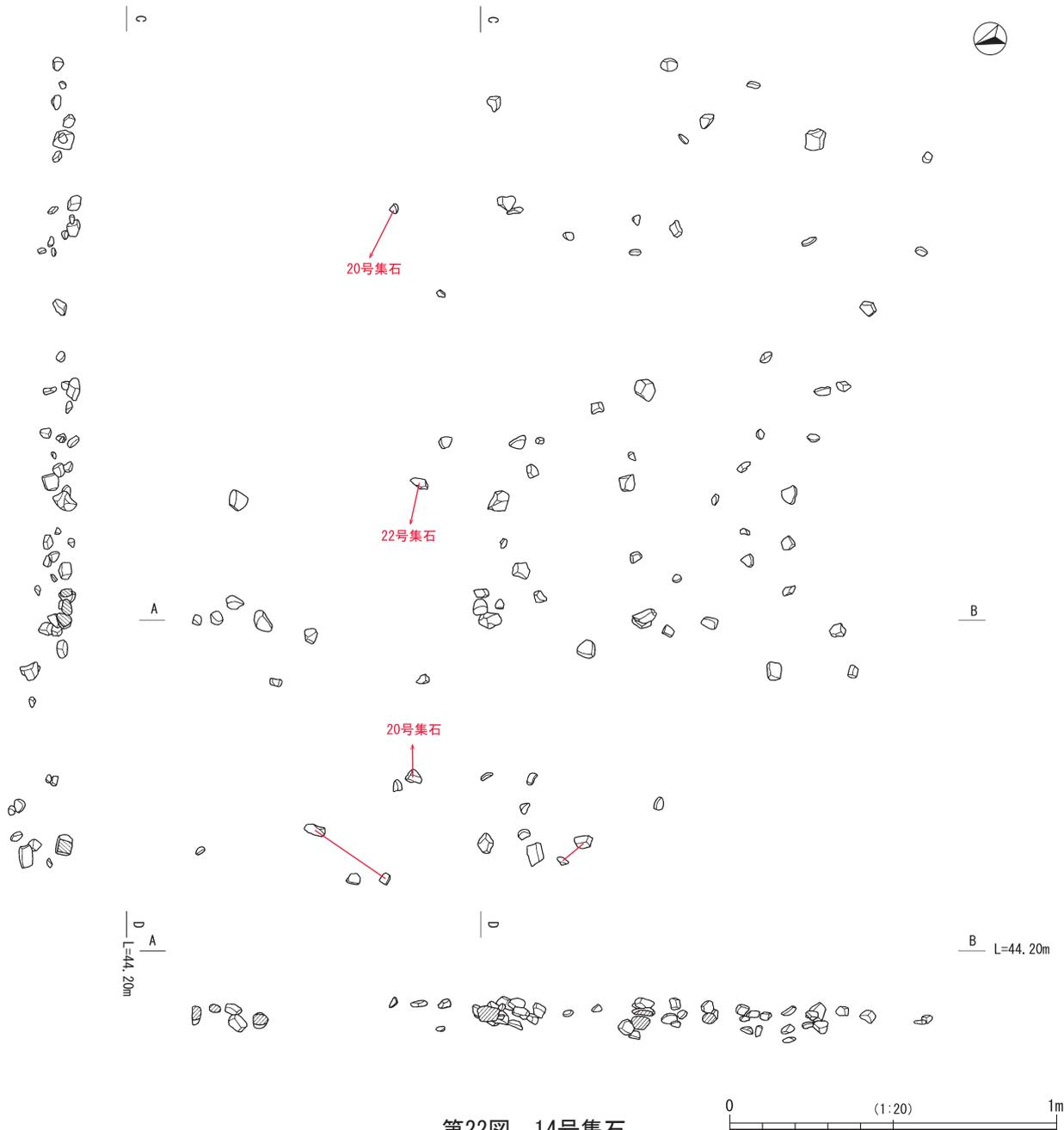
F-9区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸310cm、短軸223cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫4個2組が接合した。また構成礫の3個が、20号及び22号集石遺構の構成礫と接合し、また包含層の礫との接合もみられた。遺構内より遺物は出土しなかった。

**15号集石 (第23図)**

E・F-9区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸300cm、短軸249cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫12個6組が接合した。また構成礫の3個2組が南側に隣接する21号集石の構成礫と接合した。遺構内より土器の小片が出土したが図化に至らなかった。

**16号集石 (第24図)**

E-10区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸98cm、短軸35cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫2個1組が接合した。遺構内より桑ノ丸式土器1点が出土した。この土器は隣接する17号集石、及び約10m離れた43号集石出土の土器片、及び包含層出土土器と接合した。43号集石に掲載してある。



第22図 14号集石

#### 17号集石 (第24図)

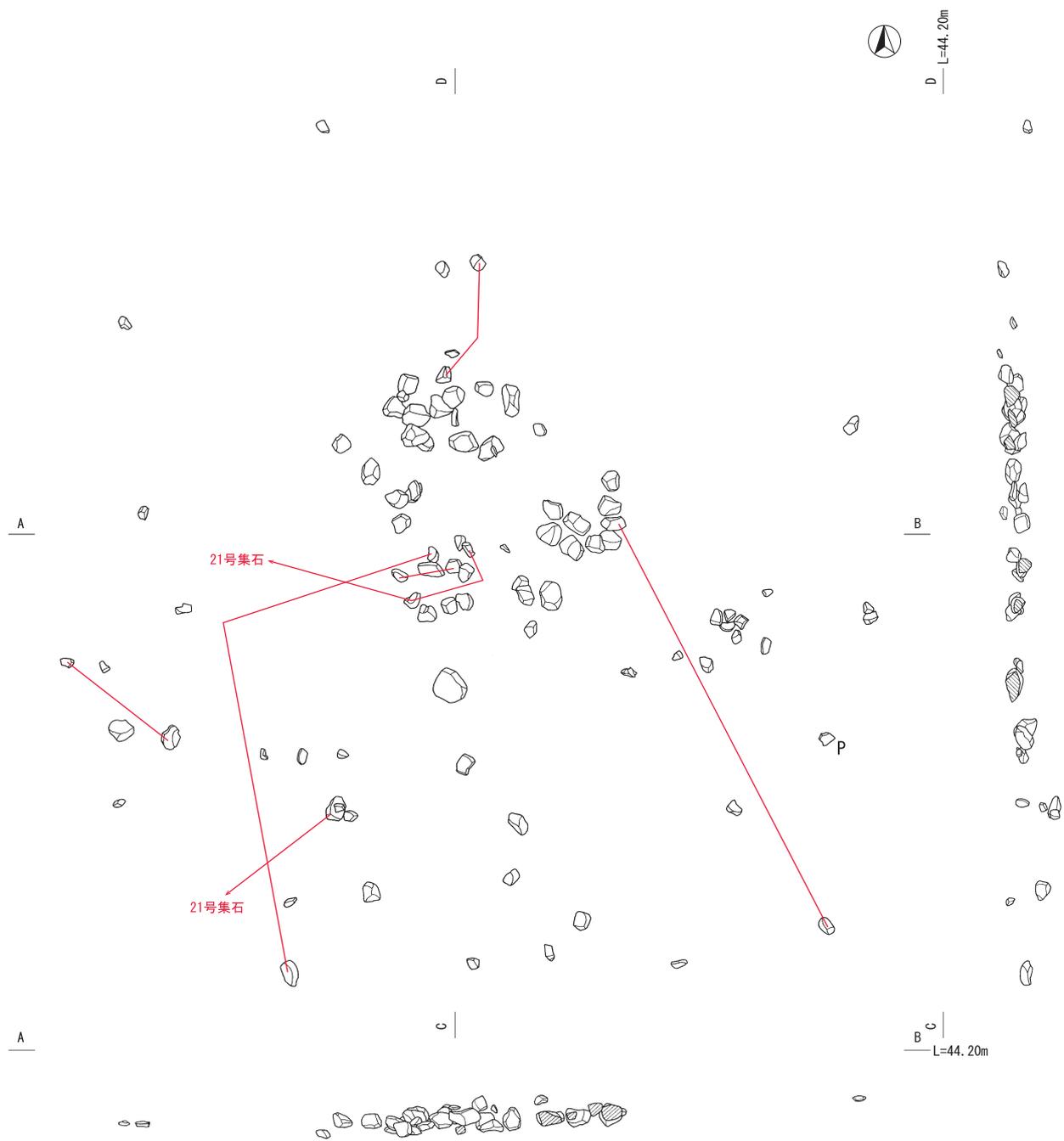
E-10・11区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸220cm、短軸194cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫18個8組が接合した。遺構内より土器2点が出土した。1は塞ノ神式土器の底部である。網目撚糸文を縦位に施した後、先端が尖った工具を使って斜位または横位に沈線を巡らせている。他の1点は16号及び43号集石出土の土器、包含層出土土器と接合した。43号集石に掲載してある。

#### 18号集石 (第25図)

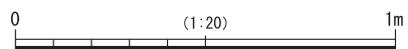
D・E-9・10区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸107cm、短軸66cmの範囲に構成礫が広がる。遺構内より遺物は楕円押型文土器が1点出土したが小片のため図化に至らなかった。

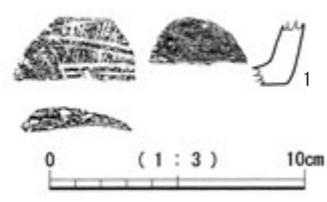
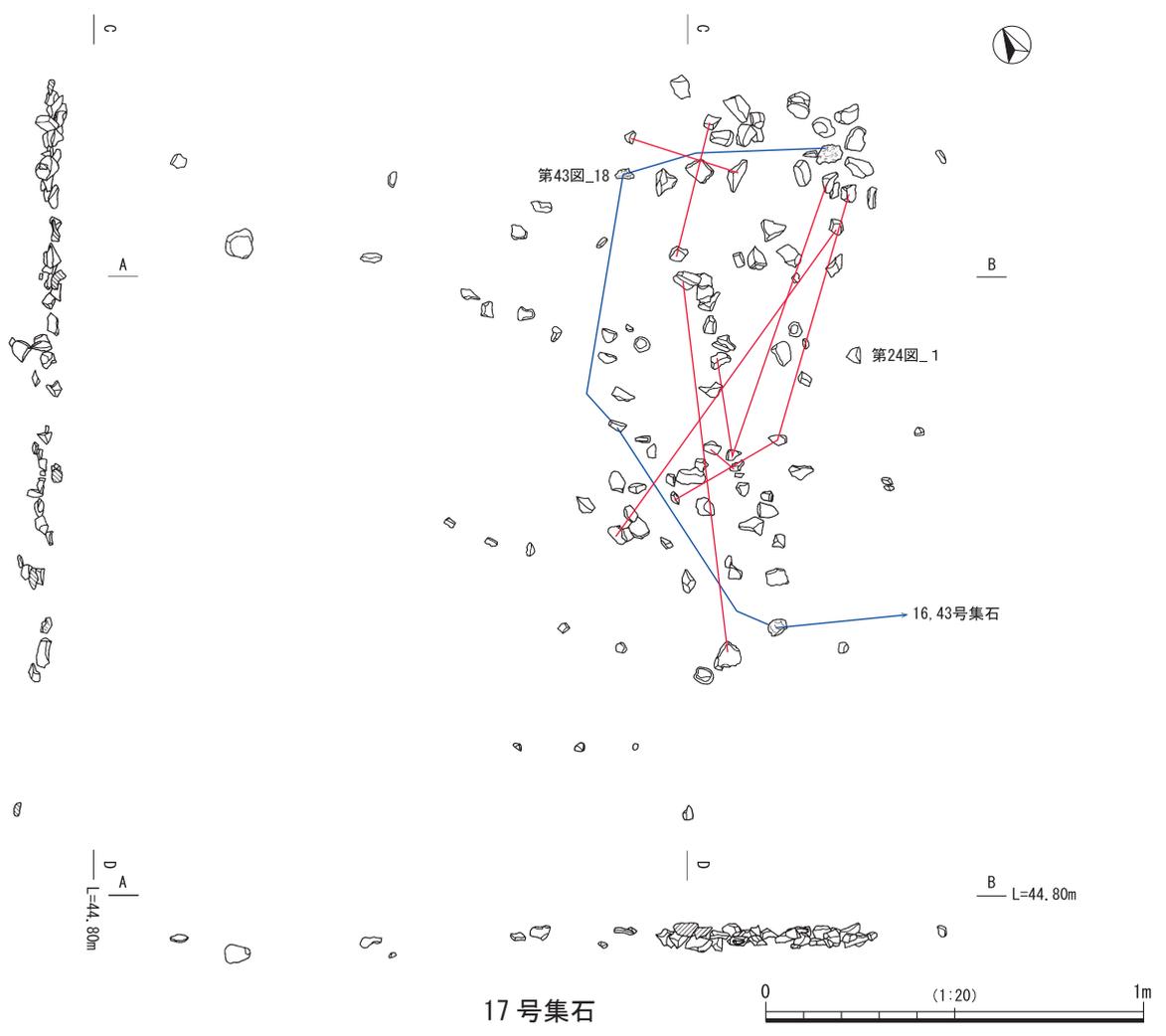
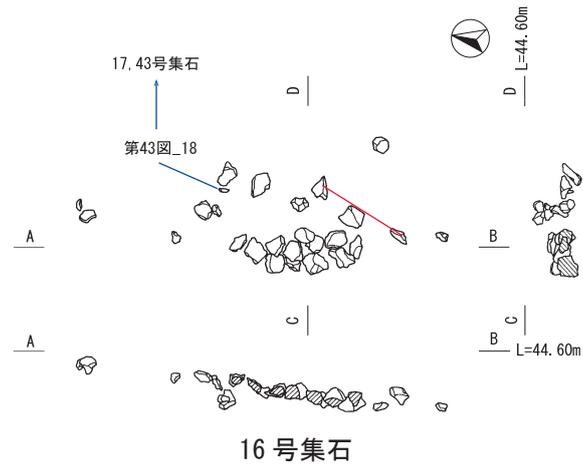
#### 19号集石 (第25図)

D-9区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸223cm、短軸149cmの範囲に構成礫が広がる構成礫4個2組が接合した。遺構内より楕円押型文土器が1点出土した



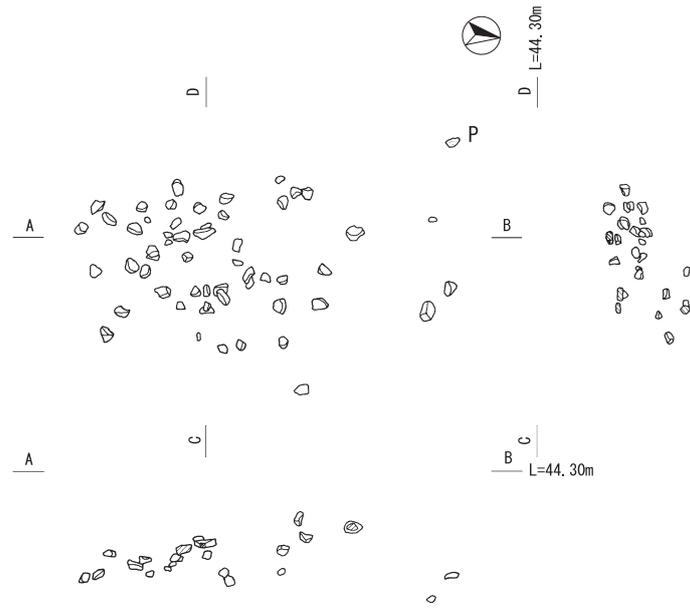
第23图 15号集石



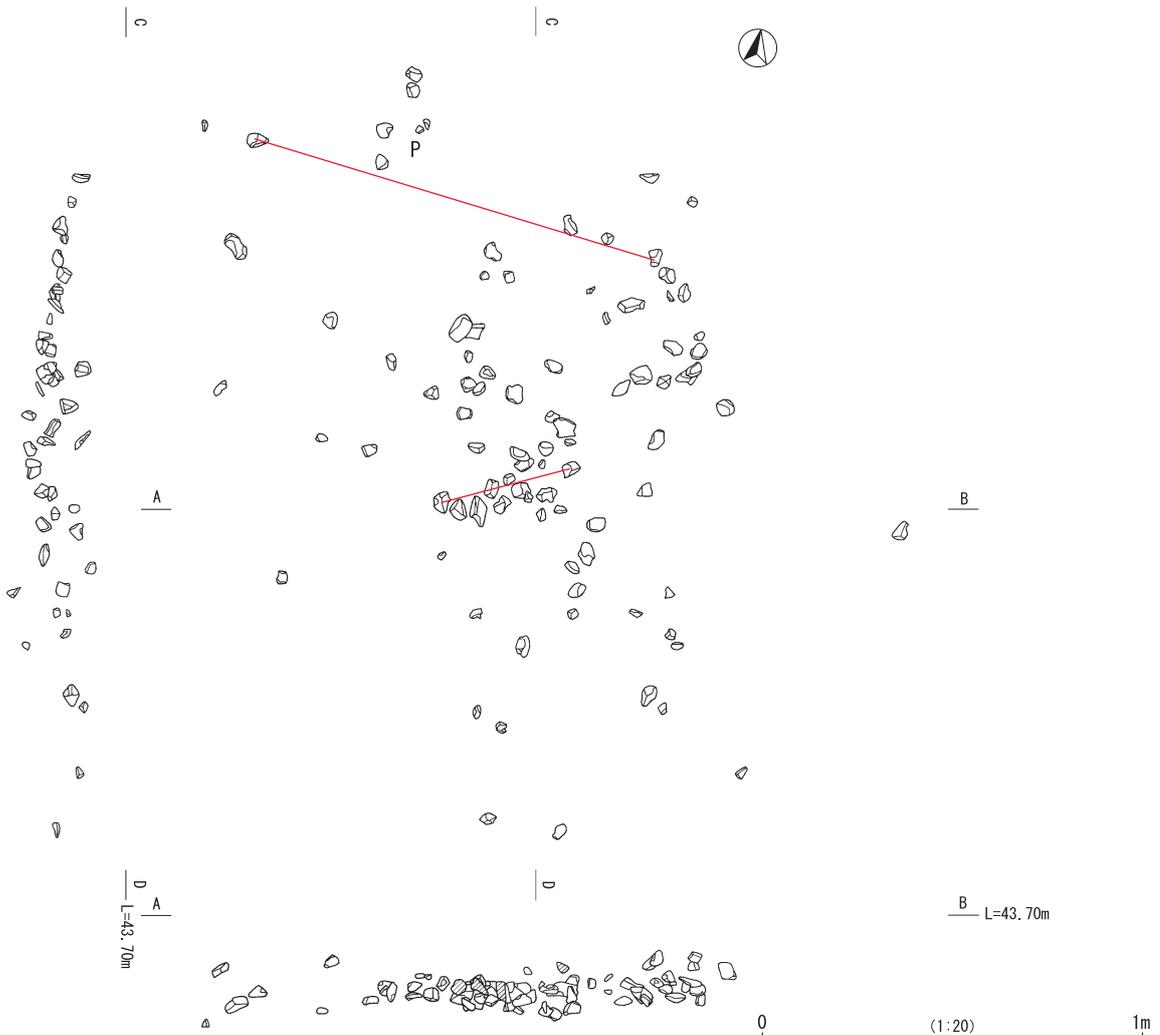


17号集石出土遺物

第24图 16・17号集石, 出土遺物

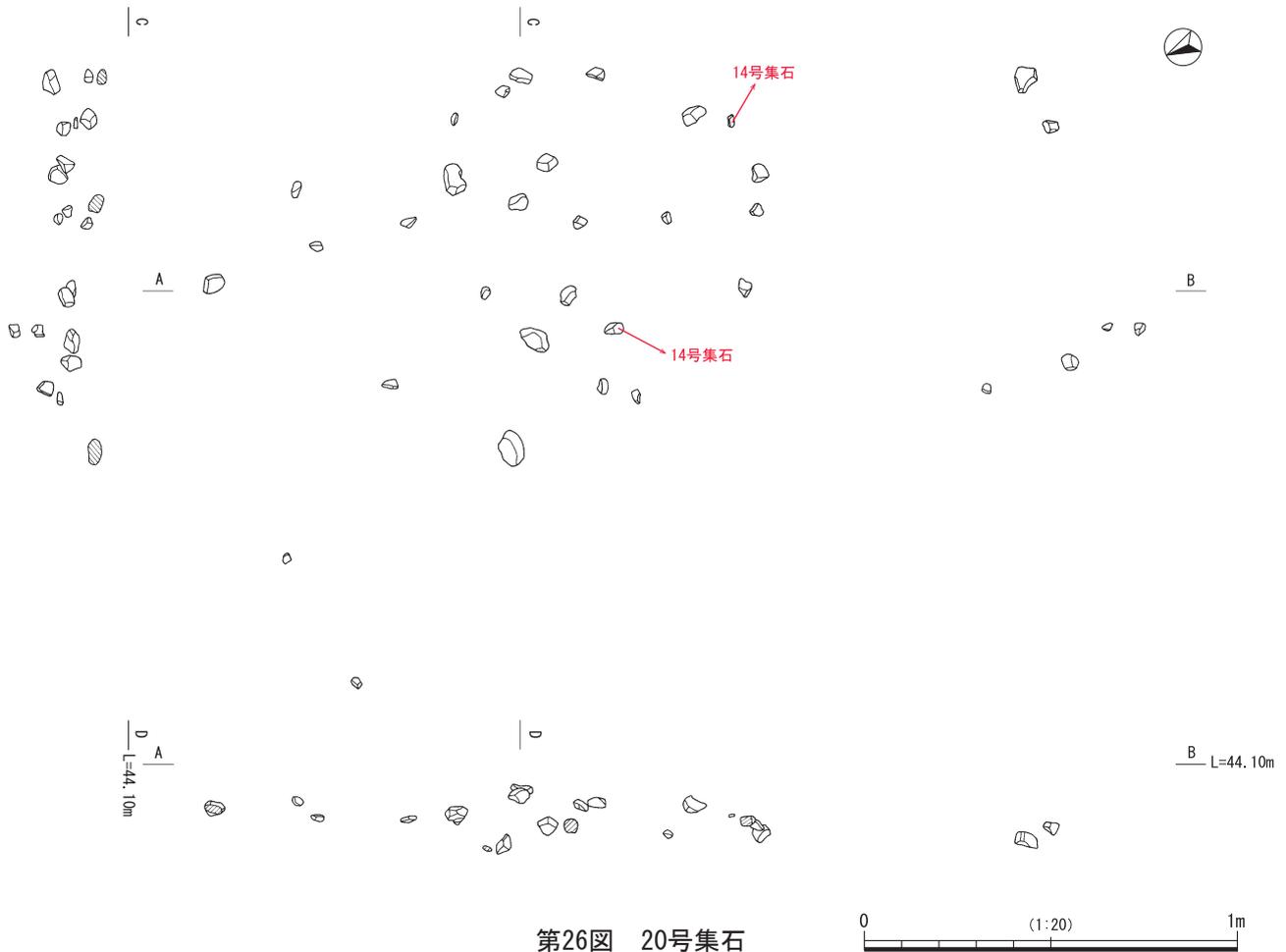


18号集石



19号集石

第25图 18・19号集石



が小片のため図化に至らなかった。

#### 20号集石 (第26図)

F-8・9区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸250cm、短軸157cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫の2個が東側に隣接する14号集石遺構の構成礫と接合した。遺構内より遺物は出土しなかった。

#### 21号集石 (第27図)

E-9区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸176cm、短軸100cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫の2が北側に隣接する15号集石遺構の構成礫と接合した。遺構内より平椀式土器1点が出土した。2は胴部である。結節縄文が胴部の下位に施される。内面はケズリの後、ナデ調整されている。E-9区VIIb層出土の土器と接合する。

#### 22号集石 (第28図)

F-9区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸224cm、短軸158cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫2個1

組が接合した。また別の1個が西側に隣接する14号集石の構成礫と接合した。遺構内より遺物は出土しなかった。

#### 23号集石 (第28図)

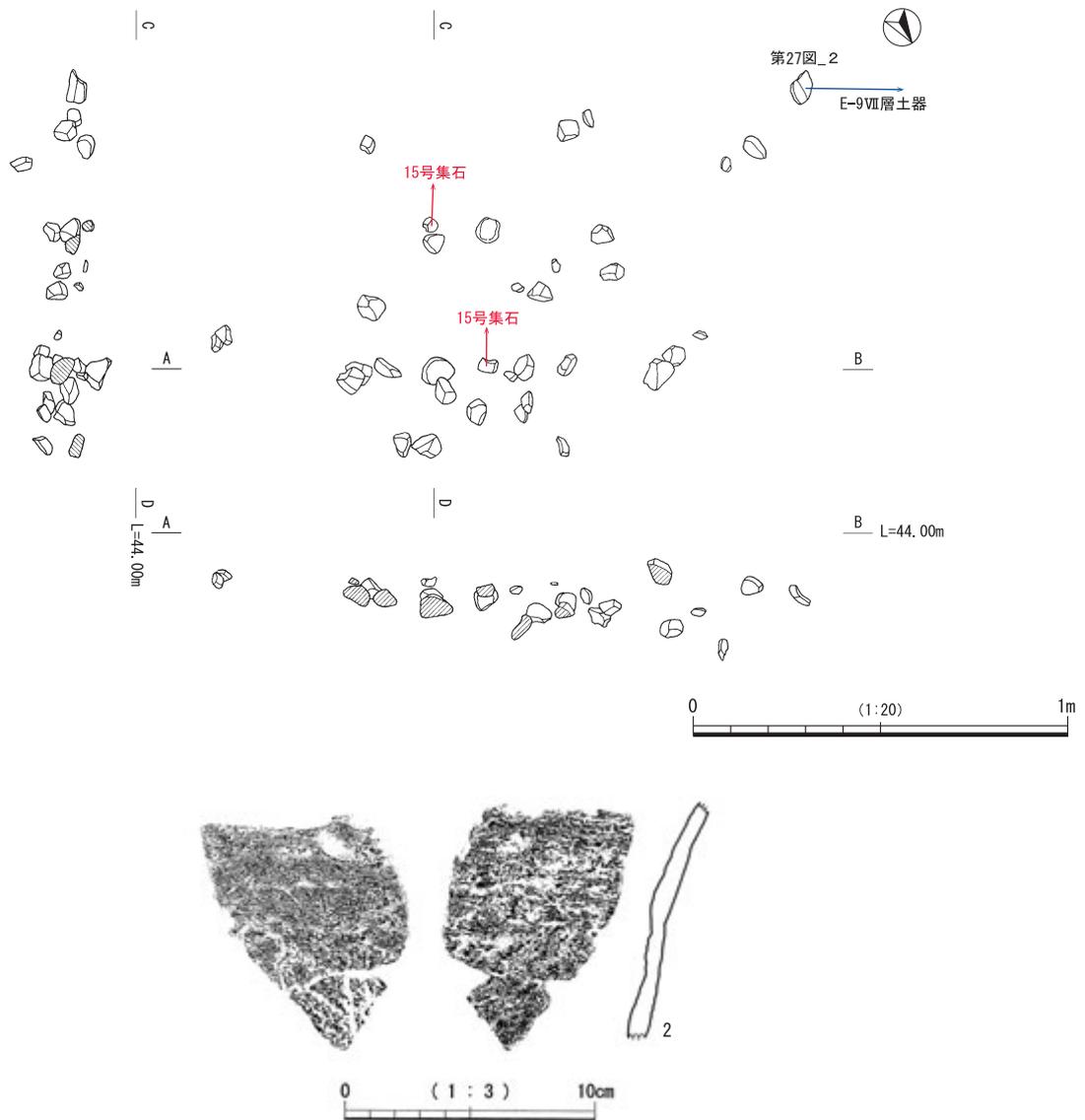
E-9区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸189cm、短軸135cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫3個1組が接合した。遺構内より遺物は出土しなかった。

#### 24号集石 (第29図)

F-10区で検出した。検出面はVIII層であり、長軸230cm、短軸200cmの範囲に構成礫が広がる。遺構内より土器2点が出土した。3は桑ノ丸式土器の胴部である。外面は全面的に斜位の短い貝殻条痕が施される。これはF-9区VIIa層、F-10区VIIb層出土の土器と接合した。この他に楕円押型文も出土したが小片のため図化には至らなかった。

#### 25号集石 (第30図)

F-10・11区で検出した。検出面はVIII層であり、長軸198cm、短軸170cmの範囲に構成礫が広がる。遺構内より



第27図 21号集石, 出土遺物

土器の小片が1点及び剥片2点が出土したが、図化に至らなかった。

#### 26号集石 (第31図)

E・F-10区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸162cm、短軸128cmの範囲に構成礫が広がる。遺構内より土器の小片が出土した。1点は表面に条痕文を施している。残りの1点は小片のため型式不明である。

#### 27号集石 (第31図)

E-10区で検出した。検出面はVIII層であり、長軸220cm、短軸88cmの範囲に構成礫が広がる。遺構内より土器1点が出土した。4は深鉢の胴部で外面に楕円押型文を施し、内面はケズリ調整である。

#### 28号集石 (第32図)

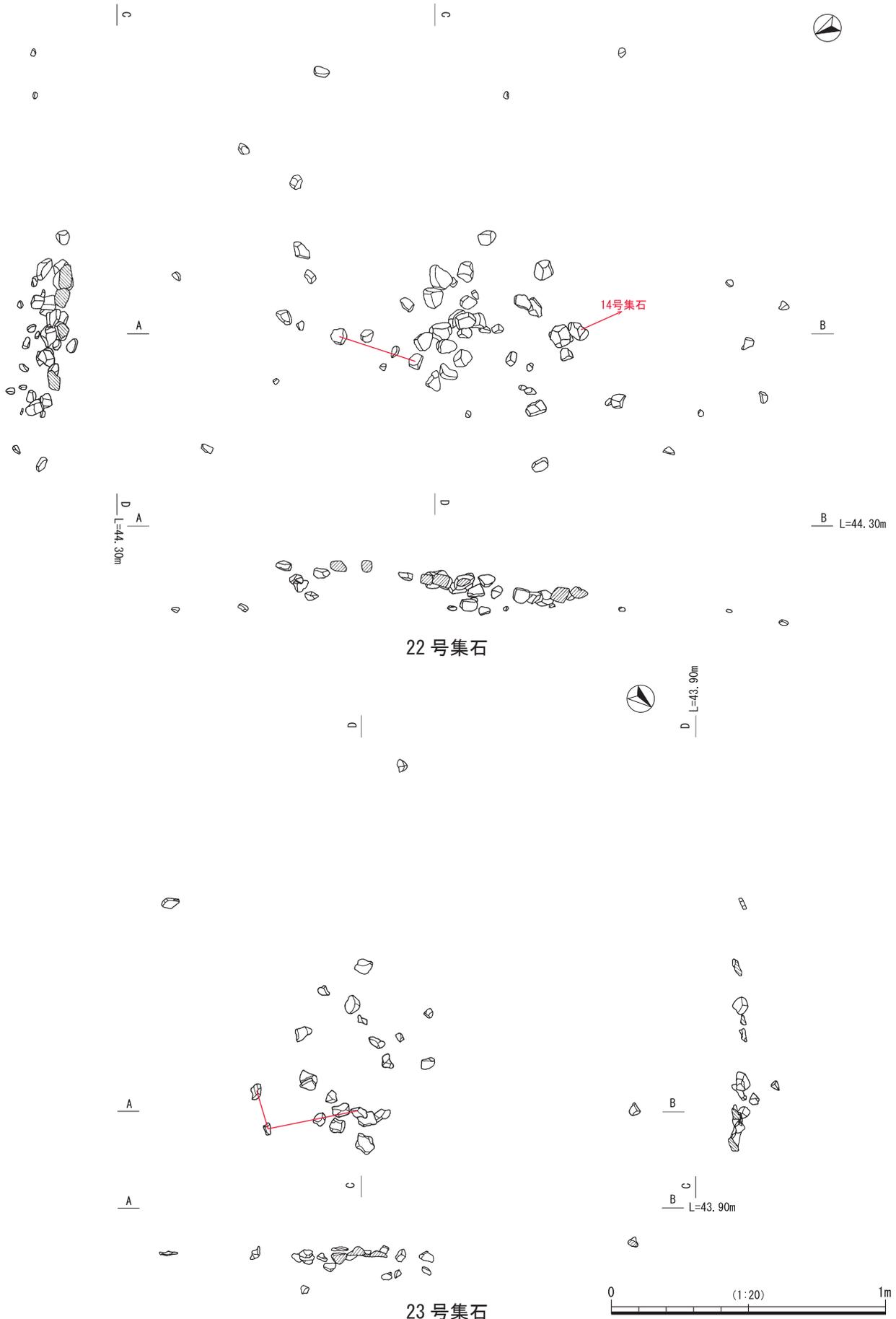
B・C-8区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸238cm、短軸161cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫4個2組が接合した。図化できなかったが遺構内より土器の小片数点が出土し、その中には桑ノ丸式土器と考えられるものが含まれていた。

#### 29号集石 (第33図)

B-8区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸222cm、短軸182cmの範囲に構成礫が広がる。遺構内より楕円押型文土器が1点出土したが図化に至らなかった。

#### 30号集石 (第34図)

B-12区で検出した。検出面はVIIa層であり、長軸228



第28图 22・23号集石



第29図 24号集石，出土遺物

cm，短軸192cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫2個1組が接合した。遺構内より土器が5点出土した。5，6，7は桑ノ丸式土器で貝殻による流水文が施される。8は外面に縦位に楕円押型文が，内面の口縁部付近に楕円押型文が横位に施される。9は底部である。施文は視認できない。

#### 31号集石（第35図）

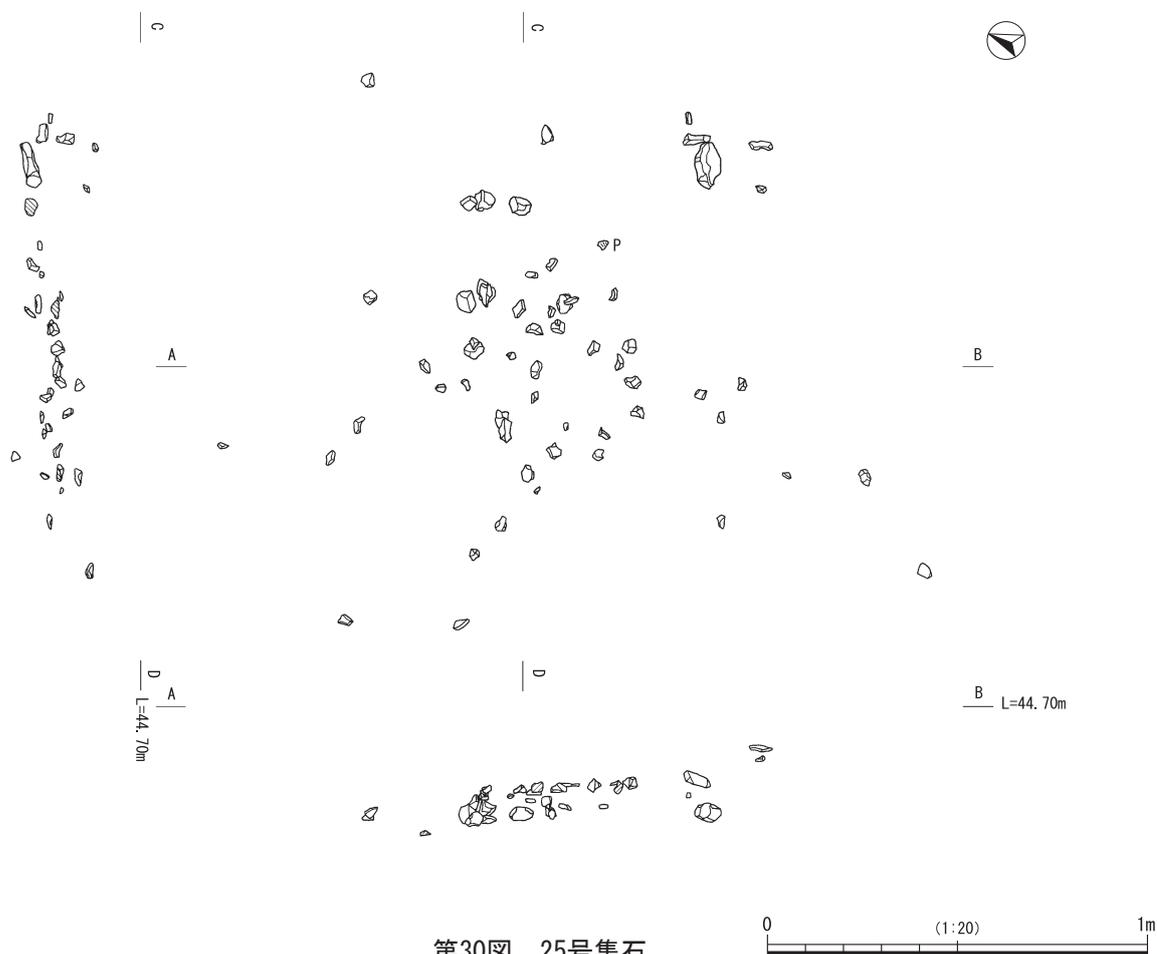
B-12区で検出した。検出面はVIIa層であり，径103cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫1組が接合した。遺構内より土器の小片が1点出土したが，図化に至らなかった。

#### 32号集石（第35図）

C-10・11区で検出した。検出面はVIIb層であり，長軸260cm，短軸178cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫4個2組が接合した。遺構内より土器1点が出土した。10は外反する口縁部である。口唇部と内外面に楕円押型文が施されている。

#### 33号集石（第36図）

C-11区で検出した。検出面はVIIb層であり，長軸236cm，短軸188cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫25個9組が接合した。その中の1組はC-11区VIIb層出土の礫



第30図 25号集石

と接合した。遺構内より土器1点が出土した。小片で図化できなかったが、条痕を施した後に楔形突起を貼り付けていることから、加栗山式土器と考えられる。

#### 34号集石 (第36図)

E-11区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸138cm、短軸70cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫4個2組が接合した。遺構内より黒曜石の剥片及び土器小片が出土した。土器は型式不明である。

#### 35号集石 (第36図)

E-11区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸115cm、短軸75cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫21組が接合した。遺構内より遺物は出土しなかった。

#### 36号集石 (第37図)

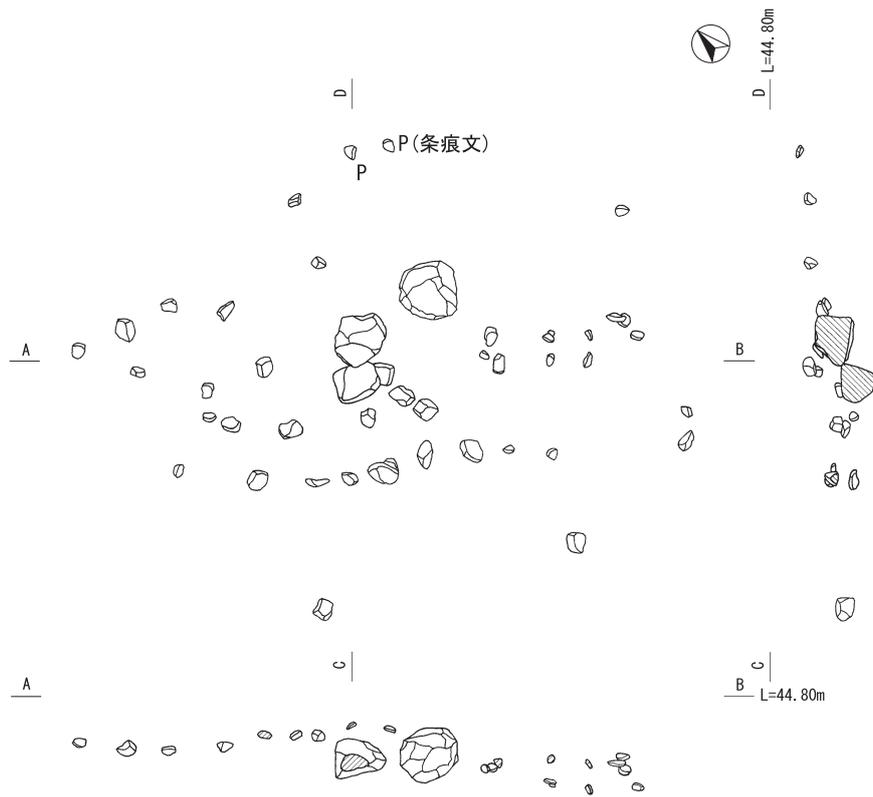
D・E-11区で検出した。検出面はVIII層であり、長軸258cm、短軸114cmの範囲に構成礫が広がる。遺構内より遺物は出土しなかった。

#### 37号集石 (第37図)

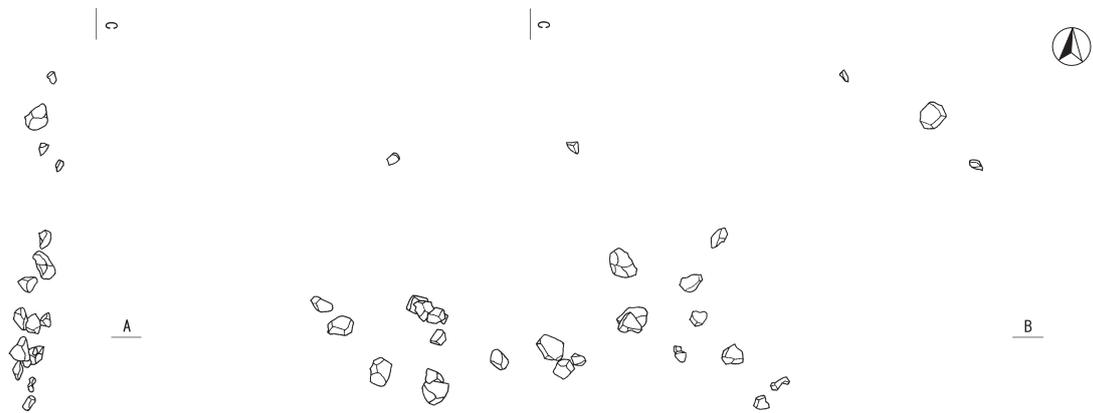
D・E-12区で検出した。検出面はVIII層であり、径60cmの範囲に構成礫が広がる。遺構内より遺物は出土しなかった。

#### 38号集石 (第37図)

D-11・12区で検出した。検出面はVIII層であり、長軸105cm、短軸46cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫2個1組が接合した。遺構内より遺物は出土しなかった。



26号集石



第31图\_4

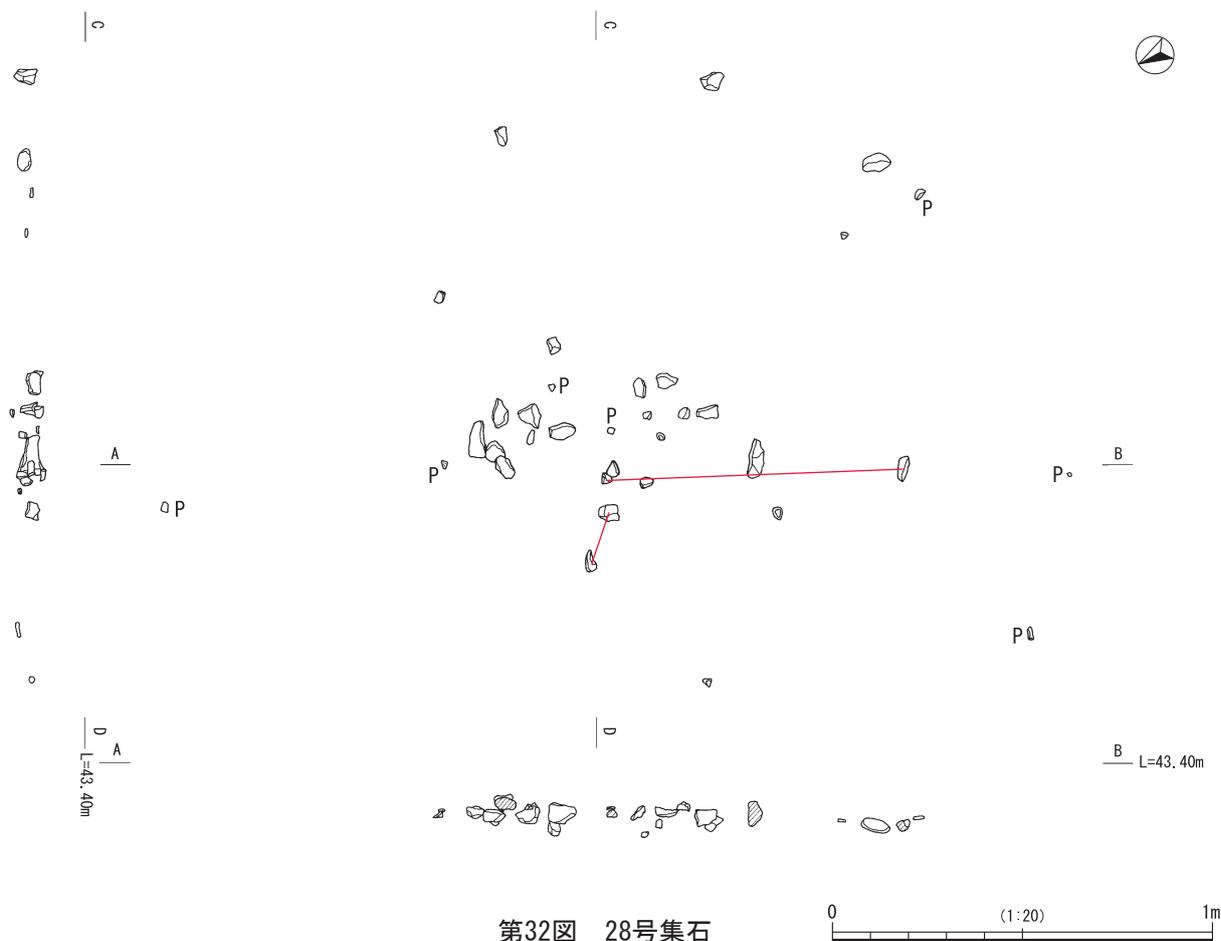


27号集石



27号集石出土遺物

第31图 26・27号集石, 出土遺物



第32図 28号集石

### 39号集石 (第38図)

D-12区で検出した。検出面はVIIb層であり、径210cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫2個1組が接合した。遺構内より土器が数点出土し、6点を図化した。11は志風頭式土器で外面に貝殻条痕文のある角筒形深鉢の底部である。D-12区VIIa層出土の土器と接合した。12~16は下剥峯式土器である。12は口唇部が水平平坦で外面に横位に連続で刺突文を施す口縁部である。13は口縁部に瘤状突起を有し、目の細かい貝殻腹縁の刺突文を横位に密に施される。C-11区VIIa層出土の土器2個と接合した。14・15は貝殻腹縁の刺突文を横位あるいは斜位に施される。16は貝殻刺突紋のある底部である。D-12区VIIa層出土の土器と接合した。

#### 【II b類】

### 40号集石 (第39図)

F・G-8・9区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸225cm、短軸120cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫2個1組が接合した。掘り込みは北西側の一部が攪乱のため欠損するが、長軸127cm、短軸109cm、深さ23cmの

楕円形を呈すると考えられる。掘り込みの埋土は単一で、VIIa層に近い色調である。遺構内より遺物は出土しなかった。

### 41号集石 (第40図)

E-10区で検出した。検出面はVIII層であり、長軸265cm、短軸210cmの範囲に構成礫が広がる構成礫6個3組が接合した。掘り込みは長軸130cm、短軸90cm、深さ15cmの不整形である。掘り込みの埋土は単一で、2mm大以下の黄色・白色パミスを多く含む、硬くしまりのある黒褐色土である。埋土中に炭化物も少量含んでいた。採取した炭化物の分析を行った結果、樹種はツバキ属ツバキ科で、放射性炭素年代は暦年較正で9520-9422cal B P (確率95.49%)という結果がでている。掘り込み外にある構成礫と接して石鏃1点が出土したので遺構内遺物として扱った。17はチャート素材としてあり、基部にU字状の挟りが入る。



第33図 29号集石

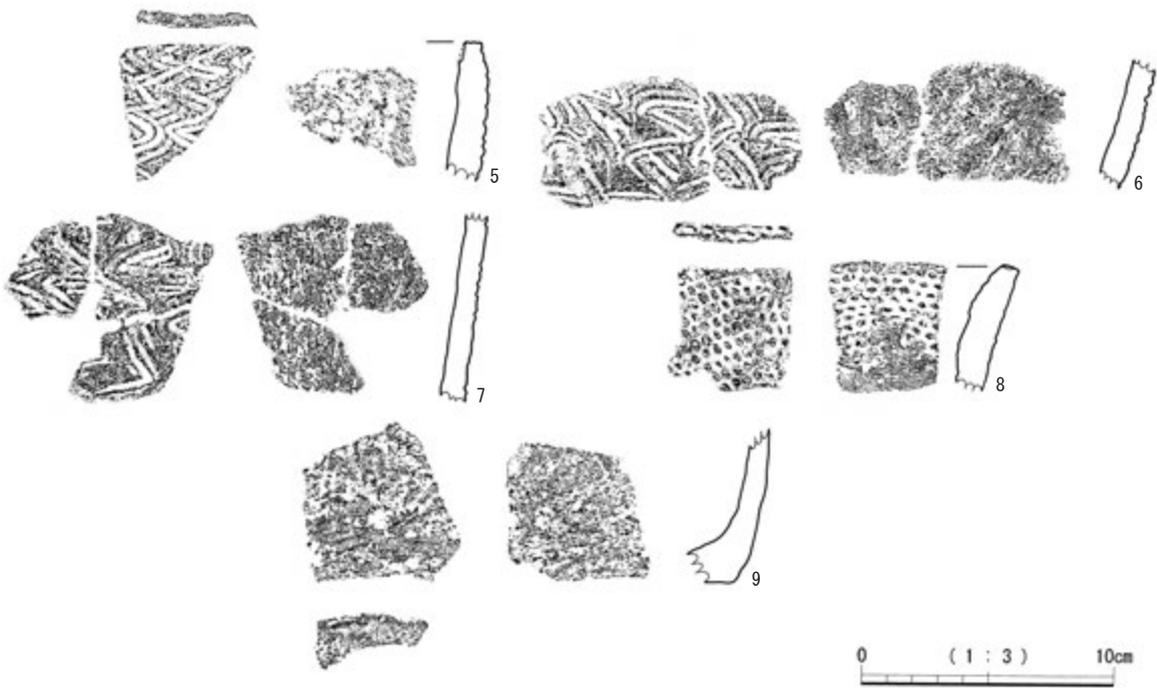
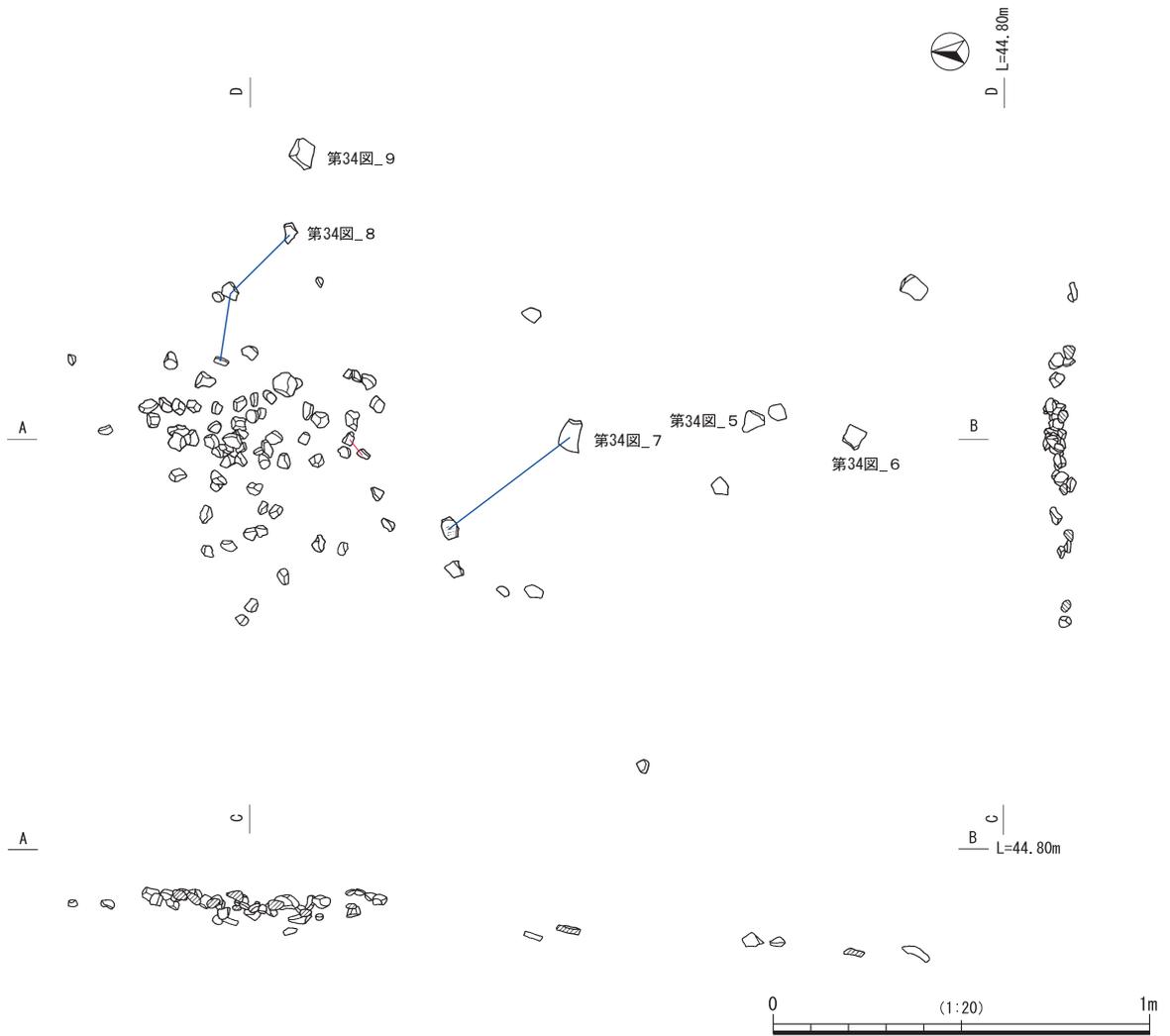
#### 42号集石（第41図）

D-12区で検出した。検出面はVIIb層であり、長軸218cm、短軸160cmの範囲に構成礫が広がる。掘り込みは径74cm、深さ14cmの楕円形を呈する。掘り込みの埋土は単一で、1mm大以下の白色パミスを多量に、2～3mm大の黄色パミスを少量含む、しまりのある黒褐色土である。遺構内より土器小片が出土したが、小片のため型式は不明である。

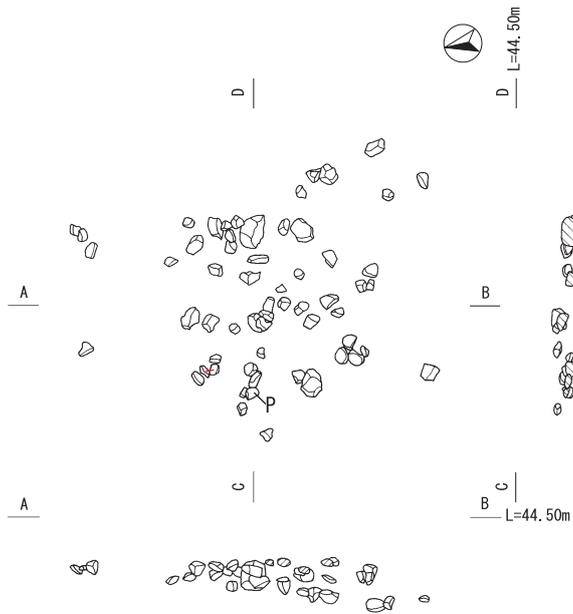
#### 【Ⅲ類】

#### 43号集石（第42図）

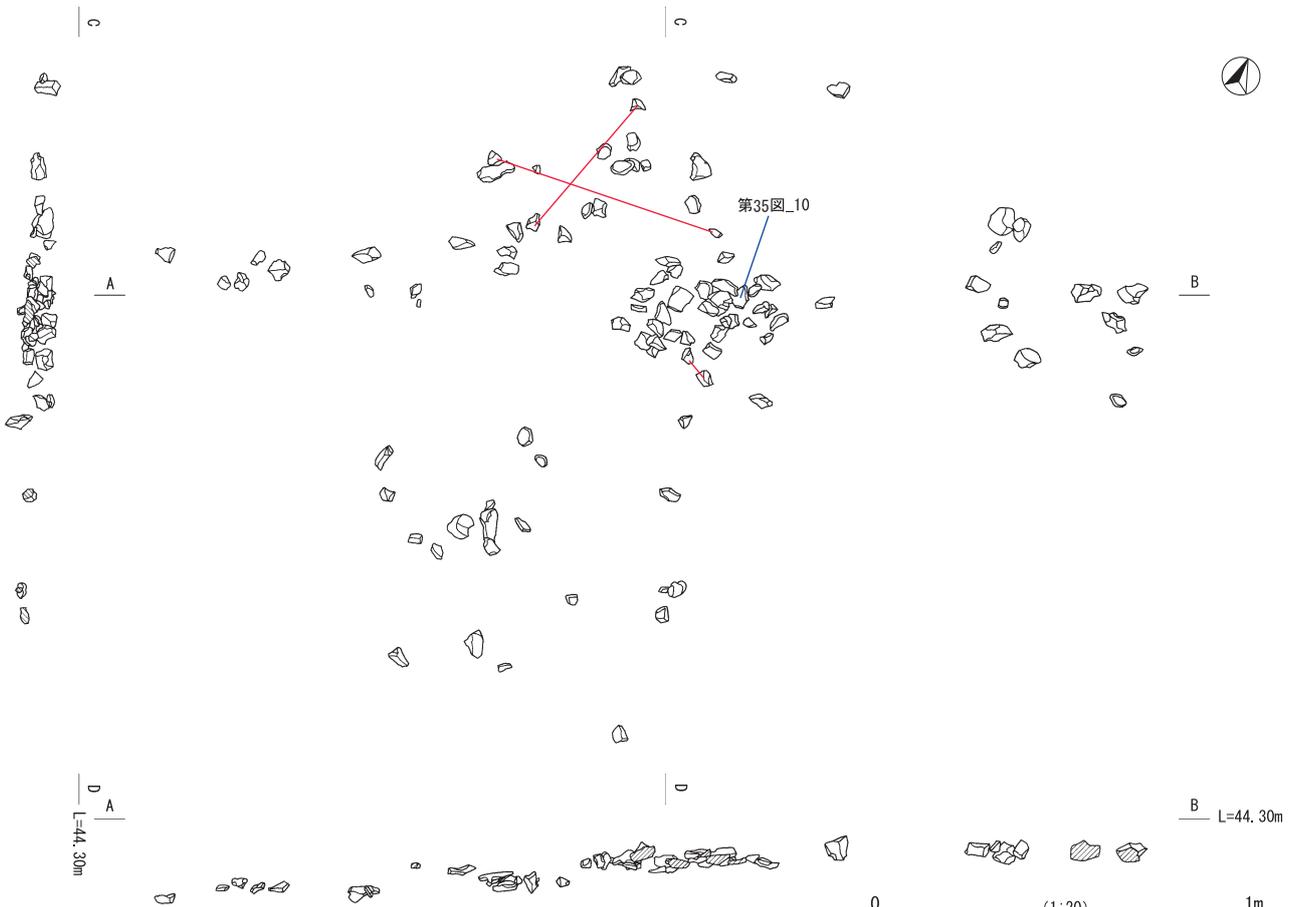
E-10区で検出した。検出面はVIIb層であり、径320cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫15個7組が接合した。集石との関係は不明であるが礫の広がりの中にある掘り込みは長軸175cm、短軸145cm、深さ14cmの楕円形を呈する。掘り込みの埋土は単一で、1mm大以下の白色パミスを含む、粘性及びしまりのある黒褐色土である。集石内より出土した土器2点を図化した。18は16号及び17号集石出土の土器、およびD-11区VIIa層出土の土器2点、VIIb層出土の土器2点、E-10区VIIa層出土の土器1



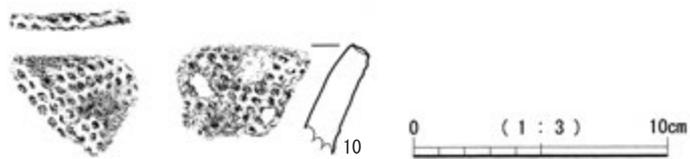
第34图 30号集石, 出土遺物



31号集石

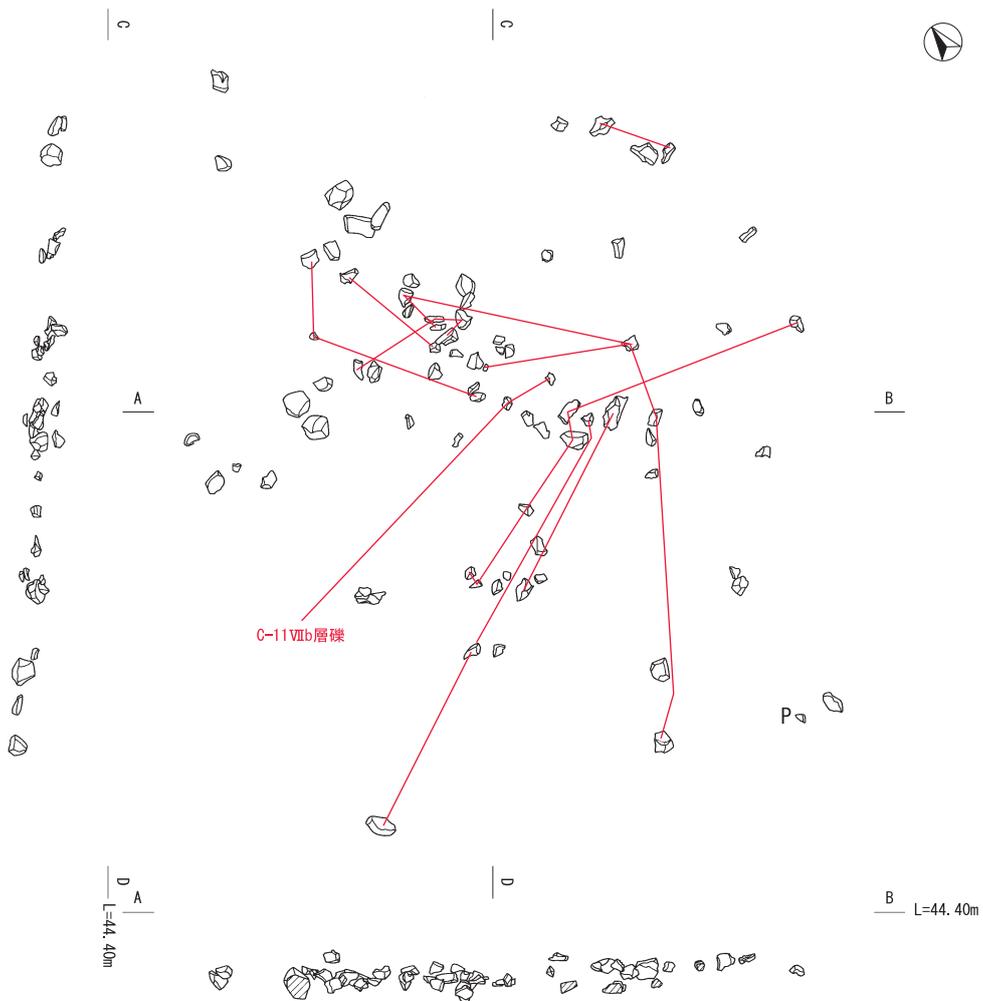


32号集石

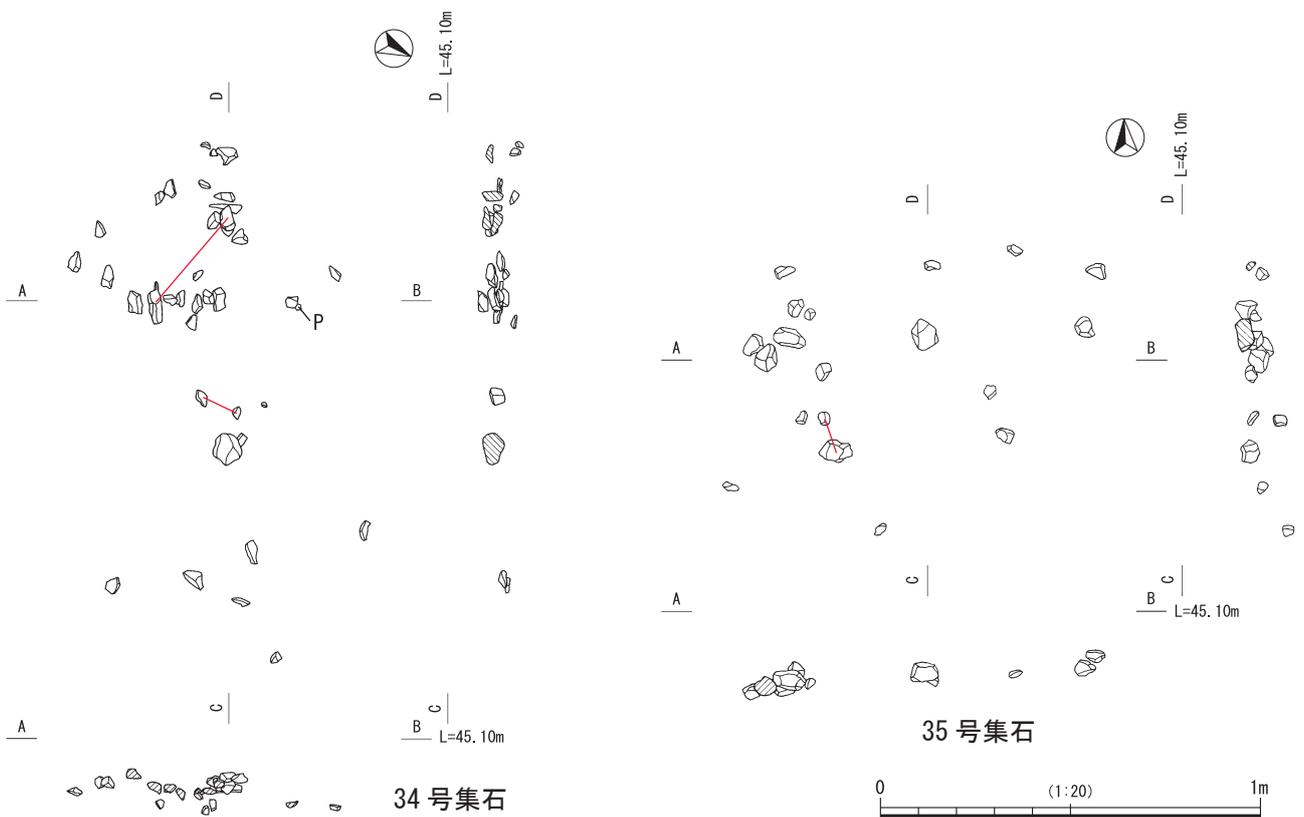


32号集石出土遺物

第35图 31・32号集石, 出土遺物



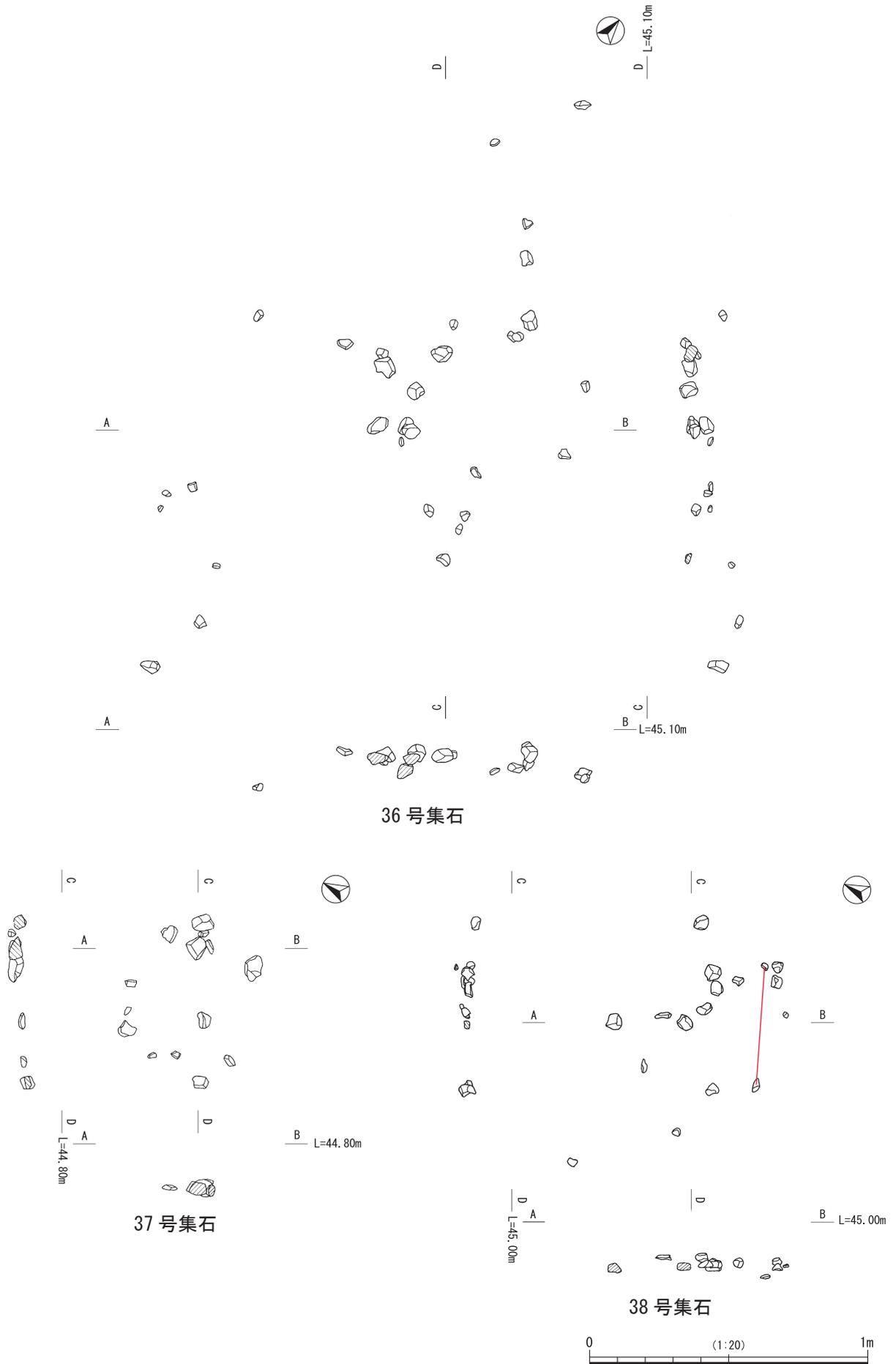
33号集石



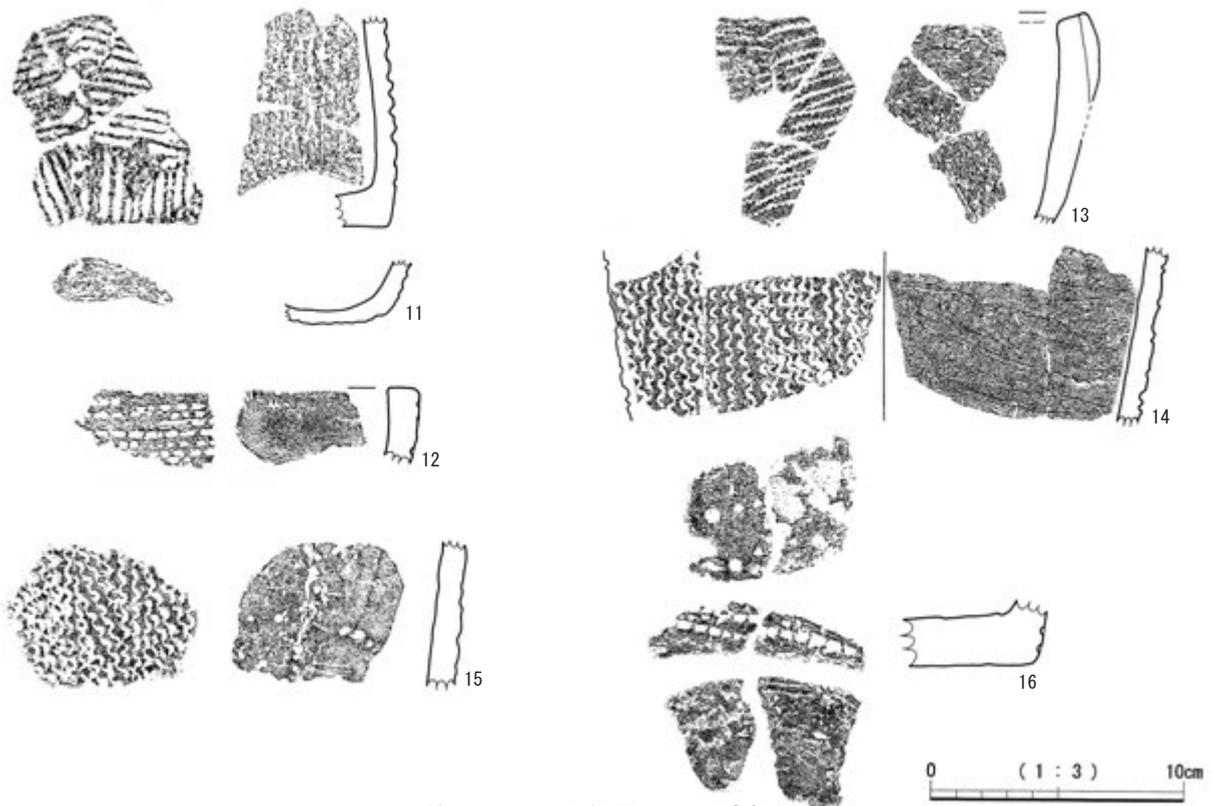
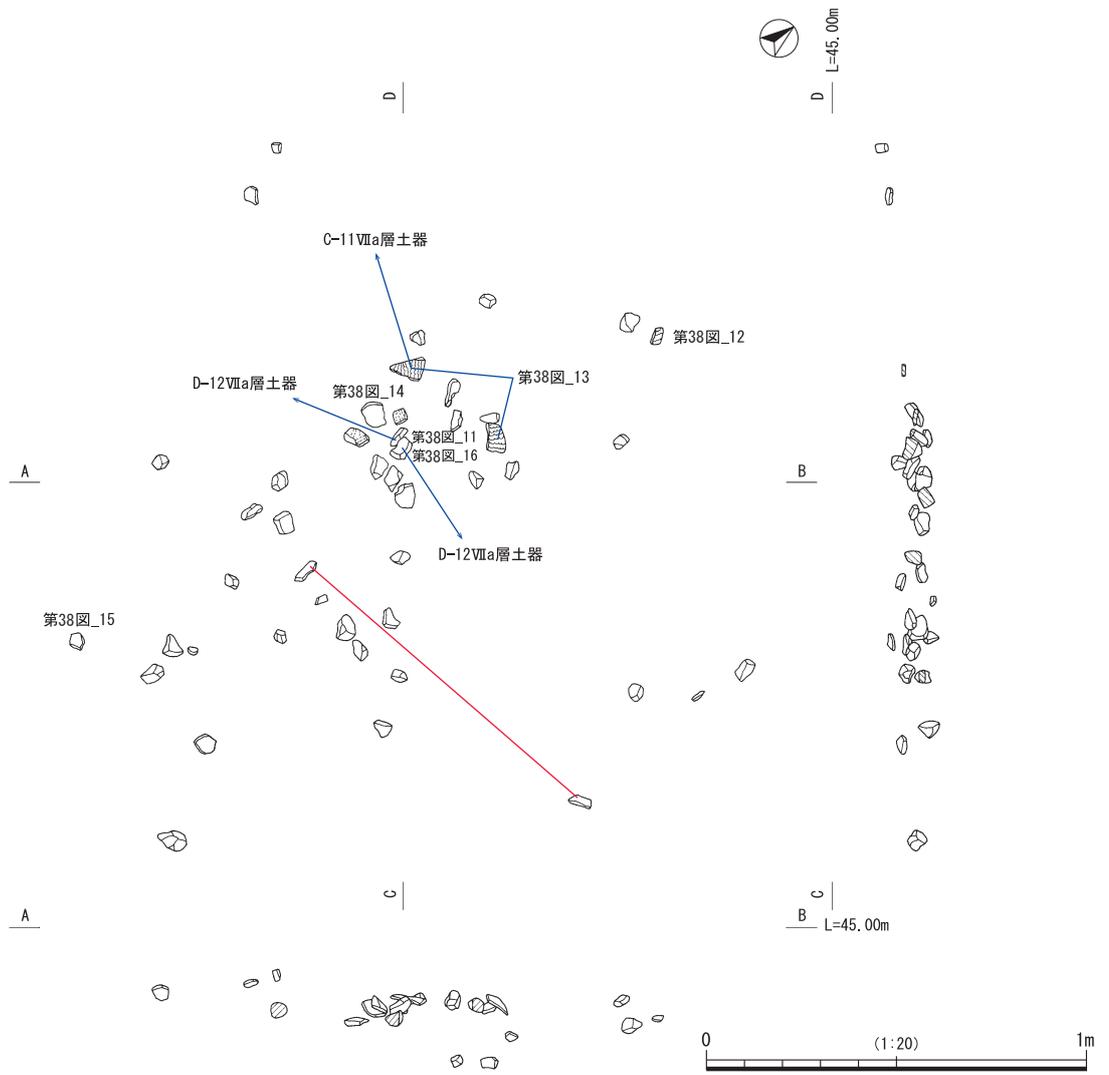
34号集石

35号集石

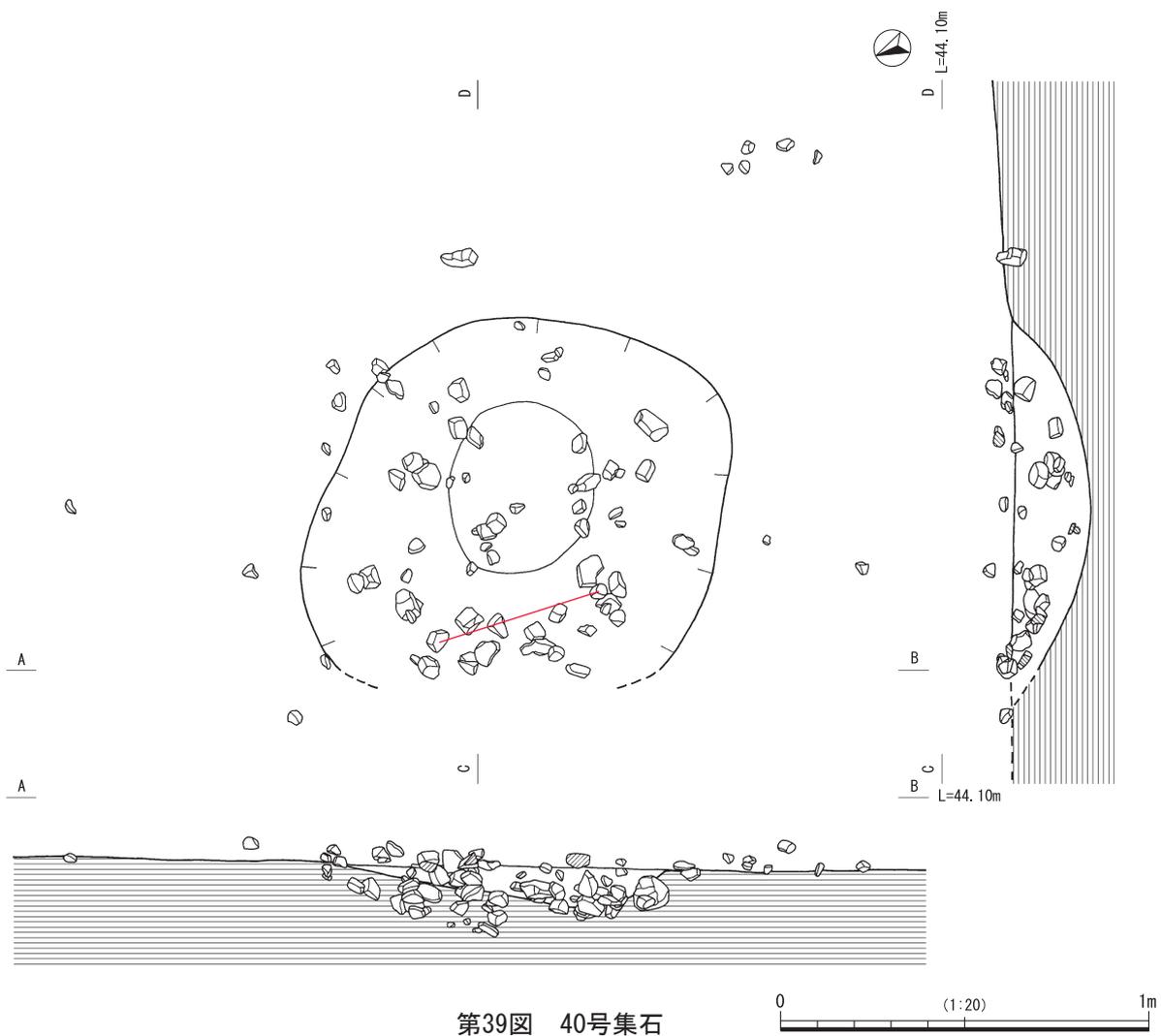
第36图 33・34・35号集石



第37图 36·37·38号集石



第38图 39号集石, 出土遺物

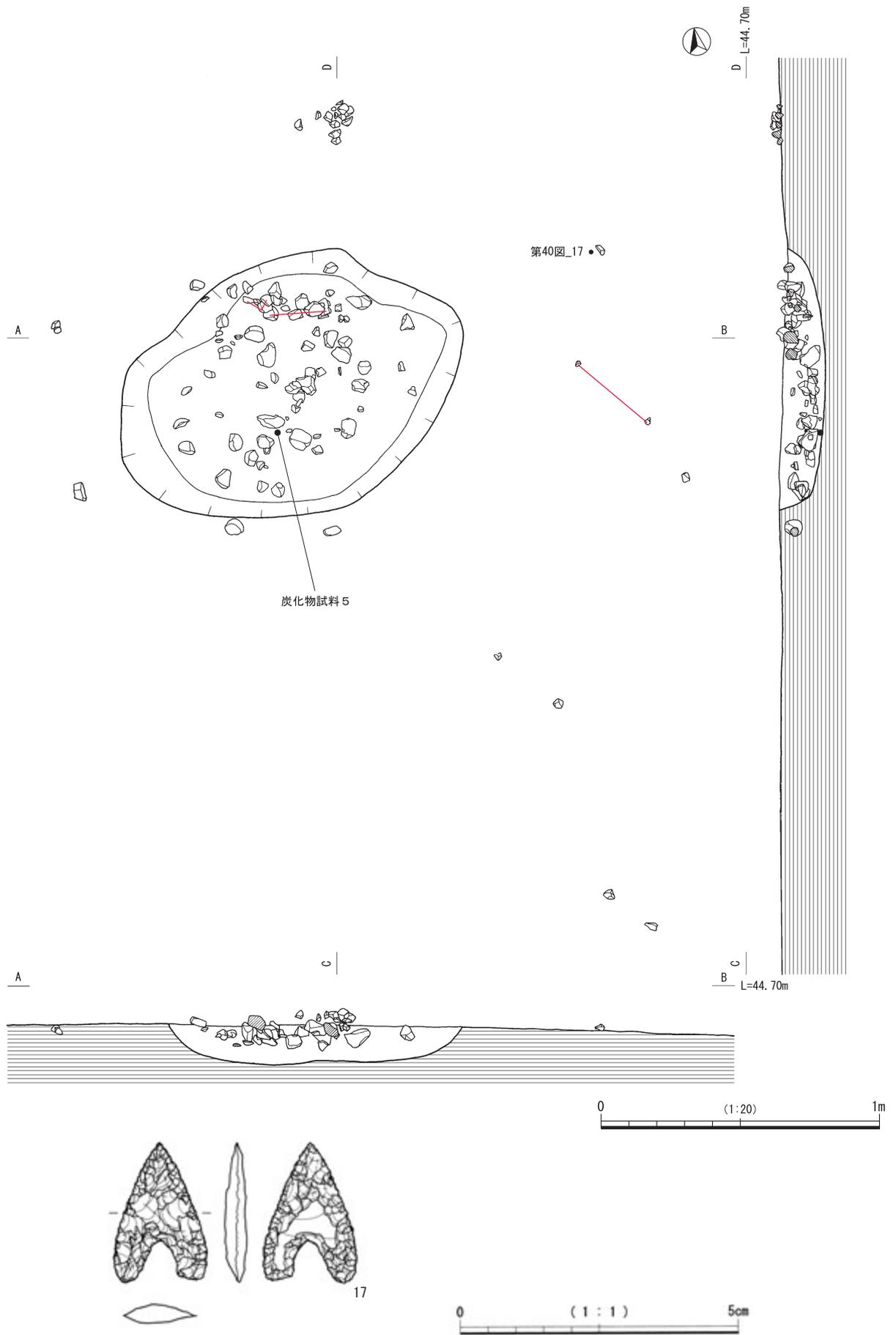


第39図 40号集石

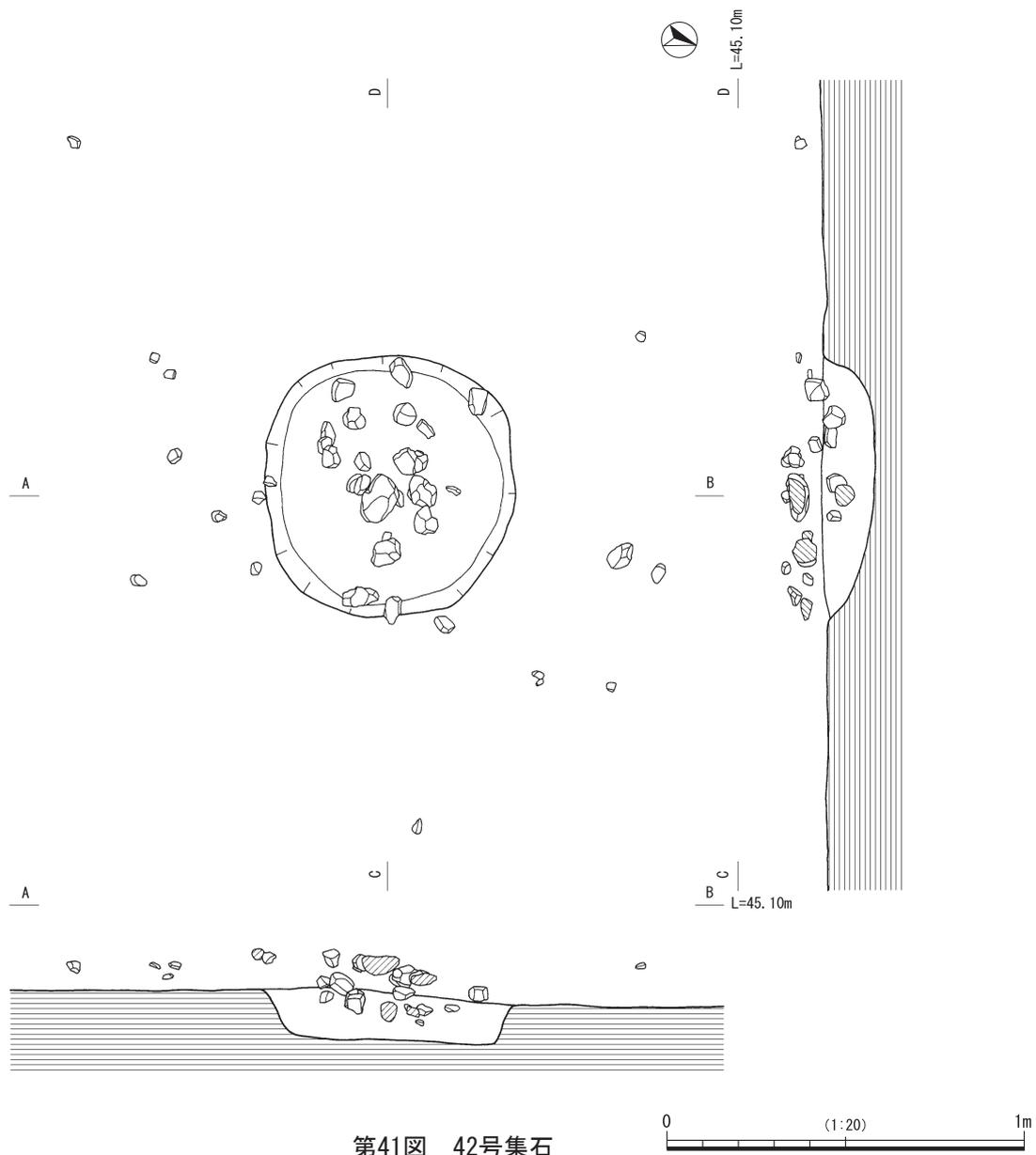
点，VIIb層出土の土器3点，F-11区VIIb層出土の土器1点と接合したもので桑ノ丸式土器の胴部である。外面はミガキ調整の後，短い貝殻条痕を羽状に施し，下部に縦位の貝殻条痕を施す。内面はミガキ調整である。19は外面に楕円押型文を施す胴部である。

#### 44号集石（第43図）

E-10区で検出した。検出面はVIII層であり，長軸165cm，短軸94cmの範囲に構成礫が広がる。構成礫8個4組が接合した。掘り込みは長軸100cm，短軸89cm，深さ15cmの不整形である。掘り込みの埋土は2つに分層できた。埋土1は2mm大以下の黄色パミス少量，白色パミスも多く含み，硬く粘質がある黒色土である。大きな炭化物を多く含む。埋土2は2mm大以下の黄色・白色パミス

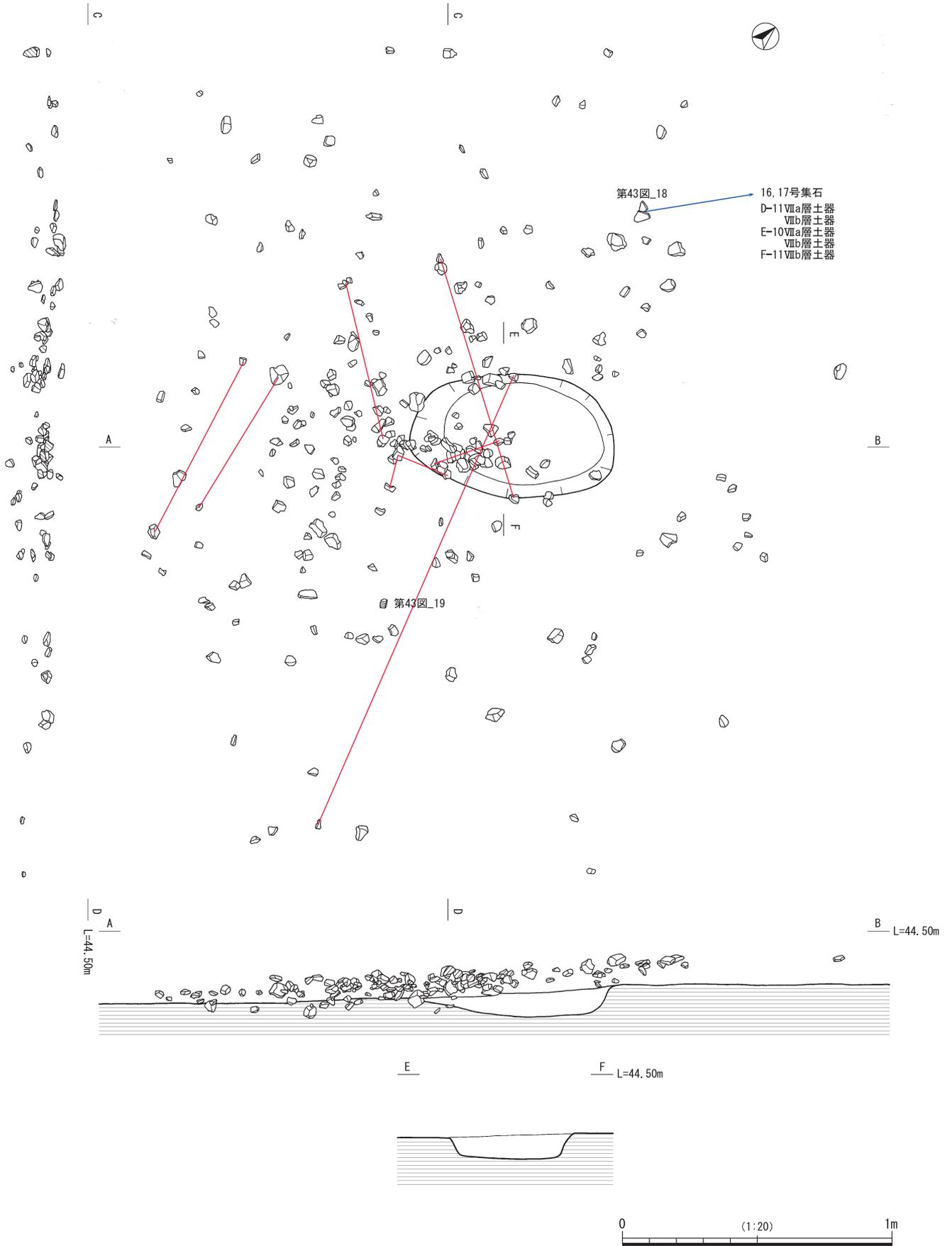


第40図 41号集石，出土遺物

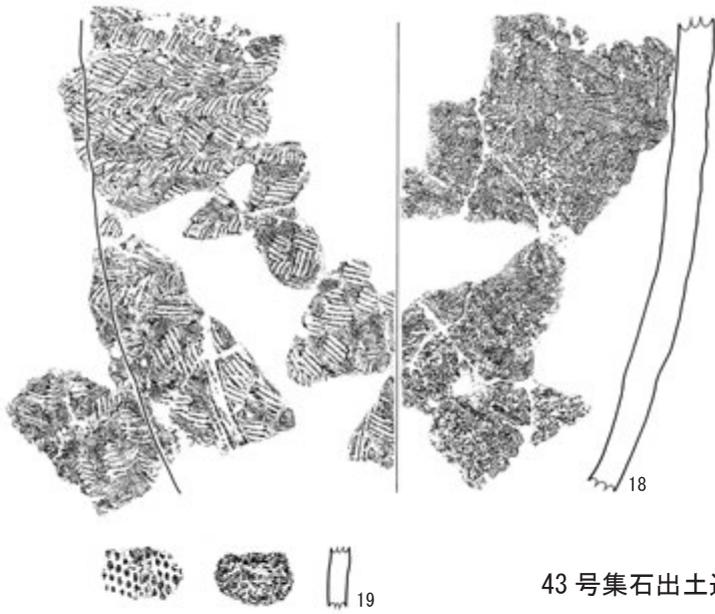


第41図 42号集石

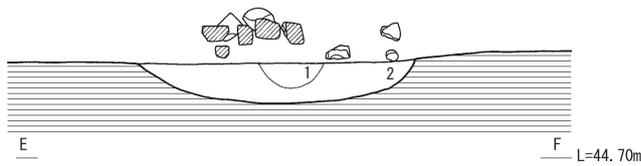
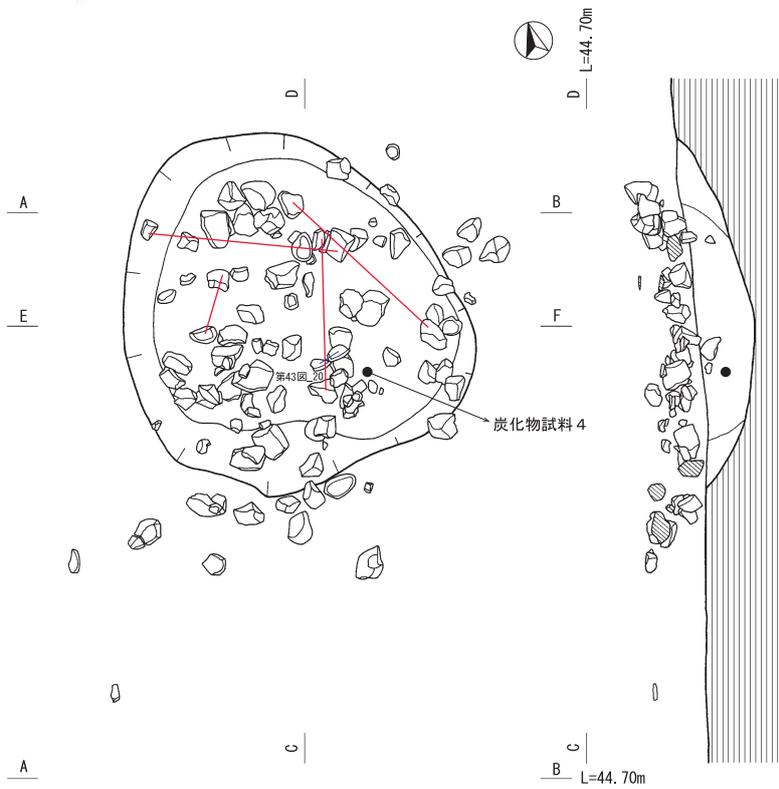
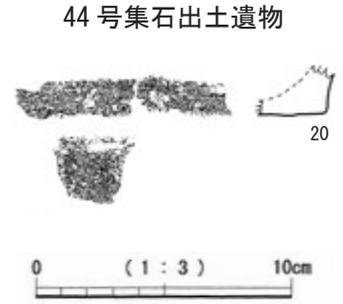
多く含み、硬くしまりがある黒褐色土である。遺構内より無文の底部片及び土器小片が出土したので、底部1点を図化した(20)。採取した炭化物の分析を行った結果、樹種はツバキ属ツバキ科で、放射性炭素年代は暦年較正で9546-9494calBP(確率95.4%)という結果がでている。



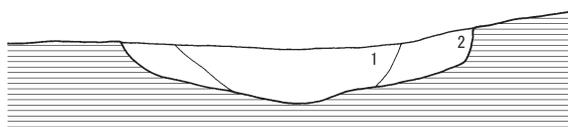
第42图 43号集石



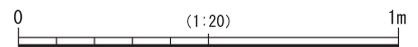
43号集石出土遺物



- 1 黒色土, 黄色・白色パミスを含む
- 2 黒褐色土, 黄色・白色パミスを含む



44号集石



第43図 43・44号出土遺物, 44号集石

### 3 土坑

VIIb下層からIX層にかけて22基を検出した。調査区の概ね北西側と南東側に大きく分かれて位置しているが、土坑同士や他の遺構と切り合って検出されたものはなかった。大きさは長軸で261cmから72cmと様々で、深さは10数cmのものが多い。断面は床面から屈曲して立ち上がるものが多い。埋土はVIIb層と考えられる黒褐色を呈するものが多い。

土坑は平面形から、下記のように3つに分類した。

- I類 (1～7号) 円形を呈するもの
- II類 (8～16号) 楕円形またはそれに近いもの
- III類 (17～22号) I・II類以外のもの

なお、埋土中から複数の礫が確認されたものについては、礫が埋土中に散在しているものや床面に礫が確認されなかった場合、集石ではなく土坑として扱った。

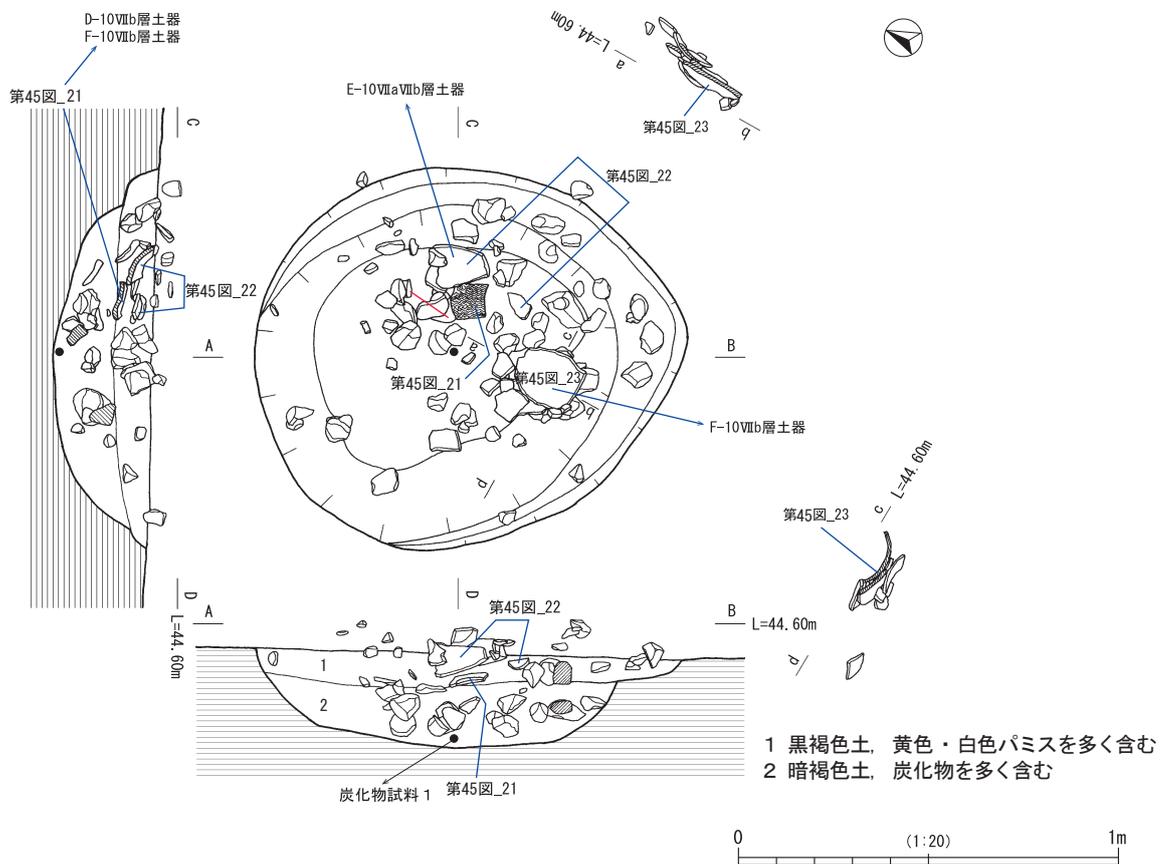
#### 【I類】

##### 1号土坑(第44・45図)

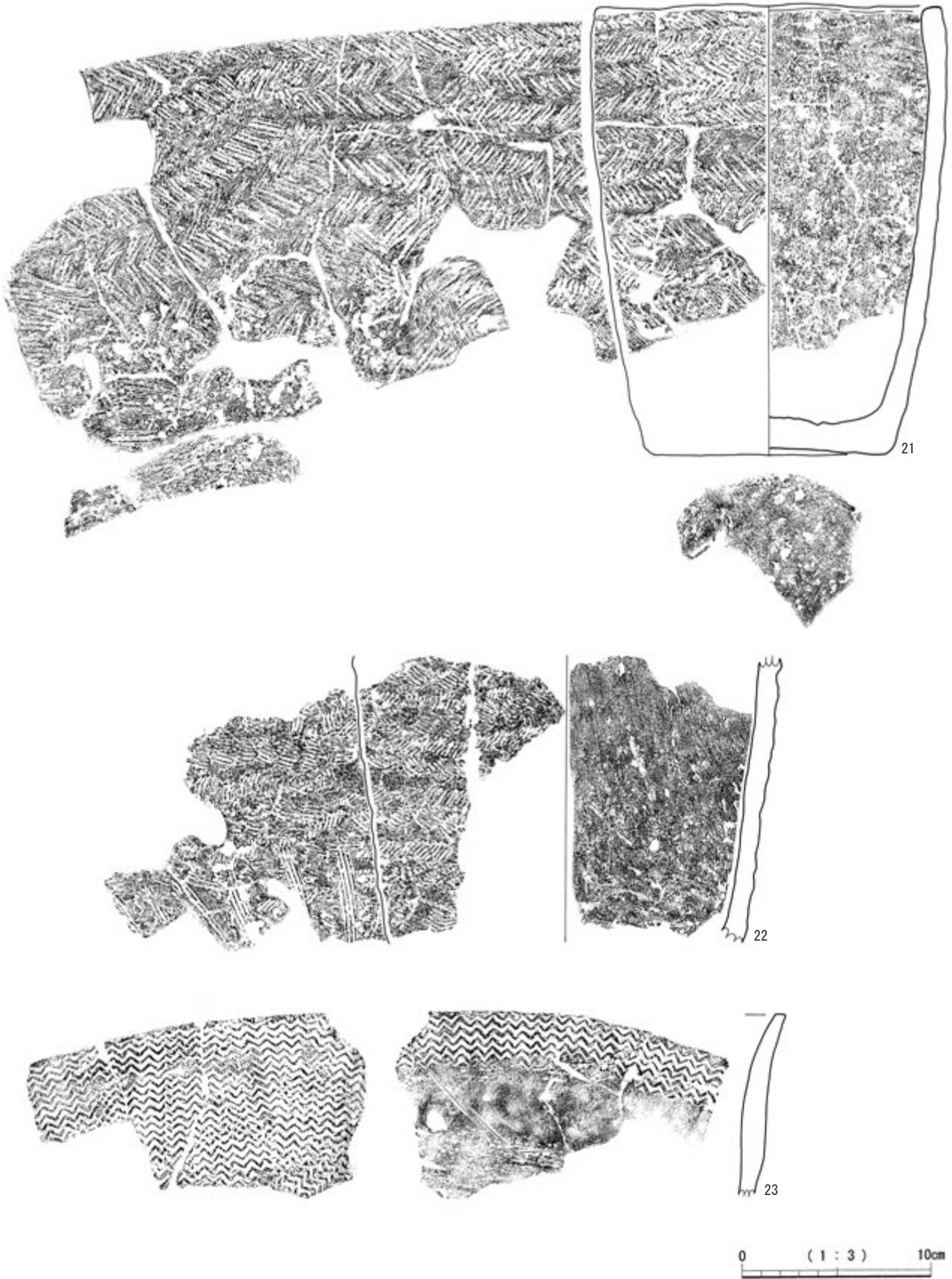
E-10区のVIII層で検出した。掘り込みは長軸116cm、短軸100cm、深さ25cmのほぼ円形に近い形状を呈し68個の礫と土器を内部に含む。構成礫のうち2個1組が接合した。掘り込みは西側を除き馬蹄形状の段を有する。埋

土は段を境に上下2つの層に分層できた。上部の埋土1は2mm大以下の黄色・白色パミスを多く含み、硬くしまりのある黒褐色土である。1～5mm大の炭化物も多く含む。下部の埋土2は黄色・白色パミスはあまり含まれず、硬くしまりのある暗黒褐色土である。1mm～2cm大の炭化物を多く含む。当初は土器が上層の埋土よりまとまって検出されたことから、土器集中遺構として取り上げた。その後、土器集中域の周囲を掘り下げたところ、掘り込みのプランや礫が検出されたため、土坑として取り扱った。床面付近から採取した炭化物の分析を行った結果、樹種はブナ科シイ属スダジイで、放射性炭素年代は暦年較正で9517-9407cal B P(確率95.4%)という結果がでている。

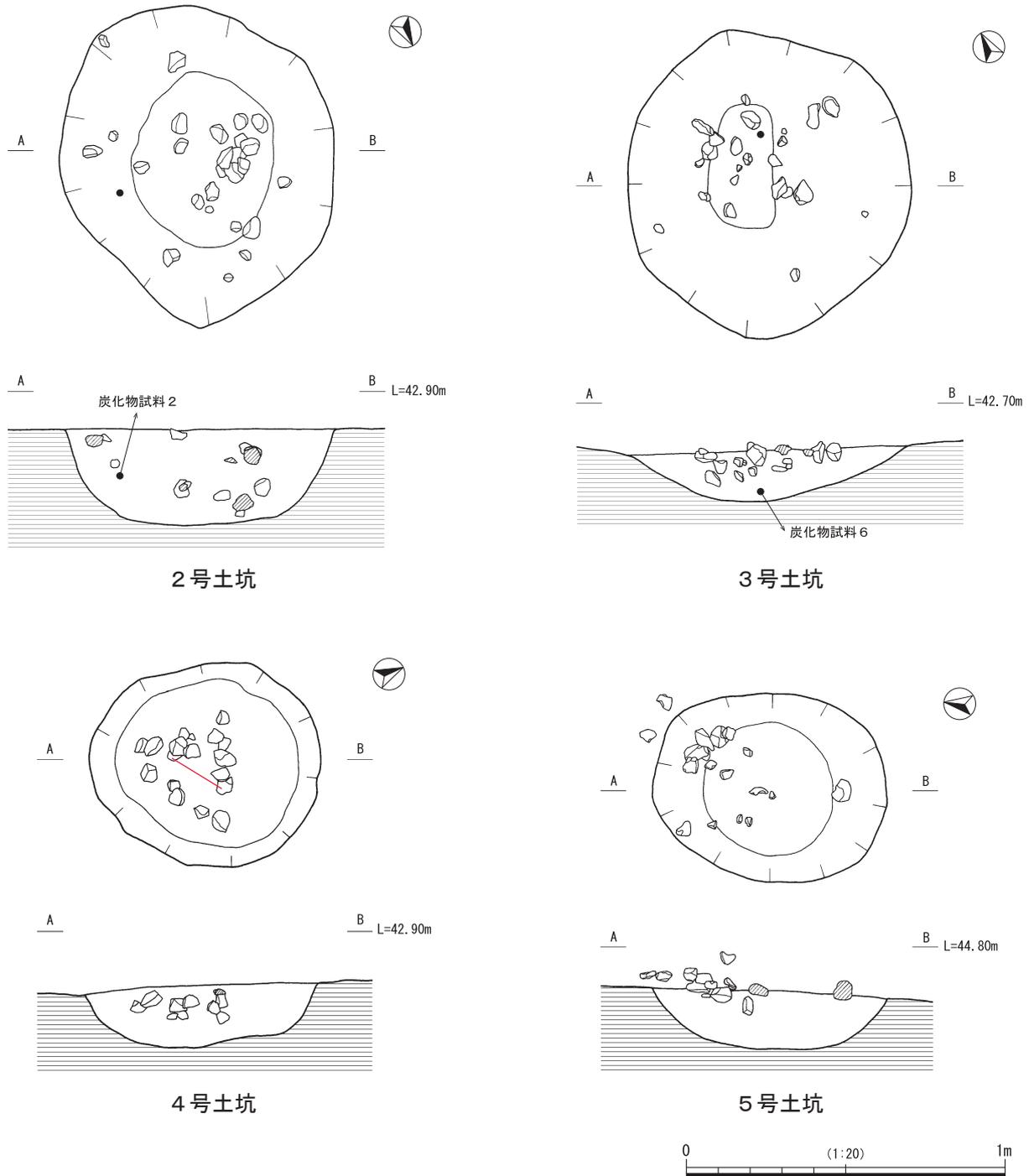
遺構内の上部の埋土1内より出土した土器を接合し、3点を図化した。21は桑ノ丸式土器の完形に復元できたもので、内傾する平坦な口唇部を有し、口縁部がわずかに内湾して、底面はやや上げ底で全体的にバケツ形の器形を呈する。口縁径18.4cm、器高24cm、底部径12.4cmを測る。外面はナデの後、ほぼ全面に短い貝殻条痕を羽状に施し、内面は工具ナデである。口縁部外面に煤が付着している。D-10区VIIb層出土の土器片1点、F-10区VIIb層出土の土器片3点と接合する。22も桑ノ丸式土器



第44図 1号土坑



第45图 1号土坑出土遺物



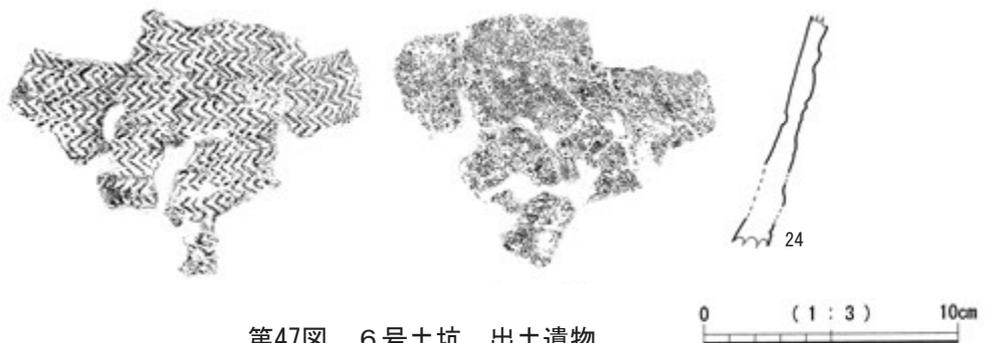
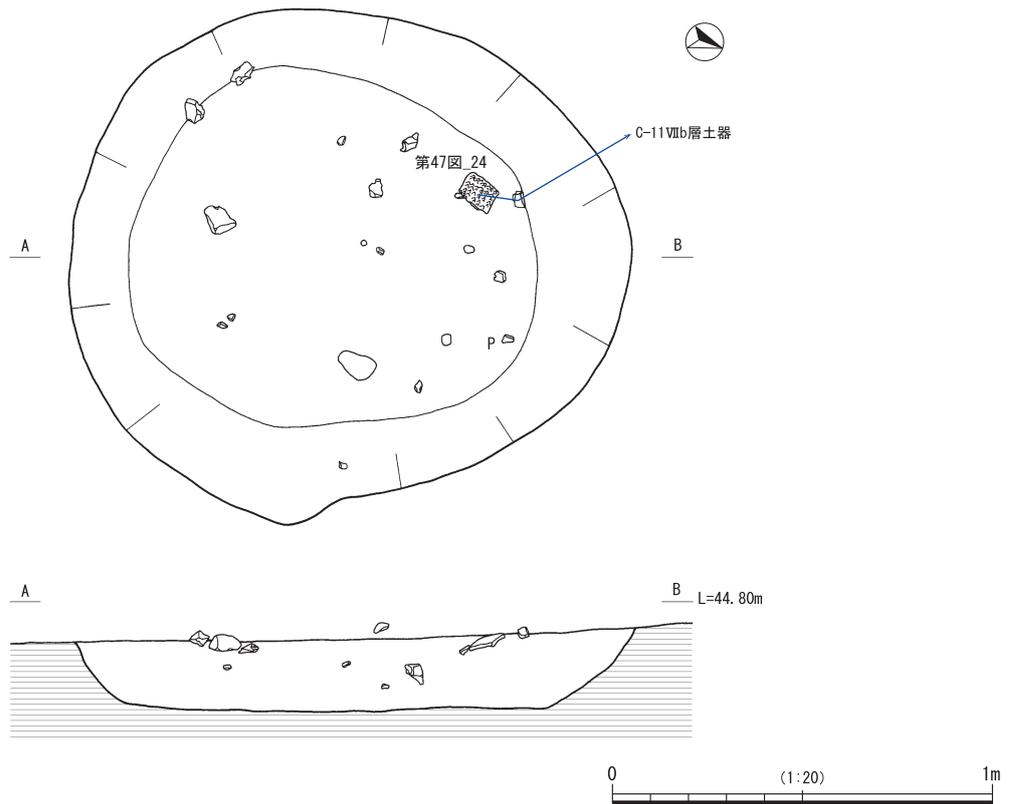
第46図 2・3・4・5号土坑

で、外面は21と同様の施文の胴部であるが、胴部下位に貝殻条痕が施される。内面は丁寧なナデ調整である。E-10区VIIa層出土の土器片3点、VIIb層出土の土器片2点と接合する。23は口縁部がわずかに外反する押型文土器の口縁部である。外面と内面口縁部に山形押型文を横位に施している。内面の施文帯の下はナデで調整を行い、更にその下部はケズリで調整を行っている。F-10区VIIb層出土の土器片3点と接合する。

#### 2号土坑（第46図）

F-6区、IX層で検出した。近くに3号・9号・17号土坑が位置する。長軸101cm・短軸85cm・深さ30cmを測る。埋土は黒褐色を呈する単層で、VIIb層相当と考えられる。埋土中で26点の礫と炭化物少量を確認した。

採取した炭化物の分析を行った結果、樹種はイチイ科カヤ属カヤで、放射性炭素年代は暦年較正で9623-9526cal B P（確率95.4%）という結果がでている。



第47図 6号土坑, 出土遺物

### 3号土坑 (第46図)

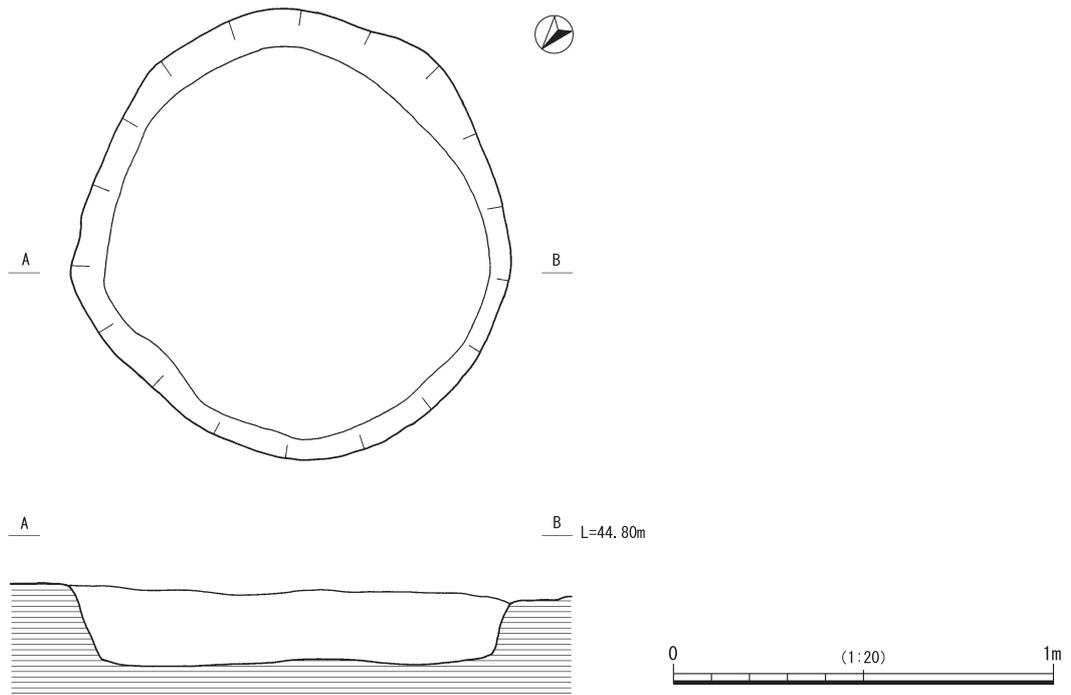
F-6区のIX層で、2号土坑から南へ5m程の距離で検出した。長軸95cm・短軸90cm・深さ18cmを測る。埋土は黒褐色土の単層で、黄色・白色パミスを多く含み、硬くしまりがある。VIIb層相当と考えられる。埋土中からは5~8cm程度の礫に小礫が入り込んでいる状態で総数23点の礫が出土した。また、炭化物が礫の直下や床面から確認された。礫の直下で採取した炭化物の分析を行った結果、樹種はイチイ科カヤ属カヤで、放射性炭素年代は暦年較正で9548-9495calBP (確率95.4%) という結果がでている。

### 4号土坑 (第46図)

E-7区, IX層で検出した。近接して遺構は検出されていない場所に位置する。長軸72cm・短軸65cm・深さ19cmを測る。構成礫1組が接合した。埋土はVIIb層相当と考えられる黒褐色土である。埋土中から礫18点と炭化物が出土した。

### 5号土坑 (第46図)

D-11区, VIIb層下面で白色パミスの集中を手掛かりに検出した。長軸73cm・短軸60cm・深さ17cmを測る。埋土はVIIb層相当の黒褐色土で、2mm以下の白色パミスを多く含み、2~4mmの黄色パミスもわずかに含む。



7号土坑

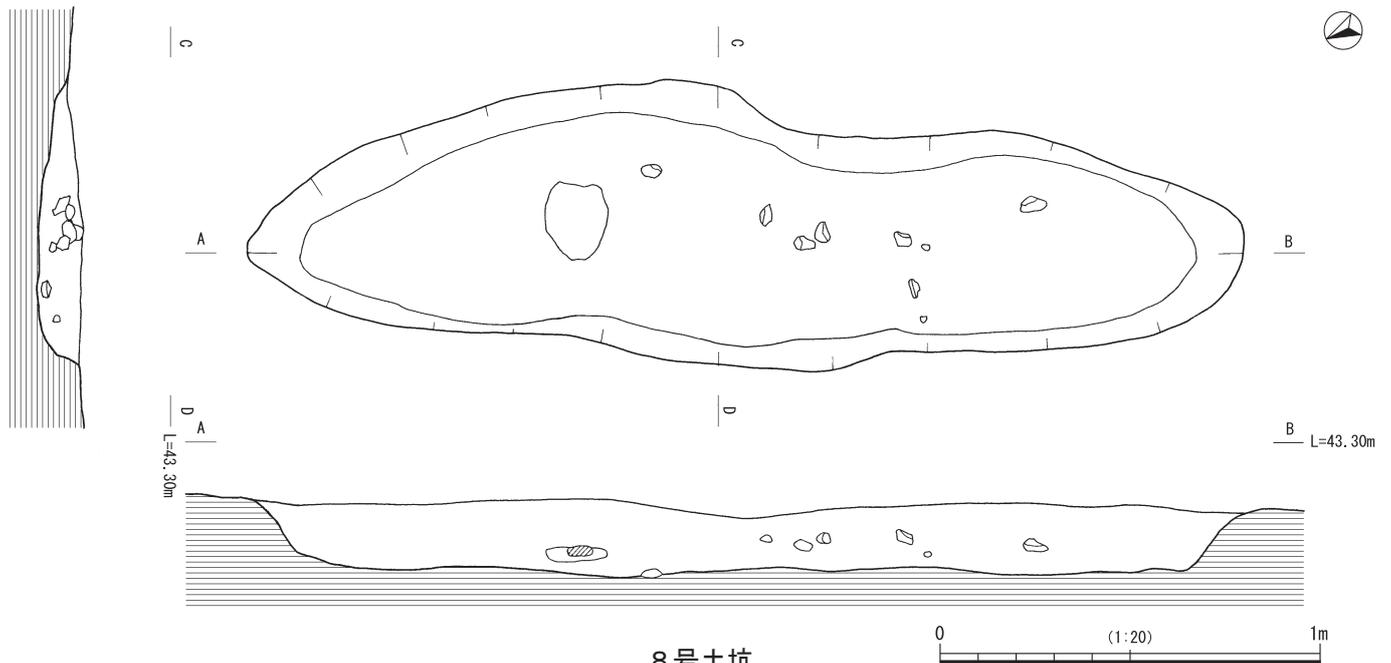
埋土の上位から礫18点が出土したが、その出土状況から掘り込み面は検出面より上位と考えられる。

6号土坑（第47図）

D-11区、IX層上面で検出した。本遺構を取り囲むように5号・7号・19号土坑が位置する。長軸147cm・短軸130cm・深さ20cmを測る。平面形の確認が困難でIX層上面となったが、本来の掘り込みは上位であったと考えられる。埋土はVIIb層相当と考えられる黒色土であるが、

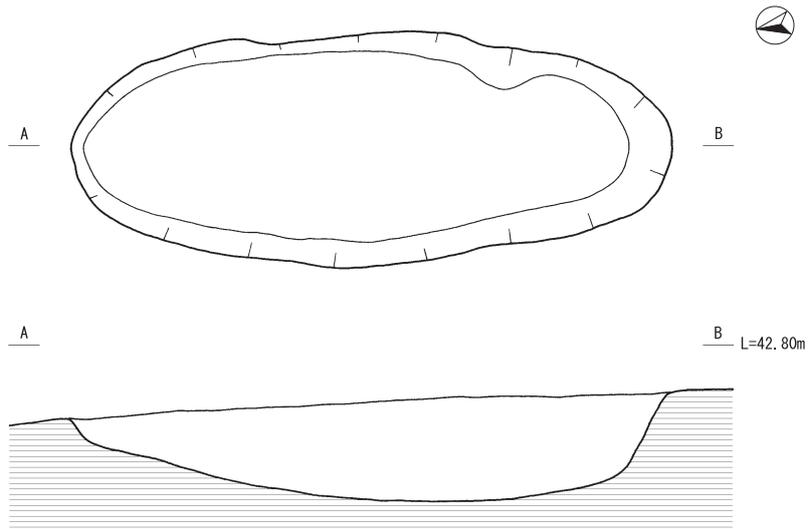
VIIb層より白色や黄色パミスを多く含む。

埋土中に浮遊した状態で土器4点と軽石を含む礫12点を確認された。土器4点は山形押型文土器で、内2点が接合したが、残りの2点も施文や胎土から同一個体の可能性が高いと考えられる。24は接合した2点で、さらに、C-11区VIIb層出土の土器2点とも接合した。これは外傾しながら直線的に立ち上がる胴部片で、密な山形文を縦位に施文する。底面境付近は、特に脆くなっている。内面調整はナデで、胎土には白色粒子や金雲母を含む。

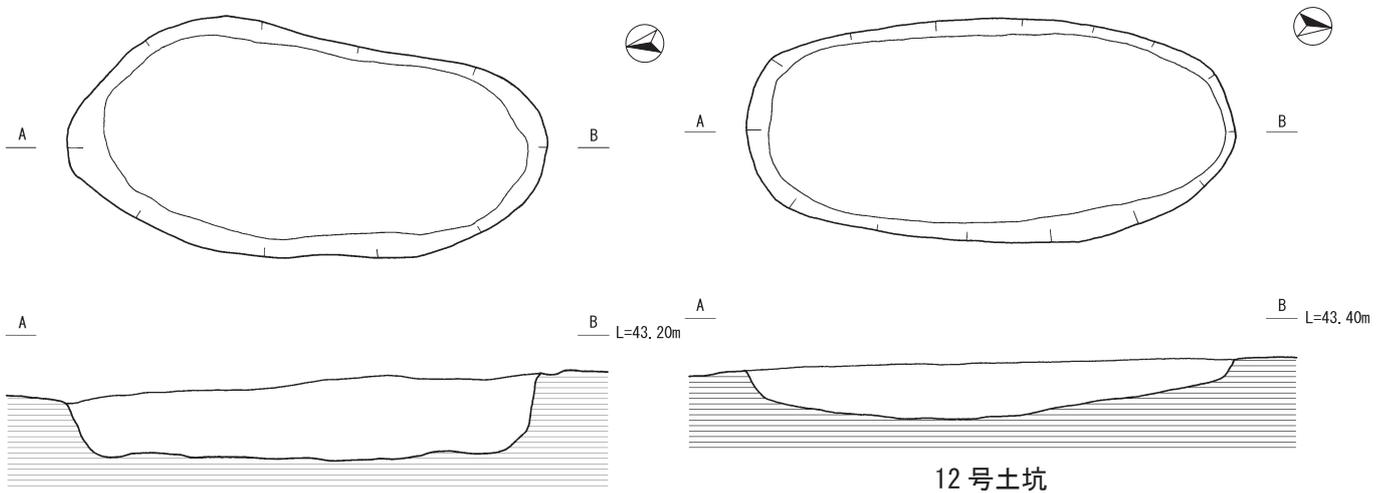


8号土坑

第48図 7・8号土坑

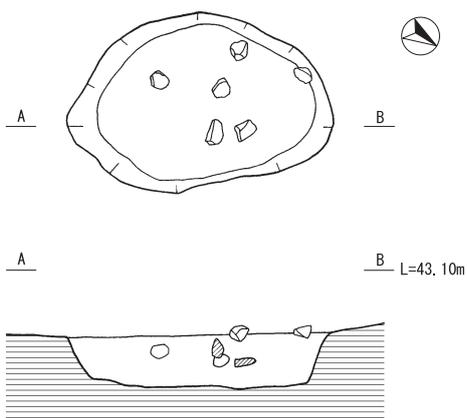


9号土坑

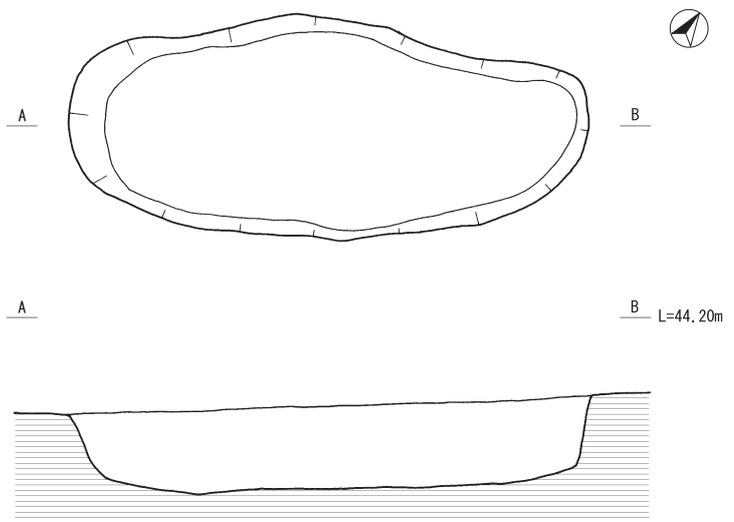


10号土坑

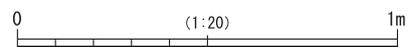
12号土坑



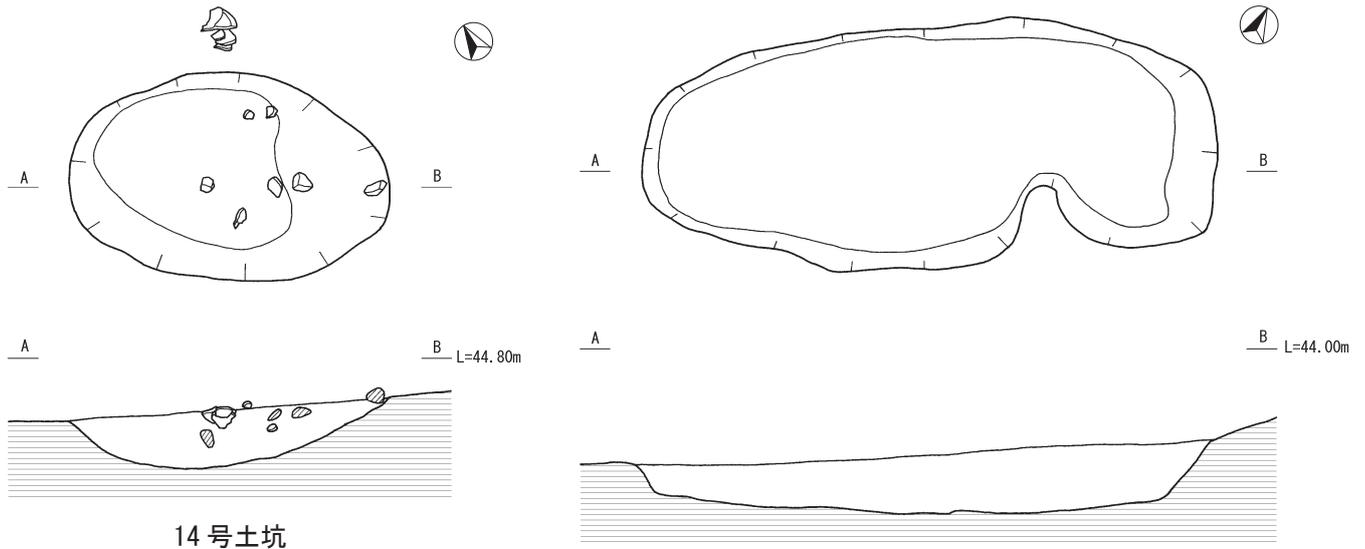
11号土坑



13号土坑

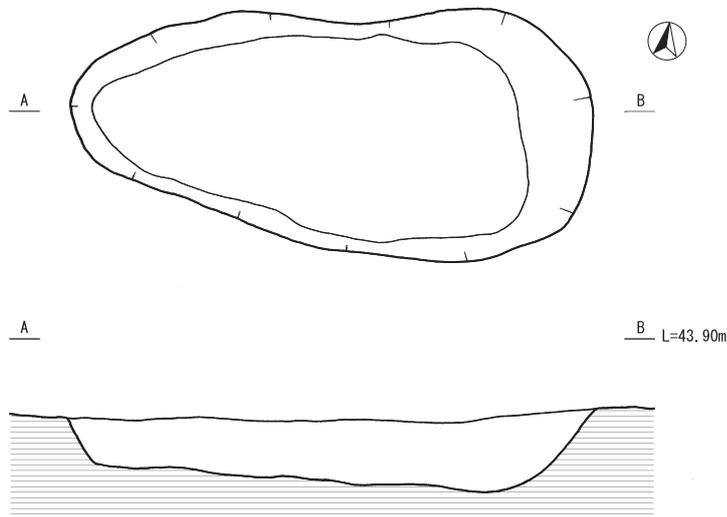


第49图 9·10·11·12·13号土坑



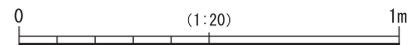
14号土坑

15号土坑



16号土坑

第50図 14・15・16号土坑



む。また、接合はしなかったが土器が1点出土したが小片のため図化し得なかった。

**7号土坑 (第48図)**

C・D-11・12区, IX層上面で検出した。長軸119cm・短軸115cm・深さは最も深い場所で20cmを測る。埋土はVIIb層相当と考えられる黒褐色土である。

埋土中から遺物は出土しなかったが、炭化物が確認された。

**【Ⅱ類】**

**8号土坑 (第48図)**

F・G-6区, IX層上面で検出した。長軸261cm・短

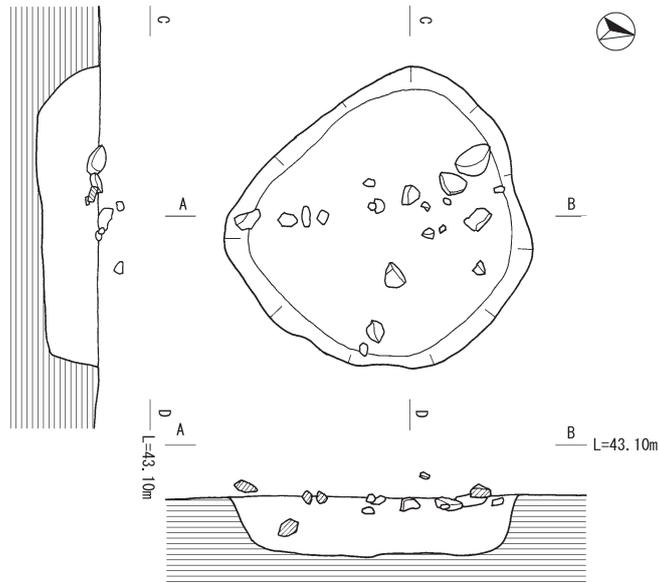
軸73cm・深さ20cmを測る。楕円形のプランではあるが、中央部付近で幾分かびれる。埋土はVIIb層相当と考えられる。埋土中から10点の礫と炭化物が出土した。

**9号土坑 (第49図)**

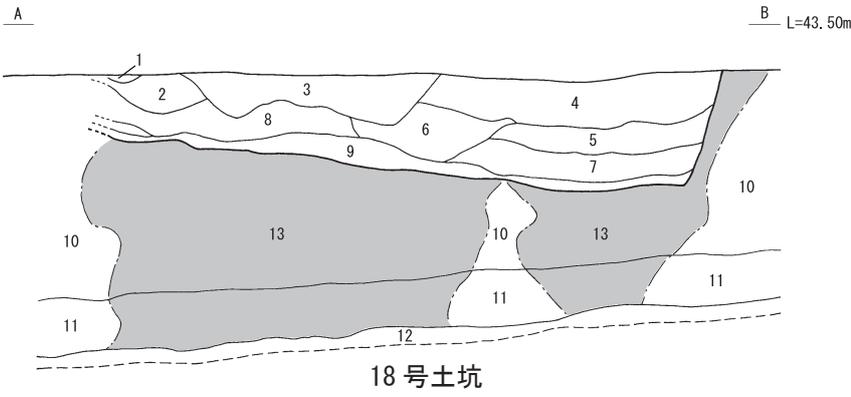
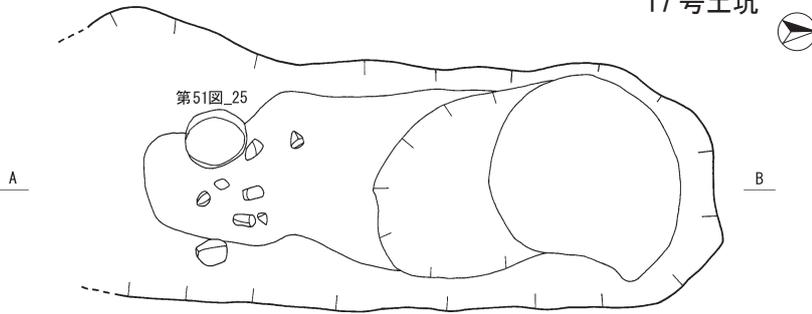
E・F-6区, IX層で6号土坑と近接して検出した。長軸158cm, 短軸61cm・深さ27cmを測る。床面は北側が浅く屈曲して立ち上がる皿状を呈するが、南側が深くなる。埋土は白色・黄色パミスを含む黒褐色土で、VIIb層相当と考えられる。埋土中に炭化物を確認した。

**10号土坑 (第49図)**

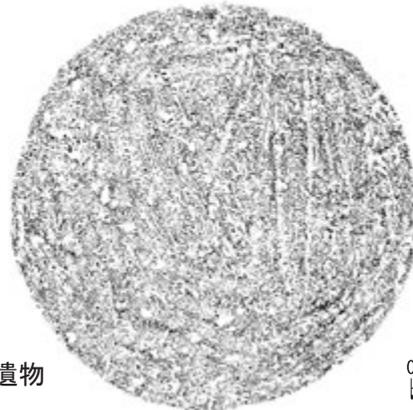
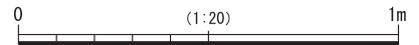
F-7区, IX層上面で検出した。長軸125cm・短軸62



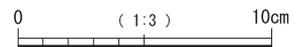
17号土坑



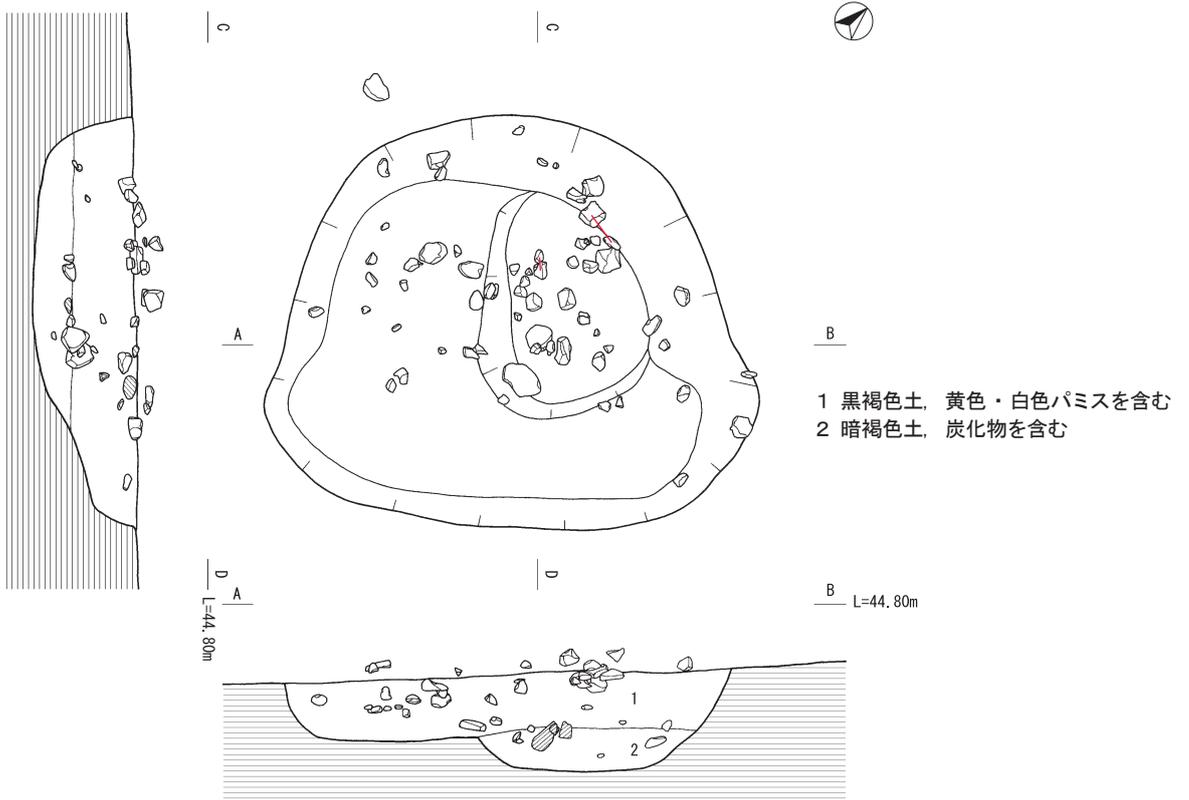
- 1 赤褐色粘質土
- 2 暗褐色粘質土
- 3 極暗褐色土
- 4 暗褐色土 (やや砂質)
- 5 褐色土 (わずかに砂質)
- 6 極暗褐色土 (わずかに砂質)
- 7 褐色土 (わずかに砂質)
- 8 明褐色土 (わずかに砂質)
- 9 暗褐色土
- 10 にぶい黄褐色土 (Ⅻ層)
- 11 にぶい黄褐色土 (軽石含むⅫ層)
- 12 褐色粘質土 (ピンク色のⅫ層)
- 13 11と12層土のシミ状変色域 (にぶい黄橙色)



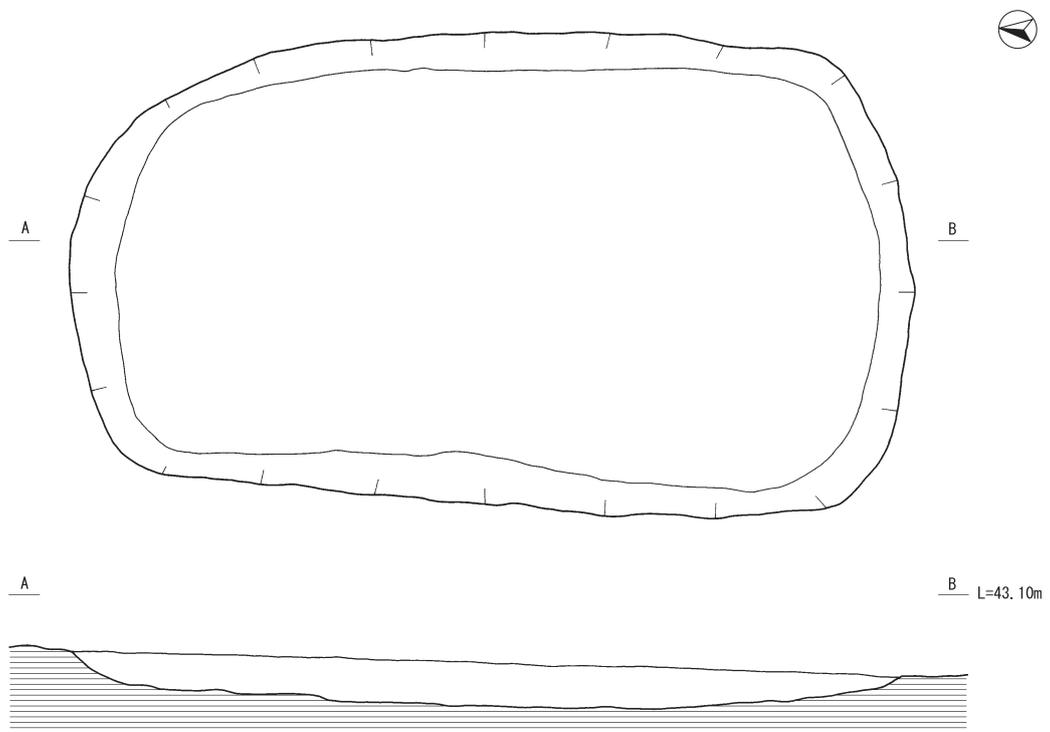
18号土坑出土遺物



第51図 17・18号土坑, 出土遺物



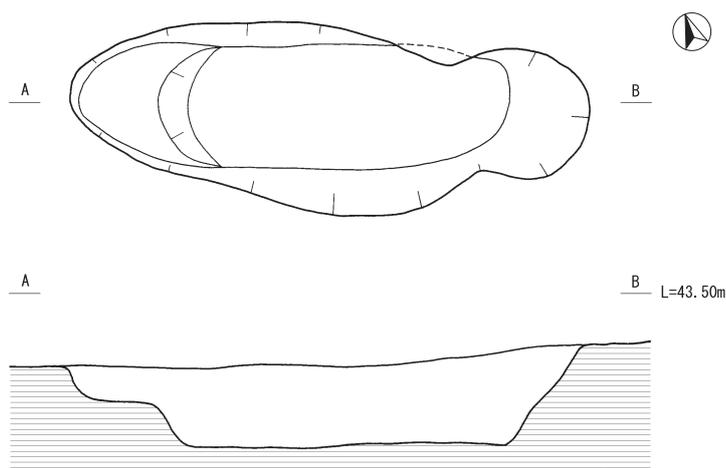
19号土坑



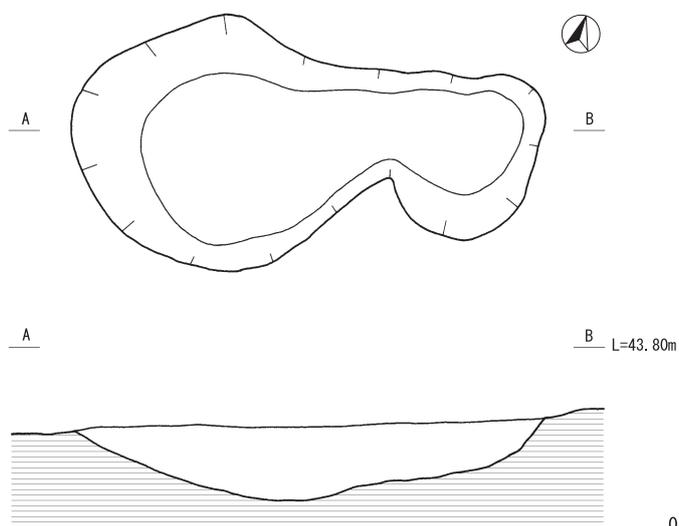
20号土坑



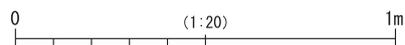
第52図 19・20号土坑



21号土坑



22号土坑



第53図 21・22号土坑

cm・深さ22cmを測る。埋土はVIIb層相当と考えられる。  
埋土中に炭化物を確認した。

#### 11号土坑（第49図）

E・F-7区, IX層で検出した。長軸70cm・短軸47cm・深さ15cmを測る。埋土は単層で, VIIb層相当と考えられる。埋土中に浮遊した状態で, 6点の礫が出土した。

#### 12号土坑（第49図）

E・F-8区, IX層で検出した。長軸129cm・短軸59cm・深さ14cmを測る。埋土はVIIb層相当と考えられる黒褐色土で, 黄色・白色パミスを多く含み, 硬くしまる。埋土から遺物等は, 確認されていない。

#### 13号土坑（第49図）

F-8区, IX層で11号土坑に近接して検出された。長軸137cm・短軸58cm・深さ21cmを測る。埋土はVIIb層相当と考えられる黒褐色土である。埋土中から遺物等は確認されていない。

#### 14号土坑（第50図）

E-11区, VIII層で検出した。長軸84cm・短軸54cm・深さ14cmを測る。埋土は1~2mm白色パミスが多く, また1~2mmの黄色パミスもわずかに含む。さらに, やや粘質でしまりがある黒色土である。埋土中から礫が7点, 周辺から4点出土した。

#### 15号土坑（第50図）

C-10区、IX層上面で検出した。楕円形で東側の一部の幅が狭くなっている。長軸150cm・短軸64cm・深さ16cmを測る。床面は東側がわずかに深い。埋土は単層で、VIIb層相当と考えられる。

埋土中から遺物等は確認されていない。

#### 16号土坑（第50図）

B-11区、IX層上面で検出した。長軸137cm・短軸66cm・深さ20cmを測る。埋土は黄色・白色パミスを含む黒褐色土であった。埋土中から遺物等は確認されていない。

#### 【皿類】

#### 17号土坑（第51図）

F-6区、VIII層の検出である。平面形は円形に近い不定形で、径80cm・深さ17cmを測る。埋土は白色・黄色パミスを含む黒褐色土で、しまりはあるが粘性は低い。構成礫の1点が16号土坑遺構と隣接する7号集石遺構の構成礫と接合した。

埋土中から21点の礫が出土した。

#### 18号土坑（第51図）

E・F-9区で検出した。周辺には集石が多く位置する。本来の掘り込み面は上位であったが、遺構のプランを十分認識しないまま掘り進めた結果、XI層の検出となった。当初、連穴土坑を想定して検出作業を進めたが、ブリッジ及びその痕跡を確認できなかったことから、連穴土坑の可能性のある土坑として取り扱うこととした。なお、埋土の堆積状況から2基の土坑が斬り合っている可能性もある。土坑の南端は十分に検出できなかったことから長軸は不明である。短軸75cm・深さ30cmを測る。遺構を実測後、断ち割ってみたら、床面より下にシミ状のにぶい黄橙色の（図中の13）変色域が観察された。このシミが何故できたかは不明である。埋土中から1つの土器の底部片、礫7点が出土した。25は加栗山式土器の底部であると考えられる。円筒形で底径16.2cmを測る。大型の土器であると思われる、外面に斜位の刻みが施される。調整は内外面ともナデであるが、かなり風化している。胎土には小礫を多く含む。

#### 19号土坑（第52図）

D-11区、VIII層を幾分掘り下げた段階で検出した。長軸130cm・短軸106cm・深さ25cmを測る。床面の北西側の一部は2段掘りとなる。埋土は2つに分層でき、上層は黄色パミスを多く含む黒褐色土、下層は暗黒褐色土となる。

埋土中から礫69点と炭化物が出土した。構成礫2組が接合した。

#### 20号土坑（第52図）

C-9区、IX層で他の土坑とは距離をもって検出した。形状は隅丸方形を呈する。長軸220cm・短軸126cm・深さ12cmを測る。埋土はVIIb層相当と考えられる。

埋土中から炭化物が確認された。

#### 21号土坑（第53図）

B-10区、IX層で検出した。長軸136cm・短軸50cm・深さ24cmを測る。断面は床面から屈曲して立ち上がる皿状ではあるが、一部西側は2段掘りとなる。埋土は白色・黄色パミスを含む黒褐色の単層でVIIb層相当と考えられる。また、粘性は低いがしまりがある。

埋土中から遺物等の出土はなかった。

#### 22号土坑（第53図）

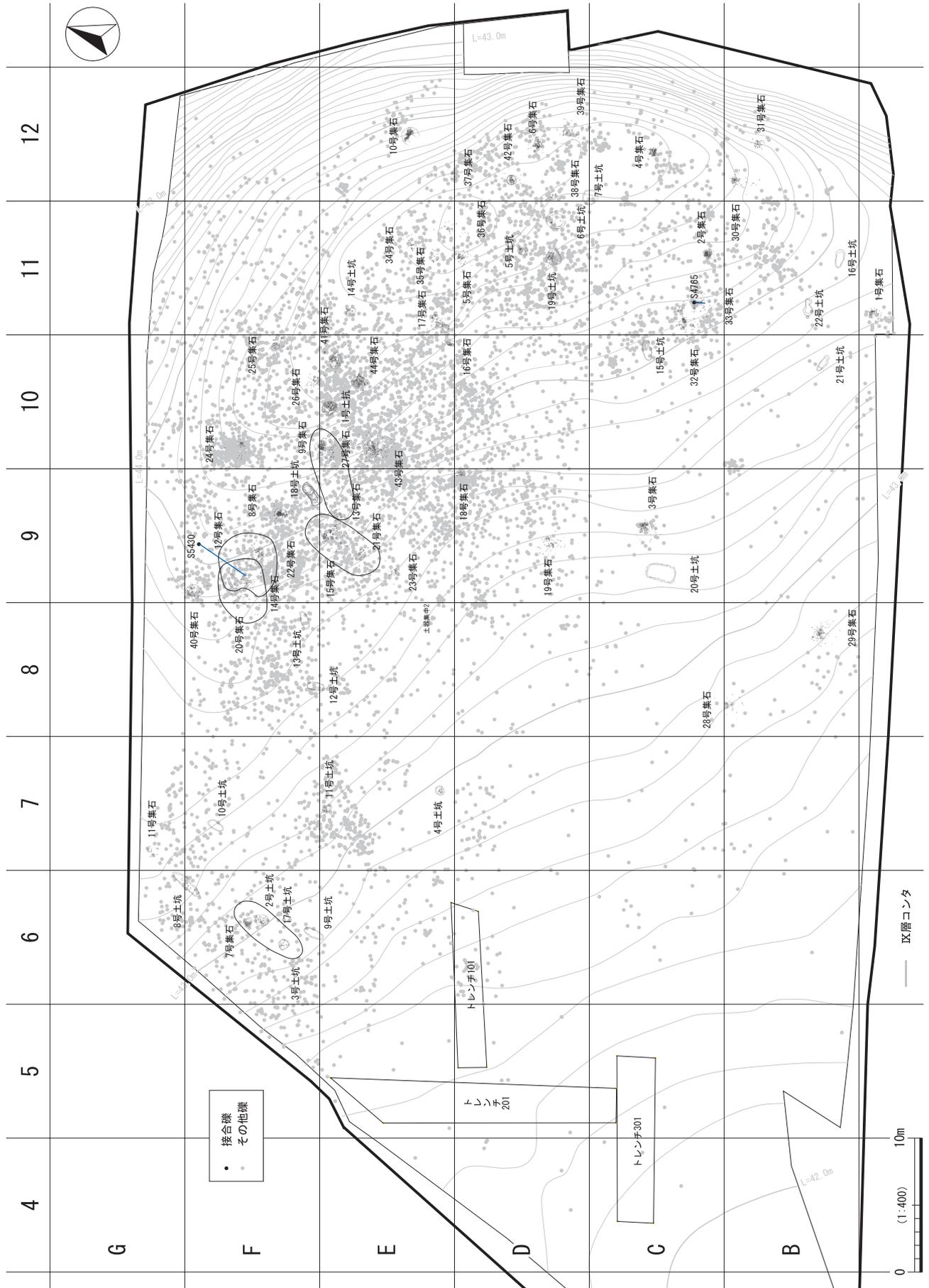
B-11区、IX層上面で検出した。東側に15号土坑、西側に20号土坑が位置する。平面形は不定形で長軸123cm・短軸68cm・深さ18cmを測る。埋土は黒褐色を呈し、VIIb層相当と考えられる。また、黄色・白色パミスを含む。埋土中から遺物は出土していない。

#### 4 礫の接合（第54～56図）

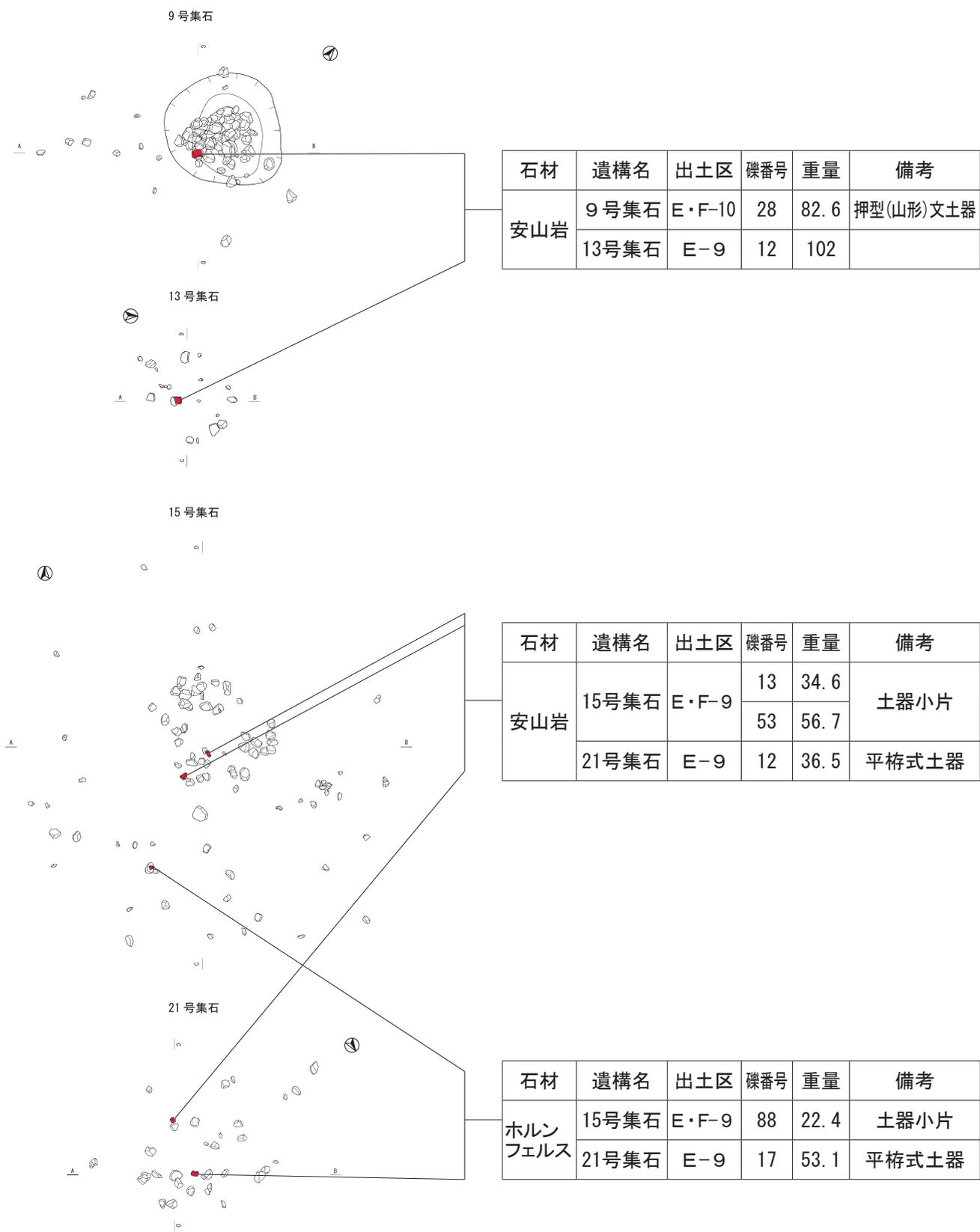
VII～IX層で検出した遺構内と包含層の礫の接合作業を行った結果、同一遺構内で接合する資料88組、異なる遺構間で接合する資料15個7組、遺構と包含層の礫の接合する資料4個2組が確認できた。これらは第54図に示してある。その中から異なる遺構間で接合し、遺構の構成について検討可能と思われる資料を7組を第55図と56図に示した。（各遺構の実際の位置は第54図を参照）

本遺跡の集石と土坑は主に北西部（E～G-6・7区）と北部（D～F-8～11区）と東部（A～E-10～12区）のエリアに大別できる。このうち遺構間で礫の接合が見られたのは北西部エリアで1組、北部エリアで4組、東部エリアで1組であった。

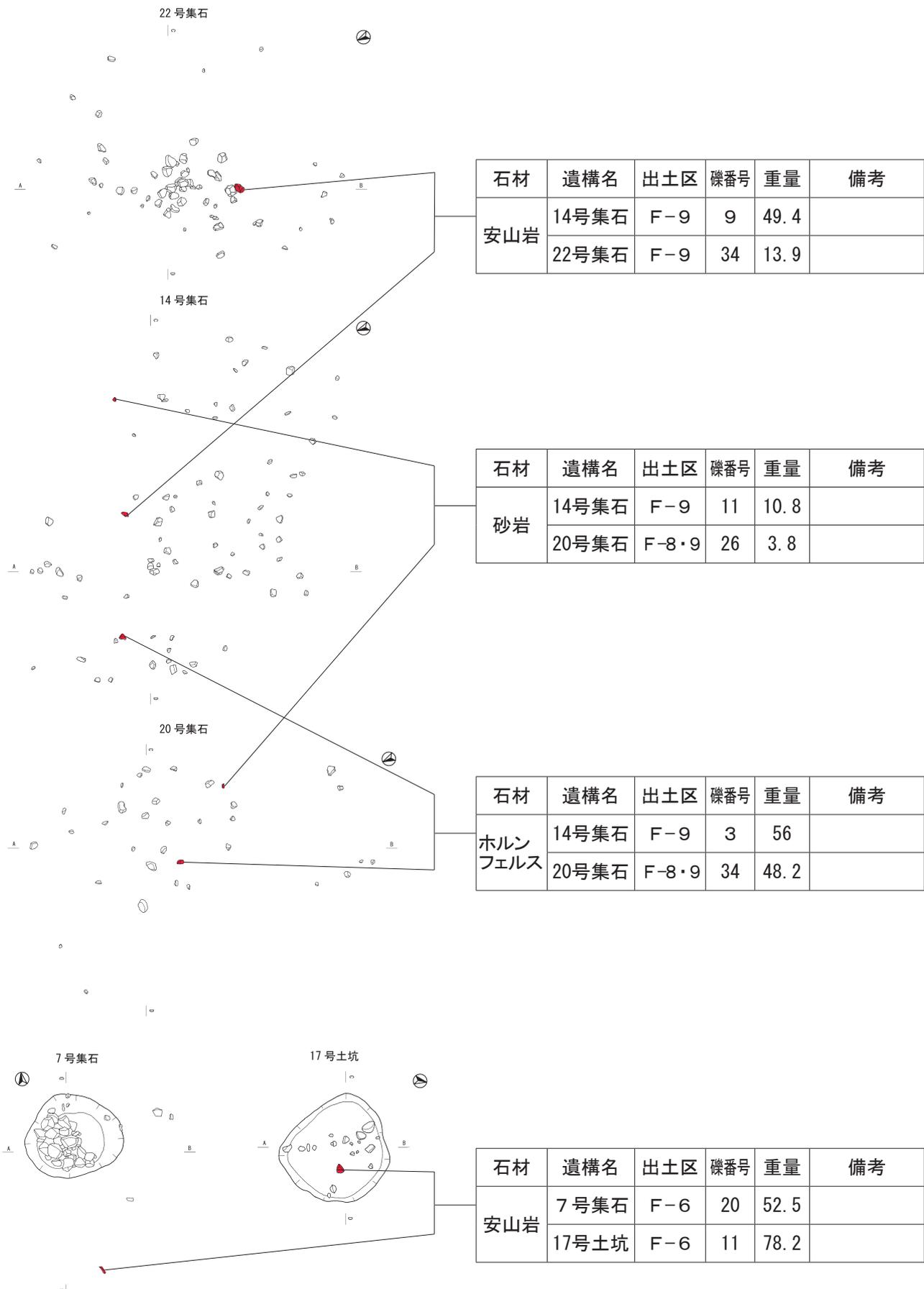
これらのエリアは、7・8類土器の出土地点と概ね一致する。なお、前述した遺構内で接合する資料88組は29基の集石内で接合したものであるが、これらは他の場所から運び込んだのか、単に被熱破砕しただけなのかは判断できなかった。



第54図 遺構・包含層の隣接合



第55図 遺構間の磔接合 1



第56図 遺構間の磔接合 2

第6表 集石一覧表

挿図 番号	番号	分類	出土区	検出面	大きさ (cm)		掘り 込み	埋土	遺物数	構成 礫数	出土遺物	石材別個数					備 考
					長軸	短軸						安山岩	ホルン フェルス	砂岩	凝灰岩	その他	
16	1	I a	A-11	VIIa	径100		×	—	113	113		81	10	22			
	2	I a	C-11	VIIb	105	87	×	—	130	129	土器（不明）	75	16	37		1	
	3	I a	C-9	VIIb	219	171	×	—	151	150	土器（不明）	101	13	35	1		
17	4	I a	C-12	VIIa	138	100	×	—	128	128		83	8	36	1		
	5	I a	D-11	VIIb	154	125	×	—	66	66		50	3	12		1	
18	6	I a	D-12	VIIb	径140		×	—	133	133		75	14	44			
	7	I b	F-6	VIIb	135	100	○	黒褐色土	42	44		37	2	5			16号土坑の礫と接合
19	8	I b	F-9	VIIb	219	198	○	黒褐色土	107	106	押型文（楕円）	70	5	31			
20	9	I b	E・F-10	VIIb	185	126	○	黒褐色土	81	79	押型文（山形）・ 土器（不明）	76	1	2			13号集石の礫と接合
	10	I b	E-12	VIII	115	55	○	黒色土	183	183		82	28	73			出土炭化物 科学分析
21	11	II a	G-7	VIIb	径85		×	—	16	16		15		1			
	12	II a	F-9	VIIb	径22		×	—	5	5		1	1	3			
	13	II a	E-9	VIIb	78	50	×	—	20	20		17			3		9号集石の礫と接合
22	14	II a	F-9	VIIb	310	223	×	—	81	81		66	7	7	1		20号集石の礫と接合
23	15	II a	E・F-9	VIIb	300	249	×	—	92	91	土器小片	68	11	12			21号集石の礫と接合
24	16	II a	E-10	VIIb	98	35	×	—	26	25	桑ノ丸式	13	2	10			
	17	II a	E-10・11	VIIb	220	194	×	—	111	102	塞ノ神式土器底部	38	16	48			
25	18	II a	D・E-9・10	VIIb	107	66	×	—	55	54	押型文（楕円）	31	6	14		2	
	19	II a	D-9	VIIb	223	149	×	—	90	89	押型文（楕円）	54	16	19			
26	20	II a	F-8・9	VIIb	250	157	×	—	34	34		21	3	10			14号集石の礫と接合
27	21	II a	E-9	VIIb	176	100	×	—	35	33	平袴式土器	30	1	2			15号集石の礫と接合
28	22	II a	F-9	VIIb	224	158	×	—	60	60		45	12	3			
	23	II a	E-9	VIIb	189	135	×	—	28	27		16	7	4			
29	24	II a	F-10	VIII	230	200	×	—	54	52	桑ノ丸式・ 押型文（楕円）	38	8	6			
30	25	II a	F-10・11	VIII	198	170	×	—	63	62	土器（不明）	37	20	5			
31	26	II a	E・F-10	VIIb	162	128	×	—	47	44	土器（条痕・不明）	40	4				
	27	II a	E-10	VIII	220	88	×	—	32	30	押型文（楕円）	27		3			
32	28	II a	B・C-8	VIIb	238	161	×	—	35	28	桑ノ丸式・土器（不明）	19	1	7		1	
33	29	II a	B-8	VIIb	222	182	×	—	105	104	押型文（楕円）	61	12	31			
34	30	II a	B-12	VIIa	228	192	×	—	84	69	桑ノ丸式・ 押型文（楕円）	44	2	23			
35	31	II a	B-12	VIIa	径103		×	—	60	59	土器（不明）	41	7	11			
	32	II a	C-10・11	VIIb	260	178	×	—	101	100	押型文（楕円）	17	11	72			
36	33	II a	C-11	VIIb	236	188	×	—	81	80	土器（加栗山式）	20	21	39			包含層の礫と接合
	34	II a	E-11	VIIb	138	70	×	—	38	36	土器（条痕、不明）	1	11	23		1	
	35	II a	E-11	VIIb	115	75	×	—	19	19		14	2	3			
37	36	II a	D・E-11	VIII	258	114	×	—	30	30		25		5			
	37	II a	D・E-12	VIII	径60		×	—	14	14		8	1	5			
	38	II a	D-11・12	VIII	105	46	×	—	18	18		10	6	2			
38	39	II a	D-12	VIIb	径210		×	—	46	36	下剥峯式	10	3	23			
39	40	II b	F・G-8・9	VIIb	225	120	○	—	80	80		55	5	19	1		
40	41	II b	E-10	VIII	265	210	○	黒褐色土	104	102	石鏃	96	5	1			出土炭化物 科学分析
41	42	II b	D-12	VIIb	218	160	○	黒褐色土	43	42	土器（不明）	35	1	6			
42	43	III	E-10	VIIb	径320		○	黒褐色土	236	231	押型文（楕円）・ 桑ノ丸式	62	146	23			
43	44	III	E-10	VIII	165	94	○	黒褐色土	109	105	土器底部（不明）	98	3	4			出土炭化物 科学分析

第7表 土坑一覽表

挿図番号	番号	分類	出土区	検出面	大きさ (cm)			遺物	備考
					長軸	短軸	深さ		
44	1	I	E-10	VIII	116	100	25	桑ノ丸式土器・押型文 (山形)	出土炭化物, 科学分析
46	2	I	F-6	IX	101	85	30	礫 26点, 炭化物	出土炭化物, 科学分析
	3	I	F-6	IX	95	90	18	炭化物, 礫 23点	出土炭化物, 科学分析
	4	I	E-7	IX	72	65	19	礫 18点, 炭化物	
	5	I	D-11	VIIb	73	60	17	礫 18点	
47	6	I	D-11	IX	147	130	20	礫 12点, 押型文 4点 (山形)	
48	7	I	C・D-11・12	IX	119	115	16		
	8	II	F・G-6	IX	261	73	20	礫 10点	
49	9	II	E・F-6	IX	158	61	27	埋土中に炭化物	
	10	II	F-7	IX	125	62	22	埋土中に炭化物	
	11	II	E・F-7	IX	70	47	15	礫 6点	
	12	II	E・F-8	IX	129	59	14		
	13	II	F-8	IX	137	58	21		
50	14	II	E-11	VIII	84	54	14	礫 11点 (埋土中 7点, 周辺 4点)	
	15	II	C-10	IX	150	64	16		
	16	II	B-11	IX	137	66	20		
51	17	III	F-6	VIII	80	80	17	礫 21点	7号集石の礫と接合
	18	III	E・F-9	IX	(185)	75	30	礫 7点, 土器 (円筒底部) 1点	
52	19	III	D-11	VIII	130	108	25	礫 69点, 炭化物	
	20	III	C-9	IX	220	126	12	埋土中に炭化物	
53	21	III	B-10	IX	136	50	24		
	22	III	B-11	IX	123	68	18		

第8表 遺構内土器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	出土区	検出層	分類	器種	施文・調整		色調		胎土						備考	
							外面	内面	外面	内面	石英	長石	輝石	角閃石	雲母	礫		その他
24	1	17号集石	E-10・11	VIIb	11b	深鉢	ナデ, 網目燃糸文, 沈線	ナデ	明黄褐	明黄褐	○		○	○				
27	2	21号集石	E-9	VIIb	10	深鉢	ナデ, 縄文	ケズリ, 指ナデ	にぶい黄橙	灰黄橙	○		○	○		○		
29	3	24号集石	F-10	VIII	7	深鉢	貝殻条痕文	ナデ	にぶい褐	灰黄褐	○	○			○	○		
31	4	27号集石	E-10	VIII	8a	深鉢	楕円押型文	ケズリ	明赤褐	黒褐	○	○	○		○	○		
34	5	30号集石	B-12	VIIa	7	深鉢	貝殻条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○		
	6				深鉢	貝殻条痕文	ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○			○			
	7				深鉢	貝殻条痕文	ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○			○			
	8				深鉢	楕円押型文	楕円押型文	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				○			
	9				深鉢	ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		
35	10	32号集石	C-11	VIIb	8a	深鉢	楕円押型文	楕円押型文	明黄褐	浅黄	○		○	○		○	○	
38	11	39号集石	D-12	VIIb	1	深鉢	貝殻条痕文	ケズリ	にぶい黄橙	黒褐		○				○	○	角筒
	12				深鉢	ナデ, 連続刺突文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい褐	○	○	○			○			
	13				深鉢	貝殻刺突文, ナデ	ナデ	明黄褐	明黄褐	○		○			○	○		
	14				深鉢	ナデ, 貝殻刺突文	ミガキ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○				○			
	15				深鉢	貝殻刺突文	ナデ	灰黄	灰黄	○	○	○			○			
	16				深鉢	貝殻刺突文, ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○			○	○		
43	18	43号集石	E-10	VIIb	7	深鉢	貝殻条痕文	ミガキ	にぶい赤褐	黒褐	○				○		口縁部煤付着	
	19	44号集石	E-10	VIII	12	深鉢	ナデ	剥落	暗赤褐	明赤褐	○	○			○	○		
45	21	1号土坑	E-10	VIII	8b	深鉢	ナデ, 貝殻条痕文	工具ナデ	にぶい黄	黄褐	○	○			○	○		
	22		E-10	VIII	7	深鉢	ナデのち羽状文	ナデ	にぶい橙	黒褐	○		○	○		○	○	
	23		E-10	VIII	7	深鉢	山形押型文	山形押型文, ケズリ	にぶい赤褐	にぶい赤褐	○					○		
47	24	6号土坑	D-11	IX上面	8b	深鉢	山形押型文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○				○			
51	25	18号土坑	E・F-9	XI	12	深鉢	キザミ	ナデ	明赤褐	にぶい褐	○				○	○	円筒	

第9表 遺構内石器観察表

挿図番号	掲載番号	遺構	出土区	器種	石材	計測値				備考
						最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	
40	17	41号集石	E-10	打製石鏃	チャート	2.49	1.68	0.28	1.20	

## 5 遺物

### (1) 土器

縄文時代早期の土器がⅦ層及びⅧ層から出土している。それぞれの土器の器形、施文方、調整の特徴からこれらを大別して11類に分類し、さらに土器によってはさらに細分した。

#### I類土器（第58図26～29）

角筒形で波状口縁を呈するものである。口唇部に浅い刻み目があり口縁部は最上部に縦位の短い貝殻刺突文を施し、その下に貝殻刺突文を横位にめぐらせる。胴部は横位または斜位の貝殻条痕文の上に縦位の流水文や貝殻刺突文を有する。内面はケズリで調整しているものが多い。29は底部である。胎土にパミスを多く含む。志風頭式土器に該当する。

#### II類土器（第58図30, 31）

円筒形で口唇部に浅い刻み目があり、貝殻条痕文の上に貝殻刺突文を重ねる二重施文である。胴部上位には楔形貼付文を有する。内面は工具により削られていて薄手である。31は底部で、外面に縦位の沈線が密に施される。加栗山式土器に該当する。

#### III類土器（第58図32～36）

円筒形で口唇部に浅い刻み目があり、外面は貝殻による条痕文を横位または斜位に施し、口縁部に楔形貼付文を有する。底部は縦位の沈線が密に施される。32はIII類の中で唯一完形に復元できたもので、III類土器の全容を窺えるものである。底部から口縁部に向けてわずかに外反しながら立ち上がる形状である。口縁径18.6cm、底部径11.2cm、器高26cmで、外面は、口唇部に刻み目があり、口縁部上位に貝殻腹縁による横位の貝殻刺突文を2条施し、その下位に楔形突起を1条施す。楔形突起間に縦位の貝殻刺突文を充填している。胴部はほぼ全面に貝殻条痕が施される。内面はナゲ調整である。33の内面には工具によるケズリ痕が観察される。ケズリの方向は一定していない。33, 34, 35の楔形貼付文は二分割されている。これらは加栗山式土器から吉田式土器期において宮崎県南部から大隅半島で見られる札ノ元遺跡出土のⅦ類土器を想定している。

#### IV類土器（第59図37, 38）

円筒形で口唇部に刻み目があり、口縁部付近に横位の貝殻刺突文と楔形突起を2条有する。胴部には地文としての条痕文が無く、縦位の貝殻刺突文のみを密接して施すものである。内面には工具によるケズリ痕が観察される。37は口径22cmで、底部よりほぼ直線的に立ち上がり、口縁部がわずかに外反する形状を呈する。38は口縁部がレモン形である可能性が考えられる。加栗山式土器から

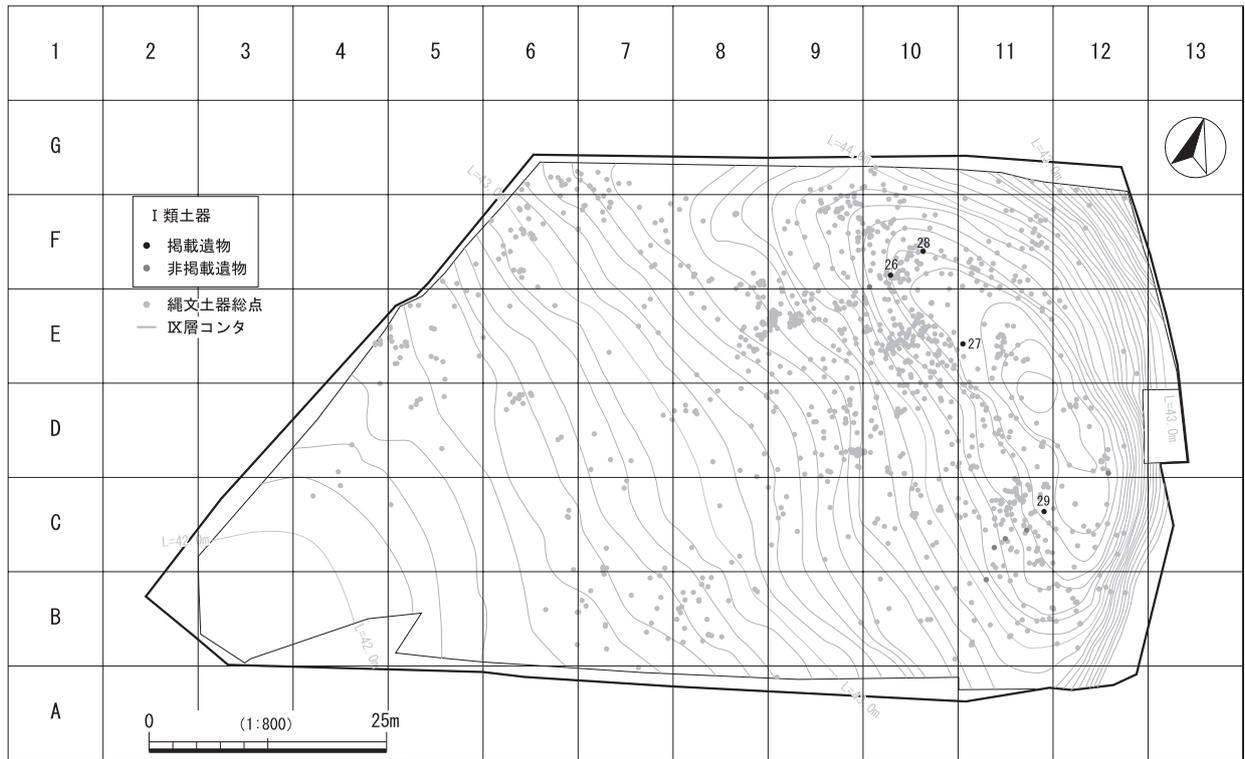
吉田式土器に移行する段階にみられる小牧3Aタイプに該当する。

#### V類土器（第59図39～41）

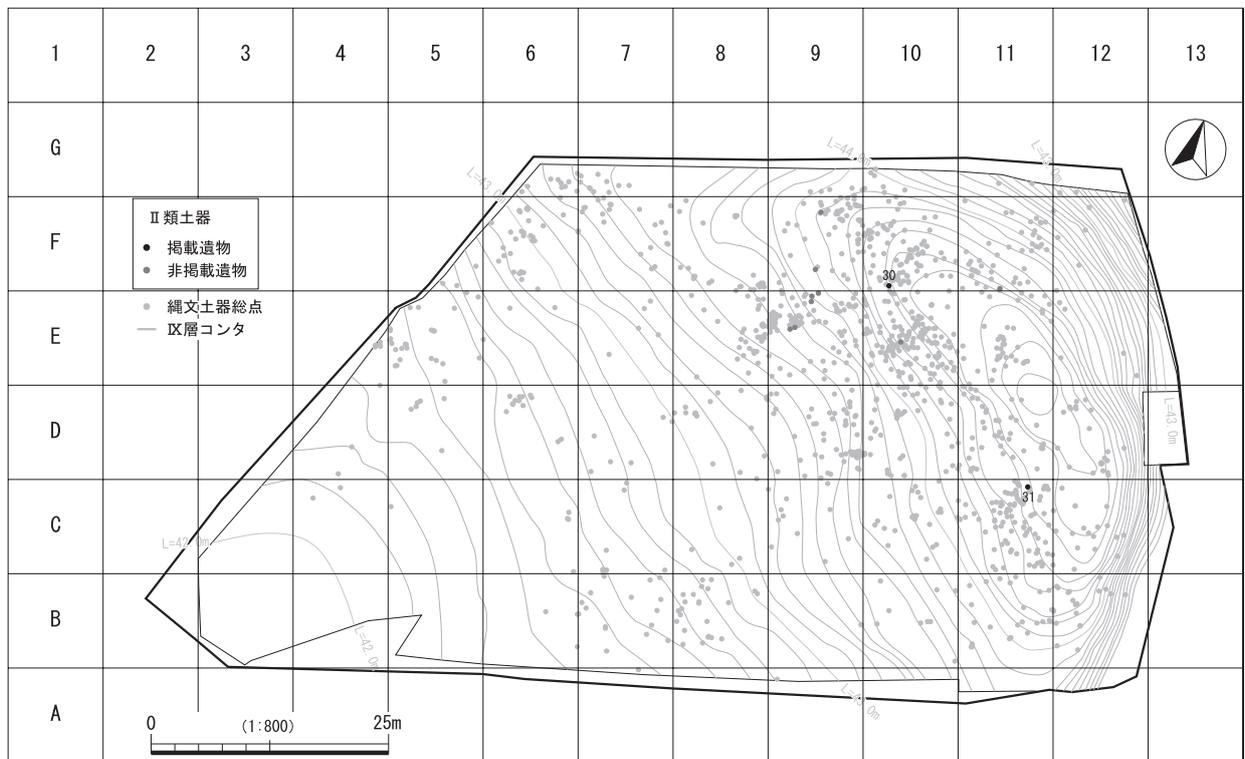
平坦な口唇部には刻み目がある。外面は貝殻による太目の条痕文を横位に施す地文があり、口縁部には楕状の工具等で縦位に刺突文を施す。内面はケズリによる器面調整が見られる。39は外反せずにはほぼ垂直に立ち上がり、筒形を呈するものと考えられる。40は底部付近である。倉園B式土器に該当する。これらは同一個体である可能性も考えられる。

#### VI類土器（第62図42～59）

口唇部の平坦面は、ミガキ状の丁寧なナゲを行っている。口縁部は直行ないしわずかに内湾するものが多く、口縁部や同部外面に瘤状突起を有するものも見られる。下刺峯式土器に該当する。施文により2つに分類した。VIa類（42～51）は胴部外面に横位または斜位に連続で刺突文を施すものである。42は内湾しつつも大きく外へ傾いている。口縁部には横方向に連続で刺突文を数条巡らし、胴部は斜位と横位に刺突文を施し、条痕文も施されている。44, 48, 49は波状口縁である。46は口縁部内面に煤が付着している。47は口縁部に瘤状突起を有する。VIb類（52～59）は貝殻腹縁の刺突文を施す一群である。53は口縁部が内湾する。54, 56, 57は刺突文が密に施される。59は目の細かい貝殻腹縁の刺突文を横位に密に施す。56と58は外面に煤が付着する。

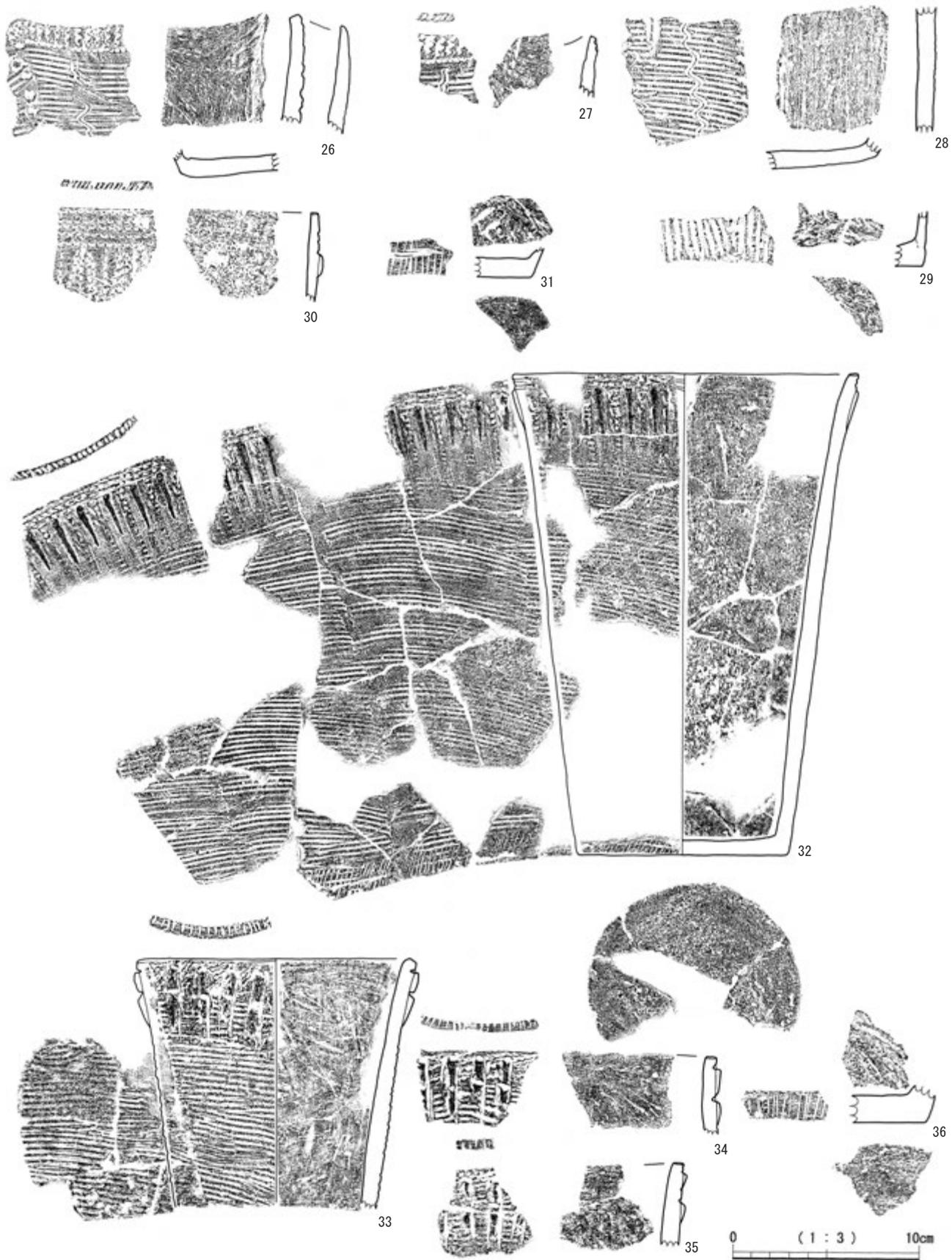


I類土器

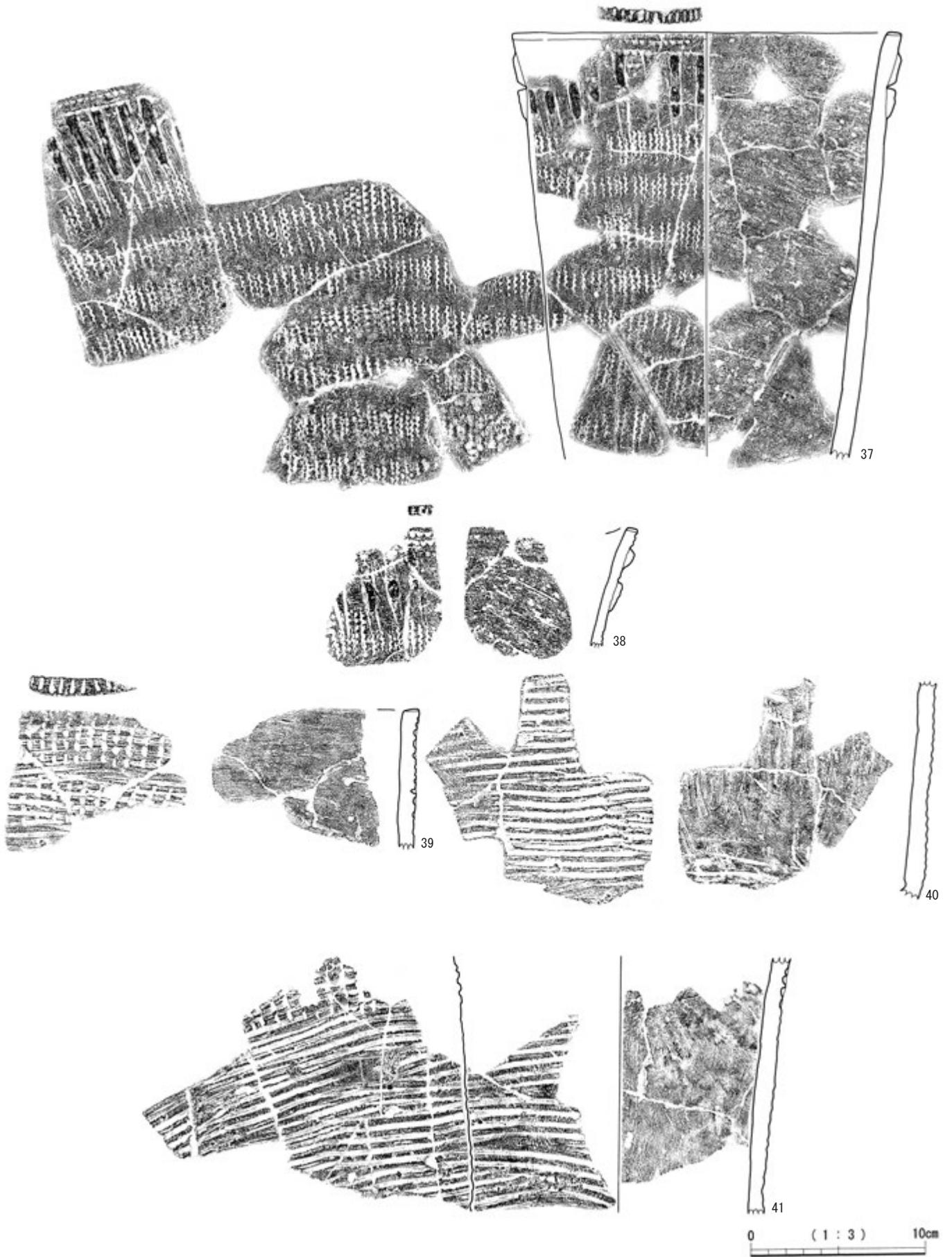


II類土器

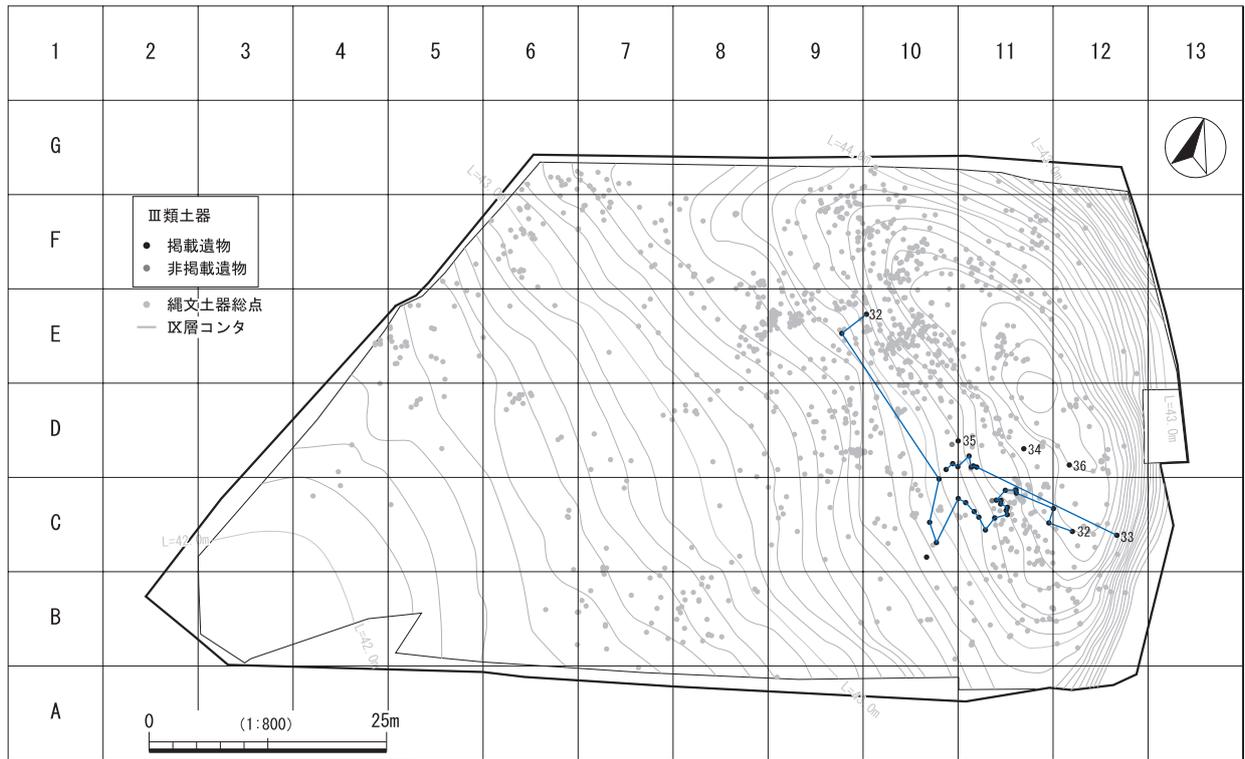
第57図 I・II類土器出土分布



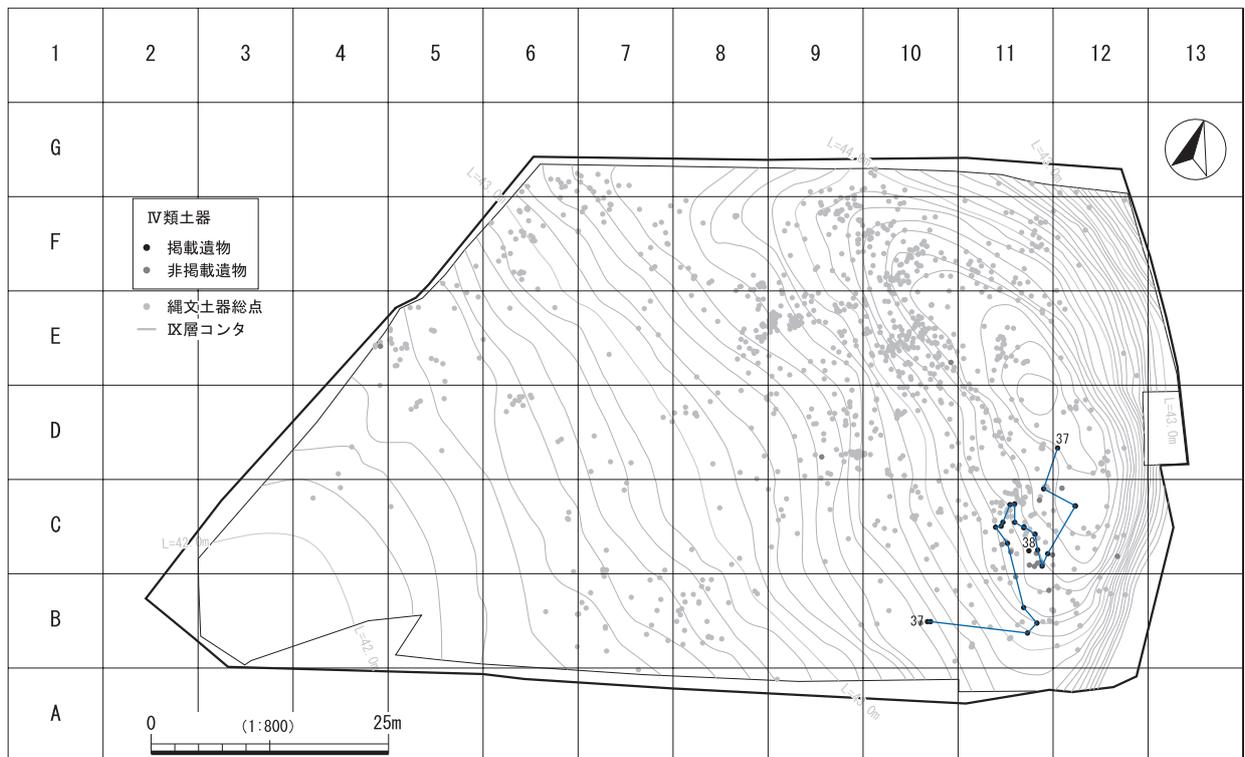
第58图 I · II · III類土器



第59図 IV・V類土器

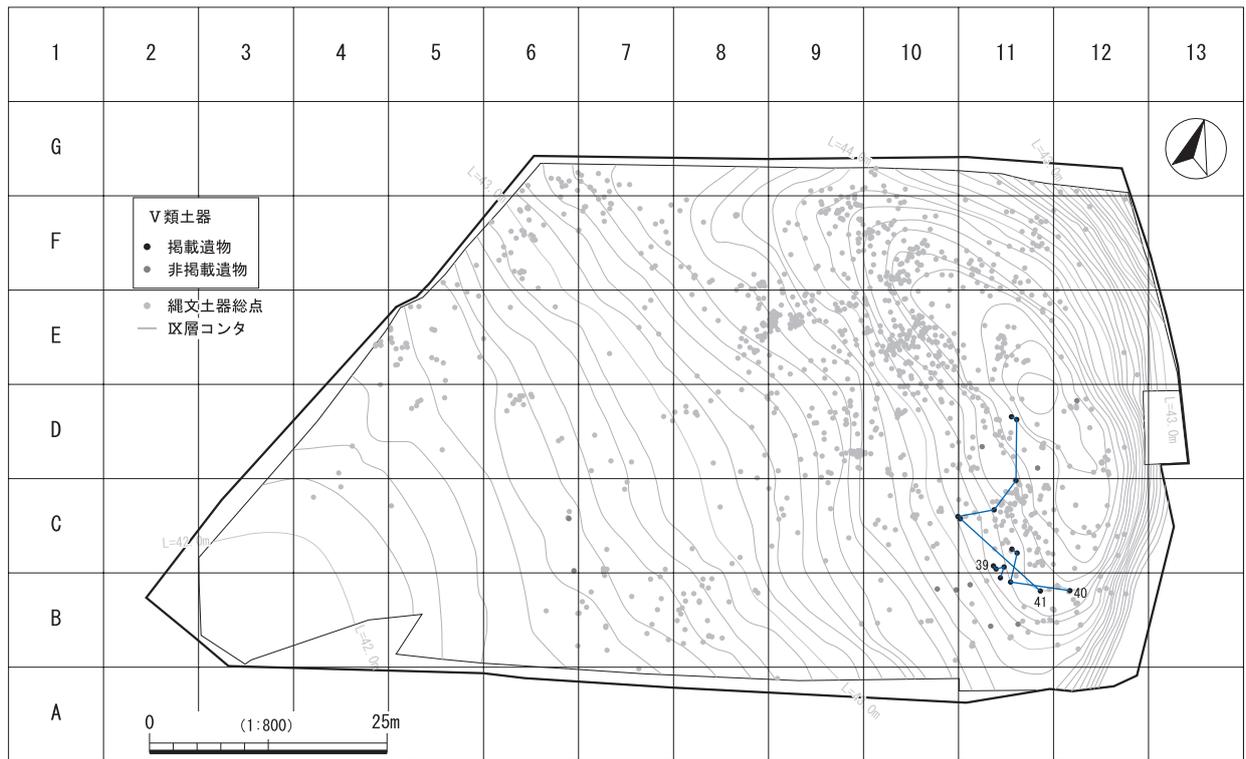


III類土器



IV類土器

第60図 III・IV類土器出土分布



V類土器

第61図 V類土器出土分布

**VII類土器（第63図60～70，第65図71～78）**

口縁部が直行ないしわずかに内湾し、平底でバケツ形の器形を呈する。施文は、短い貝殻条痕や羽状文、流水文を施すものなどである。60は唯一完形に復元できたもので、VII類土器の全容を窺えるものである。口縁径30cm、器高19.6cm、底部径12.4cmを測る。

外面はナデの後、ほぼ全面に鋸歯状に貝殻条痕を施し、内面は工具ナデである。61は外面に密に条痕を施し、口縁部に煤が付着している。内面に指頭痕が観察される。64は口縁部はわずかに内湾し、内外面にミガキ痕が観察される。胎土には金雲母を含む。65は口縁部に煤が付着する。61と同一個体の可能性がある。66は条痕文を横位に長く施す。67は口縁部に横位の刺突文が施される。75は内面に炭化物が付着する。78の胴部下位に貝殻刺突文を縦位に施す。桑ノ丸式土器に該当する。

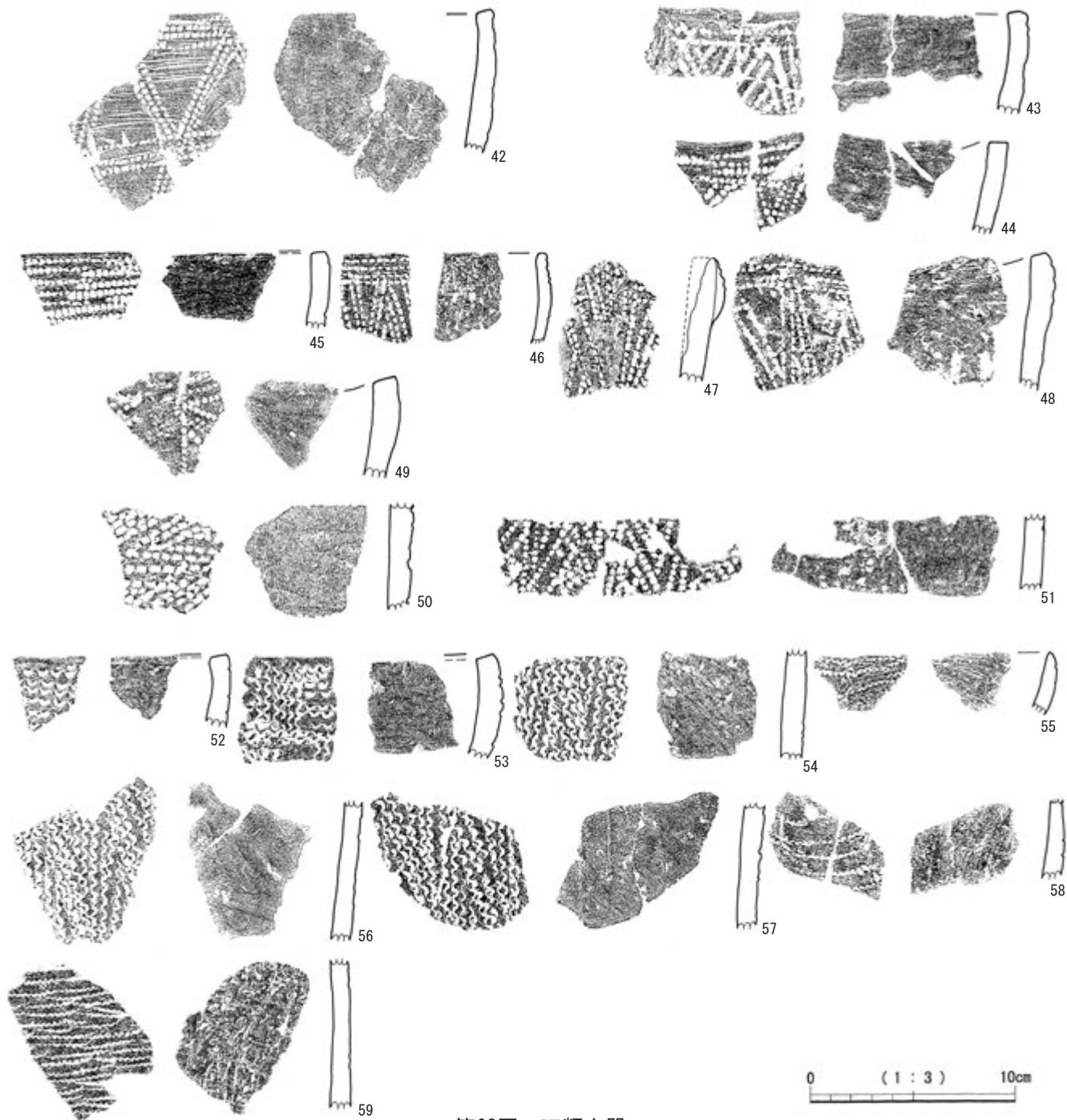
**VIII類土器（第67図79～91，第69図92～95）**

口唇部が平坦で、口縁部が外反する。胴部はわずかに膨らんで平底の底部になると思われる。口唇部と口縁部外面及び内面に押型文を施す。押型文土器に該当する。完形に復元できた個体はないが、押型により3つに分類した。

VIIIa類（79～91）は楕円押型文である。VIII類土器の中では最も多く出土している。原体を縦位、あるいは横位にころがして施文している。79は唯一口径を復元できたものである。口径は30.8cm測る。外面は縦位に、口縁部内面は横位に押型を施す。その下部はナデ調整を施している。86は外面に煤が付着する。89は押型文を縦位または斜位に施す。外面に種子圧痕がある。90、91は底部付近である。90は内湾気味に胴部へ立ち上がるもので、91は直線的に立ち上がるものである。

VIIIb類（92・93）は山形押型文である。92は内外面に押型文のある口縁部である。93は直線的に立ち上がる胴部である。内面を丁寧にナデ調整している。

VIIIc類（94・95）は微細な押型文を連続して施すものである。個体数が少なく小片のみしか図化できず、全体の様相は確認できなかった。95の内面はケズリの後にナデ調整している。



第62図 VI類土器

**IX類土器 (第69図96~104)**

口縁部が外反し、頸部でくびれ、胴部中央部で張り出し、屈曲しながら底部に至るもので手向山式土器に該当する。施文により2つに分類した。

IXa類 (96~99) は外面に押型文が施されるものである。

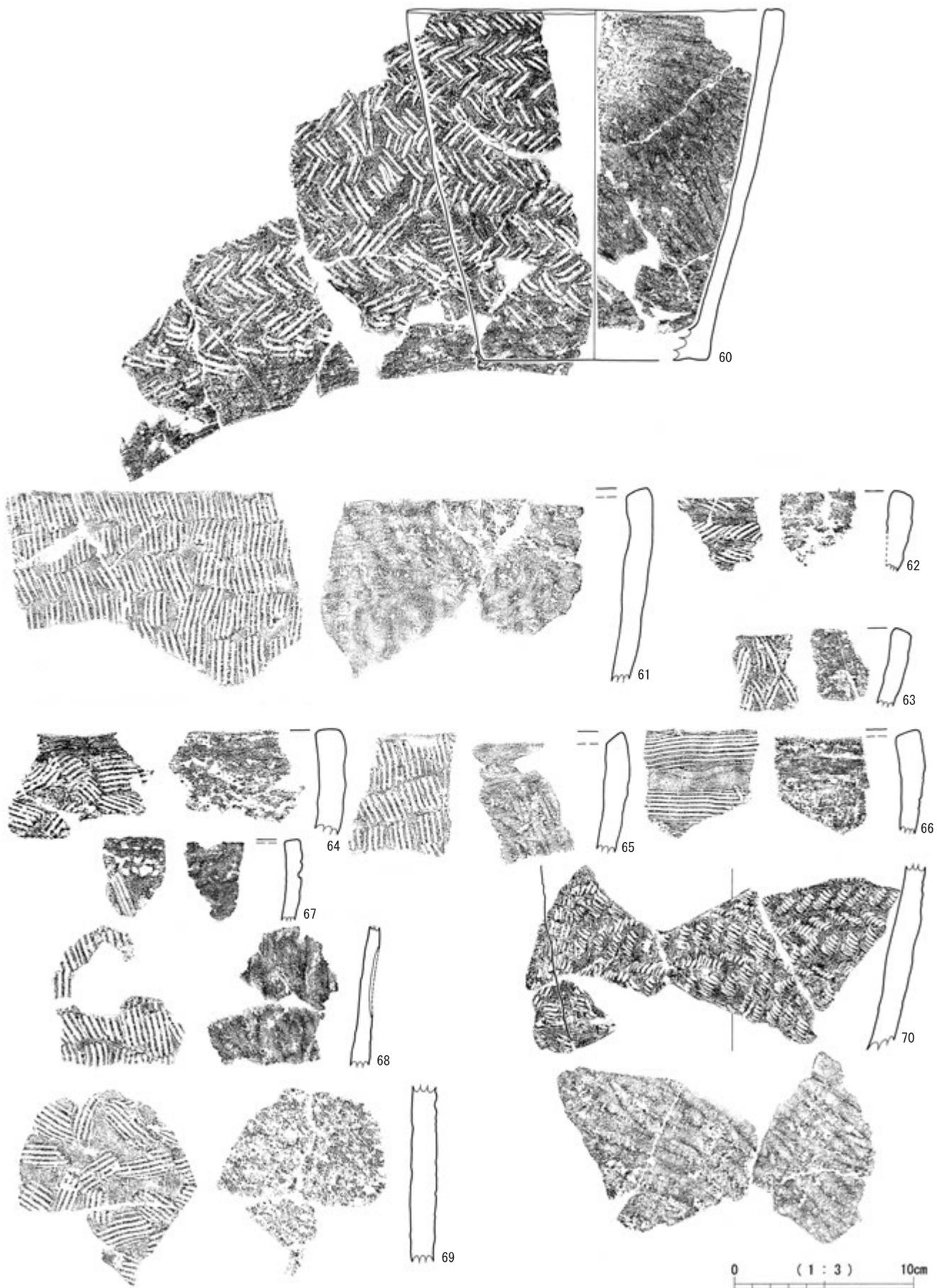
96は口唇部に刻みがみられる。97は口縁部である。山形の押型文が外面に横位に施される。98は頸部のくびれから胴部中央の屈曲にかけてのものである。山形押型文が縦位に施され、内面は指ナデである。99は底部付近で

ある。山形押型文が外面に施され、上げ底である。

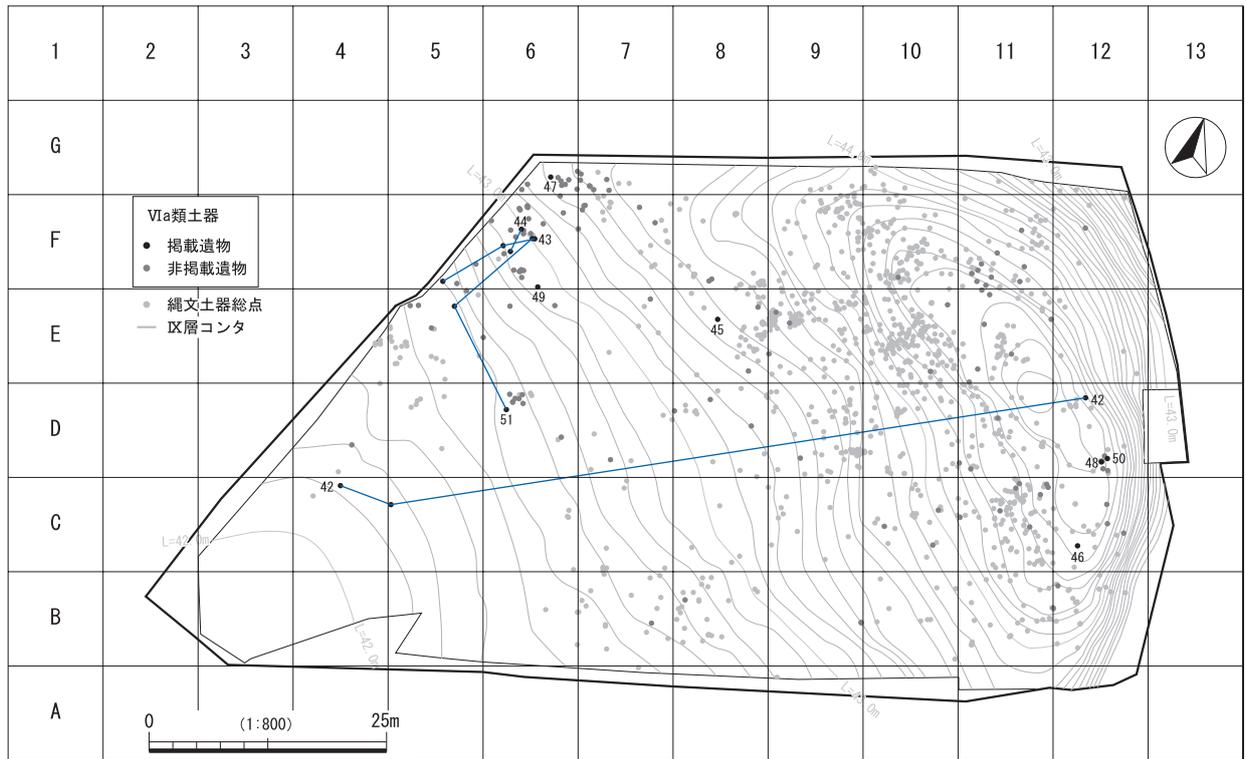
IXb類 (100~104) は外面に捺糸文が施されるものおよびその他の押型が施されているものである。施文が摩滅しはっきりしないものも含む。100と101は大きく外反する口縁部である。薄手で外面のみに施文される。104は胴部の屈曲部で上に捺糸文を、下に山形押型文を施す。

**X類土器 (第70図105~113)**

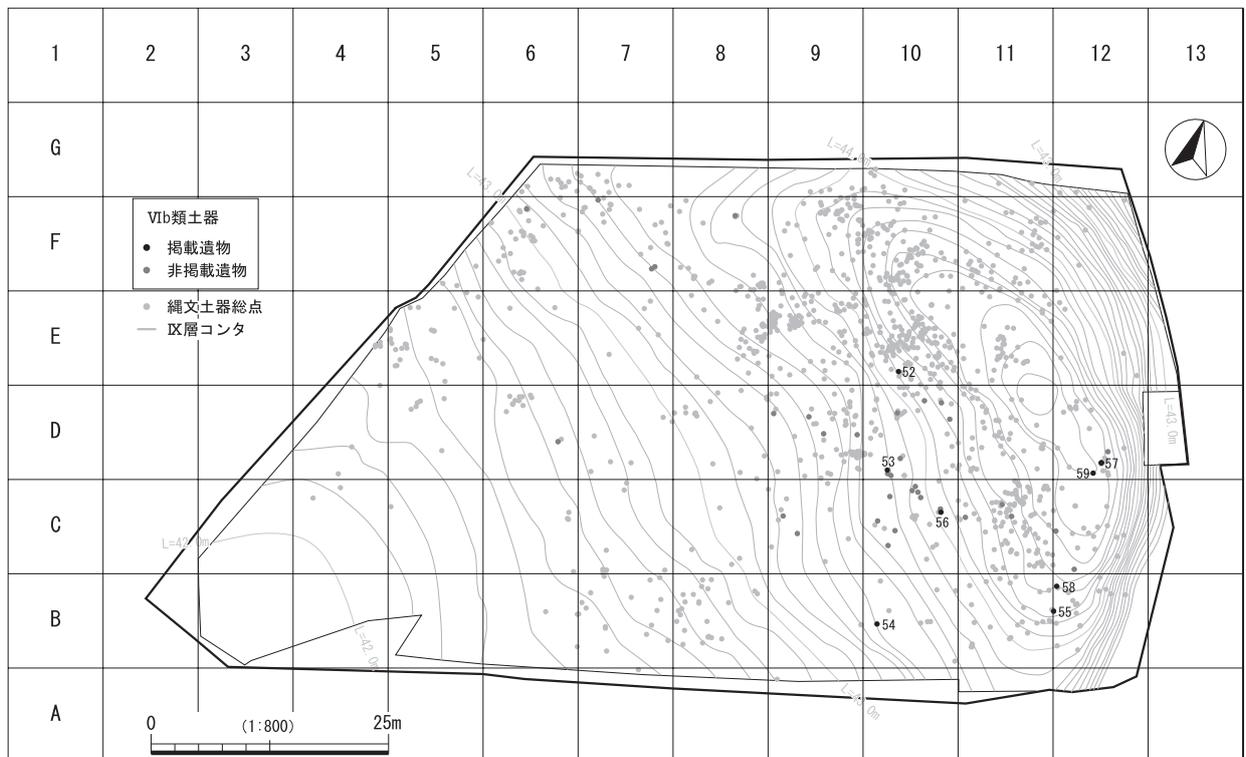
肥厚した口縁部がラップ状に強く外反するものと、強



第63图 VII類土器

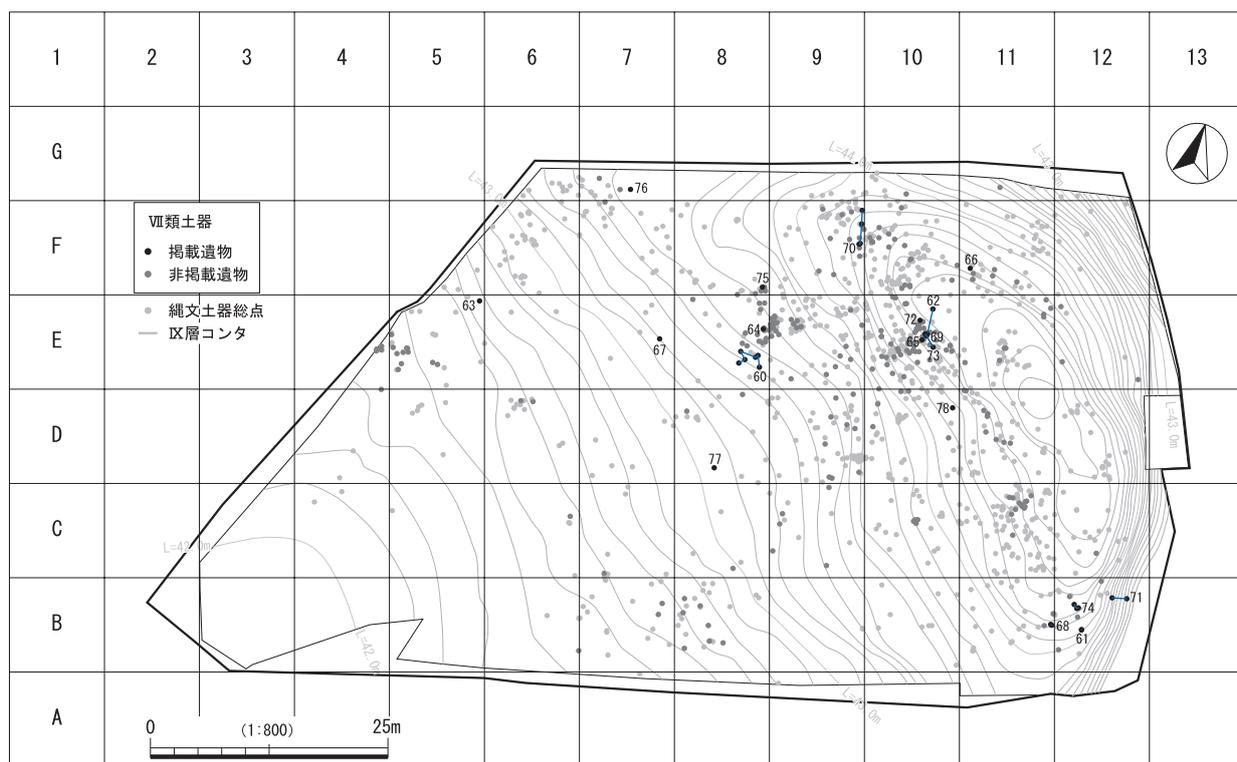


VIa類土器

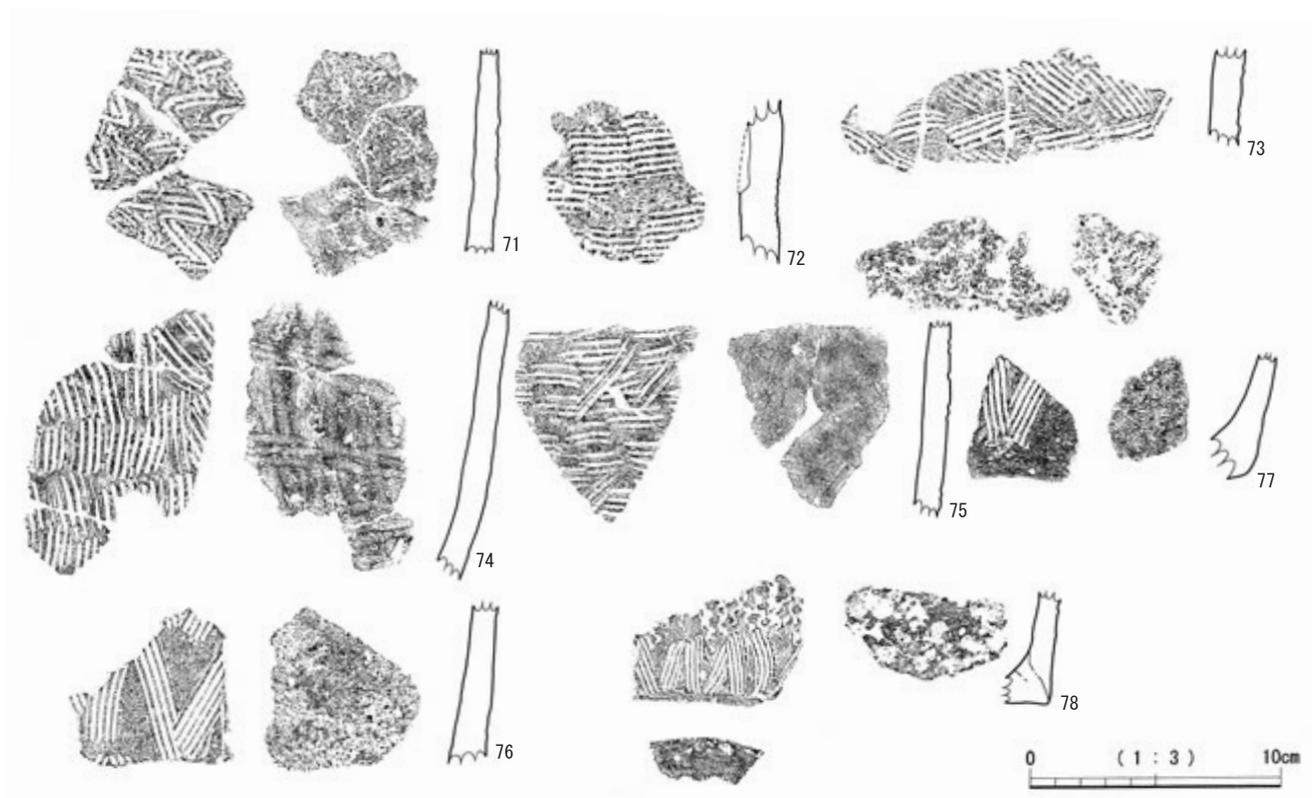


VIb類土器

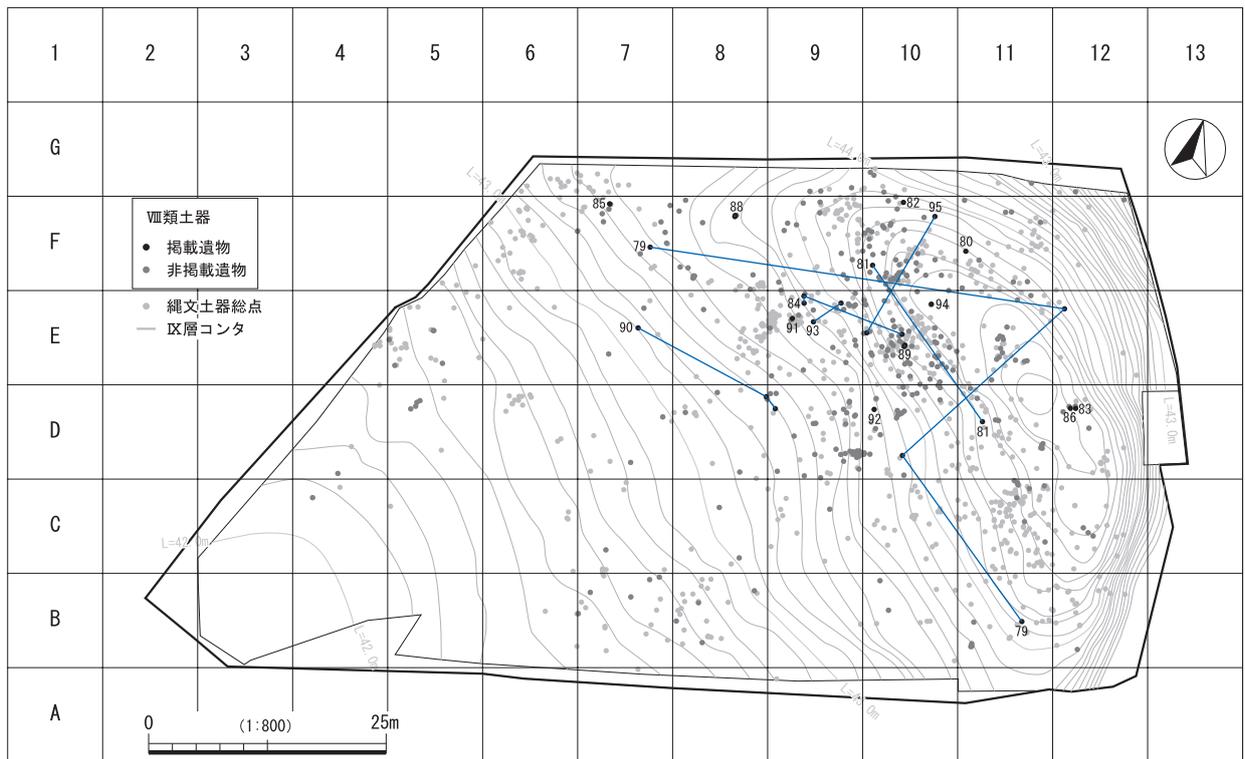
第64図 VI類土器出土分布



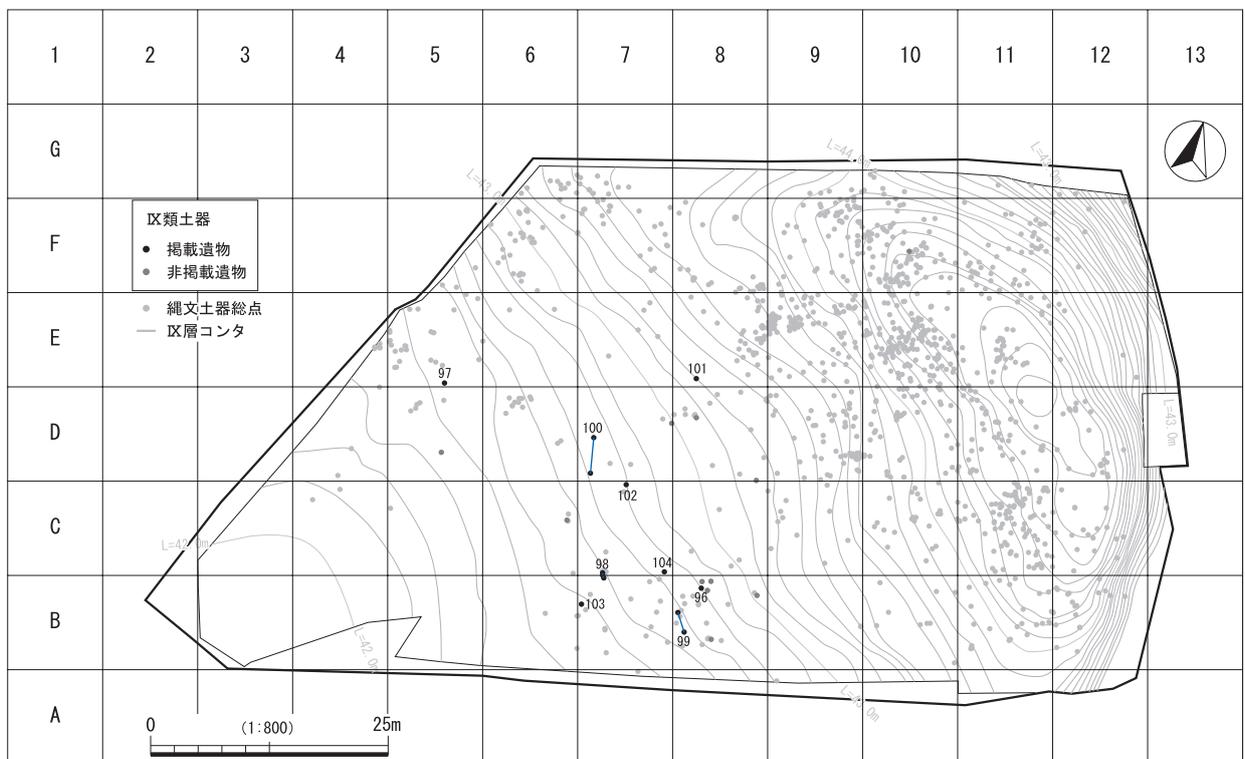
VII類土器



第65図 VII類土器出土分布, VII類土器

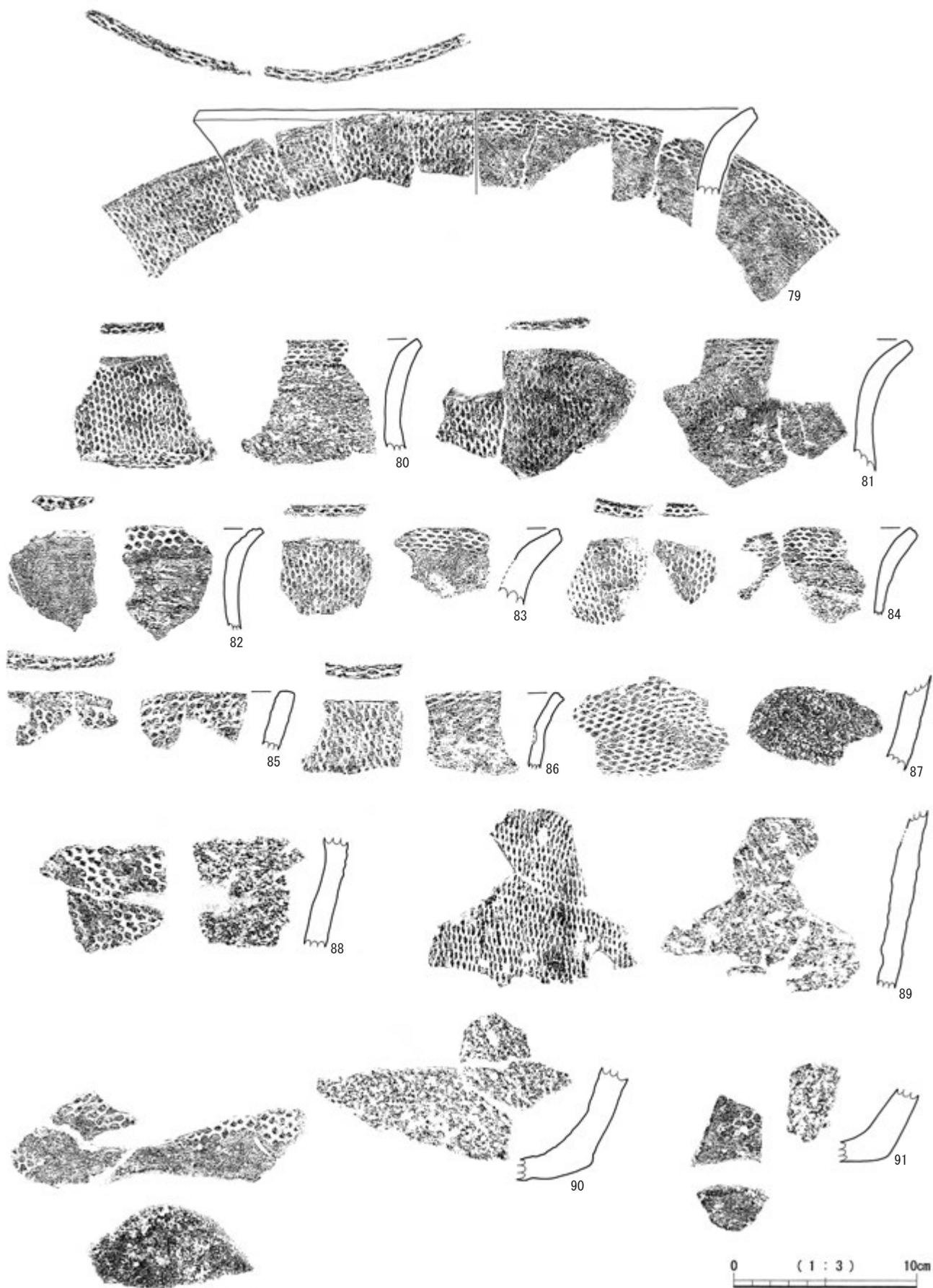


VII類土器

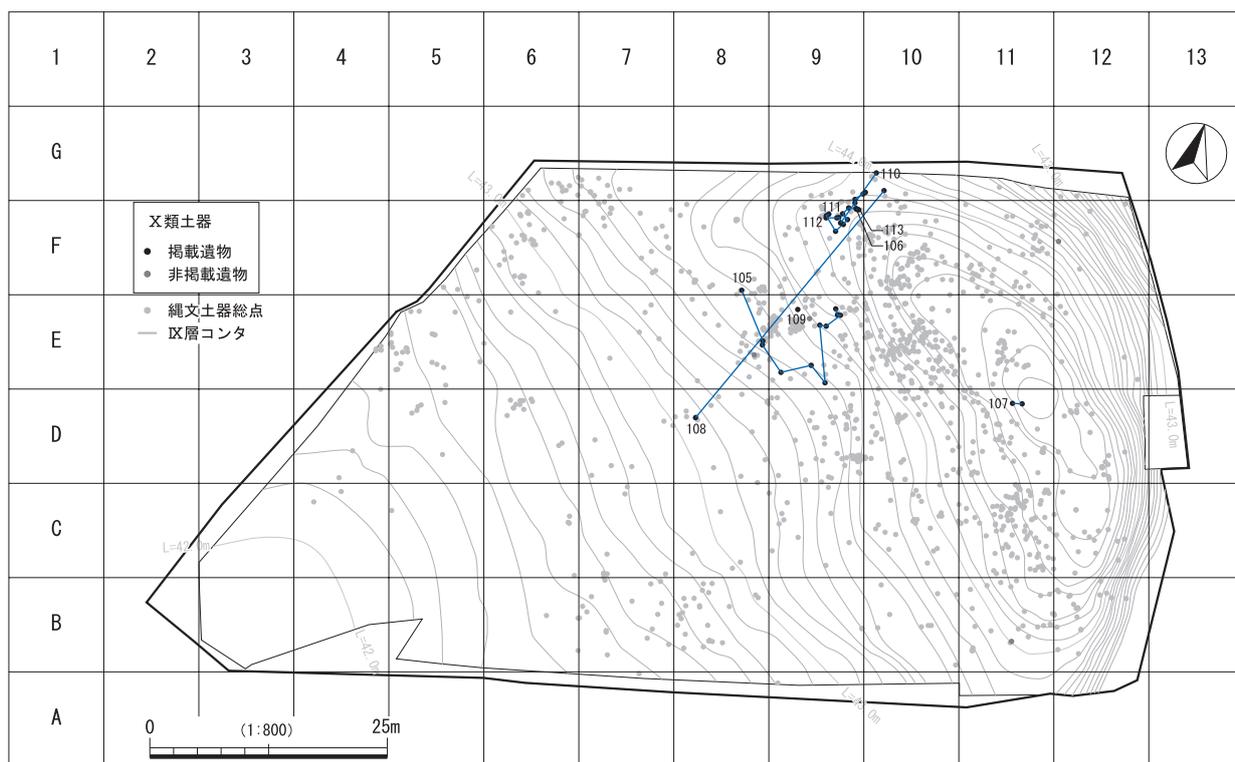


IX類土器

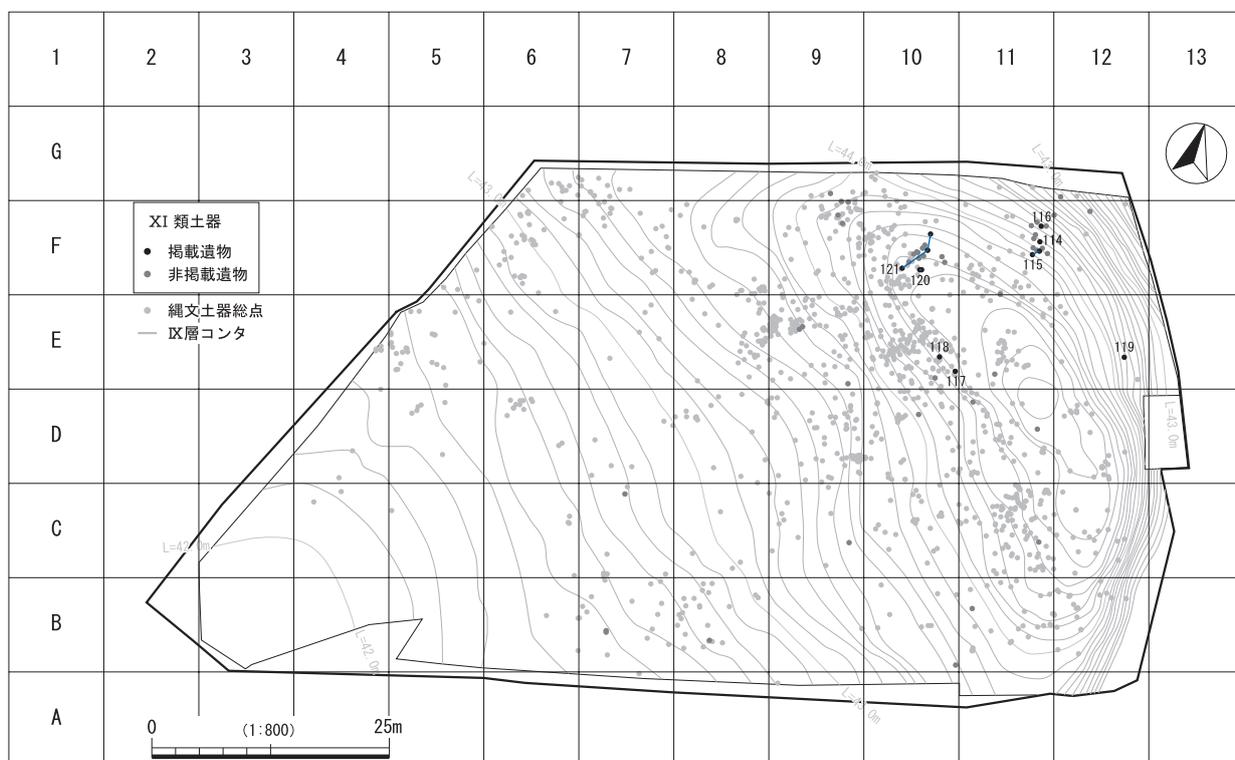
第66図 VIII・IX類土器出土分布



第67图 VIII類土器

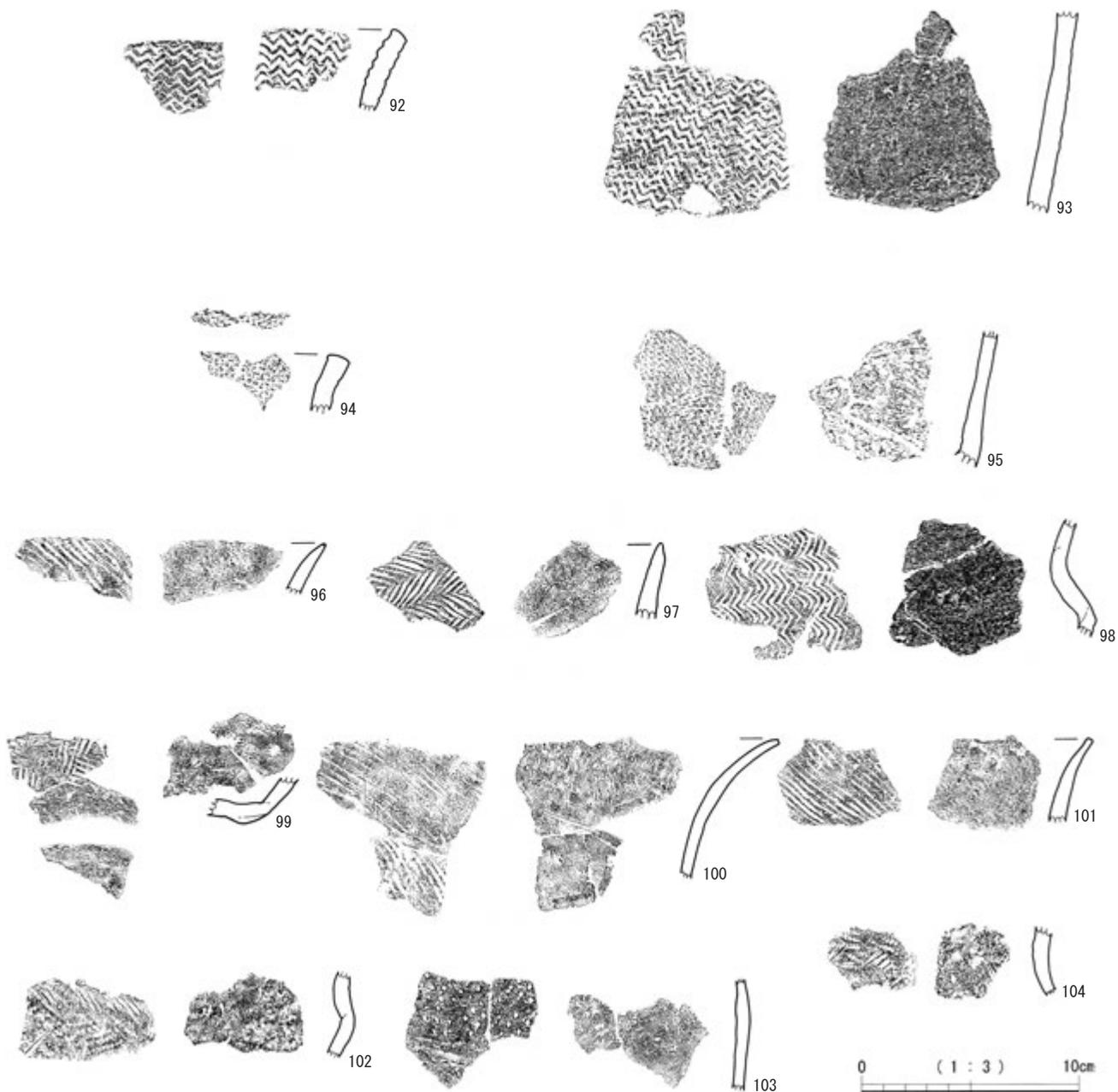


X類土器



XI類土器

第68図 X・XI類土器出土分布



第69図 VIII・区類土器

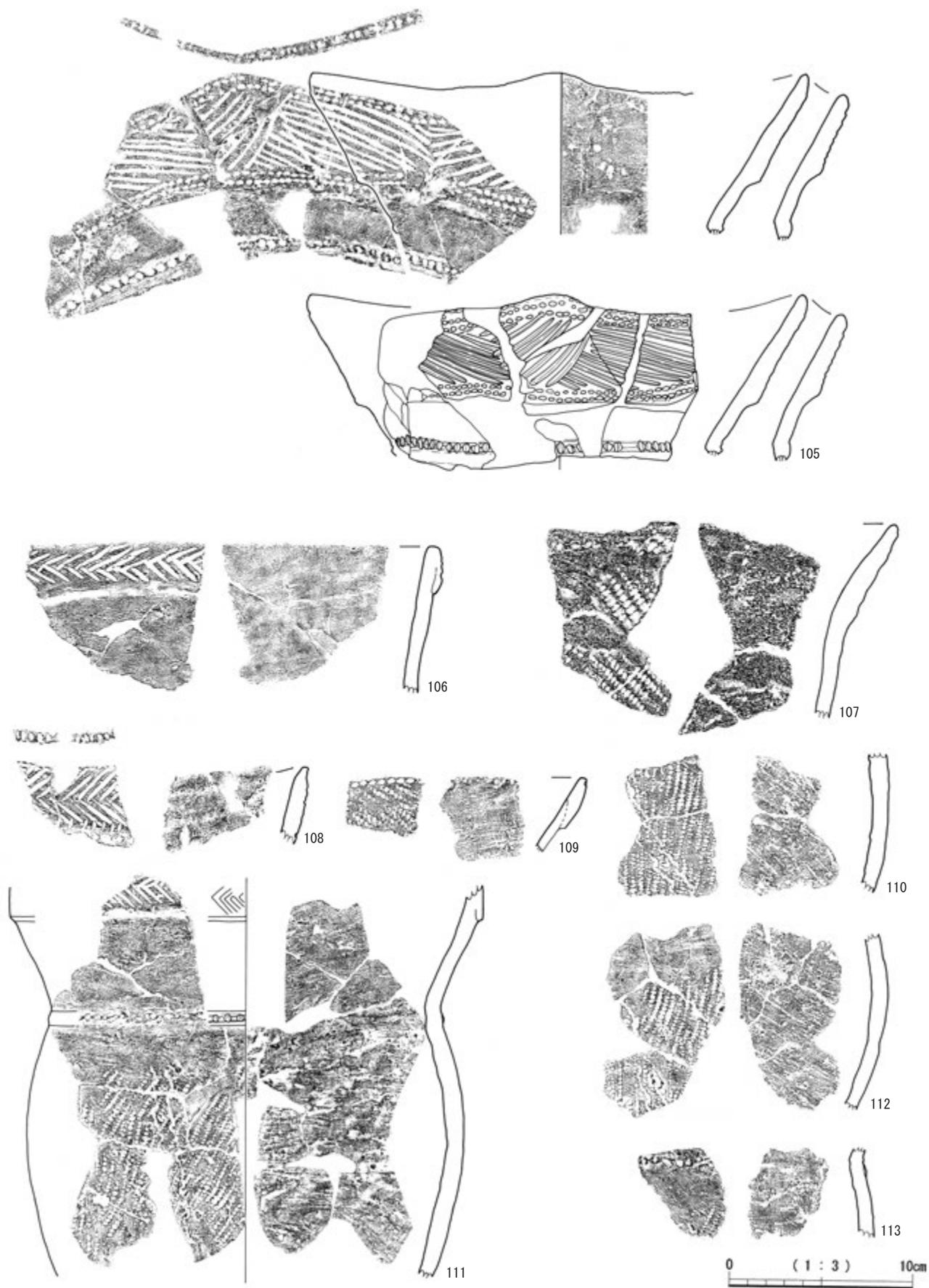
い外反が見られないものがあり、胴部はいずれも膨らむ。口縁部文様帯は沈線と刺突連点文で構成されるもの(105)と、棒状工具により、羽状文を施すもの(106, 108, 111)がある。波状を呈する口縁の105は口縁部断面が肥厚し、外面に煤が付着している。内面はナデ調整である。106, 108, 111は口縁部が外反しない。胴部施文は結節縄文を施すものが多く見られる。110と111, 112の内面はケズリ調整を行っている。平椀式土器に該当する。

**XI類土器 (第71図114~121)**

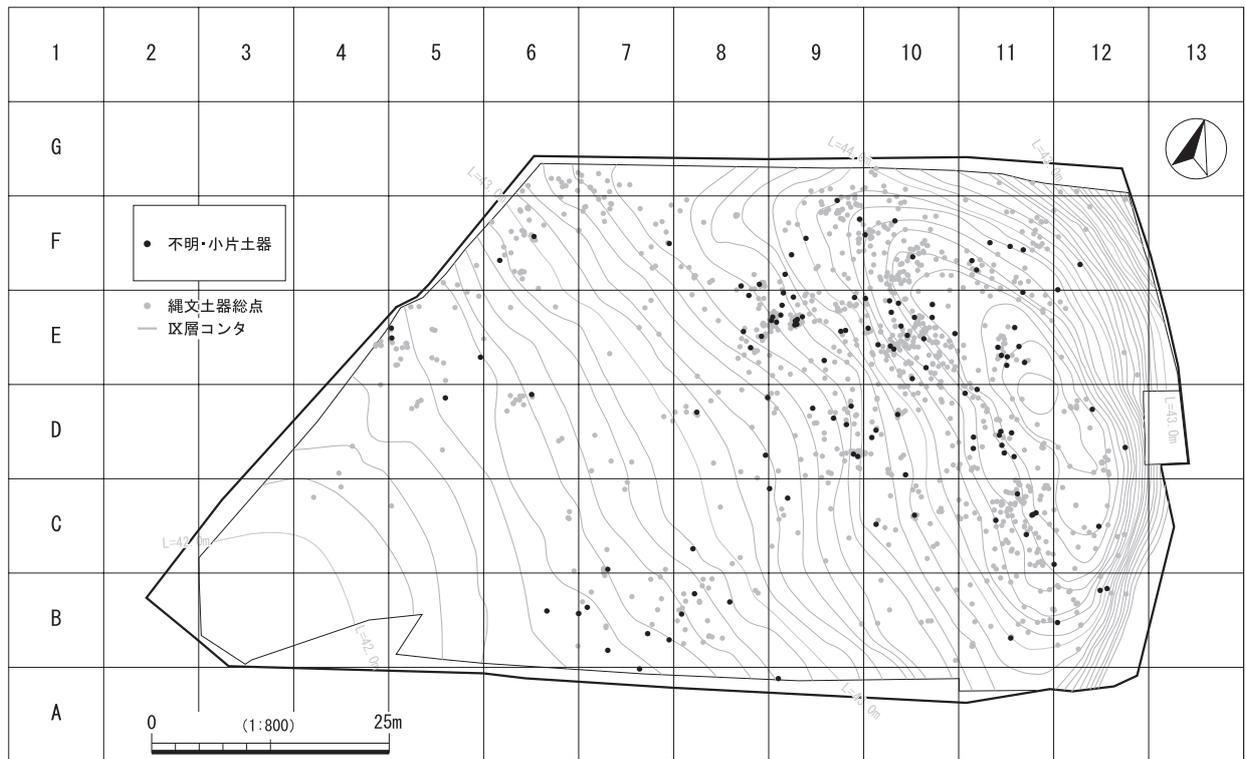
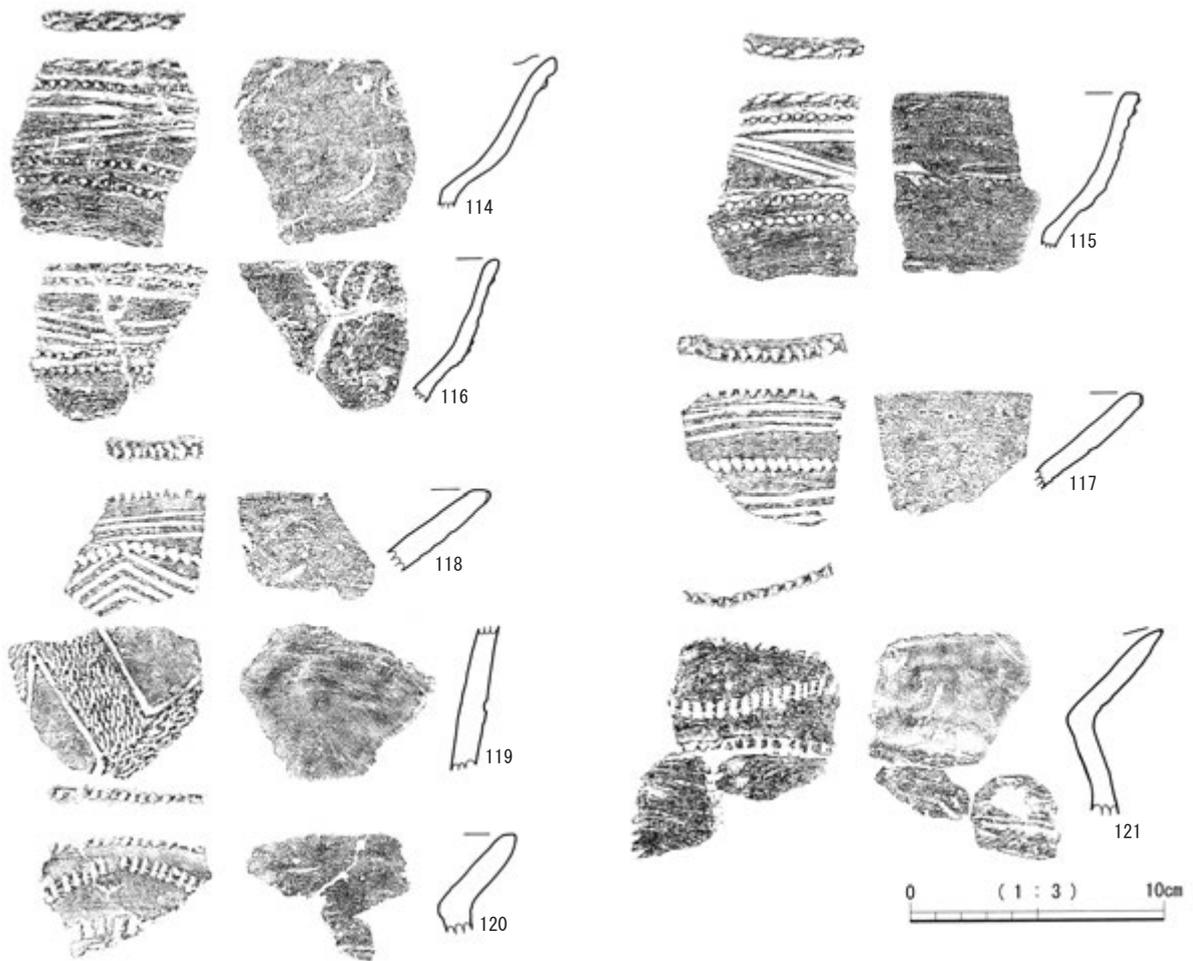
外面の施文により3つに細分化した。内面はいずれもナデ調整である。塞ノ神式土器に該当する。

XIa類(114~116)はラップ状に開いた口縁部を中程で屈曲させ、いわゆる二重口縁の器形を呈する。口唇部に刻目があり、さらに刻目を施した微隆帯を口縁部上位に1条、下位に2条巡らす。微隆帯間には横位または斜位の沈線文を施す。114は波状口縁である。

XIb類(117~119)は大きく外反する口縁部の口唇部に刻目があり、横位または斜位の刺突連点文と沈線文を施



第70図 X類土器



第71図 Ⅺ類土器・小片土器出土分布

す。胴部には棒状工具を使って沈線を施し、その枠内を網目捺糸文で満たしている。117と118は同一個体の可能性がある。

XIc類（120, 121）は口唇部に刻目があり、頸部がくの字状に屈曲シラップ状に開く口縁部を有し、貝殻による連続的な刺突文を口縁部と胴部に施すものである。胴部はやや張りがある。121は波状口縁を呈する。

その他、無文であったり小片で分類できなかったものは一括してまとめて分布図を掲載してある。

## （2）石器

縄文時代早期に属する石器はⅦ層及びⅧ層から剥片・碎片を含めると約200点出土している。この中で剥片石器を33点確認した。半数以上は石鏃である。礫石器は25点確認している。50点を図化した。

### 打製石鏃（第72図122～143）

22点を図化した。基部の挟りの有無から2類及び欠損品と未製品に大別した。黒曜石（1, 2, 3, 8類）、チャート、頁岩、安山岩を石材としている。

#### I類

基部の挟りを殆ど有さず、平面形態が三角形状を呈するもの。更に2類に細分した。

##### I a類（122～125）

基部に挟りが無いもの。122と125は三角形に近い形状である。123は黒曜石8類である。基部が僅かに欠損する。124はチャート製で下端の側辺がすばまるような形状を呈する。

##### I b類（126～129）

基部が僅かに内湾するもの。128は側辺の一部が鋸歯状になっている。129は灰白色で左脚部が僅かに欠損する。黒曜石8類である。

#### II類

基部に挟りが見られるもの。

##### II a類（130～134）

挟りが浅いもの。130は小型の石鏃で左側辺が外へ膨らむような形状を呈する。131は黒曜石3類で両側辺にも挟りが見られる。134の裏面の左側辺は細かい剥離で外形が調整される。

##### II b類（135～140）

U字状の深い挟りにより、長い脚部が作出されているもの。135は黒曜石8類で挟りにより作出された脚部の先端が尖る。137は両側辺は僅かに内湾し、先端部が鋭く尖る。138は脚部の先端が丸く、左脚が欠損する。共にチャート製である。脚部が付け根付近から欠損する139, 140も共にチャート製で本遺跡のなかで最も大型の石鏃である。

欠損品（141・142）

大きく欠損し、全体形状が明確でなく、上記の分類に含めていないもの。141は上下両端が欠損しているチャート製の石鏃である。142は挟りがあり側辺が鋸歯状になっている石鏃の脚部であるとみられる。

未製品（143）

黒曜石1類で不純物を多く含む。剥離がうまくいかずに打製石鏃の未製品であると考えられる。

### 石匙（第73図144）

安山岩の剥片を素材とし、つまみ部を作出するため左右にノッチ状の挟りがある。下辺はつまみ部に対し斜行し、背面側からの粗い剥離がみられる。両面調整は刃部に至っていない。

### 石ノミ（第73図145）

ホルンフェルス素材とし、丁寧に研磨を施して刃部を作出している。基部及び左側面側からの剥離で、身部の裏面側を欠失する。全体形状と大きさから石斧と分けて報告した。

### 石錐（第73図146・147）

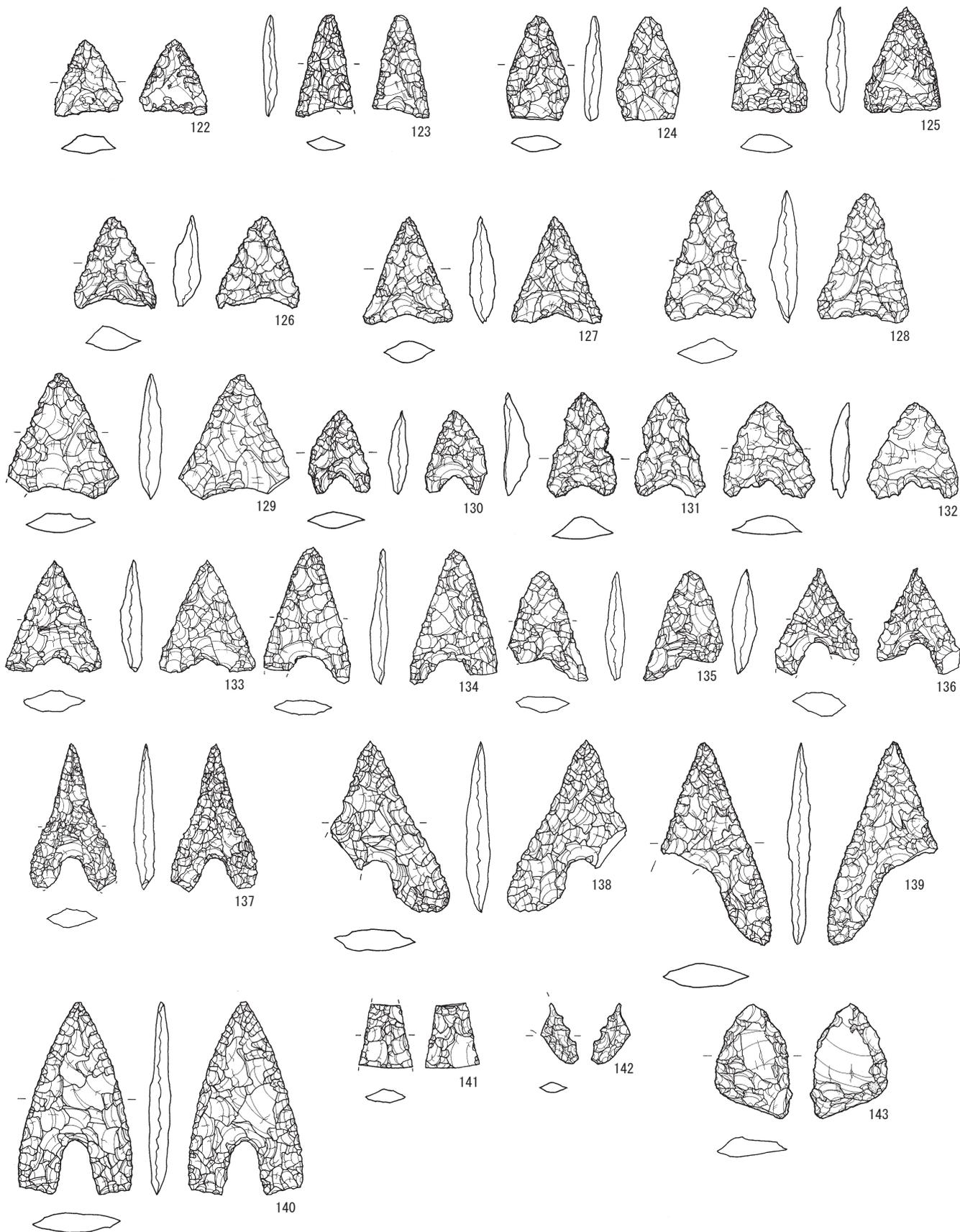
2点図化した。黒曜石4類とホルンフェルスの共に2.5cm未満の剥片を素材とする。147の先端部はやや摩滅している。

### 剥片（第73図148・149）

148は頁岩の剥片である。149は極小の縦長剥片で出土層位より早期の遺物として扱ったが細石刃の可能性も考えられる。

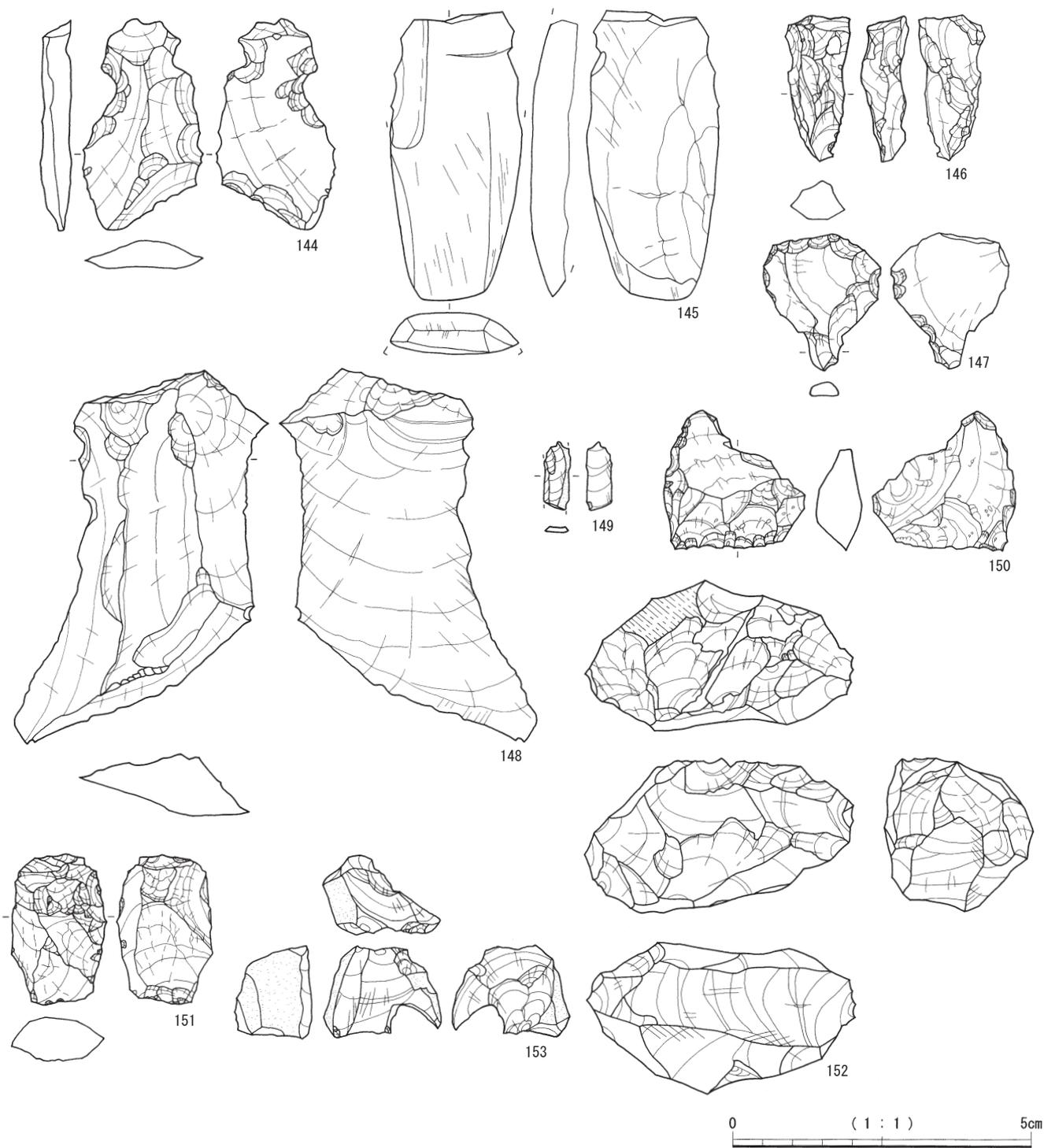
### 二次加工剥片（第73図150・151）

150は黒曜石4類で、151はチャートを素材とする。下端部に小剥離がみられ、刃部を形成しており、削器様の用途で使われた可能性が考えられる。



0 (1:1) 5cm

第72图 早期石器 1

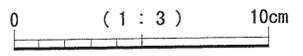
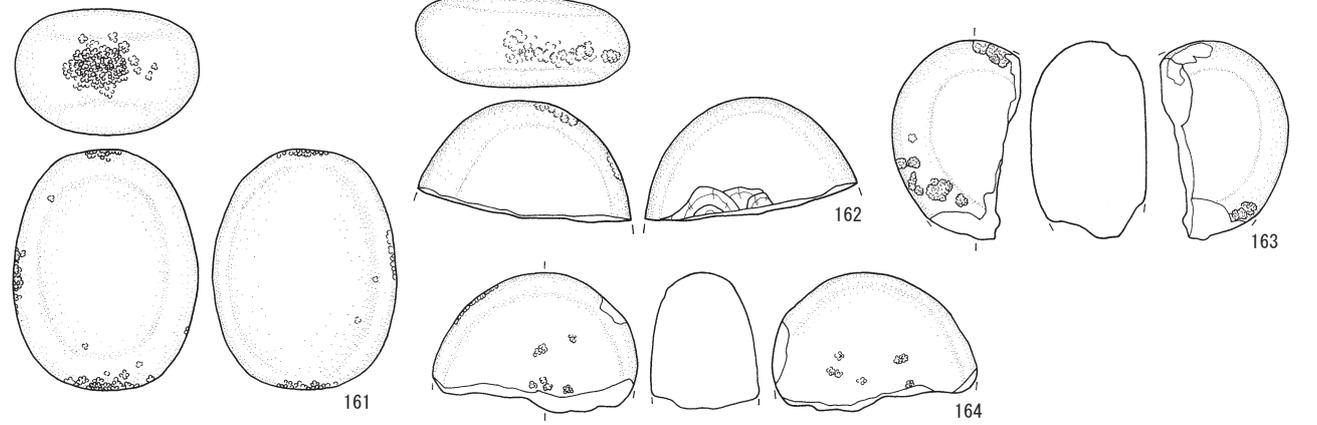
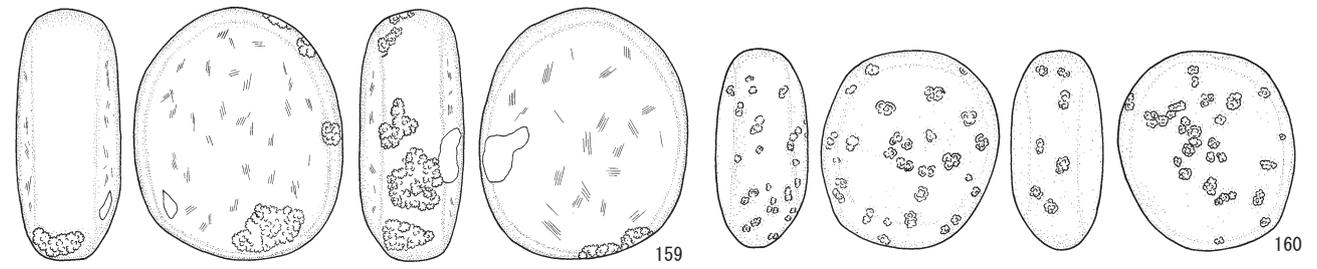
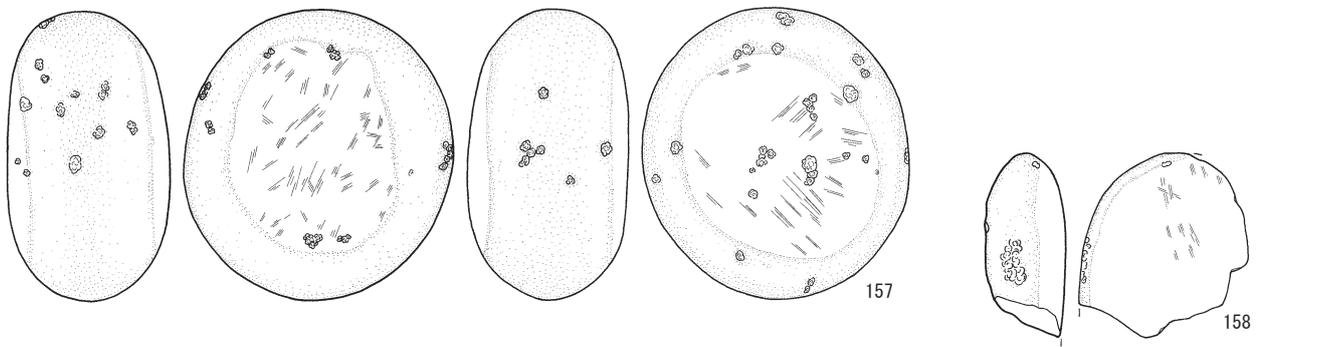
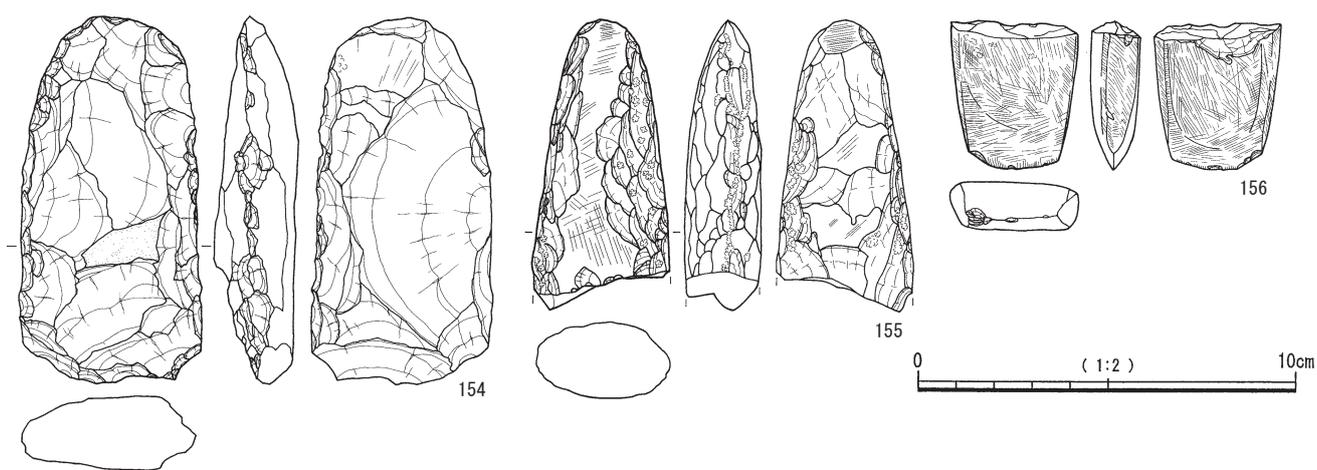


第73図 早期石器 2

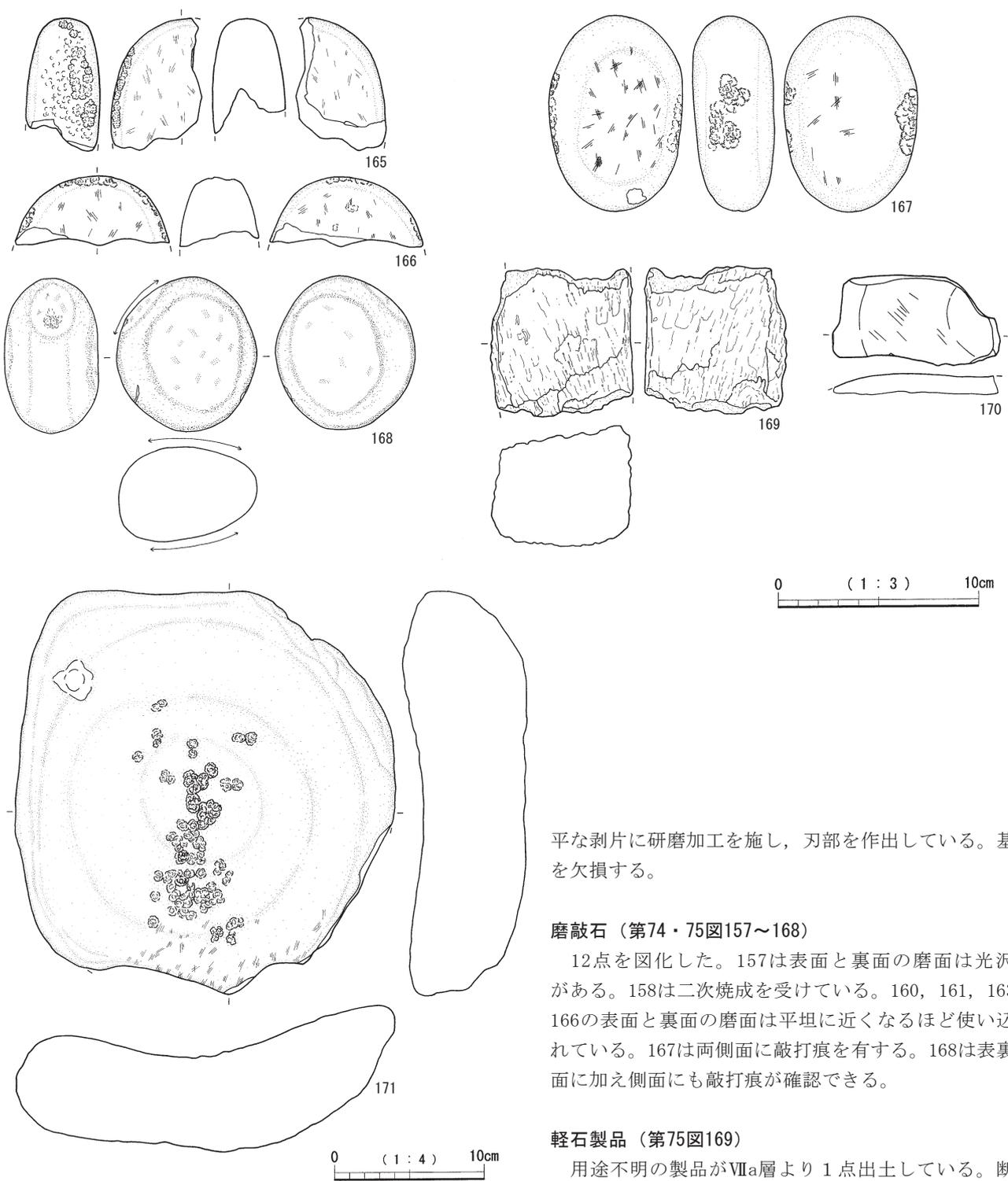
石核 (第73図152・153)

152はチャート之母石とし、上下左右に90度単位で打面転移を繰り返しながら剥離を進行させている。最後は

打撃の力が末端まで抜けず、ステップ状になってしまい剥離作業を終了している。153は黒曜石5類製の残核である。



第74図 早期石器 3



第75図 早期石器4

石斧（第74図154～156）

3点を図化した。いずれもホルンフェルス製である。154と155は打製石斧である。剥片の礫の周辺を剥離調整で加工されている。156は磨製石斧である。刃部を欠損する155は柱状の礫を剥離調整で加工している。156は扁

平な剥片に研磨加工を施し、刃部を作出している。基部を欠損する。

磨敲石（第74・75図157～168）

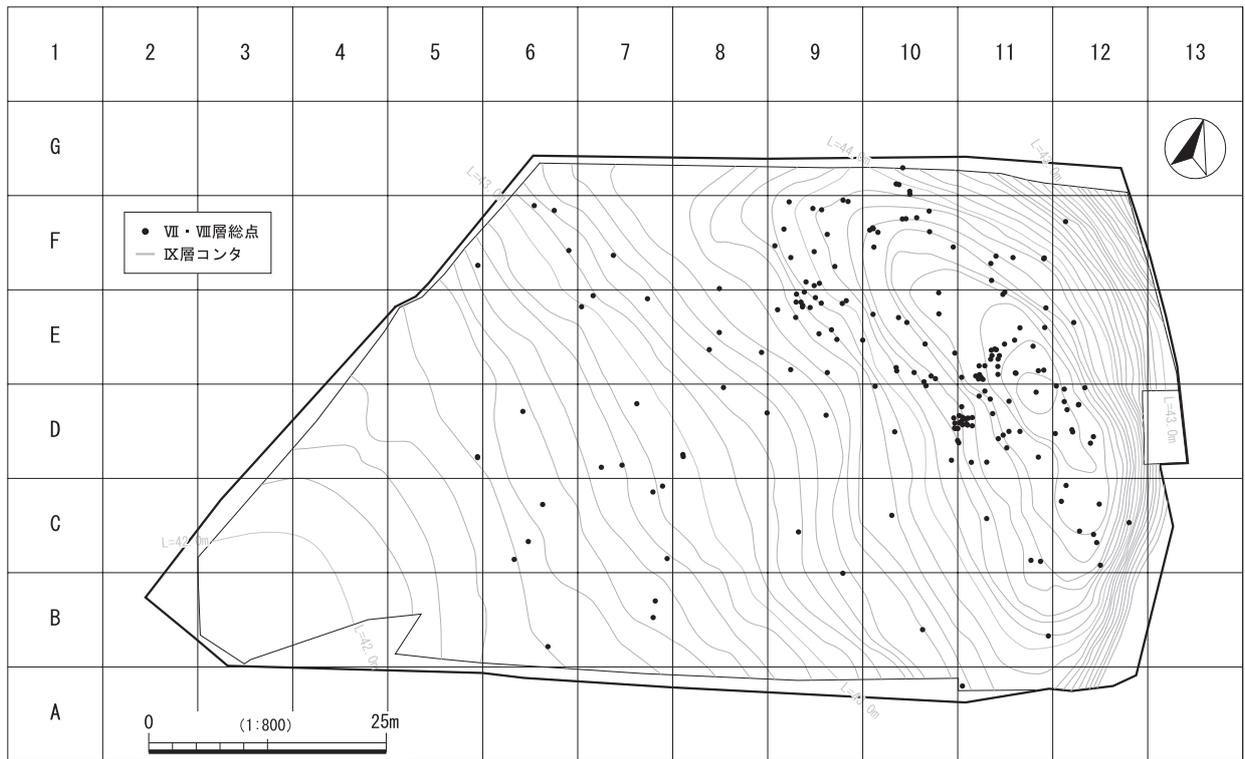
12点を図化した。157は表面と裏面の磨面は光沢感がある。158は二次焼成を受けている。160, 161, 163, 166の表面と裏面の磨面は平坦に近くなるほど使い込まれている。167は両側面に敲打痕を有する。168は表裏両面に加え側面にも敲打痕が確認できる。

軽石製品（第75図169）

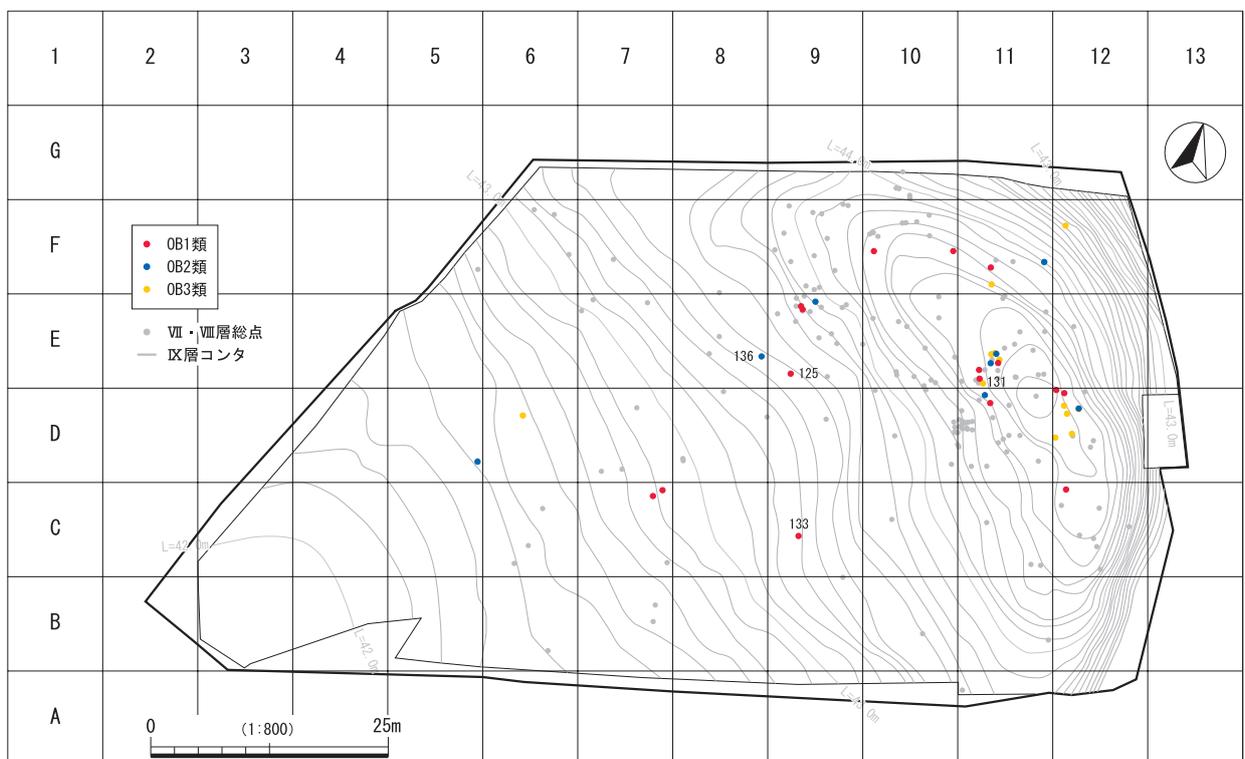
用途不明の製品がVIIa層より1点出土している。断面が方形で柱状を呈する。上下に割れ面が生じている。

石皿（第75図170・171）

171は下縁を欠損するものの、ほぼ完形で出土した。約5.8kgの安山岩の平坦面をそのまま磨面として使用しており、中央部が大きく凹んで底面には敲打痕も観察される。欠損部分に光沢感と擦痕があり、掻き出し口として使用された可能性がある。

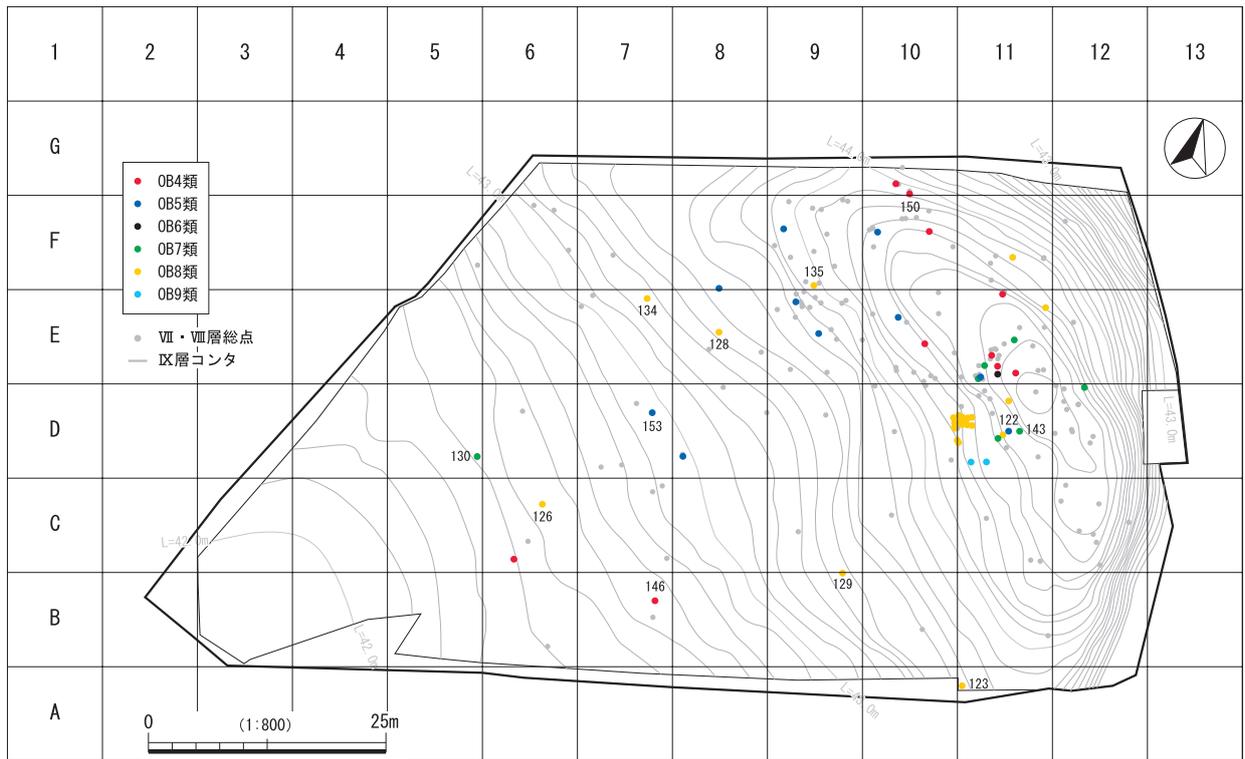


早期石器全点

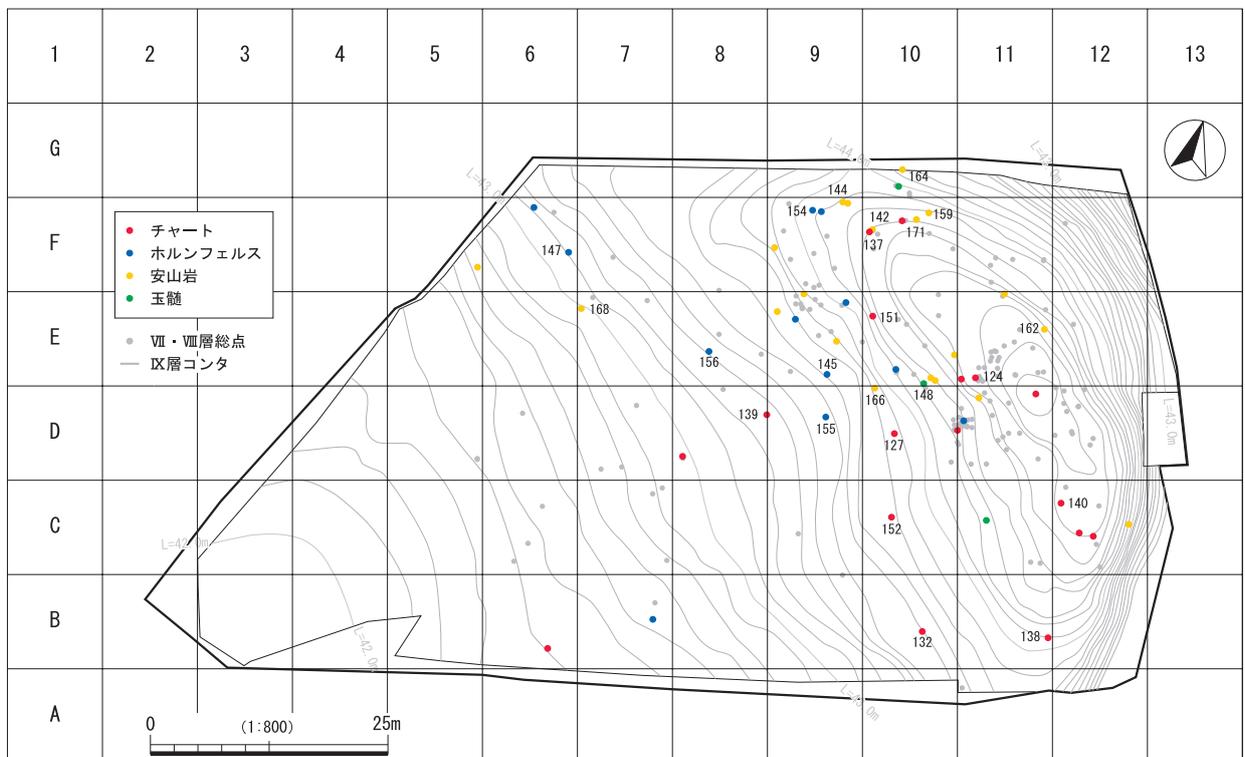


黒曜石1~3類

第76図 早期石器出土分布図1

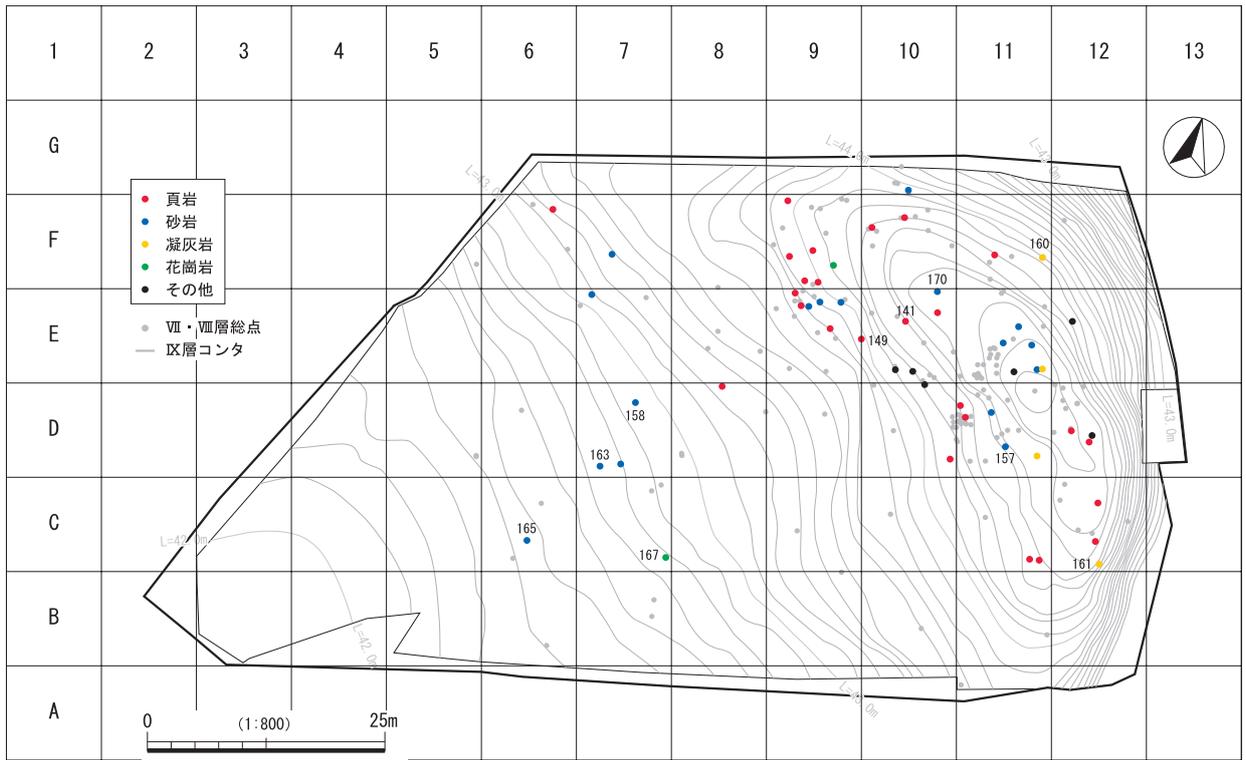


黒曜石 4～9 類

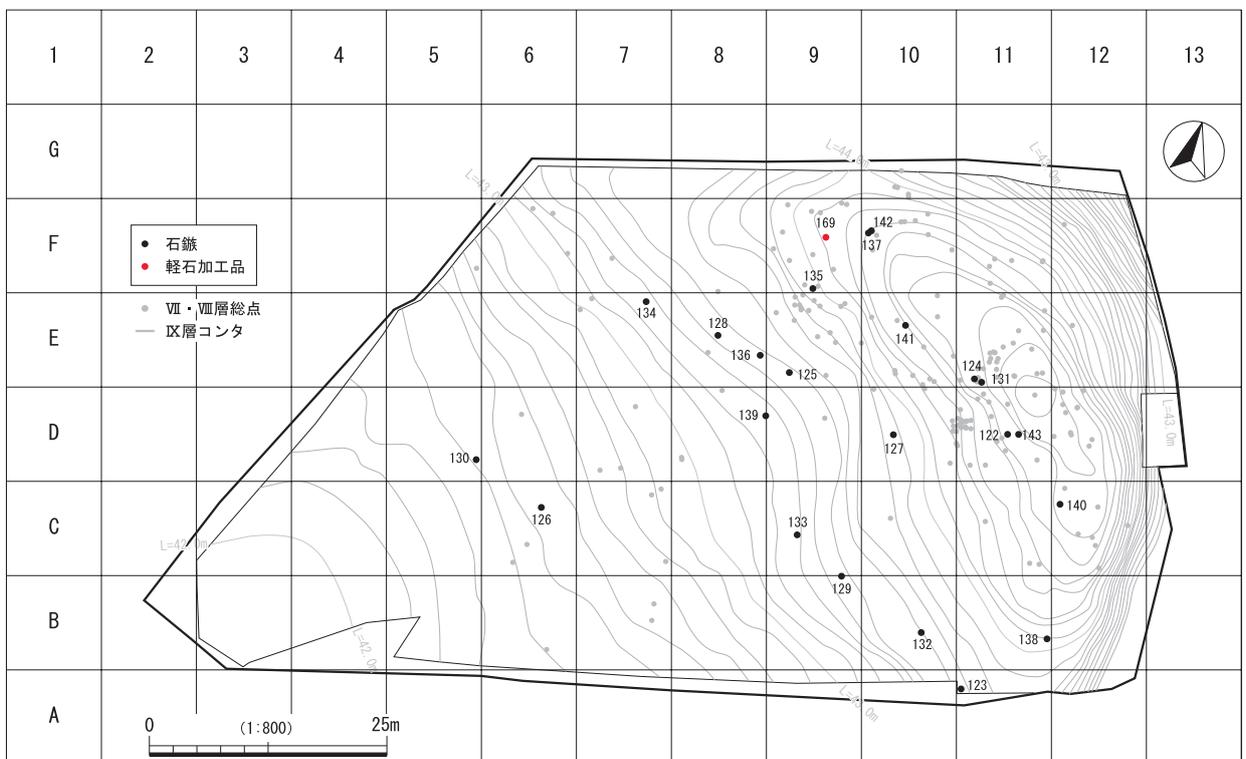


その他の石材 1

第77図 早期石器出土分布図 2

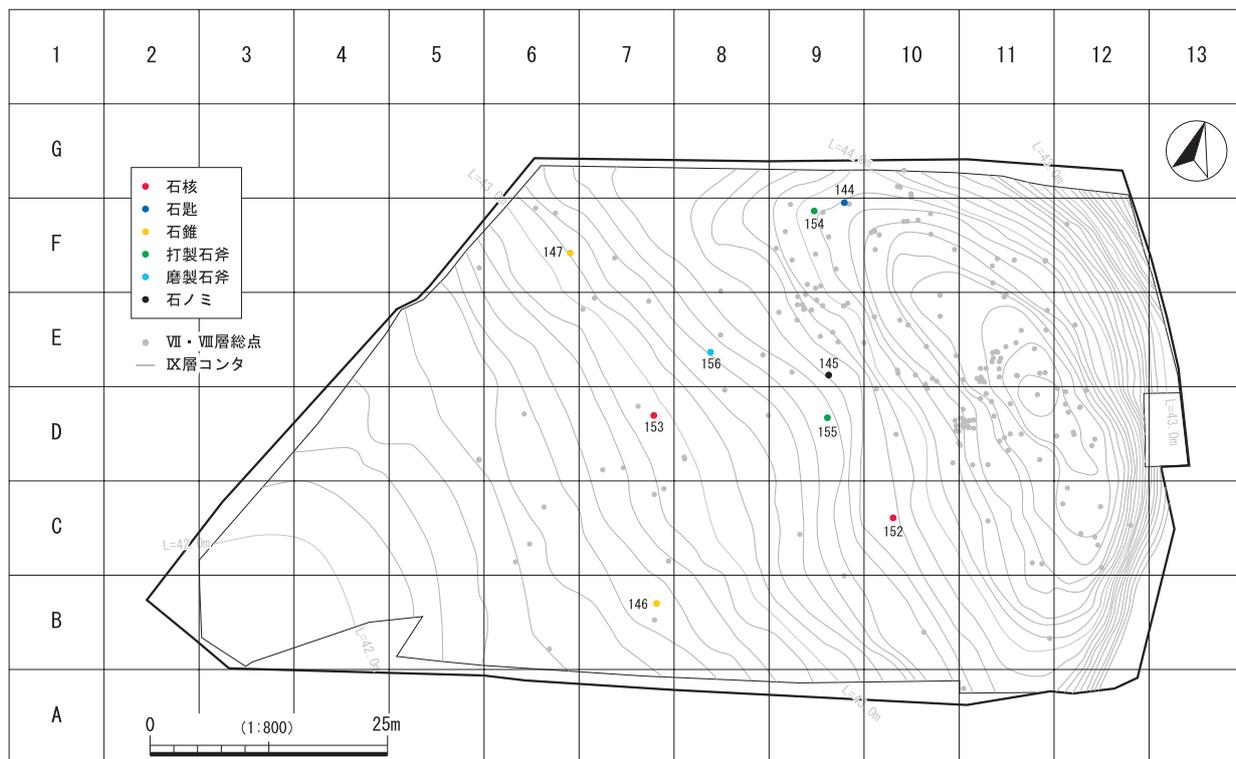


その他の石材 2

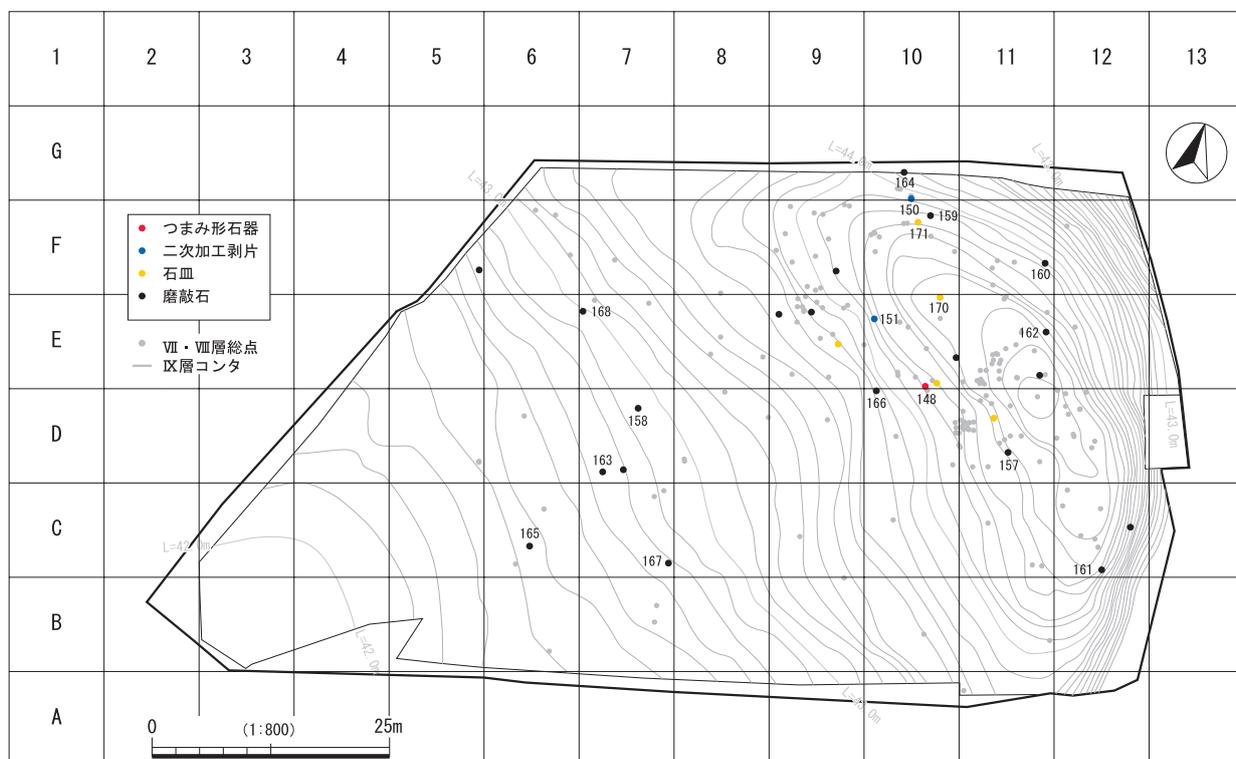


器種別石器 1

第78図 早期石器出土分布図 3



器種別石器 2



器種別石器 3

第79図 早期石器出土分布図 4

第10表 早期土器観察表1

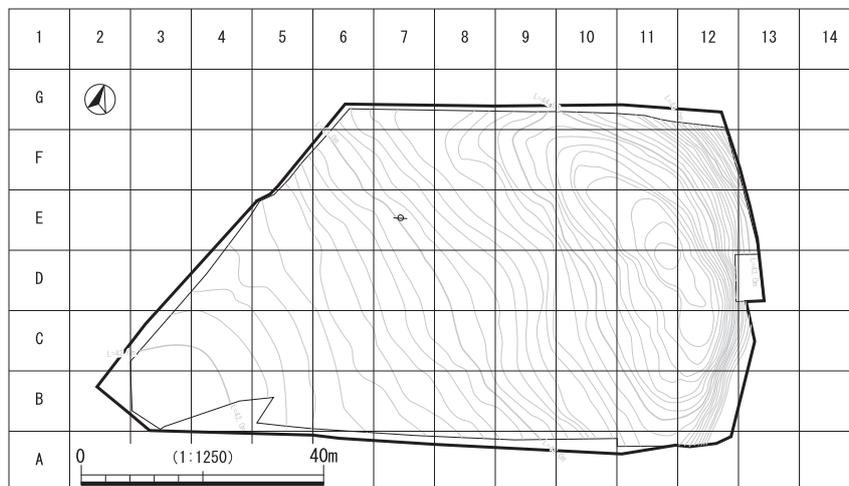
挿図 番号	掲載 番号	出土区	層位	分類	器種	施文・調整		色調		胎土						備考			
						外面	内面	外面	内面	石英	長石	輝石	角閃石	雲母	礫		その他		
58	26	F-10	VIIb	I	深鉢	貝条痕文, 貝刺突文, 縦波状文	工具ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○								角筒	
	27	E-11	VIIb	I	深鉢	貝条痕文, 貝刺突文, 縦波状文	工具ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○			○	○		角筒	
	28	F-10	VIIb	I	深鉢	条痕文, 縦波状文	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○						角筒	
	29	C-11	VIIb	I	深鉢	条痕文	ナデ	にぶい黄橙	暗灰黄	○						○		角筒	
	30	F-10	VIIb	II	深鉢	ナデ, 貝刺突文, 貼付文	工具ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○	○	○	○		○	○			
	31	C-11	VII	II	深鉢	ケズリ, 沈線	ナデ	にぶい橙	暗オリーブ褐	○		○					○		
	32	C-10	VII	III	深鉢	貝刺突文, 貼付文, 貝条痕文, キザミ	ナデ	明赤褐	赤褐	○		○	○			○	○		
		C-11	VII, VIIb																
		C-12	VII																
		E-9	VII																
E-10		VII, VIII																	
33	D-10	VIIb	III	深鉢	貝刺突文, 貝条痕文, 貼付文	ケズリ	にぶい橙	黒褐	○							○	口径: 14.9cm		
34	D-11	VIIb	III	深鉢	貝刺突文, 貝条痕文, 貼付文	ケズリ	にぶい橙	黒褐	○		○				○				
35	D-10	VII, VIIb	III	深鉢	貝刺突文, 貝条痕文, 貼付文	工具ナデ	にぶい橙	にぶい黄褐	○		○				○	○			
36	D-12	VIIb	III	深鉢	ナデ, 刻み	ナデ	黄褐	黄褐	○	○	○					○			
59	37	B-10	VII	IV	深鉢	貝刺突文, 貼付文	工具ケズリ	明黄褐	橙	○					○	○			
		B-11	VII																
		C-11	VII, VIIb																
		C-12	VIIb																
		D-12	VIIa																
		C-11	VII																
	38	C-11	VIIb	IV	深鉢	貝刺突文, 貼付文	工具ケズリ	橙	明黄褐	○						○	○	レモン形の可能性	
	39	B-11	VII	V	深鉢	貝条痕文, 貝刺突文	ケズリ	橙	にぶい褐	○	○		○						
		C-11	VIIb																
	40	B-11	VIIb	V	深鉢	ナデ, 貝条痕文	ケズリ	にぶい橙	にぶい橙	○			○						
B-12		VIIb																	
41	C-11	VII	V	深鉢	貝条痕文, 貝刺突文	ケズリ	橙	にぶい褐	○			○							
62	42	C-4	VIIa	VIa	深鉢	条痕文, 刺突文	丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○				○			
		D-12	VIIb																
	43	E-5	VIIb	VIa	深鉢	ナデ, 刺突文	丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい褐		○			○	○				
	44	F-6	VIIb	VIa	深鉢	ナデ, 刺突文	丁寧なナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○							○	波状口縁
	45	E-8	VIIb	VIa	深鉢	ナデ, 刺突文	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○	○	○							
	46	C-12	VII	VIa	深鉢	ナデ, 刺突文	丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい黄橙	○	○	○							内面煤付着
	47	G-6	VIIb	VIa	深鉢	ナデ, 刺突文	丁寧なナデ	にぶい橙	にぶい褐	○	○	○	○	○	○				口縁部に瘤状突起
	48	D-12	VIIa	VIa	深鉢	ナデ, 刺突文	丁寧なナデ	黄褐	にぶい黄	○	○	○			○	○			波状口縁
	49	F-6	VIIb	VIa	深鉢	ナデ, 刺突文	丁寧なナデ	にぶい黄褐	にぶい黄橙	○	○	○			○	○			波状口縁
	50	D-12	VIIb	VIa	深鉢	ナデ, 刺突文	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	○	○	○					○		
63	51	D-6	VIIb	VIa	深鉢	ナデ, 貝刺突文	丁寧なナデ	黄褐	にぶい黄褐	○	○								
		E-5	VIIa																
	52	F-6	VIIb		深鉢	ナデ, 貝刺突文	ミガキ	暗灰黄	黄灰	○	○								
	53	D-10	VIIb	VIb	深鉢	ナデ, 貝刺突文	丁寧なナデ	にぶい黄	にぶい黄	○	○					○	○		
	54	B-10	VII	VIb	深鉢	ナデ, 貝刺突文	ミガキ	にぶい黄橙	黄褐	○	○								
	55	B-12	VII	VIb	深鉢	ナデ, 貝刺突文	ナデ	明赤褐	黒褐	○	○						○		
	56	C-10	VII	VIb	深鉢	ナデ, 貝刺突文	ミガキ	暗灰黄	暗灰黄	○	○						○	○	外面煤付着
	57	D-12	VIIa	VIb	深鉢	ナデ, 貝刺突文	ミガキ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○	○							
	58	B-12	VIIb	VIb	深鉢	ナデ, 貝刺突文	ナデ	にぶい赤褐	オリーブ黒	○	○		○						外面煤付着
	59	D-12	VIIb	VIb	深鉢	ナデ, 貝刺突文	ナデ, ミガキ	にぶい橙	にぶい橙	○		○					○		
63	60	E-8	VIIa, VIIb	VII	深鉢	短貝条痕文, ナデ	工具ナデ	褐	黒褐	○	○							○	
	61	B-12	VIIb	VII	深鉢	短貝条痕文	ナデ	明褐	にぶい黄褐	○	○	○							
	62	E-10	VIIb	VII	深鉢	羽状文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○				○	○	○		
	63	E-5	VIIa	VII	深鉢	短貝条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄褐	○		○	○			○	○		
	64	E-9	VIIb	VII	深鉢	ミガキ, 短貝条痕文	ミガキ	にぶい褐	褐							○	○	○	
	65	B-12	VIIb	VII	深鉢	短貝条痕文	ナデ	褐	にぶい黄褐	○	○	○					○		30と同一個体の可能性
	66	F-11	VIIb	VII	深鉢	ナデ, 条痕文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい橙	○	○	○	○				○		煤付着
	67	E-7	VIIb	VII	深鉢	ナデ, 刺突文, 貝条痕文	ミガキ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○					○	○		
	68	B-11	VII	VII	深鉢	短貝条痕文	ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○	○	○						
	69	E-10	VIIb	VII	深鉢	ナデ, 短貝条痕文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○						○	○		
70	F-9	VIIb	VII	深鉢	ナデ, 短貝条痕文	ケズリ	にぶい橙	にぶい黄褐	○	○	○					○			

第11表 早期土器観察表2

挿図 番号	掲載 番号	出土区	層位	分類	器種	施文・調整		色調		胎土							備考			
						外面	内面	外面	内面	石英	長石	輝石	角閃石	雲母	礫	その他				
65	71	B-13	VIII	VII	深鉢	短貝条痕文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○			○							
	72	E-10	VIIb	VII	深鉢	ナデ, 短貝羽状文	ナデ	灰褐	灰褐	○	○			○	○	○			傾き等不明	
	73	E-10	VIIa・VIIb	VII	深鉢	ナデ, 短貝条痕文	ナデ	にぶい褐	灰褐	○		○		○	○	○				
	74	B-12	VIIb	VII	深鉢	ナデ, 短貝条痕文	工具ナデ	明褐	黄褐	○	○	○			○	○				
	75	F-8	VIIb	VII	深鉢	ナデ, 短貝条痕文	ミガキ	にぶい褐	灰褐	○	○			○	○					
	76	G-7	VIIb	VII	深鉢	ミガキ, 貝条痕文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○					○	○			
	77	D-8	VIIb	VII	深鉢	ミガキ, 貝条痕文	ナデ	黄褐	黄褐	○	○						○			
	78	D-10	VIIb	VII	深鉢	ナデ, 貝刺突文, 短貝条痕文	ナデ	にぶい黄褐	黄褐	○	○					○	○			
67	79	B-11	VII	VIIIa	深鉢	楕円押型文	楕円押型文, ナデ	浅黄	浅黄	○	○	○								
		D-10	VIIa																	
		E-12	VIIb																	
		F-7	VIIb																	
	80	F-11	VIIb	VIIIa	深鉢	楕円押型文	楕円押型文, ナデ	にぶい橙	黒褐	○	○					○	○			
	81	D-11	VIIa	VIIIa	深鉢	楕円押型文	楕円押型文, ナデ	明黄褐	明黄褐		○									
		F-10	VIIb																	
	82	F-10	VIIb	VIIIa	深鉢	ナデ	楕円押型文, ケズリ	褐	灰黄褐	○	○					○	○			
	83	D-12	VIIb	VIIIa	深鉢	楕円押型文	楕円押型文, ナデ	灰黄褐	にぶい黄橙		○									
	84	E-9	VIIb	VIIIa	深鉢	楕円押型文	楕円押型文, 工具ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐		○									
		E-10	VIIb																	
	85	F-7	VIIa	VIIIa	深鉢	楕円押型文	楕円押型文, ナデ	黄褐	暗灰黄	○	○									
F-7		VIIb																		
86	D-12	VIIb	VIIIa	深鉢	ナデ, 押型文	ナデ, 押型文	黒	にぶい褐	○	○							○	○	外面煤付着	
87	D-13	カクラン	VIIIa	深鉢	楕円押型文	ナデ	褐	にぶい褐	○	○	○									
88	F-8	VIIb	VIIIa	深鉢	楕円押型文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐	○	○										
89	E-10	VIIb	VIIIa	深鉢	楕円押型文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○										
90	D-8	VIIa	VIIIa	深鉢	楕円押型文, ナデ	ナデ	黄褐	にぶい黄褐	○	○										
	D-9	VIIb																		
91	E-9	VIIa	VIIIa	深鉢	楕円押型文, ナデ	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○	○			○	○						
92	D-10	VIIb	VIIIb	深鉢	山形押型文	山形押型文	にぶい黄	にぶい黄		○	○									
93	E-9	VIIb	VIIIb	深鉢	山形押型文	丁寧なナデ	にぶい黄橙	褐灰		○										
94	E-10	VIII	VIIIc	深鉢	押型文	ナデ	褐	褐	○	○				○	○					
95	E-10	VIIb	VIIIc	深鉢	押型文, ケズリ	ケズリのち ナデ	明赤褐	にぶい赤褐	○											
	F-10	VIIb																		
96	B-8	VII	IXa	深鉢	ナデ, 押型文	ナデ	黒褐	褐灰	○	○				○	○					
97	D-5	VIIb	IXa	深鉢	押型文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○						○	○				
98	B-7	VII	IXa	深鉢	押型文 (山形)	指ナデ	浅黄	浅黄												
	C-7	VII																		
99	B-8	VII	IXa	深鉢	ナデ, 押型文	ナデ	にぶい褐	にぶい褐						○	○	○				
100	D-7	VIIa	IXb	深鉢	ナデ, 燃糸文	ナデ	黒褐	暗褐	○						○	○	○			
101	E-8	VIIb	IXb	深鉢	ナデ, 燃糸文	ナデ	褐灰	灰黄褐	○						○	○	○			
102	C-7	VIIb	IXb	深鉢	ナデ, 条痕文, 燃糸文	ナデ	にぶい黄褐	にぶい黄褐	○						○	○	○			
103	B-6,7	VIIb下	IXb	深鉢	ナデ, 燃糸文	ナデ	黄褐	灰黄褐		○										
104	B-7	VIII																		
104	C-7	VIIb	IXb	深鉢	ナデ, 押型文, 燃糸文	ナデ	明赤褐	明褐		○	○									
105	E-8	VIIa	X	深鉢	ナデ, 沈線, キザミ目突帯, 刺突文	工具ナデ	にぶい褐	にぶい黄橙	○	○	○									
	E-9	VIIa																		
106	F-7	VIIa	X	深鉢	ナデ, 口縁部羽状文	丁寧なナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○											
F-9	VIII																			
107	D-11	VI, VIIa	X	深鉢	ナデ, 貝刺突文	ナデ	にぶい橙	橙	○	○				○	○					
108	D-8	VIIa	X	深鉢	羽状文, 刺突文	ナデ	褐	にぶい褐	○	○										
	G-10	VIIb																		
109	E-9	VIIb	X	深鉢	ナデ, 連点文, 縄文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄	○			○			○	○				
110	F-9	VII	X	深鉢	ナデ, 縄文	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○											
	G-10	VIIb																		
111	F-9	VIIa VIIb VII	X	深鉢	ナデ, 羽状文, 燃糸文	ケズリ	にぶい黄橙	浅黄	○		○	○								
	G-9	VIIa																		
112	F-9	VIIa, VIIb	X	深鉢	ナデ, 燃糸文	ケズリのちナデ	明黄褐	にぶい黄橙	○		○									
113	F-9	VIIa	X	深鉢	ナデ, 刻目, 燃糸文	ケズリ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○											
114	F-11	X	XIa	深鉢	沈線, 微隆帯, ナデ	ナデ	黄褐	明黄褐	○		○			○	○					
115	F-11	VIIb, VIII	XIa	深鉢	沈線, 微隆帯, ナデ	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○			○	○					
116	F-11	VII	XIa	深鉢	沈線, 微隆帯, ナデ	ナデ	黄褐	黄褐	○											
117	E-11	VIIa	XIb	深鉢	ナデ, 沈線刺突文	ナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	○		○									
118	E-10	VIIb	XIb	深鉢	ナデ, 沈線刺突文	ナデ	黄褐	にぶい黄橙	○		○									
119	E-12	VIIb	XIb	深鉢	ナデ, 沈線, 網目燃糸文	ナデ	にぶい褐	にぶい黄褐	○	○										
120	F-10	VIIb	XIc	深鉢	ナデ, 刺突文	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	○		○									
121	F-10	VIIb	XIc	深鉢	ナデ, 刺突文	ナデ	にぶい褐	橙	○	○	○	○								

第 12 表 早期石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土区	層位	器種	石材	計測値				備考
						最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	
72	122	D-11	VIIa	石鏃	黒曜石 5 類	13.5	12.7	0.3	0.6	
	123	A-11	VIIb	石鏃	黒曜石 8 類	17.5	10.4	0.2	0.4	一部欠損
	124	E-11	VIIb	石鏃	チャート	18.7	11.4	0.2	0.6	
	125	E-9	VIIa	石鏃	黒曜石 1 類	19.1	13.8	0.3	0.8	
	126	C-6	VII	石鏃	黒曜石 8 類	16.7	14.9	0.4	0.8	
	127	D-10	VIIb	石鏃	チャート	19.6	16.3	4.2	1.0	
	128	E-8	VIIa	石鏃	黒曜石 8 類	23.5	16.7	4.2	1.1	
	129	C-9	VII	石鏃	黒曜石 8 類	22.1	20.0	3.8	1.0	一部欠損
	130	D-5	VIIb	石鏃	黒曜石 1 類	15.2	11.4	2.8	0.4	
	131	E-11	VIIb	石鏃	黒曜石 3 類	18.9	12.9	3.6	0.7	
	132	B-10	VIIb	石鏃	チャート	17.6	16.8	2.9	0.8	
	133	C-9	VII	石鏃	黒曜石 1 類	20.1	17.3	3.3	0.8	
	134	E-7	VIIa	石鏃	黒曜石 8 類	23.1	15.6	2.9	0.8	
	135	F-9	VIIb	石鏃	黒曜石 8 類	20.1	14.4	2.9	0.6	一部欠損
	136	E-8	VIIb	石鏃	黒曜石 2 類	19.6	15.1	3.5	0.7	一部欠損
	137	F-10	VIII	石鏃	チャート	26.3	15.6	0.3	0.9	
	138	B-11	VII	石鏃	チャート	31.9	23.9	3.6	1.9	一部欠損
	139	D-9	VIIb	石鏃	チャート	37.7	22.8	3.4	1.7	一部欠損
	140	C-12	VII	石鏃	チャート	35.4	20.6	3.4	24.0	
	141	E-10	VIIb	石鏃	チャート	1.1	1.0	0.3	0.4	一部欠損
142	F-10	VIII	石鏃	安山岩	11.2	5.1	1.7	0.1	一部欠損	
143	D-11	VIIa	石鏃	黒曜石 1 類	1.8	14.2	7.3	14.0	未製品	
144	F-9	VIIb	石匙	安山岩	35.0	19.0	4.0	3.5		
73	145	E-9	VIIb	石ノミ	ホルンフェルス	48.0	22.0	6.0	10.3	
	146	B-7	VIIIb	石錐	黒曜石 4 類	24.0	11.0	6.0	1.7	
	147	F-6	VIIb	石錐	ホルンフェルス	22.0	19.0	2.0	1.7	
	148	E-9	VIIa	剥片	頁岩	61.0	44.0	12.0	17.7	
	149	F-9	VIII	剥片	黒曜石 3 類	11.0	4.0	1.0	0.1	
	150	G-10	VIIb	二次加工剥片	黒曜石 4 類	23.0	23.0	9.0	3.8	
	151	E-10	VIIb	二次加工剥片	チャート	24.0	16.0	5.0	3.4	
	152	C-10	VII	石核	チャート	25.0	44.0	24.0	30.1	
	153	D-8	VIII	石核	黒曜石 5 類	16.0	27.0	12.0	3.1	
	154	F-9	VIIb	打製石斧	ホルンフェルス	97.0	48.0	20.0	118.4	
74	155	D-9	VIIb	打製石斧	ホルンフェルス	78.0	37.0	20.0	72.1	
	156	E-8	VIIb	磨製石斧	ホルンフェルス	39.0	34.0	13.0	27.9	一部欠損
	157	D-11	VIIb	磨敲石	砂岩	115.0	107.0	62.0	1063.0	
	158	D-7	VIIb	磨敲石	砂岩	73.0	65.0	32.0	135.7	一部欠損
	159	F-10	VIII	磨敲石	安山岩	29.0	81.0	40.0	524.0	
	160	F-11	VIIb	磨敲石	凝灰岩	79.0	70.0	36.0	290.5	
	161	C-12	VIIa	磨敲石	凝灰岩	96.0	73.0	50.0	544.0	
	162	E-11	VIIb	磨敲石	安山岩	47.0	86.0	32.0	192.2	一部欠損
	163	C-7	VIIb	磨敲石	砂岩	76.0	47.0	41.0	226.0	一部欠損
	164	G-10	VIIb	磨敲石	安山岩	58.0	80.0	44.0	254.0	一部欠損
75	165	C-6	VIIb	磨敲石	砂岩	69.0	43.0	37.0	127.7	一部欠損
	166	D-10	VIIb	磨敲石	安山岩	34.0	76.0	39.0	126.2	一部欠損
	167	C-7	VIIb	磨敲石	花崗岩	98.0	67.0	40.0	402.5	
	168	E-7	VIIb	磨敲石	安山岩	77.0	70.0	46.0	351.0	
	169	F-9	VIIa	軽石加工品	軽石	75.0	72.0	61.0	140.2	一部欠損
	170	E-10	VIIb	石皿片	砂岩	45.0	82.0	11.0	60.0	一部欠損
171	F-10	VIIb	石皿	安山岩	281.0	256.0	96.0	5810.0		



近世遺構位置図

### 第3節 中世・近世の調査

#### 調査の概要

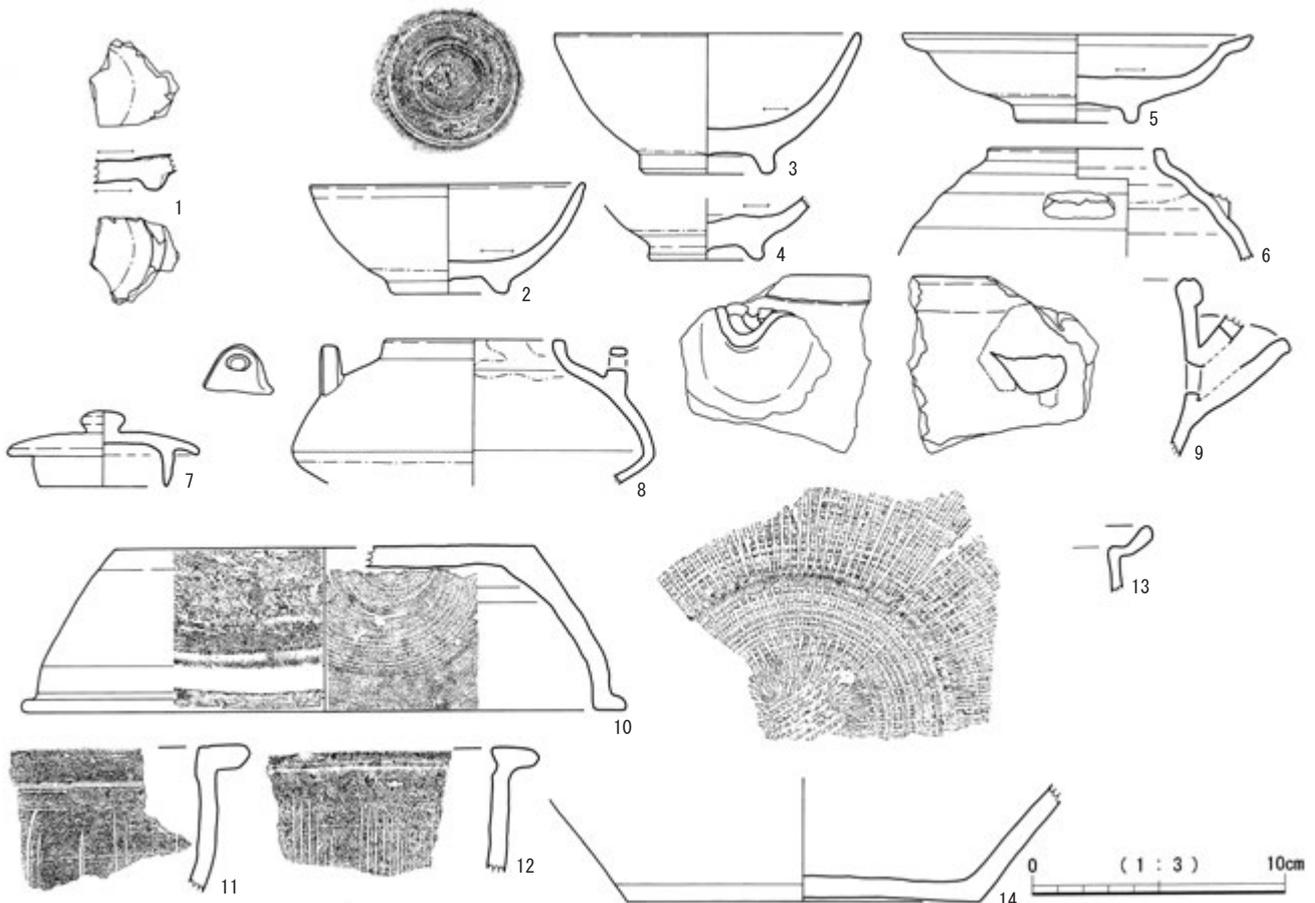
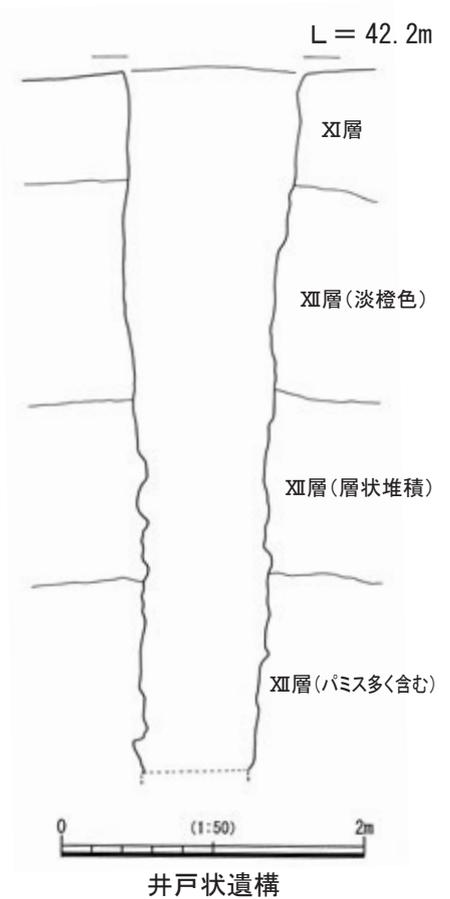
中世・近世の調査では、遺構1基が検出された。遺物は他の時代と比較するとごく少ない。また、集中的に何か所に遺物が集中するという状況も見られなかった。

#### 1 遺構

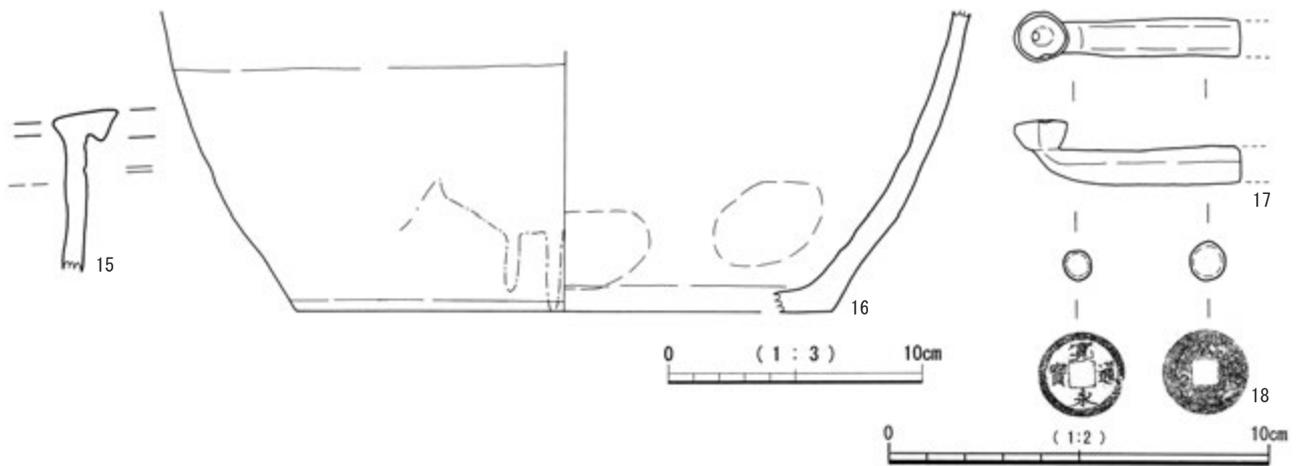
##### 井戸状遺構（第80図）

E-7区のXII層上面にて検出した。埋土中に近世の陶磁器等が入っていることから、近世以降の遺構とみられる。XI層より上層の調査においても、円形の土坑に類似したものが存在するという認識はあったが、埋土が攪乱土に類似するため、遺構ではないと判断されていたものである。XII層の調査が終了した時点になっても、底面が検出されなかったため、約1mの深さまで半截して調査したところ、底面が確認されず、さらに下方まで向かうことが明らかとなったため、周辺の安全を確保した後に重機等を用いた断ち割り半截を行うこととした。検出面から約5mの深さ（軽石の多くみられるシラス層）まで、掘り下げを行ったが、その時点でも底面は検出されなかったため、遺構の底面は確認することができなかったが、安全面等を考慮してそれ以下の調査は行わないこととした。

遺構の形状は、上面観はほぼ円形であった。断面形状は、検出面が幅1.2m、調査最下面が幅0.7mとなっており、上方から下方に向かって若干狭くなるものである。廃棄に伴う祭祀遺物やそれに類するとみられる遺物が不明であるので、明確ではないが、形状や規模などから井戸として使用されていたことが想定できる遺構である。



第80図 近世遺構，中近世遺物1



第81図 中近世遺物2

2 遺物

青磁（第80図1）

1は龍泉窯系青磁の碗である。見込みは釉剥ぎされている。時期は14世紀後半である。

龍門司（薩摩）焼（第80図2～5）

2, 3, 4は、加治木・始良系とも言われる薩摩焼の龍門司焼の碗である。胎土は緻密である。重ね焼きのため、見込みに蛇の目状の釉剥ぎがされている。2と4は小型の碗で、2と3は鉄釉がかかる。

5は皿である。白化粧土に透明釉がかかるもので、見込みに蛇の目状の釉剥ぎが見られる。これらは18世紀後半のものである。

苗代川（薩摩）焼（第80・81図6～16）

薩摩焼の苗代川系の遺物は近世終末から近代にかけてのものが主体をなす。6は耳付きの壺である。外面と内面上部に鉄釉がかかる。7は土瓶の蓋である。上面のみ

鉄釉がかかる。8は土瓶である。褐釉が胴部上半分と内面にかかる。9は釜である。民俗例では山茶家と呼ばれるもので、片口内に把手をつけるための耳がついている。二次焼成を受けている。10は蓋である。口唇部と底面は施釉後、剥ぎ取られて無釉となっている。11～14は播鉢である。11と12は口縁部が逆「L」字状を呈し、口唇部は施釉後、剥ぎ取られて無釉となっている。14の底面は施釉後、剥ぎ取られて無釉で播り目は細く密に入っている。15と16は甕である。15の口唇部は施釉後に剥ぎ取られて、口縁部は「T」字状を呈する。内外面に、ヘラ状工具による横筋が観察される。16の内面下位には重ね焼き時に使用した目跡がある。

その他（第81図17, 18）

17は煙管である。完形で火皿の口径は約12mmを測る。18は寛永通寶である。寛文8年（1668年）を初鑄年とする新寛永である。

第13表 中世・近世遺物観察表

挿図番号	掲載番号	器種	法量 (cm)			産地	取上番号	出土区	層位	釉薬色調	備考
			口径	底径	器高						
80	1	碗	—	—	—	龍泉窯	995	F-9	VIIa	オリーブ灰色	見込み釉剥ぎ
	2	碗	10.8	4.8	4.35	龍門司	一括	G-7, 8	北壁側攪乱	黒色鉄釉	見込み蛇ノ目釉剥ぎ
	3	碗	12	5.4	5.6	龍門司	一括	G-11	攪乱	鉄釉	見込み蛇ノ目釉剥ぎ
	4	碗	—	4.4	2.5	龍門司	一括	G-8	攪乱	褐色	見込み蛇ノ目釉剥ぎ
	5	皿	13.8	4.8	3.6	龍門司	一括	G-7	攪乱	化粧土・透明	見込み蛇ノ目釉剥ぎ
	6	耳付壺	—	—	—	苗代川	—	—	—	黒褐色鉄釉	内外面施釉
	7	蓋	7.5	—	3.0	苗代川	一括	F-5	表土	オリーブ褐色	上面のみ鉄釉
	8	土瓶	7.2	—	—	苗代川	一括	—	表土	オリーブ褐色	—
	9	釜	—	—	—	苗代川	—	F-5	表土	黄褐色	二次焼成
	10	蓋	24	16.6	6.5	苗代川	一括	—	表土	オリーブ灰色	口唇部と外底面は施釉後に剥取り
	11	播り鉢	—	—	—	苗代川	一括	G-6	表土	暗オリーブ色	口唇部は施釉後に剥取り
	12	播り鉢	—	—	—	苗代川	一括	G-9	攪乱	暗赤褐色	口唇部は施釉後に剥取り
	13	播り鉢	—	—	—	苗代川	—	G-7	攪乱	オリーブ黒	—
	14	播り鉢	—	14	—	苗代川	—	—	表土	黒褐色	底面は施釉後に剥取り
81	15	甕	—	—	—	苗代川	一括	F-5	表土	オリーブ黒色	口唇部は施釉後に剥取り
	16	甕	—	21	—	苗代川	—	F-5	表土	オリーブ黒色	内面に目跡
	17	キセル	—	—	—	—	一括	G-7, 8	北壁側攪乱	—	—
	18	寛永通寶	2.3	—	—	—	—	G-8	攪乱	—	完形 初鑄年1668年

## 第V章 自然科学分析等の報告

### 第1節 宮脇遺跡出土資料の自然科学分析

遺構内出土試料1～6の年放射性炭素年代測定，樹種同定

パリノサーヴェイ株式会社

図版1 炭化材（1）

図版1 炭化材（2）

### 第2節 火山灰等についての所見

成尾 秀仁

## 第1節 宮脇遺跡出土試料の自然科学分析

### (年代測定, 樹種同定)

パリノ・サーヴェイ株式会社

#### はじめに

宮脇遺跡は、田原川の右岸に形成された台地縁辺部に位置する。旧石器時代～近世の複合遺跡であるが、中心となるのは旧石器時代と縄文時代早期である。今回は、遺構出土の炭化材について樹種と年代を知り、遺構の年代や用材に関する情報を得る。

#### 1. 試料

樹種同定・年代測定を行う試料は、No. 1 (土坑1号), No. 2 (土坑2号), No. 3 (集石10号), No. 4 (集石44号), No. 5 (集石41号), No. 6 (土坑3号)の6点である。それぞれの試料には、複数の炭化材が混じっている。いずれも割材片で、最大1～2 cm程度である。分析には各試料の中で最大のもを選び、年代測定と炭化材同定が同一個体で行えるようにする。ただし、No. 5に関しては、最大の大きさでも両方行えるものが存在しなかった。このため、実体顕微鏡下で観察し、同一種類と思われるものを2個選択し、一方を年代測定に、一方を炭化材観察用に使用する。

#### 2. 分析方法

##### (1) 樹種同定

試料観察した後、年代測定に必要な量をトリミングしながら切り出す(No. 5を除く)。残った炭化材について、剃刀を用いて木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面を作成する(No. 5のみ、樹種同定と放射性年代測定は種類が同じだが別個体)。双眼実体顕微鏡や電子顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982), Wheeler他(1998), Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

##### (2) 放射性炭素年代測定

試料の周囲を削り落として40～50mg程度に調整する。削り落とした部分は樹種同定に用いる(No. 5を除く)。試料は、塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水

酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、塩酸によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理AAA:Acid Alkali Acid)。濃度は塩酸、水酸化ナトリウム共に1mol/Lである。試料が化学的に脆弱な試料は、炭素の損耗を防ぐため、アルカリの濃度を薄くする(AaAと記載)。

試料の燃焼、二酸化炭素の精製、グラファイト化(鉄を触媒とし水素で還元する)はElementar社のvario ISOTOPE cube とIonplus社のAge3を連結した自動化装置を用いる。処理後のグラファイト・鉄粉混合試料をNEC社製のハンドプレス機を用いて内径1mmの孔にプレスし、測定試料とする。

測定はタンデム加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を用いて、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定する。AMS測定時に、米国国立標準局(NIST)から提供される標準試料(HOX-II)、国際原子力機関から提供される標準試料(IAEA-C6等)、バックグラウンド試料(IAEA-C1)の測定も行う。 $\delta^{13}C$ は試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表したものである。放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。測定年代の表示方法は、国際学会での勧告に従う(Stuiver & Polach 1977)。また、暦年較正用に一桁目まで表した値も記す。暦年較正に用いるソフトウェアは、Oxcal4.3(Bronk, 2009)、較正曲線はIntcal13(Reimer et al., 2013)である。

#### 3. 結果

##### (1) 樹種同定

結果を表1に示す。検出された種類は、針葉樹が1種類(カヤ)、広葉樹が3種類(アカガシ亜属、スダジイ、ツバキ属)である。以下に検出された種類の形態的特徴を記す。

・カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には2本が対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

表1. 樹種同定結果

No.	出土区	報告書掲載遺構名	試料No.	樹種名	備考
1	E10	土坑1号	7	スダジイ	炭化物(床面検出)
2	F6	土坑2号	31	カヤ	炭化物6
3	E12	集石10号	58	アカガシ亜属	炭化物4
4	E10	集石44号	65	ツバキ属	炭化物4
5	E10	集石41号	78	ツバキ属	炭化物2
6	F6	土坑3号	82	カヤ	炭化物3

・ツバキ属 (*Camellia*) ツバキ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形～角張った

表 2. 放射性炭素年代測定結果

試料	種別／性状	樹種	方法	補正年代 (暦年較正用) BP	$\delta^{13}C$ (‰)	暦年較正年代				Code No.	
						年代値		確率%			
1	炭化材	スダジイ	AaA (0.05M)	8420±30 (8419±28)	-24.26 ±0.17	$\sigma$	cal BC 7531 - cal BC 7488	9480 - 9437 calBP	68.2	YU- 8137	pal- 11370
						$2\sigma$	cal BC 7568 - cal BC 7458	9517 - 9407 calBP	95.4		
2	炭化材	カヤ	AAA (1M)	8605±30 (8604±28)	-23.89 ±0.26	$\sigma$	cal BC 7608 - cal BC 7584	9557 - 9533 calBP	68.2	YU- 8138	pal- 11371
						$2\sigma$	cal BC 7674 - cal BC 7577	9623 - 9526 calBP	95.4		
3	炭化材	アカガシ亜属	AaA (0.05M)	8440±30 (8441±28)	-26.68 ±0.18	$\sigma$	cal BC 7546 - cal BC 7498	9495 - 9447 calBP	68.2	YU- 8139	pal- 11372
						$2\sigma$	cal BC 7572 - cal BC 7486	9521 - 9435 calBP	95.4		
4	炭化材	ツバキ属	AAA (1M)	8545±30 (8547±28)	-23.88 ±0.32	$\sigma$	cal BC 7595 - cal BC 7569	9544 - 9518 calBP	68.2	YU- 8140	pal- 11373
						$2\sigma$	cal BC 7597 - cal BC 7545	9546 - 9494 calBP	95.4		
5	炭化材	ツバキ属	AAA (1M)	8425±30 (8427±28)	-25.51 ±0.27	$\sigma$	cal BC 7536 - cal BC 7492	9485 - 9441 calBP	68.2	YU- 8141	pal- 11374
						$2\sigma$	cal BC 7571 - cal BC 7473	9520 - 9422 calBP	95.4		
6	炭化材	カヤ	AAA (1M)	8550±30 (8552±28)	-22.78 ±0.27	$\sigma$	cal BC 7596 - cal BC 7571	9545 - 9520 calBP	68.2	YU- 8142	pal- 11375
						$2\sigma$	cal BC 7599 - cal BC 7546	9548 - 9495 calBP	95.4		

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 $\sigma$  (測定値の68.2%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、酸・アルカリ・酸処理を示す。AaAは試料が脆弱なため、アルカリの濃度を薄くして処理したことを示す。
- 5) 暦年の計算には、Oxcal v4.3.2を使用。
- 6) 暦年の計算には1桁目まで示した年代値を使用。
- 7) 較正データセットはIntcal13を使用。
- 8) 較正曲線や較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 9) 統計的に真の値が入る確率は、 $\sigma$ が68.2%、 $2\sigma$ が95.4%である。

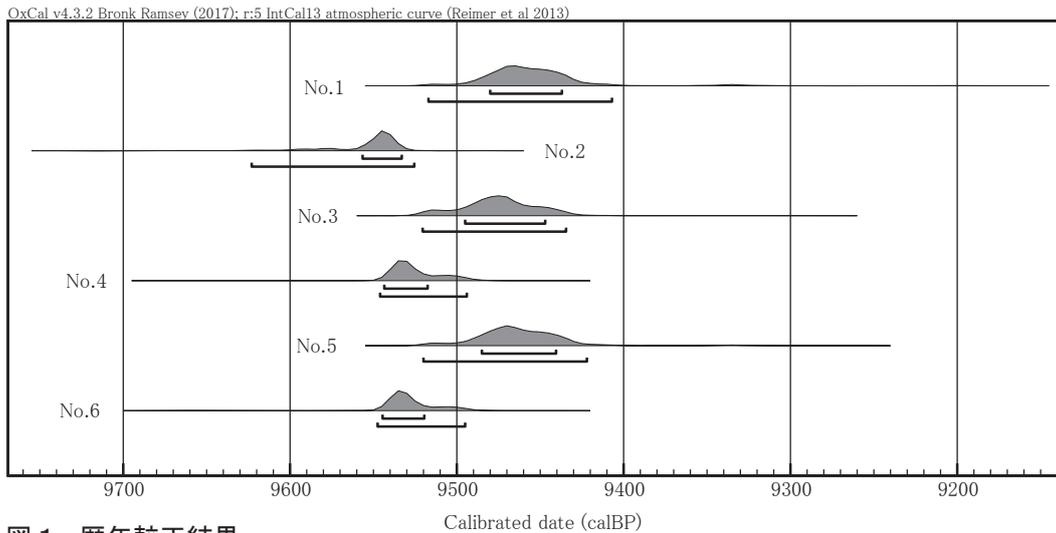


図 1. 暦年較正結果

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと同複合放射組織とがある。

・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイ属

環孔性放射孔材で、道管は接線方向に1～2個幅で放射方向に配列する。孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高。集合～複合放射組織がみられないので、スダジイとした。

楕円形、単独および2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列～階段状に配列する。放射組織は異性、1～3細胞幅、1～20細胞高。

(2) 放射性炭素年代測定

結果は表 2 に示す。分析試料は、No. 1 と No. 3 は化学的にやや脆弱で、炭素の損耗を防ぐためにアルカリ濃度を薄くしたが、他の 4 点は定法での処理が可能である。また、いずれも加速器質量分析装置を用いた年代測定に必要な炭素量が回収できている。同位体効果を考慮した測定値は、No. 1 が 8420±30BP、No. 2 が 8605±30BP、No. 3 は 8440±30BP、No. 4 は 8545±30BP、No. 5 は 8425±30BP、No. 6 は 8550±30BP である。

暦年較正は、大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年

として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動、その後訂正された半減期(<sup>14</sup>Cの半減期5730±40年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。較正用データセットは、Intcal13 (Reimer et al., 2013)を用いる。2σの値は、No. 1が9517～9407calBP, No. 2が9623～9526calBP, No. 3が9521～9435calBP, No. 4が9546～9494calBP, No. 5が9520～9422calBP, No. 6が9548～9495calBPである。

#### 4. 考察

検出された炭化材は、小片の割材のため当時の用途は不明であるが、いずれも有用材であるため、なんらかの用途で使われた木材が、最終的に火熱を受けて炭化材となった可能性がある。樹種構成は、カヤ、アカガシ亜属、スダジイ、ツバキ属で、いずれも暖地に生育する種類であるため、周囲で容易に入手できる樹木であったと思われる。また、これらの樹木は木材の中では硬い部類に入るため、炭として残りやすいという側面も持っている。九州南部の縄文時代の樹種同定結果をみると、カヤ、アカガシ亜属、スダジイは炭化材としての出土があり、用材としての出土も多い。一方、ツバキ属は用材として複数の出土例がある(伊藤・山田編, 2012)。

出土材の暦年較正結果は、いずれも近似し9450～9550年前の間に入る。細かくみるとNo. 1, No. 3, No. 5が9450～9500年前に、No. 2, No. 4, No. 6が9500～9550年前に分布の中心がある。縄文早期とされる時代観とも調和的である。

#### 引用文献

- Bronk RC., 2009, Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51, 337-360.
- 林 昭三, 1991, 日本産木材顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編), 2012, 木の考古学 出土木製品用材データベース. 海青社, 449p.
- Reimer PJ., Bard E., Bayliss A., Beck JW., Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng

H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP., Haflidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG., Hughen KA., Kaiser KF., Kromer B., Manning SW., Niu M., Reimer RW., Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM., van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0-50,000 years cal BP. *Radiocarbon*, 55, 1869-1887.

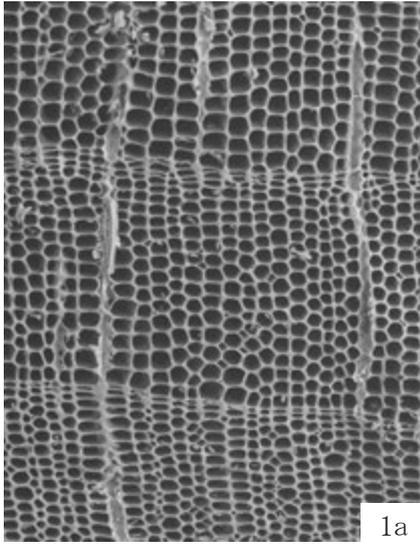
Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification].

Stuiver, M., and Polach, H. A., 1977, Discussion Reporting of <sup>14</sup>C Data. *Radiocarbon*, 19, 355-363.

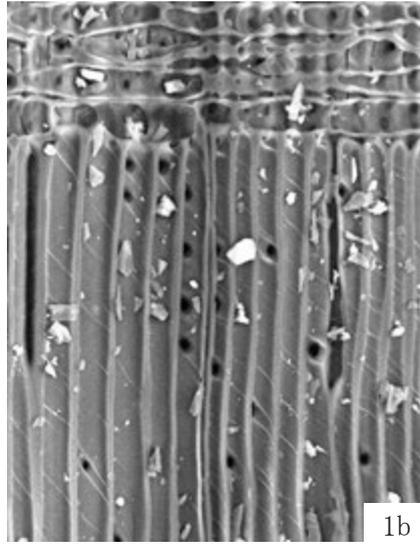
島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.

Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].

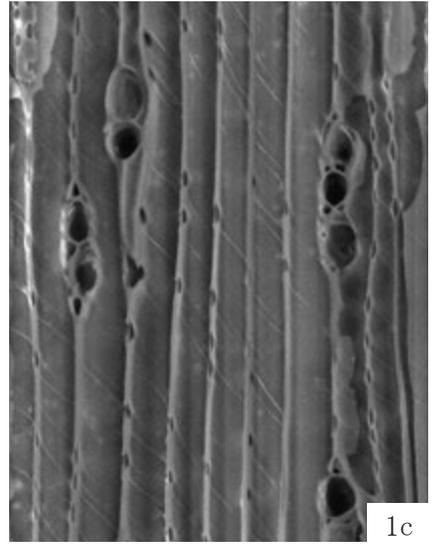
図版1 炭化材(1)



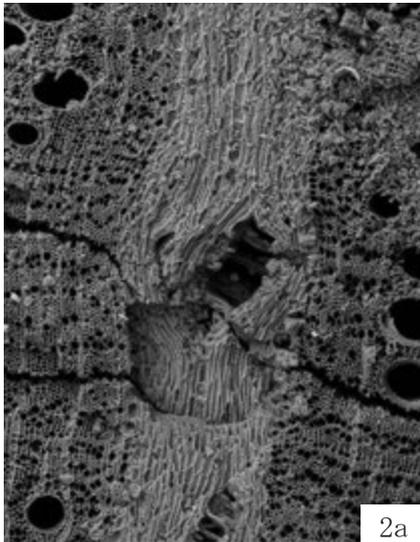
1a



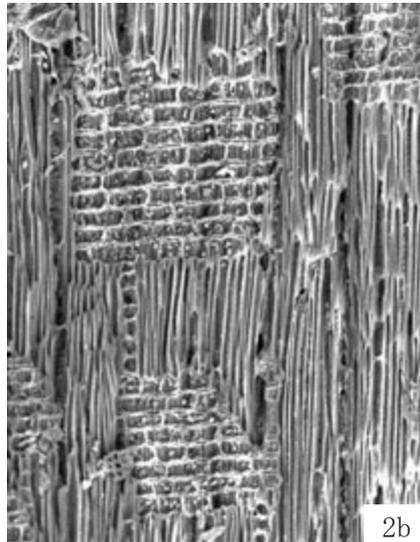
1b



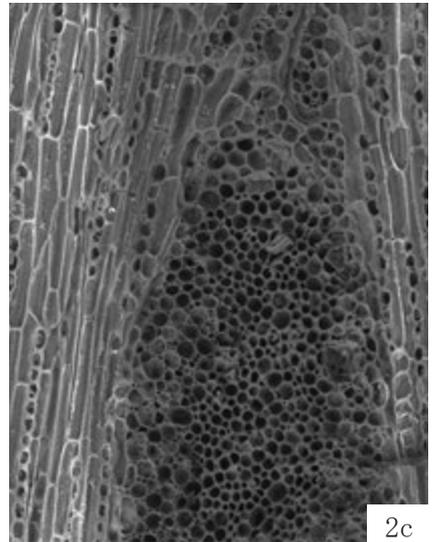
1c



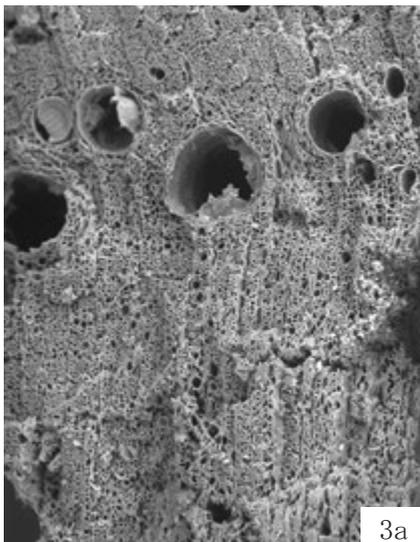
2a



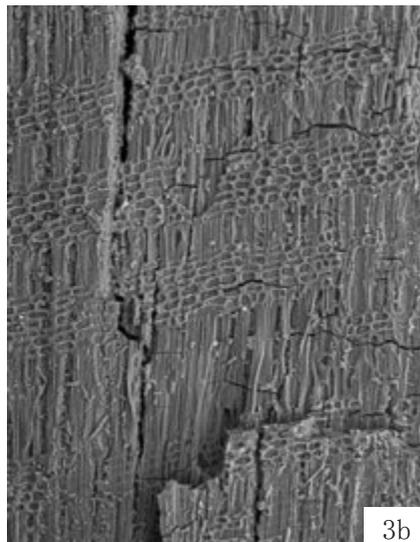
2b



2c



3a



3b

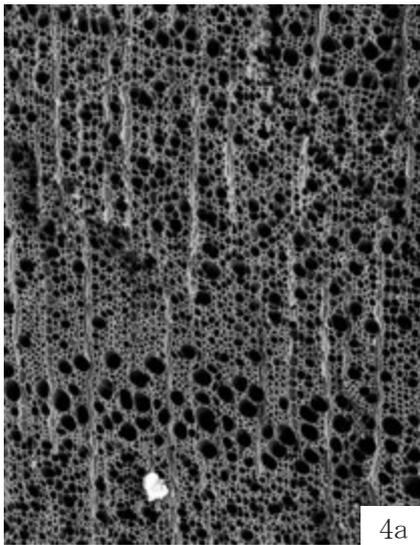


3c

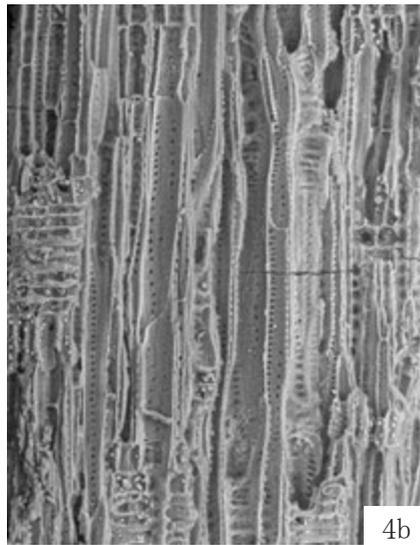
- 1. カヤ (No. 2)
- 2. アカガシ亜属 (No. 3)
- 3. シイ属 (No. 1)

スケールは100  $\mu$ m  
a: 木口 b: 柁目 c: 板目

図版2 炭化材(2)



4a



4b



4c

4. ツバキ属 (No. 4)

スケールは100  $\mu$ m  
a: 木口 b: 柁目 c: 板目

## 第2節 火山灰等についての所見

成尾英仁

### 1. 層序

遺跡の基盤は入戸火砕流堆積物及びその二次堆積物である。入戸火砕流堆積物中には、火砕流堆積物定置後のガスの吹き抜け跡であるセグリゲーション・パイプが多数あり、パイプ内および周辺に鶏卵大以下の火山豆石が散在、もしくは密集して産する。二次シラス層は層厚1～2mで、砂層・シルト層および軽石混じり砂礫層からなり、それらが波打ちながら堆積する。

二次堆積物の上には粘質土壌層（ローム）、黒色腐植土、起源を異にする数枚のテフラが堆積する。ローム層は暗茶褐色を帯びた粘質土の土壌層であり、桜島起源のテフラを挟在すると推定されるが、肉眼観察では識別できなかった。ロームはテフラおよび風成塵を主体とし、それらに黒色腐植土が混在したもので粘土化が進行している。

このローム層の上位には桜島起源の薩摩テフラ、黒色腐植土・明褐色土、鬼界カルデラ起源のテフラ、池田カルデラ起源のテフラ、黒色腐植土の順に堆積する。最上部の黒色腐植土層は層厚が1m近くあるが、肉眼観察では開聞岳起源のテフラは認められない。

地点によっては池田テフラ上位の黒色腐植土層中に、径1～2mm以下の黄白色軽石が点在する。他遺跡での観察結果と総合すると、霧島火山起源の御池軽石と推定される。

鬼界カルデラ起源のテフラ（7,300ca1BP）は、幸屋降下軽石と鬼界アカホヤ火山灰であり、幸屋火砕流堆積物は確認されない。幸屋降下軽石はオガクズ状～小豆大の軽石からなり、層厚10cm程度で堆積する。鬼界アカホヤ火山灰は基底部には、層厚5cm程度で大豆大～ウズラ卵大以下の軽石や火山豆石を含む層があり、それに連続して鬼界アカホヤ火山灰が堆積する。鬼界アカホヤ火山灰層は層厚約30cmである。

幸屋降下軽石層直下、および鬼界アカホヤ火山灰層中には砂層が堆積する。鬼界アカホヤ火山灰層中の砂層は10～30cmの層厚で、遺跡の高所部を除きどの地点でも認められる。これに対し、幸屋降下軽石層直下の砂層は、遺跡の南西部のみの狭い範囲でレンズ状に堆積する。

### 2. 鬼界アカホヤテフラ層中の砂層

鬼界アカホヤ火山灰層中の砂層は、宮脇遺跡近隣の多くの遺跡で認められるものと同様である。砂層が縄文時代早期の明褐色土層・黒色腐植土層の上のり、鬼界アカホヤ火山灰層に覆われる例は多数ある。大崎町荒園遺跡では下位の二次シラス層から上昇する様子が観察されており、地震時の液状化現象により噴き出した砂と考えられる。ただ、本遺跡では噴砂脈は確認できなかった。おそらく噴砂脈は遺跡範囲外にあると推定される。砂は大量の無色透明なバブルウォール型の火山ガラス、黒褐色のバブルウォール型の火山ガラスから構成され、無色透明なものは二次シラス層に、黒褐色のものは鬼界アカホヤ火山灰に由来する。

砂層は低所の傾斜地でも旧地形に平行に厚く堆積し、通常の流水による堆積物のような水平な堆積構造は見られない。これは地下水と一緒に噴き出した砂が傾斜面を流れ下る過程で、水と砂のセパレーションが起こったためと考えられる。すなわち、噴き出した水は早々に流れ去ったが、砂は地表面に生えていた草木にトラップされて取り残され、傾斜地でも地表面に平行に厚く堆積したと考えられる。

宮脇遺跡北東部にある平良上C遺跡では砂層上部に大量の軽石が堆積するが、宮脇遺跡ではごくわずかな量の軽石が堆積するのみである。これは液状化発生源の地層が砂がちで、軽石がほとんど入っていなかったためと推測される。

砂層が幸屋降下軽石層に覆われるのはこれまで知られ

ておらず、宮脇遺跡が初めての確認例である。大隅半島の多くの遺跡では、砂層が縄文時代早期の明褐色土層・黒色腐植土層上に直接堆積し、鬼界アカホヤ火山灰に覆われる例がある。これは本来、鬼界アカホヤ火山灰の降下堆積中に噴き出した噴砂であり、これが鬼界アカホヤ火山灰層下部に堆積する幸屋降下軽石層を侵食した結果である。

これに対し、宮脇遺跡で見られる砂層は明確に幸屋降下軽石層に覆われ、幸屋降下軽石噴出前の砂層であることは確実である。砂層と幸屋降下軽石層との間には、顕著な風化帯・黒色腐植土は見られず、またガリー侵食などの痕跡も無い。このことから、両者の時間差はほとんど無いと考えられる。砂層はややピンク色を呈した細粒砂～シルト質であり、下位にある二次シラス層のメンバーに類似する。砂は無色透明なバブルウォール型の火山ガラス、黒褐色のバブルウォール型の火山ガラスから構成される。砂には若干であるが黒雲母の風化生成物が含まれる。付近の二次シラス層中には黒雲母が含まれるものもあり、砂は二次シラスに起源を持つと推定される。

幸屋降下軽石層直下の砂層については、二次シラス層に起源を持つ噴砂の可能性が高いが、噴出口が見つからない点、鬼界アカホヤ火山灰層中の砂に比べ色調・粒径が異なる点があり、単純に噴砂とは断定できない。ただ、遺跡全体が平坦であり、大雨などで流されてきた砂の可能性は低い。付近の河川・海岸に堆積する砂には、大隅花崗岩由来の黒雲母が若干量入っており、砂が海岸からもたらされた可能性、すなわち津波堆積物の可能性も検討する必要がある。



現地指導の様子



V層中の2回の噴砂痕 (A-5・6区南側)



土層剥ぎ取り資料 (A-7区南側)

## 第Ⅵ章 総括

### 第1節 概要

宮脇遺跡の旧石器時代の包含層はXb層・Xb'層・Xc層とXIa層・XIc層，縄文時代早期の包含層はVI層・VIIa層・VIIb層・VIII層である。

旧石器時代と考えられる礫群は，Xb層で1基，Xd層上面で1基検出した。

また遺物はXb層～XIc層にかけては旧石器時代の遺物が出土している。

縄文時代早期と考えられる遺構は，集石44基，土坑22基が検出された。土坑の検出面はほとんどがIX層で，VIIb層とVIII層が1基ずつ含まれる。集石の検出面はVIIa・VIIb層であった。

また，遺物は主にVIIa層からVIII層にかけて出土している。このなかで前葉の土器はVIII層を中心に，中葉の土器はVII層を中心に出土している。石器は石鏃・磨石・チップ等が出土している。縄文時代早期の遺物を包含する層の厚さは，おおよそ55cm程度となる。

遺構については，検出面・埋土及び遺物の出土状況等から時期を判断した。また，土器の分類は，包含層出土の遺物をもとにI～XI類に区分した。石器については剥片石器と礫石器に大別し，それぞれを器種・形態ごとに細別した。

本遺跡で出土した黒曜石は1～9類に分類しているが，そのうち1～8類はそれぞれ

1類は伊佐市大口日東及び五女木，2類は佐賀県伊万里市腰岳，3類は熊本県人吉市桑ノ木津留及び上青木，4類は鹿児島市三船，5類は薩摩川内市樋脇町上牛鼻及び日置市市来町平木場，6類は錦江町馬場の長谷，8類は大分県姫島で産出する黒曜石に類似する。また，7類は内屋敷UT群ないし霧島系と称される黒曜石に類似する。

旧石器時代の遺物の出土分布は調査区の北部と東部に集中する。ここは調査区の東を流れる田原川によって浸食されたシラス台地の縁辺部にあたり，同時に標高43m以上の調査区内の微高地ともいえる場所である。一方，西側の緩やかな傾斜地にはあまり出土が見られない。これは概ね縄文早期の遺物の出土地点と一致する。このことから，この地域では旧石器時代の人間は縄文時代早期と同様の条件の土地に生活していたことが考えられる。

### 第2節 旧石器時代の調査

#### 1 遺構

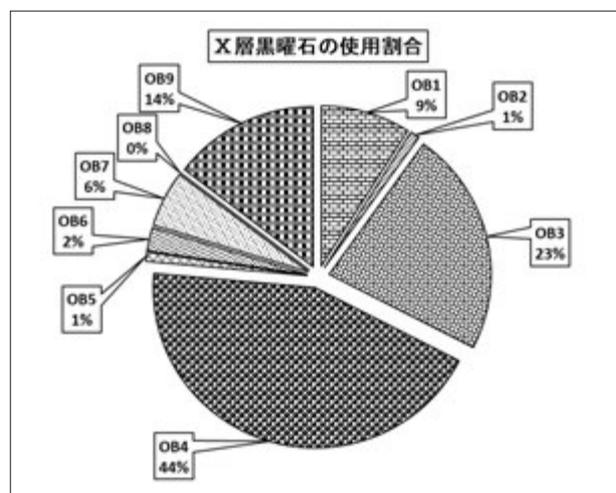
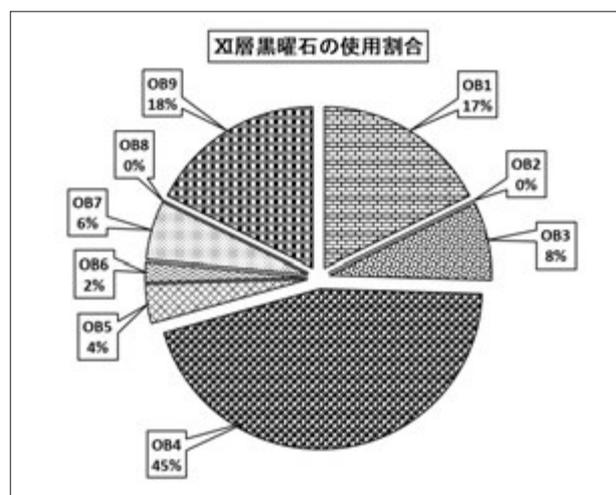
礫群が2基検出された。層位が違い，検出位置が大きく離れていることから，同時期のものとは考えられない。1号礫群（Xb層・D-12区）は調査区内で最も標高の高い地点にあり，石材は泥岩，砂岩，ホルンフェルス，

安山岩と多岐にわたるものである。一方2号礫群（Xd層・E-6区）は調査区西側の緩やかな斜面上にあり，石材は全て砂岩である。炭化物等は無かったが被熱により破砕していたことから，調理施設として使用されたことも考えられる。

#### 2 遺物

掲載した出土石器は，ナイフ形石器11点，三稜尖頭器1点，台形石器1点，搔・削器類7点，彫器1点，石錐2点，楔形石器1点，細石刃5点，細石刃核4点，細石刃石器群に伴うとみられる調整剥片7点，その他の剥片類15点，石核1点，磨・敲石類6点の計62点である。

出土石器には，ナイフ形石器文化期に帰属するナイフ形石器・三稜尖頭器・台形石器などと，細石刃文化期の細石刃・細石刃核などが含まれるが，各文化期の石器群とその出土層位に有意な対応関係は認められず，層位的には混在して出土している。



遺物は、E-11区～C-12区にある北西方向から南東方向に向かう小丘陵状の頂部と、その北西から南西側に広がる斜面部分一帯などに散漫な広がりをして分布する。

このなかで、F-9区の黒曜石4類の剥片類などが集中する部分、本文中でも指摘した黒曜石3類の細石刃・細石刃核・剥片類が径3m弱の範囲で出土しているD-10の2か所は遺物集中部が形成されていた可能性があるが、いずれも調査段階での遺物集中部の認定はされていない。

上記の状況から、本遺跡出土の旧石器時代の出土遺物について、層位及び遺物集中部を単位とした一括性に基づき、器種及び石材組成について検討することは困難であるが、概括的にはナイフ形石器及び三稜尖頭器などナイフ形石器文化期の石器群は、宮田(2006)における九州東南部の後期旧石器時代VI期、馬籠(2010)のV期第2段階に位置づけられる資料で、霧島市福山町城ヶ尾遺跡第II文化層、志布志市松山町の蕨野B遺跡などに類例を求めることができる。

また、細石刃石器群については、細石刃核の中に古相とされる位牌塔型と共通する上面観の厚みが薄い扁平形の細石刃核がみられるものの、背面及び側面に自然面を残置するもので、位牌塔型にみられる定型的な側面及び背面の調整を欠く資料であることから、細石刃文化期後半期以降の比較的新しい様相の石器群に位置づけられる可能性が高い。

### 第3節 縄文時代早期の調査

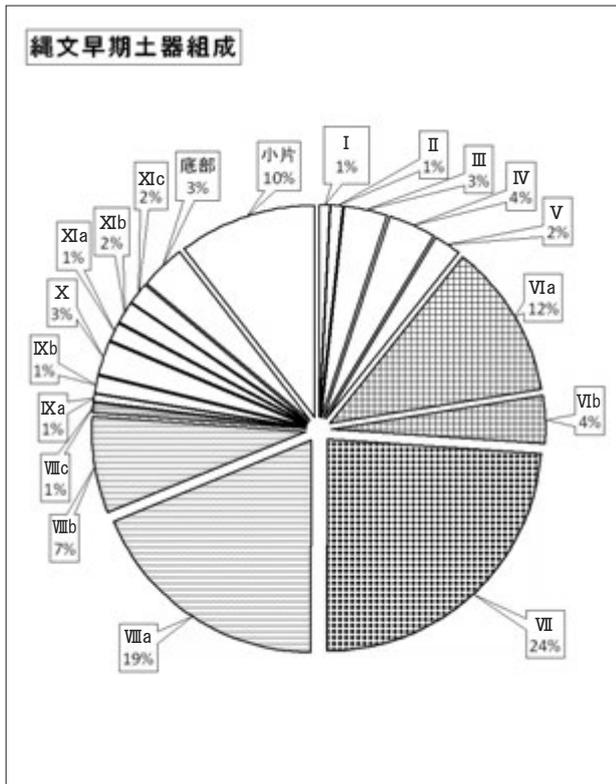
#### 1 遺構

早期の集石はVII・VIII層より合計44基、土坑はVII～IX層より合計22基が検出された。これらは調査区の北部と東部に集中する。ここは標高43.5m以上の調査区内の微高地ともいえる場所であり、西側には遺構は見られない。これは概ね早期の遺物の出土地点と一致する。また住居跡が検出されなかったことからここは定住的集落の周辺にあるキャンプ地的な場所として使われていたことが考えられる。また遺構が北部と東部に集中する理由としてここが調査区の東を流れる田原川によって浸食されたシラス台地の縁辺部にあり、台地下に湧き出る水を得やすかったことが考えられる。

集石は礫が比較的集中するものI類10基(Ia類1～6号集石、Ib類7～10号集石)と、礫が集中しないものII類32基(IIa類11～39号集石、IIb類40～42号集石)と、礫と掘り込みの関係性がはっきりしないものIII類2基(43・44号集石)に分類して報告した。

この中で30、43号集石ではVII類(桑ノ丸式)土器とVIIIa類(楕円押型文)土器が出土している。

全集石での使用礫の割合は安山岩が61.2%と半数以上を占め一番多く、次いで砂岩が23.8%、ホルンフェルスが14.5%となっている。個別の集石で見ると安山岩が構成礫の半数以上占めている集石は27基、砂岩が構成礫の半数以上占めている集石は3基、ホルンフェルスが構成礫の半数以上占めている集石は1基である。石材別の平均重量は安山岩97.7g、ホルンフェルス61.7g、砂岩47.1gである。個々の集石の構成礫数をみるとI類は平均113個、II類は51.8個、III類は168.5個である。



縄文早期土器組成

分類	型式	出土遺物数	占有率
I	志風頭	10 / 1203	0.83%
II	加栗山	11 / 1203	0.91%
III	札ノ元VII類	39 / 1203	3.24%
IV	小牧3A	43 / 1203	3.57%
V	倉園B	25 / 1203	2.08%
VIa	下剥峯a	142 / 1203	11.80%
VIb	下剥峯b	44 / 1203	3.66%
VII	桑ノ丸	288 / 1203	23.94%
VIIa	楕円押型文	225 / 1203	18.70%
VIIb	山形押型文	89 / 1203	7.40%
VIIc	押型文その他	10 / 1203	0.83%
IXa	手向山a	7 / 1203	0.58%
IXb	手向山b	16 / 1203	1.33%
X	平袴	31 / 1203	2.58%
XIa	塞ノ神 微隆帯	17 / 1203	1.41%
XIb	塞ノ神 A	20 / 1203	1.66%
XIc	塞ノ神 B	20 / 1203	1.66%
底部		41 / 1203	3.41%
小片		125 / 1203	10.39%
土器出土総数		1203	100.0%

## 縄文早期石器組成

	黒曜石 1類	黒曜石 2類	黒曜石 3類	黒曜石 4類	黒曜石 5類	黒曜石 6類	黒曜石 7類	黒曜石 8類	黒曜石 9類	チャート	安山岩	玉随	ホルン フェルス	凝灰岩	花崗岩	砂岩	頁岩	その他	合計
石鏃	2	1	1		1		2	6		7	1						1		22
打製石斧													2						2
磨製石斧													1						1
石核										1									1
石匙											1								1
石ノミ													1						1
石錐				1									1						2
二次加工剥片				1						1									2
磨敲石											9			2	2	7			20
石皿											3					2			5
剥片/碎片	13	7	11	8	9	1	5	21	2	7	6	3	5	2		8	24	6	138
原礫	1									1			2						4
合計	16	8	12	10	10	1	7	27	2	17	20	3	12	4	2	17	25	6	199

22基検出された土坑のなかで1号（E-10区Ⅷ層検出）は礫，Ⅶ類（桑ノ丸式）土器，Ⅷb類（山形押型文）土器，炭化物を伴っているがその形状から廃棄土坑の可能性が考えられる。この遺構内炭化物の放射性炭素年代は暦年較正で9517-9407cal B P（確率95.4%）という結果がでているが，同時にこれが本遺跡内でこの2種類の土器の時期を現すものと考えられる。

18号土坑（E・F-9区Ⅸ層検出）はブリッジに相当する部分は確認できなかったが，土坑の形状と床面より下層にシミ状の変色域が観察されたため，連穴土坑である可能性が残る。

科学分析の項でも報告があるが，遺構内から出た6点の炭化物（集石（3），土坑（3））からわかった樹種構成は，カヤ・アカガシ亜属・スダジイ・ツバキ属でいずれも暖地に生育するため，調査区周辺で容易に入手できる樹種であったと考えられる。またこれらの樹木は木材の中では硬い部類に入るため，炭として残り易かったと言える。また年代測定と暦年較正の結果をみると，いずれも縄文早期中葉とされる時期に入っている。

本遺跡では包含層と集石や土坑内から出土した礫の接合を試みた。その結果，異なる遺構間で接合する資料が7個体確認できた。いずれも遺構の密集する場所に隣り合った遺構間でのものである。このことからこれらの遺構は同時期に使用されたか，あるいは極めて近い時期に使用されのではないかと考えられる。

## 2 遺物

縄文早期の土器はⅠ～Ⅺ類に分類して報告した。

グラフからⅥ類（下剥峯式），Ⅶ類（桑ノ丸式）土器，とⅧb類（押型文）土器で7割以上を占めており，遺構内出土の土器もほとんどがこれらで占められているため，

本遺跡は縄文早期中葉期を中心とした遺跡と捉えたい。またⅥ類は下剥峯式土器の範疇で分類したが小片が多く，全体形状が把握できないものが多かった。特徴的なものとして遺物数は少ないが，早期前半の加栗山式後半～吉田式前半期において宮崎県南部を中心に出土する札ノ元遺跡Ⅶ類（Ⅲ類）土器という地域性の強い土器も見られることから，文化的影響をうかがい知ることができる。

土器の出土分布は，前述したように調査区の東側の微高地の周辺に集中しており，西側では疎らになっている。その中でⅢ類（札ノ元Ⅶ類）土器，Ⅳ類（小牧3Aタイプ）土器，Ⅴ類（倉園B式）土器の分布とⅦ類（桑ノ丸式）土器，Ⅷ類（押型文）土器の分布はほぼ重なるようである。このエリアが各時期に共通して利用されていたことが考えられる。

一方，Ⅵ類（下剥峯式）土器のaとbでは分布に若干の違いが見られる。Ⅰ～Ⅴ類土器，Ⅷ～Ⅺ類土器は出土点数や全体に占める占有率が5%にも満たないものであり，いずれも本遺跡の主体を占めるものではない。

なお，本遺跡より東方約1kmの田原川左岸の段丘上，いわば対岸に位置する平良上C遺跡では竪穴住居跡が6基検出され，遺物ではⅥ類（下剥峯式）土器の出土が一番多い。このことから縄文早期中葉期にこの地域では田原川両岸の浸食されたシラス台地の縁辺部に幾つかの生活拠点が存在していたことが考えられる。出土した石器では狩猟具である石鏃と植物加工具である磨敲石が量的には一番多いが，石皿は小片も含め確認できたものは5点であった。一方，出土石器を石材で見ると，黒曜石は8類（推定原産地：姫島）が一番多く，1類（推定原産地：日東）がこれに次ぐ。

軽石加工品は1点出土している。今後，他の遺跡の軽石加工品も含めて検討が必要であろう。

## 第4節 中世・近世の調査

### 1 遺構

近世の遺構として報告した井戸状遺構は、この地域特有の保水性の低いシラス台地で必要な耕作や生活用水の確保のために掘られたものであると考えられる。本遺跡の西側に広がる笠野原台地に現在も残る「土持堀の深井戸（県指定文化財）」は天保年間（1818～1843）に掘られたもので深さは約64mの素掘りで上屋を持ち、当時は牛に綱を引かせて井戸水を汲み上げていたようである。本遺跡の井戸状遺構は上屋等の遺構は検出されなかったが、そのような使われ方をしていたものの一つで、灌漑施設や水道が普及して使われなくなると破棄され、その存在が忘れ去られていったものではないだろう。

ところで本遺跡の名称である宮脇遺跡（字宮脇）は第Ⅱ章の地理的環境で述べた通り、隣接するようにある井俣神社（蔵王権現）に関連するものであることが考えられる。この神社は、彦火瓊杵尊（ヒコホノニギノミコト）を本尊とする神社で、棟札に「元禄七年新奉造立」とあるので、創建はそれ以前であろう。旧大崎村は井俣村を含む十ヶ村があった。井俣神社（蔵王権現）は当村にある神社として尊崇されていたものである。大崎町史に「井俣は・・・『彦火々出見尊が御足を以て掘り給ふ所から水が出でその流れの末に稲の種子が生まれ出で田となった。』農業の起こりである」と書いてある所である。云々の記述が見られることから稲作と水利に関連する神社であり、同時に本遺跡を含む一帯が近世の開拓集落であることを想起させる。

### 2 遺物

中世と思われる遺物は1点のみであったので、この時期に集落等の生活拠点が周辺にあったとは考えにくい。一方、近世の遺物は18世紀後半以降のもので占められる。これら貯蔵具（甕・壺）、調理具（播り鉢）、食器（碗・皿）は日用品であることから、該当期には少なくともこの地域ではいわゆる薩摩焼の6系統（堅野系・苗代川系・龍門司系・西餅田系・平佐系・種子島系）のうちの苗代川系と龍門司系の2系統が商品として広く流通していたことがうかがえる。

#### 【引用・参考文献】

宮田栄二 2006 「九州東南部の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』安斎正人・佐藤宏之編 同成社

馬籠亮道 2010 「九州東南部における角錐状石器の出現と展開」『旧石器時代研究』第6号 日本旧石器学会

立神倫史 2018 「大隅地方中部における縄紋時代早期後葉の土器様相に関する一考察 ―天神段遺跡出土資料を

中心に―」『鹿児島考古第48号』鹿児島県考古学会

鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2018『天神段遺跡3』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（18）

鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2018『天神段遺跡4』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（19）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2001『上野原遺跡（第10地点）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（28）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002『上野原遺跡（第2～7地点）』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（41）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010『定塚遺跡・稲村遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（153）

鹿児島県立埋蔵文化財センター 1995『小牧3A、岩本遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（15）

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会 1985『芳ヶ迫第2遺跡、芳ヶ迫第3遺跡、札ノ元遺跡』田野町文化財調査報告書2

南九州縄文研究会 2002 『南九州貝殻文系土器1～鹿児島県～』

鹿児島県教育委員会・公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター 2017『天良上C遺跡』公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（11）

志布志市教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書13 2018『次五遺跡』

大崎町教育委員会 平成4年『郷土の歴史』

大崎町史刊行会 昭和26年 『大崎町史』

第14表 集石 石材別重量

集石 番号	礫 総数	石材別個数・重量等														礫総重量 (g)	礫平均重量 (g)	
		安山岩	総重量 (g)	平均重量 (g)	ホルン フェルス	総重量 (g)	平均重量 (g)	砂岩	総重量 (g)	平均重量 (g)	凝灰岩	総重量 (g)	平均重量 (g)	その他	総重量 (g)			平均重量 (g)
1	113	81	2433.0	30.0	10	346.0	34.6	22	415.0	18.9							3194.0	28.3
2	129	75	2384.1	31.8	16	476.6	29.8	37	784.7	21.2				1	14.3	14.3	3659.7	28.4
3	150	101	2889.0	28.6	13	303.5	23.3	35	651.0	18.6	1	10.5	10.5				3854.0	25.7
4	128	83	2385.0	28.7	8	242.5	30.3	36	1056.5	29.3	1	12.0	12.0				3696.0	28.9
5	66	50	4040.6	80.8	3	363.7	121.2	12	572.0	47.7				1	65.3	65.3	5041.6	76.4
6	133	75	1263.2	16.8	14	269.4	19.2	44	1026.4	23.3							2559.0	19.2
7	44	37	25612.8	692.2	2	61.7	30.9	5	644.5	128.9							26319.0	598.2
8	106	70	18582.3	265.5	5	542.4	108.5	31	1951.0	62.9							21075.7	198.8
9	79	76	16817.1	221.3	1	500.5	500.5	2	405.1	202.6							17722.7	224.3
10	183	82	10544.7	128.6	28	1844.7	65.9	73	3704.0	50.7							16093.4	87.9
11	16	15	1098.8	73.3				1	12.0	12.0							1110.8	69.4
12	5	1	143.5	143.5	1	55.2	55.2	3	180.3	60.1							379.0	75.8
13	20	17	1690.8	99.5							3	25.7	8.6				1716.5	85.8
14	81	66	3237.1	49.0	7	172.9	24.7	7	330.9	47.3	1	10.9	10.9				3751.8	46.3
15	91	68	7925.1	116.5	11	658.6	59.9	12	933.8	77.8							9517.5	104.6
16	25	13	802.3	61.7	2	88.9	44.5	10	942.8	94.3							1834.0	73.4
17	102	38	1838.0	48.4	16	502.4	31.4	48	1917.6	40.0							4258.0	41.7
18	53	31	613.9	19.8	6	96.4	16.1	14	189.4	13.5				2	23.5	11.8	923.2	17.4
19	89	54	2167.4	40.1	16	646.8	40.4	19	442.9	23.3							3257.1	36.6
20	34	21	1325.8	63.1	3	79.7	26.6	10	558.1	55.8							1963.6	57.8
21	33	30	3857.7	128.6	1	53.1	53.1	2	80.3	40.2							3991.1	120.9
22	60	45	4821.2	107.1	12	311.7	26.0	3	237.6	79.2							5370.5	89.5
23	27	16	1301.5	81.3	7	247.4	35.3	4	187.9	47.0							1736.8	64.3
24	52	38	1243.7	32.7	8	396.5	49.6	6	154.4	25.7							1794.6	34.5
25	62	37	1308.6	35.4	20	561.1	28.1	5	95.4	19.1							1965.1	31.7
26	44	40	8602.8	215.1	4	88.4	22.1										8691.2	197.5
27	30	27	2218.5	82.2				3	36.3	12.1							2254.8	75.2
28	28	19	645.4	34.0	1	169.1	169.1	7	493.6	70.5				1	25.6	25.6	1333.7	47.6
29	104	61	1935.5	31.7	12	296.0	24.7	31	775.5	25.0							3007.0	28.9
30	69	44	1194.0	27.1	2	36.0	18.0	23	492.5	21.4							1722.5	25.0
31	59	41	1702.0	41.5	7	113.0	16.1	11	221.0	20.1							2036.0	34.5
32	100	17	988.0	58.1	11	523.3	47.6	72	3401.1	47.2							4912.4	49.1
33	80	20	2593.2	129.7	21	717.3	34.2	39	959.4	24.6							4269.9	53.4
34	36	1	263.5	263.5	11	304.4	27.7	23	517.4	22.5				1	0.7	0.7	1086.0	30.2
35	19	14	1409.2	100.7	2	139.9	70.0	3	109.6	36.5							1658.7	87.3
36	30	25	1589.6	63.6				5	285.7	57.1							1875.3	62.5
37	14	8	631.6	79.0	1	12.3	12.3	5	296.4	59.3							940.3	67.2
38	18	10	735.2	73.5	6	124.9	20.8	2	60.7	30.4							920.8	51.2
39	36	10	451.9	45.2	3	144.7	48.2	23	1121.5	48.8							1718.1	47.7
40	80	55	3687.2	67.0	5	337.9	67.6	19	1154.4	60.8	1	51.2	51.2				5230.7	65.4
41	102	96	5865.2	61.1	5	417.7	83.5	1	17.6	17.6							6300.5	61.8
42	42	35	3275.9	93.6	1	233.5	233.5	6	424.4	70.7							3933.8	93.7
43	231	62	2414.4	38.9	146	3486.2	23.9	23	599.0	26.0							6499.6	28.1
44	105	98	16371.3	167.1	3	284.6	94.9	4	353.6	88.4							17009.5	162.0
平均	70.6	97.7	4020.5	97.7	11.3	406.3	61.7	17.6	685.6	47.1	1.4	22.1	18.6	1.2	25.9	23.5	5049.7	80.3
総数	3108	1903			451			741			7			6				
割合(%)	100	61.2			14.5			23.8			0.2			0.2				

# 圖 版





①遺跡近景 ②2, 32, 33号集石検出状況  
遺跡近景, 集石検出状況

图版 2



①北側土層堆積狀況 ②西側土層堆積狀況 ③南側土層堆積狀況  
土層断面



① 1号礫群検出状況 ② 2号礫群検出状況 ③ Xb'層ナイフ形石器出土状況 ④ X層遺物出土状況  
 ⑤ Xc層石核出土状況 ⑥ Xb'層遺物出土状況 ⑦ XI層遺物出土状況  
 旧石器遺構, 遺物

図版 4



①Xc層スクレイパー出土状況 ②1号集石検出状況 ③2号集石検出状況 ④発掘調査の様子 平成27年10月 ⑤3号集石検出状況 ⑥7号集石検出状況 ⑦7号集石掘り込み  
旧石器遺物, 縄文早期遺構 1



① 4号集石検出状況 ② 5号集石検出状況 ③ 8号集石上面検出状況 ④ 8号集石下面検出状況 ⑤ 8号集石掘り込み ⑥ 11号集石検出状況 ⑦ 10号集石の断面 ⑧ 10号集石下面検出状況

縄文早期遺構 2

图版 6



①15号集石検出状況 ②16号集石検出状況 ③17号集石検出状況 ④21号集石検出状況 ⑤22号集石検出状況 ⑥23号集石検出状況 ⑦24号集石検出状況 ⑧26号集石下面検出作業

縄文早期遺構 3



①27号集石検出状況 ②30号集石検出状況 ③39号集石検出状況 ④41号集石検出状況 ⑤42号集石検出状況 ⑥縄文早期土器出土状況 ⑦43号集石検出状況

縄文早期遺構 4

図版 8



① 1号土坑検出状況 ② 1号土坑Ⅷ・区類土器共伴 ③ 1号土坑掘り込み ④ 44号集石検出状況 ⑤ 44号集石下部検出状況

縄文早期遺構 5



① 2号土坑検出状況 ② 3号土坑検出状況 ③ 2・3号土坑 ④ 4号土坑検出状況 ⑤ 6号土坑の半截  
⑥ 7号土坑完掘 ⑦ 9号土坑完掘

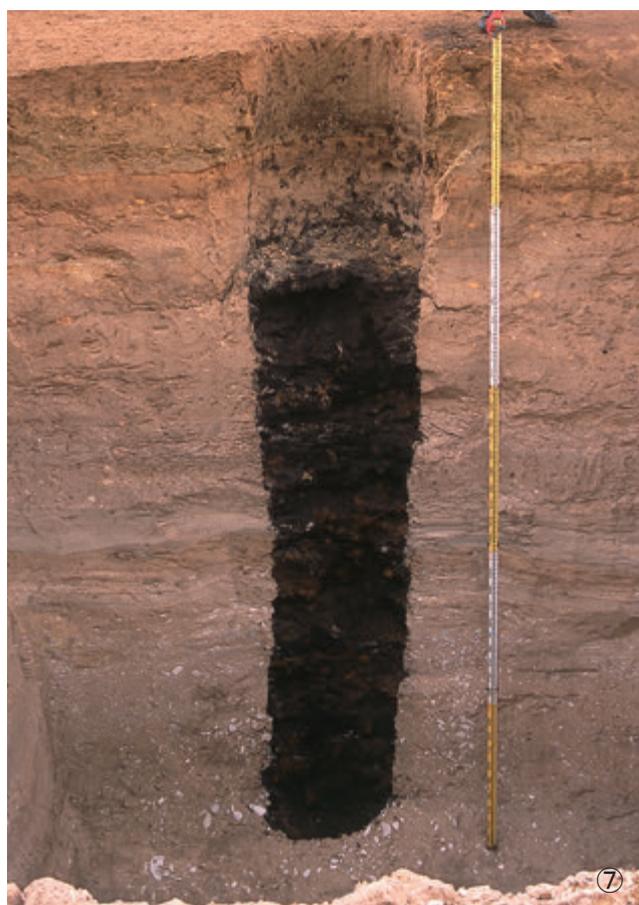
縄文早期遺構 6

图版 10



①12号土坑完掘 ②13号土坑検出状況 ③16号土坑半裁 ④15号土坑断面 ⑤15号土坑完掘 ⑥18号土坑断ち割り ⑦18号土坑半裁

縄文早期遺構 7



①19号土坑検出状況 ②19号土坑完掘 ③20号土坑完掘 ④21号土坑半裁 ⑤22号土坑半裁 ⑥縄文早期土器出土状況 ⑦近世井戸状遺構断面

縄文早期遺構 8, 近世遺構

图版 12



旧石器时代遺物 1



旧石器時代遺物 2



縄文早期土器 1



縄文早期土器 2



縄文早期土器 3



縄文早期土器 4



縄文早期土器 5



縄文早期土器 6



縄文早期土器 7



縄文早期土器 8



縄文早期土器 9



縄文早期土器10

图版 24



縄文早期石器 1



154 155 156



157 171 169  
167 159 161  
164 168 166 160  
163 165 158  
162 170

縄文早期石器 2



中世・近世陶磁器

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書 (28)

東九州自動車道建設 (志布志 I C ~ 鹿屋串良 J C T 間) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 宮 脇 遺 跡

発行年月 2020年2月

編集・発行 鹿児島県教育委員会

公益財団法人 鹿児島県文化振興財団 埋蔵文化財調査センター  
〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号  
TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576

印刷 株式会社 国分新生社印刷  
〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久620-1  
TEL 0995-45-4880 FAX 0995-45-6979

